

田 村 遺 跡

— III —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第167集

1987

福岡市教育委員会

田 村 遺 跡

— III —

—福岡市早良区田所在遺跡群の調査—



1987年3月

福岡市教育委員会

序

福岡市の西南部に広がる早良平野では、近年、住宅・道路・学校建設、ほ場整備などに伴い、数多くの発掘調査が行われています。

田村遺跡群は、この早良平野のほぼ中央に位置します。昭和53年学校建設に伴い初めてこの遺跡群を発掘調査いたしました。昭和55年度からは、福岡市住宅供給公社の委託を受けて、田村団地建設地内の発掘調査を行ってきました。またその成果の一部についてはすでに報告を行っております。

本書はこの田村団地内での昭和56年4月から翌年5月までの発掘調査を報告したもので、この調査では、弥生時代の水利施設、古代の掘立柱建物群を中心とした集落跡など多くの遺構と、縄文時代から江戸時代にわたる各種の遺物を検出いたしました。

田村遺跡群ではその後も調査が進められており、これらの成果と本書をあわせることにより、早良平野の歴史の一端を解明する資料になるものと思われます。さらに本書が埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となれば幸いです。

発掘調査から本書の上梓にいたるまで、指導委員の先生、地元の人々をはじめとする多くの方々の御協力をいただきました。ここに心から謝意を表します。

昭和62年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤 善郎

例　　言

1. 本書は福岡市住宅供給公社による田村団地建設に伴い、福岡市教育委員会が昭和55（1980）年度から継続して発掘調査を行っている田村遺跡の第3次調査報告である。
1. 本報告は、昭和56年度発掘調査を行った第3・4・5地点に関するものである。
1. 現場での遺構実測には浜石哲也・赤司善彦・大橋隆司・岡部裕俊・岩切幹嘉があたった。
1. 遺構番号は各々第1地点・第2地点からの通し番号とした。ただしSA（柵）、SB（孤立柱建物）に関しては各地点ごとに01から番号を付けた。
1. 出土遺物の実測は浜石・小畠弘己・林田憲三・久保寿一郎が行った。
1. 製図は浜石・小畠・村上かをりが行った。
1. 本書に使用した写真は、遺物を藤美代子、他は浜石哲也が撮影した。現像・焼付けは黒岩三紀子の協力をえた。
1. 出土木器の一部については鳴倉己三郎先生により樹種の鑑定を受けた。
1. 本書に掲載した遺物は、材質、出土地点を問わず001-658の通し番号とした。また巻末に掲載遺物の一覧と福岡市埋蔵文化財センターにおける登録番号を表で示した。
1. 本書に関係する記録類、出土遺物のすべては福岡市埋蔵文化財センターに収蔵している。
1. 本書の執筆は浜石が行なったが、下記については分筆した。
S X31の石器、各地点出土の石器のうち石鏃・使用度ある剝片・スクレイパー・ドリル・石匙の項……小畠
各地点出土の木器の項……久保
III-(9)-1)、SD65の出土遺物、V-(6)-1) ……林田
1. 本書の編集は浜石が行なった。

本文目次

	頁
序	
I はじめに	1
1 調査にいたる経過	1
2 調査の組織	1
II 遺跡の位置と環境	3
III 第3地点の調査	5
1 概要	5
2 土層	6
3 遺構と遺物	7
(1) 横	7
(2) 獣立柱建物	7
(3) 井戸	23
(4) 土壙	26
(5) 溝	31
(6) 古河川	37
(7) その他の遺構	50
(8) 繩文包含層	51
(9) その他の遺物	59
IV 第4地点の調査	72
1 概要	72
2 4a地点の遺構と遺物	73
3 4b・c地点の遺構と遺物	77
4 4d地点の遺構と遺物	79
5 4e地点の遺構と遺物	92
6 第4地点出土石器	94
V 第5地点の調査	97
1 概要	97
2 土層	97
3 遺構と遺物	98
(1) 横	98
(2) 竪穴住居	99
(3) 土壙	100
(4) 溝	103
(5) 古河道	108
(6) その他の遺物	112
VI まとめ	123

図 版 目 次

図版 1	田村遺跡群周辺航空写真			
図版 2	3a地点遺構検出状況	1 北から	2 南から	
図版 3	3b地点遺構検出状況	1 北から	2 南から	
図版 4	3c地点遺構検出状況	1 北から	2 南から	
図版 5	3d地点遺構検出状況	1 西側部分（西から）	2 東側部分（南から）	
図版 6	1 SB01（西から） 3 SB11（南から）	2 SB02（西から） 4 SB04・05・12（西南から）		
図版 7	1 SB19・20周辺（南から） 3 SB08・09・10・24（北から）	2 SB16・17・23（南から）		
図版 8	1 SB15・21周辺（西から） 3 SB18P11（西から）	2 SB18P12（北から） 4 SB21P25（北から）		
図版 9	1 SE01（東から） 3 SE03（南から）	2 SE02（南から） 4 SE04（西から）		
図版 10	1 SK73（北から） 3 SK80・81（南から）	2 SD33・34・35（西から） 4 SD39周辺（北から）		
図版 11	1 SD44（南西から） 3 SX34（西から）	2 SX33（北西から） 4 SX31（東から）		
図版 12	3a地点古河川検出状況	1 東南から 2 西北から		
図版 13	3a地点古河川	1 杭列I 2 杭列III・IV		
図版 14	4a地点遺構検出状況	1 北から 2 南西から		
図版 15	4b・c地点遺構検出状況	1 南から 2 北から		
図版 16	4d地点 1 SD63検出状況（北から）	2 SD63・64検出状況（北から）		
図版 17	第5地点全景	1 東から 2 西から		
図版 18	第5地点下層遺構検出状況	1 東から 2 西から		
図版 19	1 III区台上地遺構検出状況（北から）	2 SC07（南から）		
図版 20	古河道検出状況	1 北から 2 東南から		
図版 21	古河道	1 杭列II 2 杭列IV		
図版 22	出土土器I			
図版 23	出土土器II			
図版 24	出土土器III			
図版 25	出土土器IV			

- 図 版 26 出土土器Ⅴ
 図 版 27 出土土器Ⅵ
 図 版 28 出土土器Ⅶ
 図 版 29 出土土器Ⅷ
 図 版 30 出土石器 I
 図 版 31 出土石器 II・金属器
 図 版 32 出土木器

挿 図 目 次

	本文頁	
第 1 図	早良平野の遺跡	2
第 2 図	田村遺跡群と周辺の遺跡	(折り込み)
第 3 図	第 3 地点土層図	6
第 4 図	掘立柱建物実測図 I	8
第 5 図	掘立柱建物実測図 II	9
第 6 図	掘立柱建物実測図 III	10
第 7 図	掘立柱建物実測図 IV	11
第 8 図	掘立柱建物実測図 V	12
第 9 図	掘立柱建物実測図 VI	14
第 10 図	掘立柱建物実測図 VII	16
第 11 図	掘立柱建物実測図 VIII	17
第 12 図	掘立柱建物実測図 IX	19
第 13 図	掘立柱建物実測図 X	20
第 14 図	掘立柱建物・ピット出土土器実測図	22
第 15 図	井戸実測図	24
第 16 図	井戸出土土器実測図	25
第 17 図	土壤実測図 I	27
第 18 図	土壤実測図 II	28
第 19 図	土壤実測図 III	29
第 20 図	土壤出土土器実測図	30
第 21 図	SD39および周辺の遺構	33
第 22 図	SD44土層断面実測図	35

第 23 図	溝出土土器実測図	36
第 24 図	溝出土銅鏡拓影	37
第 25 図	3a地点古河川略図	39
第 26 図	V層出土土器実測図	41
第 27 図	V層出土木器実測図 I	(折り込み)
第 28 図	V層出土木器実測図 II	43
第 29 図	V層出土木器実測図 III	44
第 30 図	IV層枕列実測図	46
第 31 図	IV層出土土器実測図 I	47
第 32 図	IV層出土土器実測図 II	48
第 33 図	IV層出土土器実測図 III	49
第 34 図	S X33・34実測図	50
第 35 図	S X33・34出土遺物実測図	51
第 36 図	S X31遺物出土状況図	52
第 37 図	S X31出土土器実測図	53
第 38 図	S X31出土石器実測図 I	55
第 39 図	S X31出土石器実測図 II	56
第 40 図	S X35出土土器実測図	58
第 41 図	第 3 地点出土土器実測図 I	60
第 42 図	第 3 地点出土土器実測図 II	62
第 43 図	第 3 地点出土土器実測図 III	63
第 44 図	第 3 地点出土石器実測図 I	65
第 45 図	第 3 地点出土石器実測図 II	66
第 46 図	第 3 地点出土石器実測図 III	67
第 47 図	第 3 地点出土石器実測図 IV	(折り込み)
第 48 図	第 3 地点出土石器実測図 V	69
第 49 図	第 3 地点出土石器実測図 VI	70
第 50 図	第 3 地点出土その他の遺物	71
第 51 図	4a地点全体図	74
第 52 図	4a地点古河川土層断面図	75
第 53 図	4a地点出土遺物実測図	76
第 54 図	4b・c地点全体図	77
第 55 図	4b・c地点古河川土層断面図	78
第 56 図	4b・c地点出土遺物実測図	79

第 57 図	S D63・64上層断面実測図	80
第 58 図	S D63・64実測図	81
第 59 図	S D64出土土器実測図	82
第 60 図	S D63下層出土土器実測図	83
第 61 図	S D63上層出土土器実測図	84
第 62 図	4d地点出土土器実測図 I	85
第 63 図	4d地点出土土器実測図 II	86
第 64 図	4d地点出土土器実測図 III	87
第 65 図	4d地点出土土器実測図 IV	88
第 66 図	4d地点出土土器実測図 V	89
第 67 図	4d地点出土土器実測図 VI・土鍤実測図	91
第 68 図	4e地点トレンチ配置図	92
第 69 図	4e地点出土土器実測図	93
第 70 図	第4地点出土石器実測図 I	94
第 71 図	第4地点出土石器実測図 II	95
第 72 図	第4地点出土石器実測図 III	96
第 73 図	第5地点上層断面図	98
第 74 図	堅穴住居跡実測図	99
第 75 図	土壙実測図	101
第 76 図	S K90土壤出土遺物実測図	102
第 77 図	S D65出土土器実測図	104
第 78 図	S D66出土遺物実測図	105
第 79 図	S D70・75・77出土遺物実測図	107
第 80 図	古河道出土遺物実測図 I	110
第 81 図	古河道出土遺物実測図 II	111
第 82 図	古河道出土遺物実測図 III	112
第 83 図	第5地点出土土器実測図 I	113
第 84 図	第5地点出土土器実測図 II	114
第 85 図	第5地点出土土器実測図 III	116
第 86 図	第5地点出土石器実測図 I	118
第 87 図	第5地点出土石器実測図 II	119
第 88 図	第5地点出土石器実測図 III	120
第 89 図	第5地点出土石器実測図 IV	121
第 90 図	第5地点出土土製品・鉄製品実測図	122

表 目 次

第 1 表	第 3 地点掘立柱建物計測表	21
第 2 表	古河川出土三叉鉢計測表	42
第 3 表	S X31石器組成	55
第 4 表	S X31出土剝片の重量別ヒストグラム	55
第 5 表	S X31出土剝片の計測グラフ	55
第 6 表-12表	掲載出土遺物一覧表 I - VII	126-132

付 図 目 次

付 図 1	田村園地内遺跡調査地点図
付 図 2	第 3 地点遺構配置図
付 図 3	第 3 地点古河川実測図
付 図 4	4a 地点杭列実測図
付 図 5	第 5 地点遺跡配置図
付 図 6	第 5 地点古河道杭列実測図

I はじめに

1 調査にいたる経過

1979（昭和54）年、福岡市建築局から文化課（現埋蔵文化財課）に対し、早良区（当時西区）大字田の市営住宅建築予定地内の埋蔵文化財の有無について照会があった。申請地一帯は、縄文時代から中世にいたる遺物の散布地として知られ、同時に発行された『福岡市埋蔵文化財地図（西部Ⅰ）』では田村遺跡群としてすでに登録されていた。

建設予定地が数万m²にのぼることから、文化課では建築局、市住宅供給公社と協議をもち、とりあえず第1年度建築分について試掘調査を行ない、遺跡の性格と範囲を確認することにした。試掘調査は住宅建築部分（第1・2地点）15000m²について同年9月10日～17日、付属施設部分（第3・4地点の一部）7000m²について11月7日～19日に行なわれた。その結果、前者では約3800m²の部分に遺構・遺物の検出をみた。また後者では約150m²が調査の対象地であると判定された。再び協議を行ない、一部設計を変更して、遺跡にかかる以外の部分から住宅・付属施設の建築が開始された。このうち第1・2地点は建築の関係から早急な調査が要請され、翌1980年の12月5日から発掘調査を開始した。以後1983年度までに以下の3次にわたる発掘調査を行なっている。

第1次 第1・2地点 2,650m² 1980.12.5～1981.4.14

第2次 第3・4・5地点 12,820m² 1981.4.22～1982.5.15

第3次 第8・9地点 8,500m² 1983.1.20～6.15

この間整理作業も一部併行して行ない、第1次発掘調査の成果は『田村遺跡I・II』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第89集・第102集）として1982年と1984年に刊行している。本報告はそれに統くもので、第2次調査（第3・4・5地点）をその対象としている。

2 調査の組織

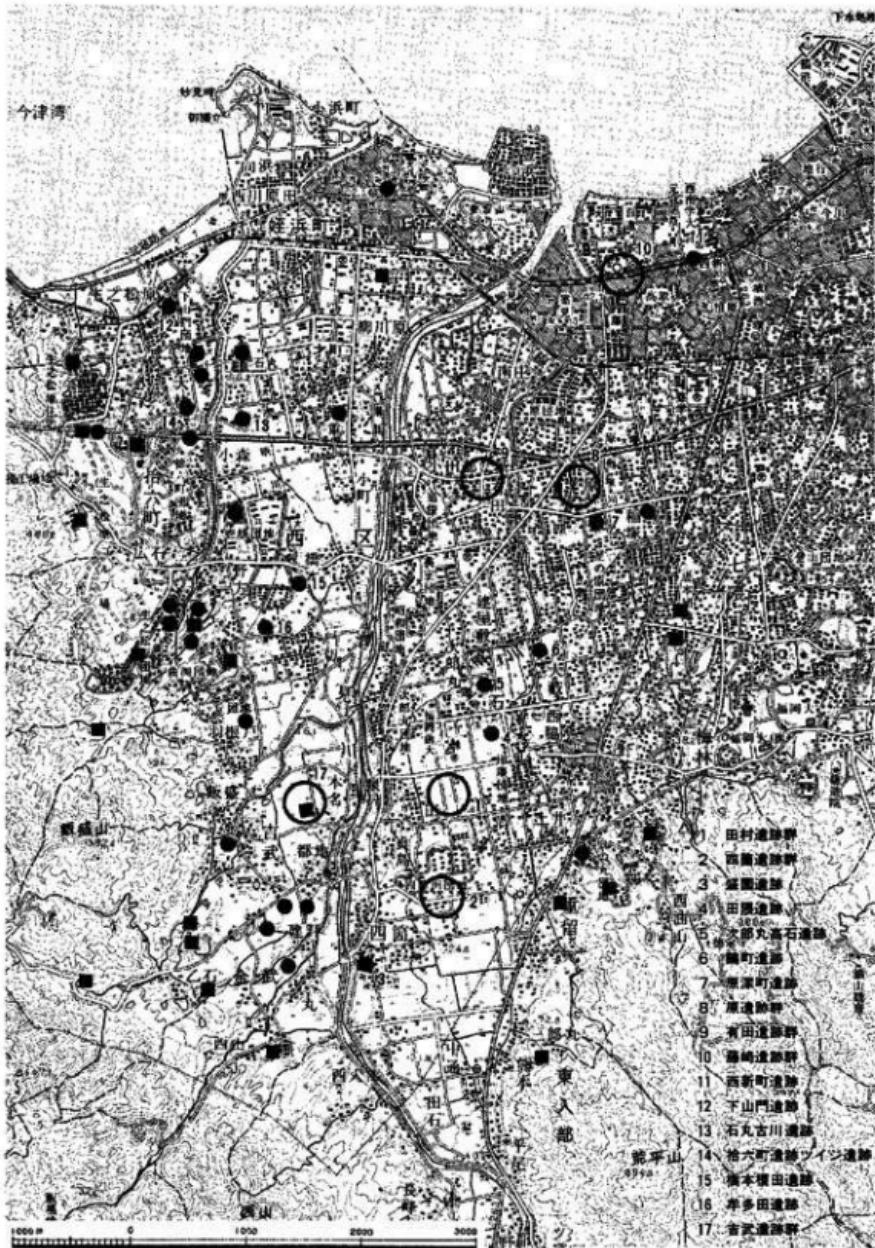
調査委託 福岡市住宅供給公社

調査主体 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第1係

柳田純孝（課長） 折尾学（係長） 岸田隆（庶務） 浜石哲也（調査・整埋）

調査・整理補助 林田憲三（中村学園短大講師） 村上かおり 久保寿一郎（九州大学大学院） 渡辺和子（現筑紫野市教育委員会） 赤司善彦（現九州歴史資料館） 岡部裕俊（現前原町教育委員会） 大橋隆司 岩切幹嘉

発掘作業、整理作業においては地元の方々をはじめ多数の人々の協力を得た。また山崎純男・二宮忠司・横山邦雄・井沢洋一・小畠弘己・佐藤一郎の各氏には報告書作成にあたって御教示を得た。



第1図 平良平野の遺跡(1/5万) ○造跡●造跡■古墳

II 遺跡の位置と環境

玄界灘をへだて朝鮮半島および大陸と面する福岡市は、西から糸島（今宿）・早良・福岡・粕屋の大小平野が博多湾を囲んで拡がる。これらの平野は山塊・丘陵によって分断され、各々が独特な自然・歴史的環境を備えている。

このうち西南部に位置する早良平野は、西の糸島平野・東の福岡平野にはさまれ、南は背振山脈にはばまれている。この背振山脈に源を発する室見川が、平野中央を北流し、博多湾へそそぐ。平野には第三紀丘陵・洪積台地が点在し、また北辺には砂丘が形成されているが、その多くが室見川などによる沖積地となっている。

早良平野を中心とした地域は、もと早良郡に属し、律令時代には毗伊・野解・額田・平群・田部の六郷からなっていた。明治以降、福岡市に順次くみこまれ、1975年（昭和50）年早良町が福岡市に編入されたことを最後に郡名は消滅した。

この平野における考古学的調査も、福岡市への編入の過程と規を一にしているような所がある。江戸時代の文献に古墳の記載などはあるものの、福岡平野に比べその出発点はかなり遅れている。明治以降、藤崎・西新町・有田などの遺跡が発見されているが、本格的な調査が開始されるのは1967年の有田遺跡からといえよう。これは福岡市の都市化が西に波及したことによるもので、特に1975年以後は、宅地開発・道路建設・学校建設・運動場整備などに伴う発掘調査が絶えず行なわれている。その結果、平野外縁の丘陵地・中央沖積地・博多湾に面した砂丘上で、先土器時代から江戸時代にいたる多くの遺跡が確認された（第1図）。と同時に膨大な資料も蓄積された。しかしそれと引きかえに多くの遺跡は消滅を余儀なくされている。

田村遺跡群はこの早良平野の中央南側に位置し、標高15~17mの北側に低い沖積地に立地する。行政的には福岡市早良区（改区前は西区）大字田で、国土地理院発行の5万分の1地図「福岡」の北から28.7cm、西から15.5cmを中心とした一帯に拡がる。開発が及ぶ以前は、一部集落が点在する他はすべて水田であった。

この田村遺跡群は1978年の分布調査によって初めて知られることになった。1971年に発刊された遺跡地名表では、四箇遺跡を除けば、沖積地の遺跡は知られていないかった。しかし、鶴町遺跡・原談儀遺跡・牟多田遺跡さらには四箇遺跡が調査されるに至って、沖積微高地を生活基盤とし、その周辺の低湿地部分に生産地を確保した遺跡があることが判明した。田村遺跡群の発見もまさにこの成果によるものである。以後も、原深町遺跡・次郎丸高石遺跡・石丸古川遺跡・橋本権田遺跡・拾六町ツイジ遺跡などの同様の立地をもつ遺跡が検出されている。その時代は縄文時代～中世におよび、水利に関係した遺構が多いのが特徴的である。まさに沖積地におけるこの種の遺跡は、水といかに共存するかが最大の課題であったといえよう。

さて、田村遺跡群ではこれまで7次にわたる発掘調査が行われている。遺物の発見例としては出限出土とされる銅鋤先が著名である。あるいは田村遺跡群からの出土品かとも考えられた

が、最近田限遺跡など周辺の遺跡が確認され、その確定は困難となった。以下これまでの7次の調査について記す（第2図）。

第1次調査 宇高柳で学校建設に伴い1978年10月～12月にかけて行なわれた調査である。発掘調査面積3,000m²。古墳時代～古代の土壙・溝などが検出された。高柳遺跡として1981年報告書が作成されている。遺跡調査番号7803。

第2次調査 市営田村団地の建設に伴う第1次調査である。第1地点（遺跡調査番号8034）と第2地点（同8035）の2ヶ所2,650m²を1980年12月～1981年4月にかけて調査した。弥生時代の古河川およびそれに付設された井堀など、また縄文時代を中心とした掘立柱建物などの集落跡を検出。田村遺跡I・IIとして報告。

第3次調査 団地建設に伴う第2次調査。第3地点（遺跡調査番号8144）、第4地点（同8145）、第5地点（同8146）の3ヶ所12,820m²を1981年4月～1982年5月にかけて調査。弥生時代古河川、古代集落跡など検出。本報告。

第4次調査 団地建設に伴う第3次調査。第8地点（遺跡調査番号8233）8500m²を1983年3月～6月にかけて調査。上下2層に分けられ、上層は古代～中世の集落跡、下層は縄文後・晩期の包含層。上層では掘立柱建物・竪穴・井戸など多数検出。一部未調査。未報告。

第5次調査 第10地点の学校建設に伴う調査（遺跡調査番号8408）。1984年7月～1985年7月にかけ17000m²を発掘。中世を中心とする多数の掘立柱建物、溝、土壙の他弥生時代前期の甕棺墓も検出。未報告。

第6次調査 店舗建設に伴い第11地点800m²を、1984年8月～9月にかけて調査（遺跡調査番号8429）。縄文時代後・晩期のピット群を検出。未報告。

第7次調査 市道建設に伴い第12地点1200m²を、1984年12月に調査（遺跡調査番号8447）。中世の掘立柱建物・溝などを検出。本年度報告予定。

以上みてきたように、川村遺跡群は沖積地に立地し、縄文時代から現代まで、古河道の変化の影響を受けながらも、繰り返し居住・生産・埋葬の地として利用され続けてきたことがうかがえる。

註1) 福岡市教育委員会「福岡市文化財分布地図（西部Ⅰ）」1979

2) 福岡市教育委員会「福岡市埋蔵文化財調査地名表—総集編—」福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集 1970

3) 1981年度までの早良平野での調査遺跡一覧は「福岡市西部地区埋蔵文化財調査報告1」（福岡市埋蔵文化財調査報告書第64集、1981）に収載されている。以後の調査は、一部を除き各報告書が作成されている。

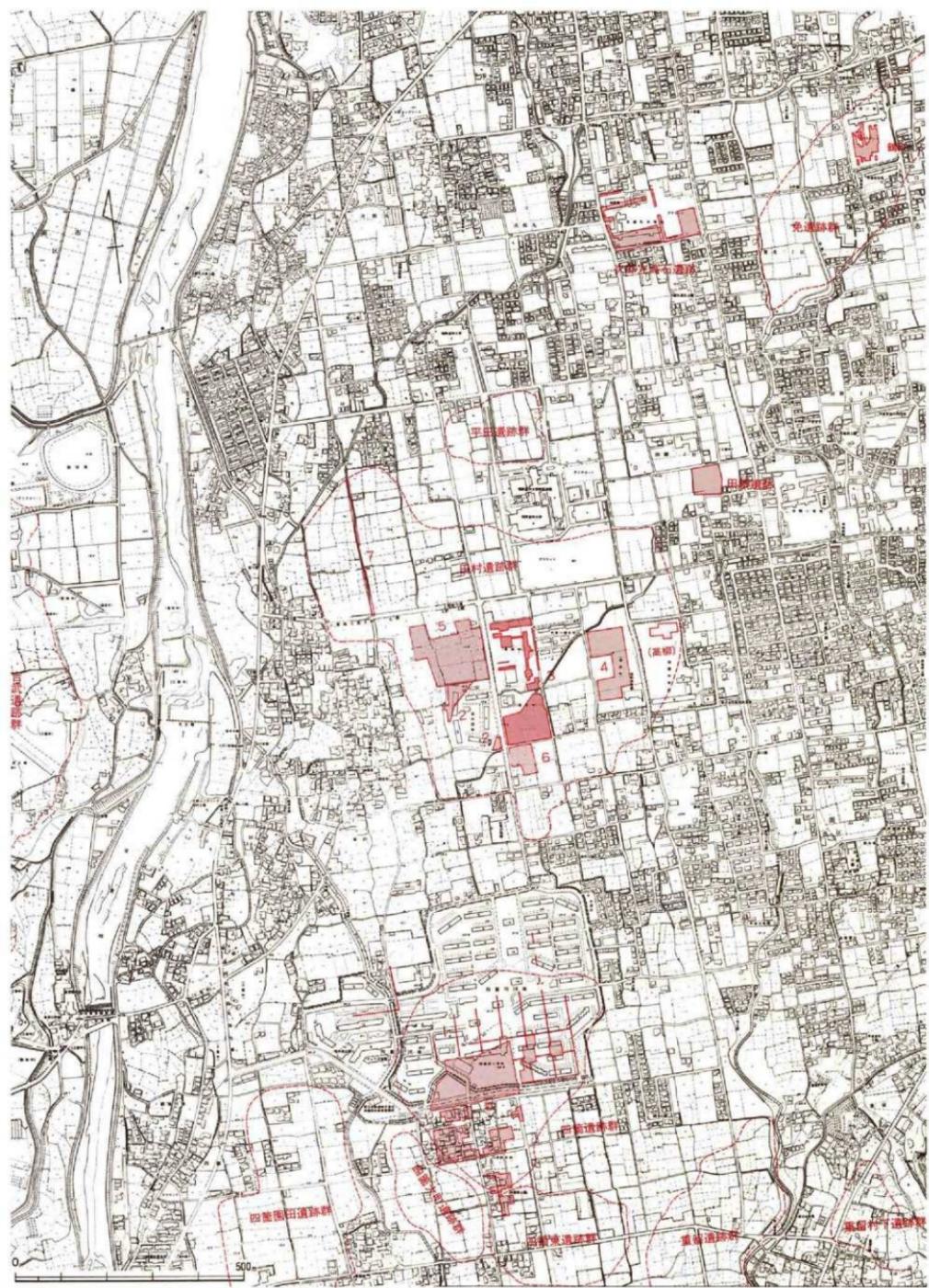
4) 御田康雄「青銅製鏡先」『鏡山雲先生古稀記念古文化論文』1980

5) 1985年12月～1986年1月にかけて調査。弥生時代の墓地を検出。

6) 横山邦雄・力武卓二「高柳遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第70集 1981

7) 洪石伴也（編）「山村遺跡I」福岡市埋蔵文化財調査報告書第89集 1982

洪石伴也（編）「田村遺跡II」福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集 1984



第2図 田村道路群と周辺の道路 (1/8000)

III 第3地点の調査

1 概要

第3地点は大字田字柿ノ木に所在し、前年度（1980年）調査した第1地点と道路を隔てた東側に位置する。また南側は1984年に発掘調査された第11地点と接する。西北の一角には田村団地の高架給水塔がすでに建設されていたが、残りの部分は水田であった。

この地点は、1979年11月の試掘調査で高架給水塔部分を試掘調査しただけで、他の部分の遺跡範囲・性格については判明していなかった。そのため1981年4月22日から、予備調査をトレント方式で行なった。対象地の中央部分約2,500m²が未買収であったため、その東西地区に南北のトレント2本ずつをあけた。その結果、西側地区ではピット、土壙、溝を、また東側地区では溝、杭列などを検出した。遺構の拡がりは第3地点の全域におよんでおり、遺物も縄文時代から中世の上器・石器などが出土したため、本調査に切り換え、重機（爪なしユンボ）による表土剥ぎを開始した。

本調査にあたっては、未買収地を3b、その西側を3a、東側を3c、3c地点の北側を3dと便宜的に分割した。また全域にわたって10m方眼を組み、東西方向を0~10、南北方向をA~Lに割り付けた（付図2）。本報告では10m方眼によって遺構の位置などを表記したが、場合に応じて3a・3b・3c・3dなどの地区表記も行なう。

発掘調査は3a地点から開始し、3c地点に移り、3d地点と進んだ。3a地点は、第1地点から続く古河川の調査が梅雨、湧水の関係で遅れ、10月初頭までずれこんだ。その間3c・3d地点、さらには第4地点の調査を併行して行なった。また3b地点は未買収ながら、所有者との協議により発掘許可を得、第5地点の調査の終った翌1982年4月から開始し、5月16日に終了した。

第3地点は、後述する第4・5地点に比べて高地部分がよく残っており、3b、3c地点を中心とする柱建物群・井戸・溝などの古代末の集落跡を検出した。3a地点にもこの時期の溝などの遺構がみられるが、建物はなかった。この地点は高地が途切れており、前年度第1地点で検出した古河川が東北方向に延びていることが判明した。古河川の最下層には護岸用と考えられる杭列が多数出土した。またこの古河川が埋没する過程で、一部水田の痕跡を見出しき、その範囲、付属施設は確認できなかった。

出土遺物は縄文時代早期・中期・後期・晩期、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、江戸時代にわたっている。縄文時代の明確な遺構はなかったが、3a・3c地点で包含層を検出した。弥生・古墳時代の遺物は主として古河川覆土から出土したものである。それ以後の遺物は高地地上の遺構および表土層から出土した。遺構の性格上、伴出する遺物がきわめて少なく、年代決定を困難なものとした。遺物の種類としては、土器・石器・木器・鉄器・



銅錢などがある。時期はまたがるが、石器・石材の多いことが特に注目される。

以下、土層を述べた後、出土遺構・遺物について記述する。

2 土層

第3地点は約8700m²にわたって発掘調査を行なったが、3a地点の古河川部分を除けば、表土（江戸時代～現代水田層）のすぐ下が疊あるいはシルト質の地山であった。3a・3c地点の一部分にはこの地山上に薄い縄文包含層が認められた。古河川部分は場所によっては複雑な土層堆積となっている。ここではE・F区間に東西方向に設定したトレンチで土層を観察する（第3図）。

I層は水田耕作土および床土である。Icの部分に畦畔があり、複数面の水田があることが知られる。II層は暗褐色土で、江戸時代までの遺物を包含する。このI・II層は第3地点のはば全域に拡がる。III層は白色粗砂層で、主に古河川上に堆積する。厚さは一定せず、場所によってはほとんどない。また台地部分にも薄く堆積する所がある。この層からは鎌倉時代までの遺物が出土している。このトレンチを横断するSD31・32・36・37は、いずれもIII層に覆われている。

IV層は黒色粘質土である。中央部で溝状に層が下に厚くなる。また西側ではやや砂質をおび、SD32に切られる。その西側にはこの層は見られず、V層の上にIII層が直接覆う。3a地点の北壁土層では、この層は砂層が複雑に絡みあっており、図示したトレンチと異った堆積状況があったことを示す。また杭列も検出している。IV層は古墳時代前期の遺物が出土する。V層は灰褐色粘土層である。下部は疊・シルトの地山に接する。その間に砂・砂質土が中央部分を中心に堆積していたが、湧水のため図示できなかった。V層は古河道と考えられ、護岸その他の杭の頭はこの層の中ほどに表われ、地山深く打ち込まれていた。遺物は縄文土器が多いが、弥生後期までのものを包含する。

調査は、台地～IV層上面を一面として発掘し、その後IV層、V層と順次さげた。IV・V層については後段の古河川の項で再述する。

3 遺構と遺物

第3地点で検出した遺構は、樋・掘立柱建物・井戸・土壙・溝の他、古河川、縄文包含層などがある。遺物は縄文早期から江戸時代におよんでいる。古河川、縄文包含層を除けば、その大半は古代に属することから、ここでは遺構の種類別にその観察と出土遺物についてあわせて記する。ただし、SX31出土以外の石器、また各遺構にあって明らかにその構築以前の土器については、この章の後段に一括して記載した。

(1) 樋

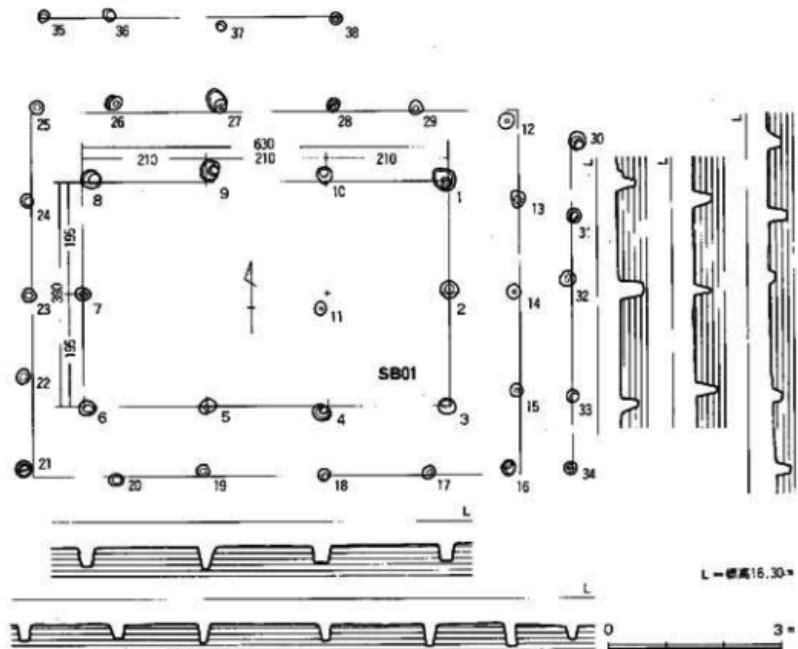
SA01 D-4区で検出した(付図2)。8個のピットから構成されるもので、やや西側に張りをみせながらも、ほぼ南北に5m続く。ピットの径は30~40cmであるが、深さは数cmしかない。出土遺物もなく、その性格・時期は不明である。とりあえず樋としてまとめてみた。

(2) 掘立柱建物

掘立柱建物は、3b・3c地点で31棟検出した。小さな空地を囲むようにして建てられ、北側と東側では重複が激しい。その大半が2×3間の身舎からなり、周りに廂または隠れし塀を持つものもある。南北棟が大半を占めるが、東西棟も5棟みられる。3d地点から3c地点の北側にかけて分布するピット群は、掘立柱建物の柱穴と土色が明らかに異なっており、性格・時期とも建物に関係ないものと考えられる。しかしながら、3c地点を中心に柱穴と考えられるピットが残っており、まとめきれなかった建物も若干残っているものと思われる。これら建物に関係あると考えられるピットおよび出土遺物についても、ここであわせて観察する。なお、各棟の計測値などについては21頁の第1表にまとめた。

SB01 (第4図) C-9区で検出した四面廂付の東西棟である。身舎は2×3間で、東梁間柱の西1間の所に、やや南にずれながらも床束とみられる柱穴がある。身舎の柱穴は径23~35cm、深さ24~42cmのほぼ円形を呈する。廂は身舎の隅柱に対応する柱穴があり、梁・桁行とも内側に入り込む。深さは身舎柱と同じであるが、径が19~35cmとやや小さくなる。身舎との間隔は西が90cm(3尺)、他は120cm(4尺)である。北廂の外にはP35-38の4柱穴、東廂の外にはP30-34の5柱穴がならび、隠れし塀の可能性がある。この柱穴は径15~28cm、深さ20cm前後のものが多い。また図示しなかったが、P35-36の北側、P30-34の東側の180cm(6尺)離れた所に各々柱穴があり、SB01に付属するものと考えられる。

出土遺物 (第14図001-003) P1・2・3・12・13・37・38から土師器・内黒土器・黒色土器片が出土した。001-002は土師器の皿で、復元口径9.0~10.0cm、器高1.2~1.3cm。ヘラ切り底で、板状圧痕が残る。003は復元口径15.6cmの杯片で、高台がつく可能性もある。いずれもナデ調整。底部が残存する破片は、すべてヘラ切り離しであった。

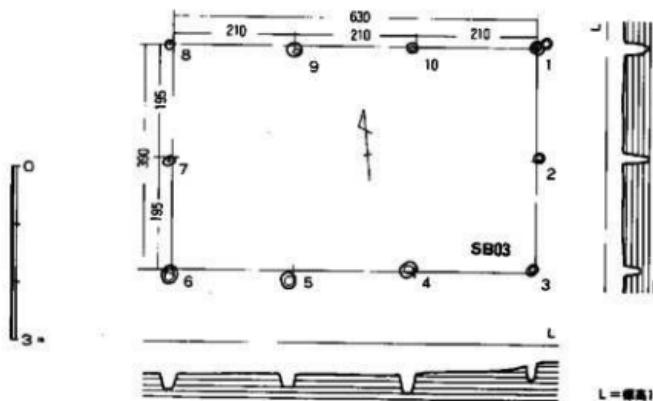
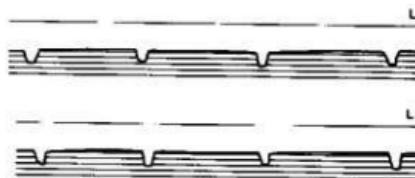
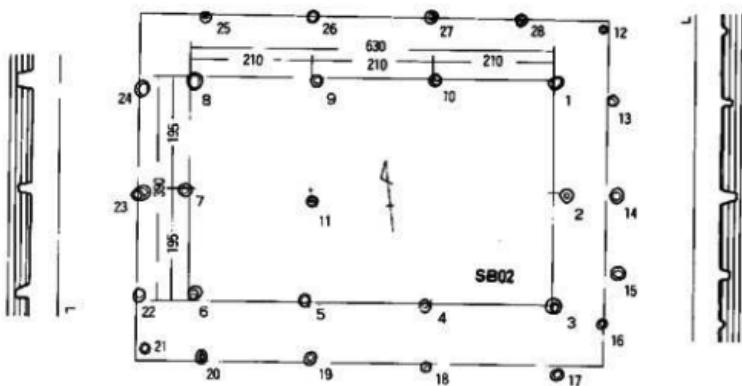


第4図 据立柱建物実測図 I (1/100)

SB02 (第5図) SB01の西約16mのC-7・8区で検出した四面崩付の東西棟である。身舎はSB01と全く同じ規模をもつ。ただ床東が西梁間柱の東1間の所に位置する。梁間柱は東西とも梁行の外に出る。柱穴は径18~25cmの円形で、深さは18~33cmをはかる。崩は身舎から東西側で90cm(3尺)、南北側で105cm(3.5尺)離れる。SB01同様、身舎の隅柱に対応する柱穴が梁・桁行とも内側に入り込む。また西北・東南の隅柱を欠く。これはP12・21の隅柱が8cmしか残存しておらず、削平された可能性もある。他の崩柱は17~38cmの深さをもつ。P1・2・10・18から土師器・黒色土器が出土しているが、いずれも細片である。

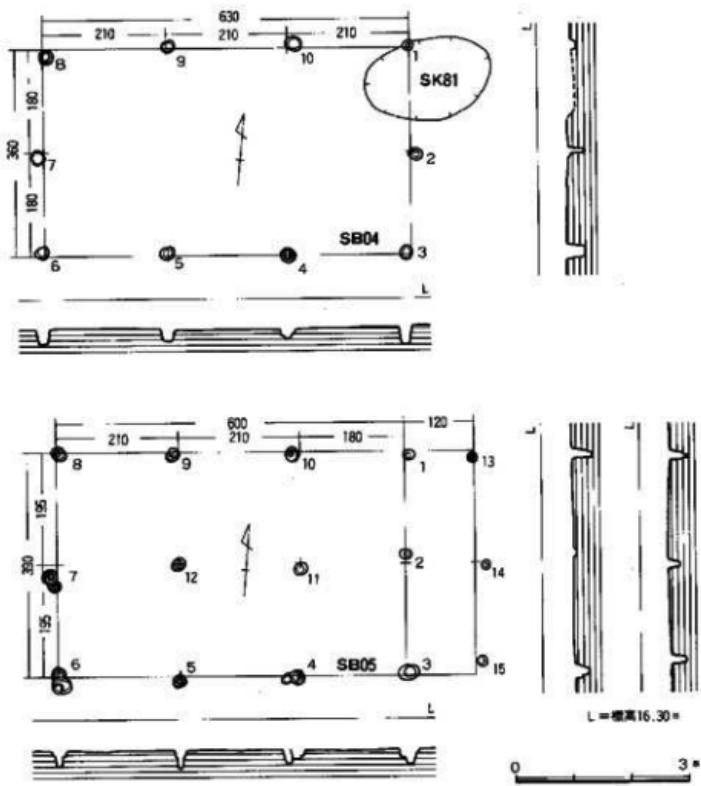
SB03(第5図) SB01のすぐ北に位置する2×3間の側柱だけの東西棟である。規模はSB01・02の身舎と全く同じである。柱穴は径14~26cmの円形状。北桁部分が削平されて浅くなっている他は、24~46cmの深さをはかる。東梁60cm(2尺)の所に不等間隔ながら柱穴が平行に続いており、目隠し塀あるいは柵であるかもしれない。SB25と西側で重複する。P1・2・3・5から土師器・黒色土器の細片が出土した。

SB04 (第6図) F-6・7区で検出した2×3間の側柱だけの東西棟である。先の3棟



L = 高さ16.30m

第5図 摄立柱建物実測図II(1/100)

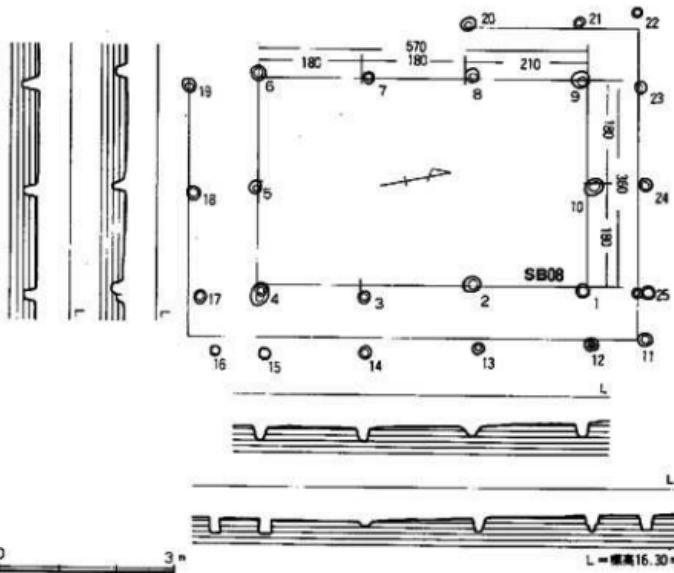
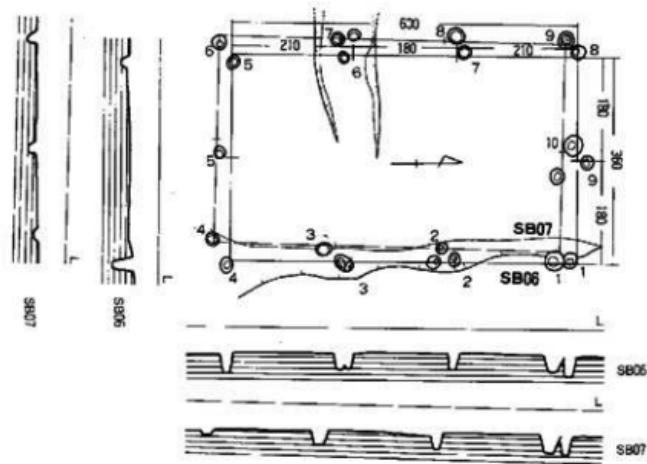


第6圖 埋立柱建物実測図III(1/100)

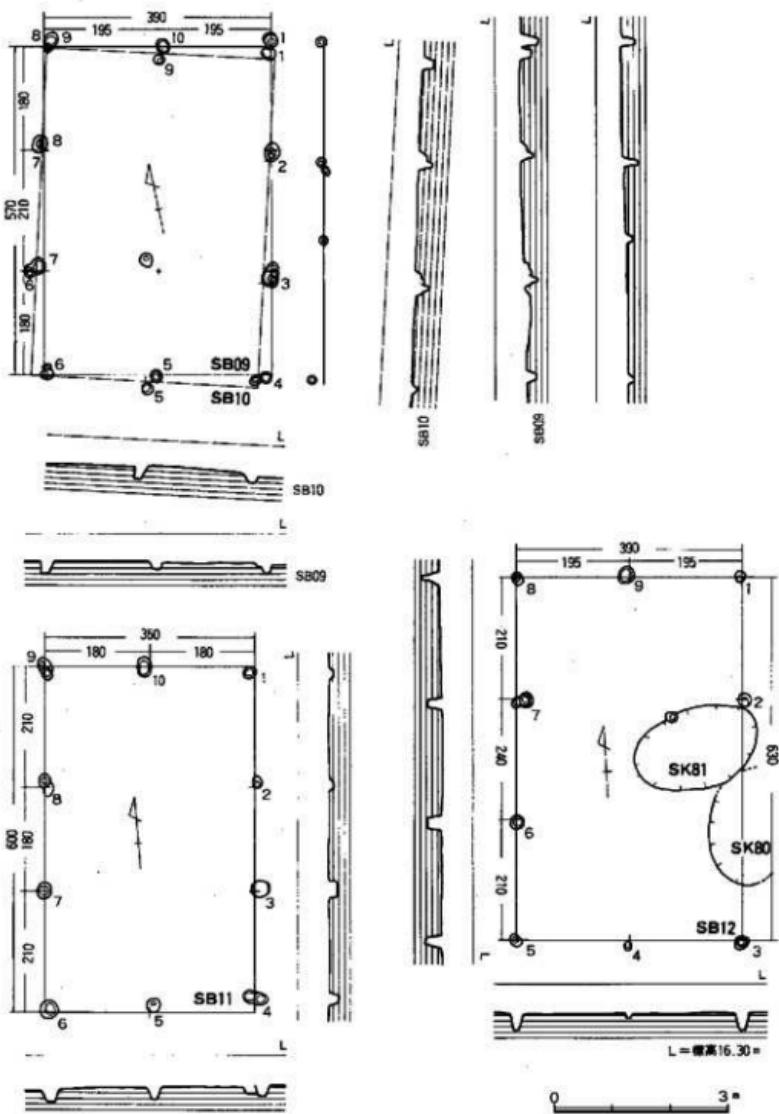
に比べ、梁行が30cm(1尺)小さくなっている。梁間柱はSB02と同じく外に出る。柱穴は径18~25cmの円形で、6~32cmの深さが残存する。SB30と重複し、またP1がSK81を切る。P6から繩文土器細片が出土しただけである。

SB05(第6図) SB07の北側60cmの所に、ほぼ同じ方位で位置する東廂付の2×3間の純柱建物である。SB04に比べ梁行が30cm(1尺)長く、桁行が1尺短い。梁間柱はともにやや南北にずれている。柱穴は円形で、径16~26cm、深さ16~40cmをはかる。東廂は梁から120cm(4尺)の間を取る。柱穴は径が14~16cmと側柱より小さい。深さは20~35cm。SB12を切り、SB13に切られ、またSB14と重複する。

出土遺物 (第14図004・005) P 1・8・14・15から土師器・内黒土器・瓦器・白磁の細片



第7圖 橫立柱牆面實測圖(1/100)



第8図 捕立柱建物実測図 V (1/100)

が出土した。004は瓦器の皿で、復元口径9.6cm、器高1.5cmをはかる。底部をのぞき内外面ともヘラ磨きで仕上げており、内面は銀色を呈する。005は土師器の裏片である。多量の砂粒を混えた胎土で、残存部分はナデ調整を行なっている。外面には煤が多量に付着しており、土鍋の類と考えられる。

SB06・07(第7図) D-E-9区で検出したとともに2×3間の側柱だけの南北棟である。この2棟は建替え状態を示しており、切り合いからみるとSB07が新しい。規模は同じであるが、SB06の南梁間柱が検出できなかった。柱穴は円形で、SB06が径19~24cm、深さ7~38cm、SB07が径20~33cm、深さ7~33cmをはかる。この一帯は西側に向って削平を受けている。SB16・26・27・28の4棟と重複する。SB06のP3・8・9から土師器・内黒土器・黒色土器、SB07のP1・2から土師器・黒色土器などが出土しているが、細片で固化しない。

SB08(第7図) SB07の西に位置する四面廂付の南北棟である。身舎は2×3間で、梁間柱はやや外側に出る。柱穴は径18~29cm、深さ12~47cm。廂は身舎から南側で120cm(4尺)、他は90cm(3尺)の間をとる。西桁の南半分の柱穴は確認できなかった。柱穴の径17~22cm、深さ9~33cm。SB09・10と重複する。P4・5・10・11・12・13・18から土師器・黒色土器の細片が出土したにとどまる。

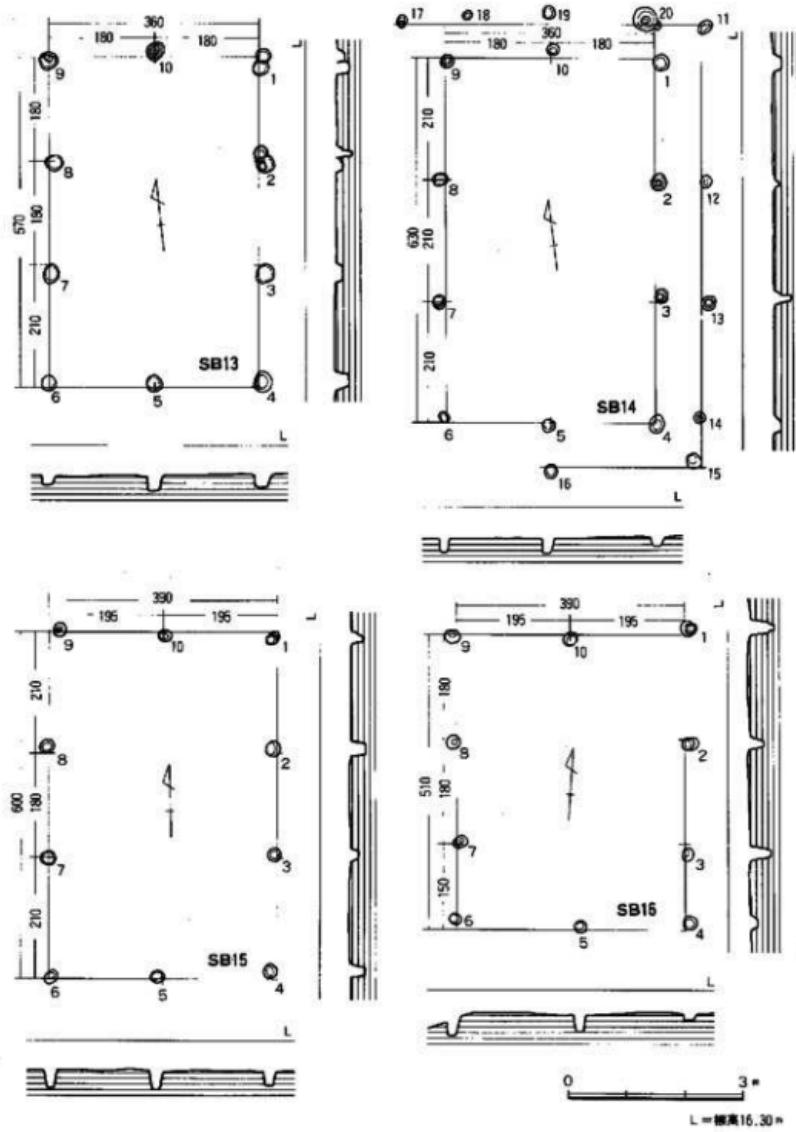
SB09・10(第8図) SB08の西北側に位置するとともに2×3間の側柱だけの南北棟である。この2棟は位置・規模もほぼ同じことから建替えによる重複と考えられる。SB10が新しく、やや東にふれる。SB10の西南隅柱は確認できなかった。また南梁間柱の北は1間の所に柱穴があり、床束の可能性がある。SB09に伴うものであろうか。柱穴はともに径16~27cm、深さ13~32cmの円形を呈する。東側にはSB09に沿った杭列がみられる。目隠し塀であろうか。

出土遺物(第14図006・007) SB10はP6・P9から土師器・内黒土器の細片および滑石製石鍋(321)と滑石製品(324)が出土した。SB09はP5・6・10以外の柱穴から、土師器・内黒土器・黒色土器・白磁の小片が出土した。006は口径9.3cm、器高1.2cmの土師器皿である。内外面ともナデ調整。底部はヘラ切りで、板状圧痕が残る。007は土師器杯であろう。復元口径16.4cm。ナデ調整。内外面とも煤が付着する。

SB11(第8図) E-6区で単独で検出した側柱だけの2×3間の南北棟である。柱穴は径16~30cmの円形で、深さは6~32cm。P4・8・9に柱穴の重複がみられ、ほぼ同一位置で建替を行なった可能性がある。P4・5から繩文土器・土師器・内黒土器・黒色土器の細片が出土したにとどまる。

SB12(第8図) F-7区で検出した側柱だけの2×3間の南北棟である。柱穴は径12~26cmの円形で、深さ7~34cmをはかる。SK80とSB05に切られる。またSB04・SK81と重複する。P1・2・9から土師器皿細片が出土している。

SB13(第9図) SB12の西4mに位置する側柱だけの2×3間の南北棟である。柱穴は径25~32cmの円形で、深さ12~29cmをはかる。北梁間柱がやや外に出る。SB05を切り、SB14と重



第9図 据立柱建物測定図 VI(1/100)

複する。P1・3・7・8から土師器・内黒土器・黑色土器・瓦器の細片が出土した。

SB14(第9図) SB14の北側に重複する二面窓付の南北棟である。身舎は2×3間で、梁間柱がともにやや外に出る。柱穴は円形で径17~25cm、深さ11~28cm。窓は北と東にあり、身舎から90cm(3尺)の間をとる。またP15・16・17との関係からすれば四面窓であった可能性もある。窓柱穴は径14~22cm、深さ8~20cm。SB19に切られ、SB13の他SB05とも重複する。P11・12・16から土師器・内黒土器片が少量出土している。

SB15(第9図) SB14の西北6mの所で検出した側柱だけの2×3間の南北棟である。柱穴は径19~28cmの円形で、深さは14~33cmをはかる。西北側でSB21と重複する。P3・5・6・7・10から縄文土器・土師器の細片が少量出土している。

SB16(第9図) D-E-9区で検出した側柱だけの2×3間の南北棟である。柱穴は円形で、径18~24cm、深さ12~44cm。東南隅柱だけが特に浅い。SB06・17・23およびSK73と重複する。P1~4で土師器・内黒土器の細片が少量出土している。

SB17(第10図) SB16の東北隅で重複する側柱だけの2×3間の南北棟である。梁間柱はともにやや外に出る。柱穴は径18~28cmの円形をなし、18~36cmの深さをはかる。SB16の他、SB22・23とも重複する。遺物はP2・7から土師器・内黒土器の細片が少量出土した。

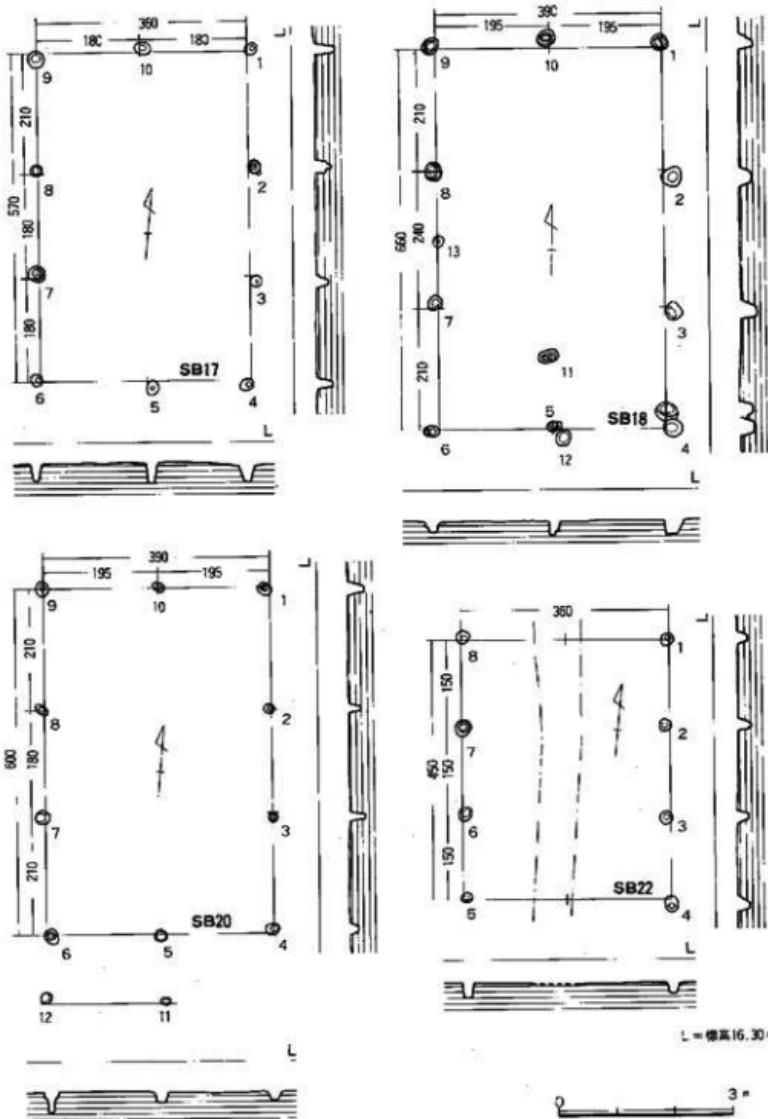
SB18(第10図) G-6・7区で検出した側柱だけの2×3間の南北棟である。柱穴は径16~32cmの円形で、深さ19~36cm。西側桁中央にあるP13は、南北梁から等距離(330cm)にあり、この建物に関係するものと考えられる。建物内にある楕円形状のP11は、深さ6cmと浅く、土師器皿(014)が正置で出土した。また南梁間柱のP5の南に位置するP12では、深さ40cmの穴の中央から、土師器皿が1点横向きで出土した。位置関係および遺物が完形であることを考慮すれば、SB18に關係した祭祀行為の可能性が強い。

出土遺物(第14図008・013・014) 建物柱穴のP1・6~8からは、縄文土器・土師器の細片が少量出土した。008はかろうじて実測した土師器皿で、復元口径8.9cm、器高1.1cmをはかる。ヘラ切り離しの底部で、横ナデ調整。013はP12から出土した土師器皿で、口径9.0cm、器高1.1cm。糸切り底で、板状压痕が残る。他はナデ調整。014は口径12.0cm、器高4.7cmの土師器の高台付碗である。底部はヘラ切りで板状压痕が残る。ナデで仕上げる。

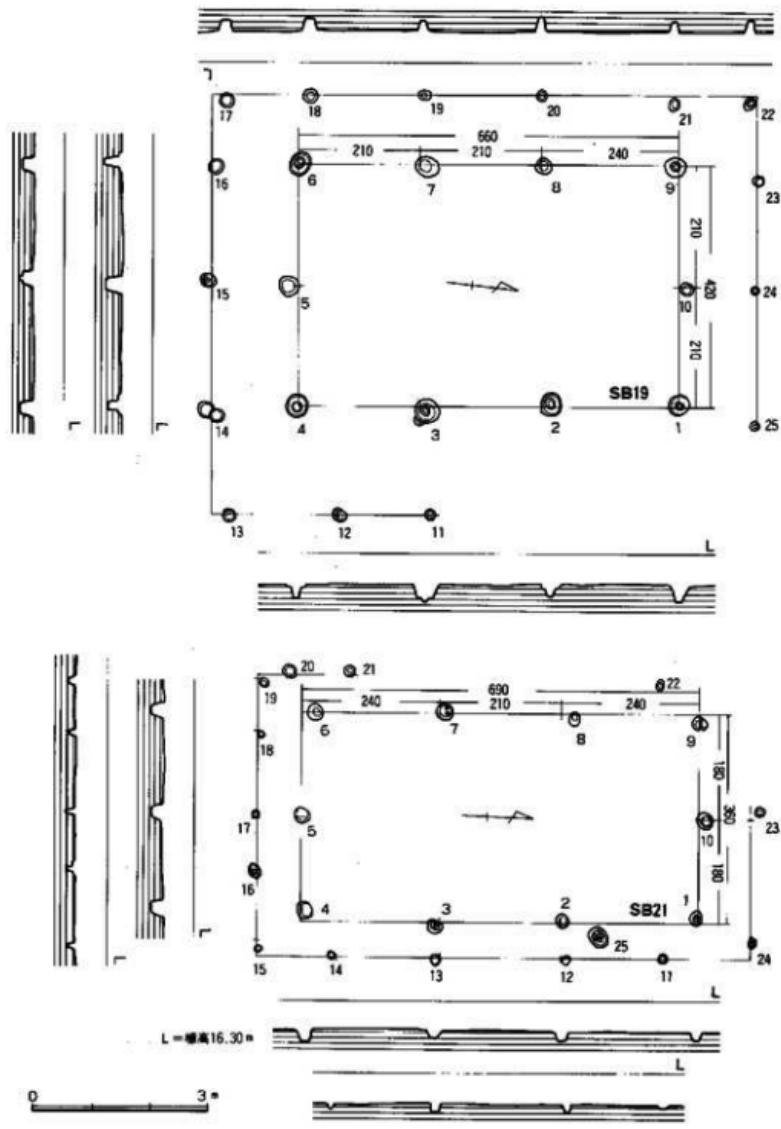
SB19(第11図) SB18の西南に位置する3面窓付の南北棟である。身舎は2×3間で、柱穴は径22~40cm、深さ20~34cmの円形を呈する。梁間柱は外に出る。窓は東を除く3面につくが、身舎からの間は北梁で135cm、南梁で150cm、西桁で120cmと不等である。窓柱は径12~25cm、深さ12~33cm。東桁の南半に平行してP11~13がある。目隠し塀であろうか。SB13・14・18・20と重複する。

出土遺物(第14図009) P1・3・4・19から土師器・内黒土器小片が少量出土した。009は内黒土器で、内面ヘラ研磨、外面横ナデ調整を行なっている。

SB20(第10図) SB19の北側に重複する2×3間の南北棟である。南側梁に平行して西か



第10図 基立柱建物実測図 VI (1/100)



第11図 摄立柱建物実測図(1/100)

ら1間分柱穴が続く。身舎の柱穴は円形で、径15~22cm、深さ14~36cm。SB14とも重複する。P2・4~6・9で縄文土器・弥生土器・土師器の細片が少量出土した。

SB21(第11図) SB20の西側に位置する二面廻付の南北棟である。身舎は2×3間で、柱穴は径20~28cm、深さ14~28cmをはかる。梁間柱はともにやや外に出る。廻は東と南につき、身舎から東で60cm、南で75cmの間をとる。その柱穴は径11~20cm、深さ9~15cm。西側にはP20・21、北側にはP23・24の柱穴があり、この建物に付属する施設と考えられる。また東桁と廻の間には径30cm、深さ14cmのP25があり、その中から土師器碗(015)が正置で出土した。SB18にみられたものと同じく、この建物に関する祭祀行為を示すものであろう。SB15と南側で重複する。

出土遺物(第14図010~012・015) P2・8・13・22から土師器片が少量出土した。010・011は杯あるいは碗片である。ナデ調整か。012は甕であろう。復元口径15.4cm。二次焼成を受けている。この3点は磨滅が著しい。015はP25から出土した高台付楕で、口径は12.4cm、器高4.6cmをはかる。底部はヘラ切り。体部・高台は内外面ともナデ調整で仕上げる。

SB22(第10図) E-9・10区で検出した側柱だけの南北棟である。現状では1×3間の建物であるが、試掘トレンチが梁間柱部分を掘り抜いている所から、本来は梁行が180cm(6尺)等間の2×3間の建物であったと想定される。円形柱穴は径16~23cm、深さ18~32cm。SB17と重複する。P8から縄文土器細片が1点出土しただけである。

SB23(第12図) D-E-9区で検出した側柱だけの南北棟である。東桁の1柱穴および南梁間柱を確認できなかったが、一応2×3間の建物を想定しておく。柱穴は径16~25cm、深さ5~30cm。SK73に切られ、SB16・17と重複する。P3・5から土師器・内黒土器・黒色土器の細片が少量出土した。

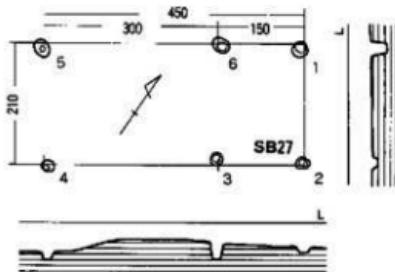
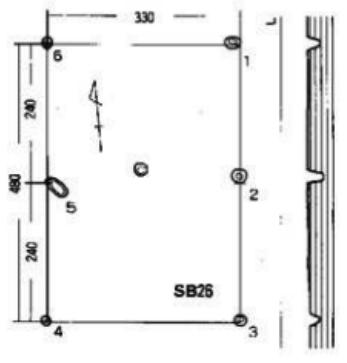
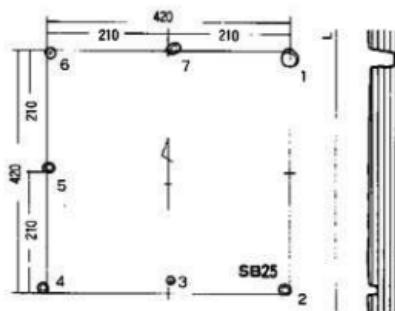
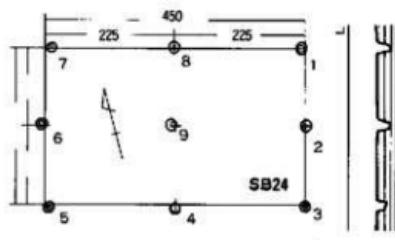
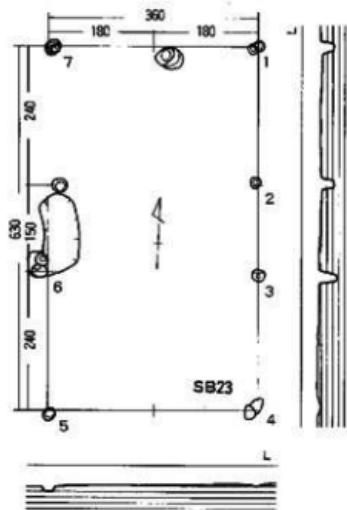
SB24(第12図) E-8区で検出した2×2間の純柱建物である。東西450cm(15尺)、南北270cm(9尺)で、東西棟と呼べるものであろう。柱穴は円形で、径17~20cm、深さ18~30cmをはかる。P1・3・8から縄文土器・土師器・内黒土器の細片が少量出土した。

SB25(第12図) D-8・9区でSB03と重複する側柱だけの建物である。2×2間の建物を想定したが、東間柱を欠く。この一帯が削平されおり、東に建物が延びる可能性もある。とすればSB03との建替え状態を示すものかもしれない。柱穴は径16~27cm、深さ4~42cm。出土遺物はない。

SB26(第12図) E-8・9区で検出した側柱だけの1×2間の南北棟である。柱穴はP5が楕円形の他は、径16~24cmの円形。深さは4~29cm。SB06・07・28~30と重複する。P2から土師器細片が少量出土した。

SB27(第12図) C-9区に位置する1×2間の側柱だけの建物である。これまでにみてきた建物とは大きく棟方向がずれる。柱穴は径19~24cm、深さ9~31cm。SB03・16・23・25と重複する。P2・6から縄文土器・土師器・黒色土器の細片が少量出土しただけである。

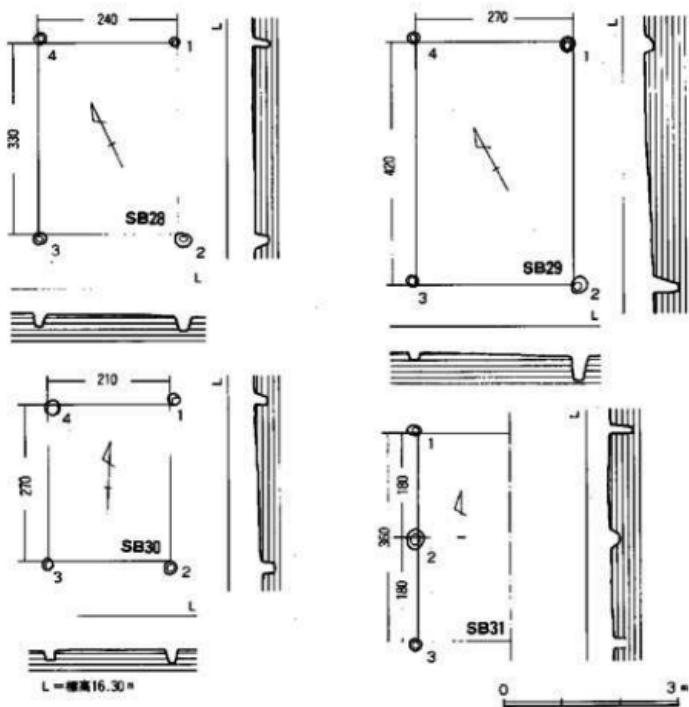
SB28(第13図) E-9区で検出した1×1間の南北に長い棟である。柱穴は径18~25cm、



0 3 =

L = 標高 16.30 m

第12図 据立柱建物実測図(1/100)



第13図 標立柱建物実測図X(1/100)

深さ23~30cm。SB06・07・26・29・30と重複する。P3から内黒土器細片が1点出土。

SB28(第13図) SB28の南側で重複する1×1間の南北に長い建物である。柱穴は径18~25cm、深さ12~43cm。SB06・07・26とも重複する。P4以外から土師器細片が出土した。

SB30(第13図) SB29の西側で重複する1×1間の建物である。柱穴は径18~25cm、深さ17~25cm。SB06・07・26とも重複する。P2から繩文土器細片1点が出土した。

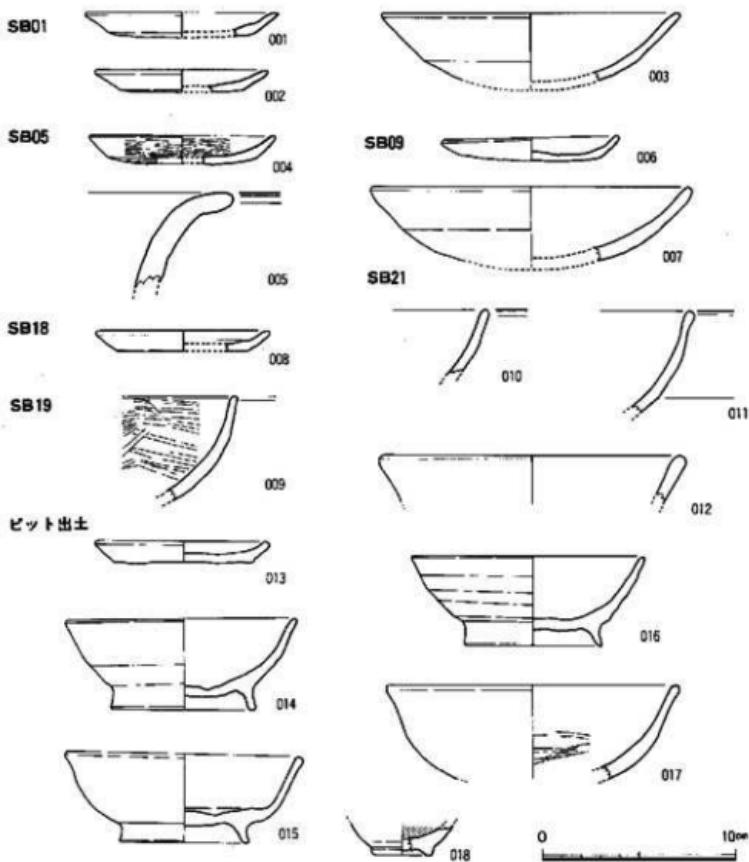
SB31(第13図) C-10区で検出した南北方向の柱穴3個であるが、SB01とはほぼ同じ方位をもつことから、東に延びる建物として設定した。柱穴は径16~30cm、深さ17~40cm。出土遺物はない。

その他のピット出土土器(第14図013~018) ここでは直接建物に関係しないピットから出土した土器について扱う。ただし、013・014はSB18、015はSB21の項ですでに観察を行なったので、ここでは再述しない。016は土師器高台付椀である。口径12.1cm、器高4.65cm。底部は

番号	規模	棟方向	梁 行		桁 行		方位 (磁針)	床面積 m ²	備 考
			実長 cm	柱間寸法	実長 cm	柱間寸法			
01	2×3	東西	390(13)	6.5	630(21)	7	N	24.57	四面廻・目隠し塀
02	2×3	東西	390(13)	6.5	630(21)	7	N-7° E	24.57	四面廻
03	2×3	東西	390(13)	6.5	630(21)	7	N-5° E	24.57	
04	2×3	東西	360(12)	6.0	630(21)	7	N-6° W	22.68	
05	2×3	東西	390(13)	6.5	600(20)	7-7-6	N-5° W	23.40	東廻
06	2×3	南北	360(12)	6.0	600(20)	7-6-7	N-2° E	21.60	
07	2×3	南北	360(12)	6.0	600(20)	7-6-7	N-3° E	21.60	
08	2×3	南北	360(12)	6.0	570(19)	7-6-6	N-10.5° E	20.52	四面廻
09	2×3	南北	390(13)	6.5	570(19)	6-7-6	N-12.5° E	22.23	目隠し塀
10	2×3	南北	360(12)	6.0	570(19)	6-7-6	N-13.5° E	22.23	
11	2×3	南北	360(12)	6.0	600(20)	7-6-7	N-4° E	21.60	
12	2×3	南北	390(13)	6.5	630(21)	7	N-3° E	24.57	
13	2×3	南北	360(12)	6.0	570(19)	6-6-7	N-5.5° E	20.52	
14	2×3	南北	360(12)	6.0	630(21)	7	N-6.8° E	22.68	二面廻(北・東)
15	2×3	南北	390(13)	6.5	600(20)	7-6-7	N-1.5° E	23.40	
16	2×3	南北	390(13)	6.5	510(21)	6-6-5	N-4° W	19.89	
17	2×3	南北	360(12)	6.0	570(19)	7-6-6	N-6° W	20.52	
18	2×3	南北	390(13)	6.5	660(22)	7-8-7	N-1° W	25.74	
19	2×3	南北	420(14)	7.0	660(22)	8-7-7	N-6.5° W	27.72	三面廻(北・西・南)
20	2×3	南北	360(12)	6.0	600(20)	7-6-7	N-4° W	21.60	
21	2×3	南北	360(12)	6.0	690(23)	8-7-8	N-2.5° W	24.84	二面廻(東・南)
22	1×3	南北	360(12)	12.0	450(15)	5-5-5	N-6° W	16.20	
23	1×3	南北	360(12)	12.0	630(21)	8-5-8	N-2.5° W	22.68	
24	2×2	東西	270(9)	4.5	450(15)	7.5	N-15° E	12.15	
25	2×2	一	420(14)	7.0	420(14)	7	N	17.64	
26	1×2	南北	330(11)	11.0	480(18)	8	N-5° E	15.84	
27	1×2	南北	210(7)	7.0	450(15)	5-10	N-55° E	9.45	
28	1×1	南北	240(8)	8.0	330(11)	11	N-26° E	7.92	
29	1×1	南北	270(9)	9.0	420(14)	14	N-28° E	11.34	
30	1×1	南北	210(7)	7.0	270(9)	9	N-4° W	5.67	
31	2×1	東西?	360(12)	6.0	?	?	N?		

注・桁実長の()内はA、B(30mm)として計算

第1表 田村第3地点掘立柱建物計測表(身寄のみ)



第14図 振立柱建物・ピット出土土器実測図(1/3)

ヘラ切りで板状压痕が残る。体部および高台は内外面ともナデ調整。これはSB11の東側ピットから正置の状態で出土しており、SB18・21にみられた建物関係の祭祀遺物と考えられる。017は土師器椀片である。復元口径4.8cm。体部内面にヘラ研磨がみられる。SB05と重複したピットから出土。018は淡赤褐色の胎土の陶器杯底部片で、内面にはスリップを施す。その上に薄緑の釉がかろうじて認められる。外面から底部にかけてはヘラ削りの露胎。SB21と重複するピットから出土。

(3) 井戸

3b・c・d地点で点在する4基の井戸を検出した。いずれの井戸も素掘りである。

SE01 (第15図) D-10区発掘区西端部分で検出した。上面は径約1mの円形をなし、底に向ってすばまる。深さ0.75m。埋土は褐色粗砂と黒色粘質土の上下2層に分かれる。

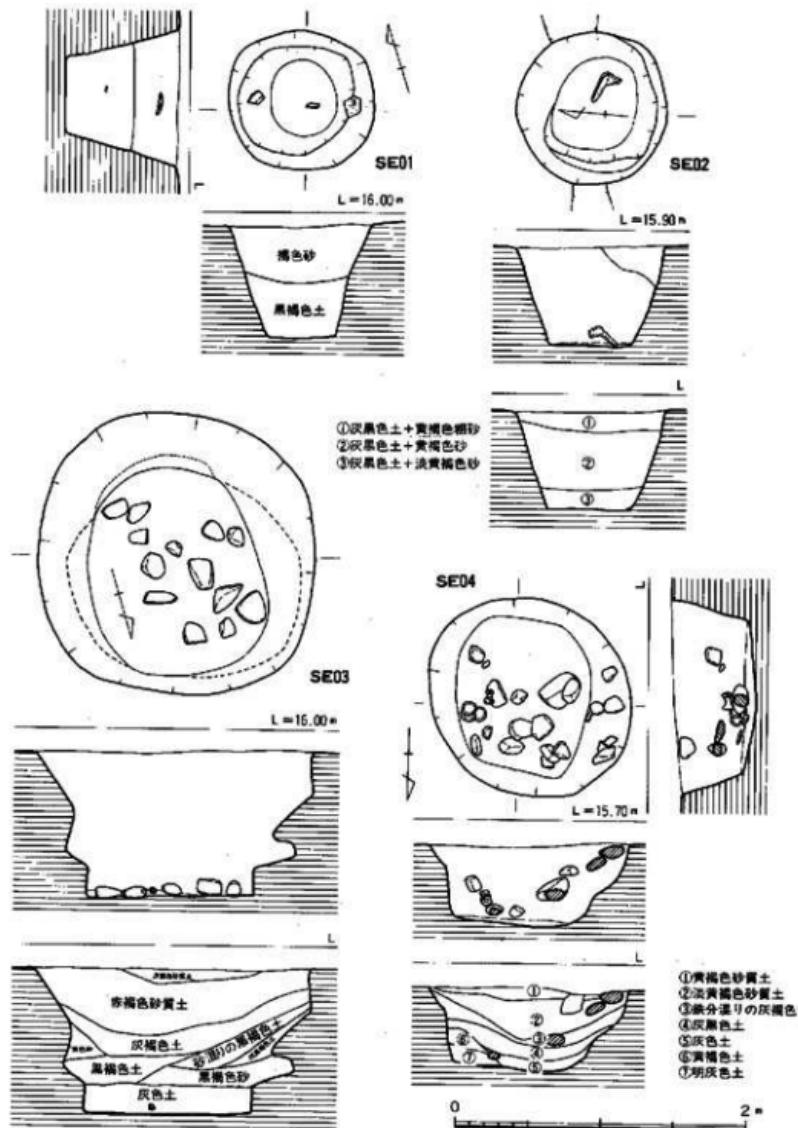
出土遺物 (第16図019-020) 019は褐釉陶器の壺片である。横耳が1個しか残存しないが四耳壺と考えられる。釉は黄味をおびた褐色で、部分的には黒色に近い所もある。残存部外面と内面上部に施釉する。胎土には白色・黒色の微粒を含む。小片のため径は不確実である。020は土師器皿である。復元口径15.8cm、器高4.15cm。体部と底部の境には明瞭な段を設けている。底部はヘラ切りで、板状圧痕が残る。体部は横ナデ、内底は丁寧なナデ調整。ともに上層出土。他にヘラ切り土師器皿など少量の土器細片が出土している。

SE02 (第24図) B-5・6区で検出した。上面は径1.05mの円形で、底に向ってすばまる。深さ0.70m。埋土は上中下3層に分かれる。下層底面に接して馬と考えられる下顎骨が出土した。SD33を切っている。出土遺物は前述の骨の他、弥生土器・土師器細片少量と石鏃などである。

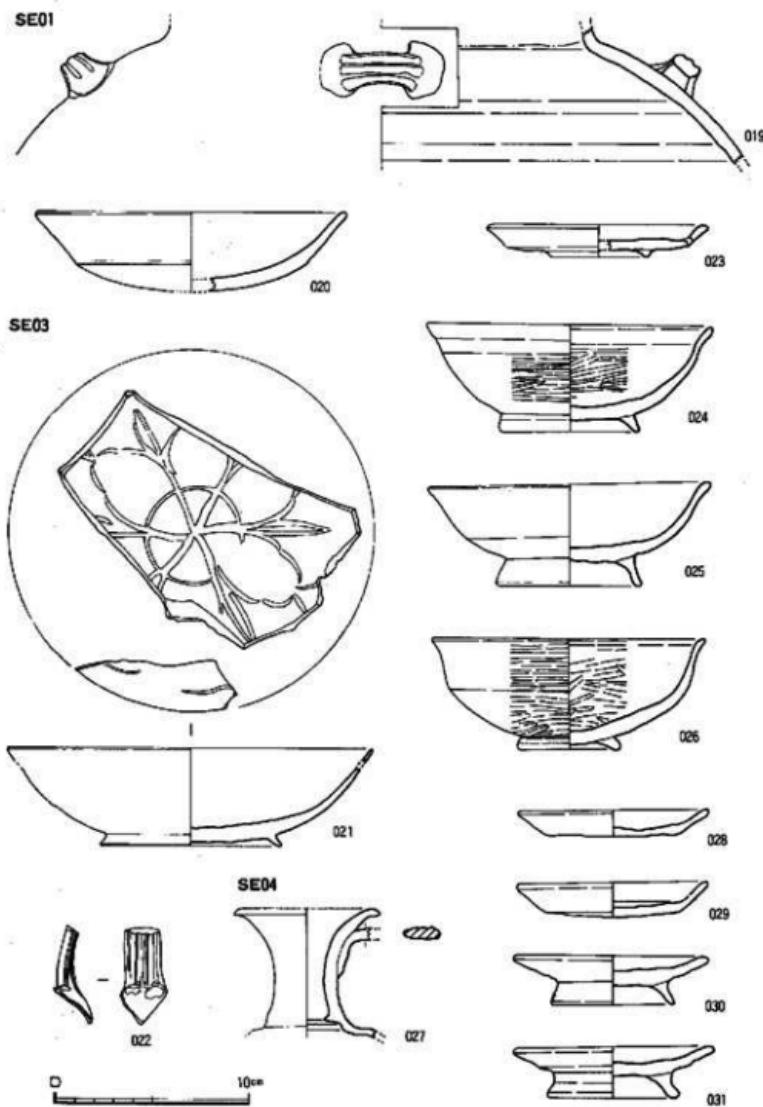
SE03 (第24図) C-3区、SB01のすぐ北側で検出した。上面は径1.90mの円形を呈する。深さは1.0m。底面より20cmほど上の側壁がえぐれている。これは湧水・汲水による壁面の崩壊であろう。底面には20cm大の焼けた礫が13個以上あり、その間を灰色粘土で充填している。梅雨と重なり湧水が著しかったため、底面全体を確認できなかったが、井戸底の施設であった可能性もある。

出土遺物 (第16図021-026) 021は越州窯系青磁碗である。復元口径18.8cm、器高5.1cm、底径9.4cm。内面にヘラ状工具で花文を彫り込んでいる。花文は六弁花の重弁文で、花芯は簡略化されて円形になっている。釉は緑がかった褐色で、全面にかかる。胎土は白色・黒色微粒を少量混え、暗赤褐色を呈する。底面には焼成時の目跡が5ヶ所にある。また疊付の一部には砂が焼成時付着している。高台は低いが、外にシャープに張り出す。これとは別にもう1個体分(3片)刻花文を有する越州窯系青磁が出土している(図版23・657)。花文の詳細は不明だが021によく似る。ただ釉は灰色味をおびた緑色で、胎土も灰色を呈する。022は越州窯系青磁水注の把手である。これはSE04の027と同一個体であり、その観察はあわせて後述する。磁器としては他に白磁細片が1片ある。

023は低い高台のつく土師器皿で、復元口径11.5cm、器高1.7cm。器表は剥落が著しいが、内外面とも部分的にヘラ研磨が認められる。024は土師器の高台付碗である。口径15.0cm、器高5.6cm。口縁部は強いナデで外反する。体部は内外面ともヘラ研磨。内底と高台部はナデ調整。底部にはヘラ状工具による溝巻状の調整が認められる。内面は褐色、外表面は灰黒色と褐色を呈する。025は同じく高台付碗で、口径14.7cm、器高5.3cmをはかる。高台は高く大きい。全体に器表の磨滅が著しい。残存部からすれば内外面ともナデ調整である。底部はヘラ切り。明黄褐色。



第15図 井戸実測図(1/40)



第16図 井戸出土土器実測図(1/3)

026は黒色土器碗である。復元口径14.2cm、器高5.75cm。高台は低く小さい。高台部分はナデ、他は内外面とも横のヘラ研磨。内底は強い指ナデの後、ヘラ研磨を行なっている。漆黒にいぶされ、光沢さえおびる。以上述べた遺物は、いずれも底面縁付近から出土したものである。この他土師器の細片、滑石製石鍋片、種子などが出土している。

SE04 (第24図) I-8区で検出した。上面は 1.34×1.48 mの略円形を呈する。深さ0.57mで、底面は 0.93×1.06 mの隅丸方形状をなす。SE03と同様、焼けた縁が井戸内にみられるが、底面にはほとんどみられず、流れ込んだ状態を示している。この縁および⑥・⑦層の堆積状況からすれば、井戸の廃棄にあたって井戸側が引き抜かれた可能性がある。井戸の東側の多数のピットは、先にみた獨立柱建物の柱穴とは異なるものである。

出土遺物 (第14図027-031) 027は越州窯系青磁水注である。SE03の022と同一個体。頭部以上が残存しており、口径7.6cmをはかる。頭部はよくしまっており、口縁部がラッパ状に開く。内面の頭部と肩部の境には突起および段がつく。肩部は横に張るようである。把手は扁平な蒲鉾状の断面を呈し、背面に4本の沈線を入れる。軸は薄緑色で、スリップを施した後、頭部内面から外面全体にかける。ややガラス質で、貫入がみられる。胎土は灰色で、黒色・赤褐色微粒が少量混る。028・029は土師器皿で、口径10.0cm、器高1.4~1.8cm。底部はヘラ切り。028には板状圧痕が残る。体部は内外面とも横ナデ調整。030・031は土師器高台付皿で、口径10.2cm~10.5cm、器高2.6cm。高台高は1.3cm前後。全面ナデ調整。内底には煤らしき付着物がみられる。以上の5点はいずれも④・⑤層からの出土である。②・③層からは縄文土器・土師器細片、①層からは同種の土器の他、須恵器・唐津焼が出土している。①層はII層の流れ込みであろう。

(4) 土壌

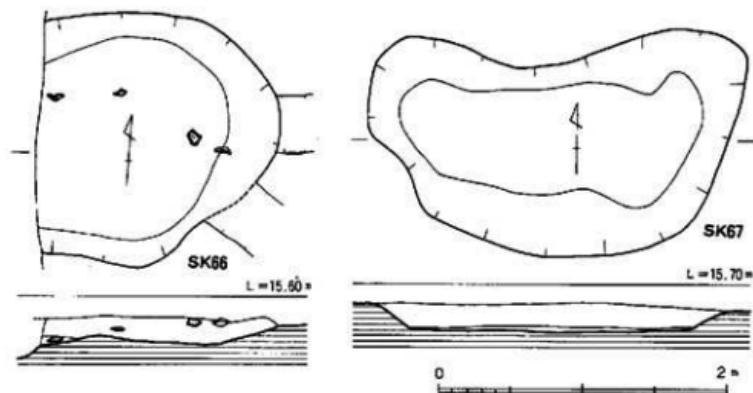
調査区内で22基検出土した。このうち3a地点のものは、溝などと複合あるいは関連しており、また規模・形態ともまちまちである。残りの地点の土壌は、一部切り合いをみせるものの点在しており、形態・規模・主軸方位なども描うものがある。あるいは土壌墓であろうか。なおSK70は欠番である。

SK60 B-3区で検出した。 2.35×0.88 mの不整橈円形を呈し、深さ19cmをはかる。覆土は砂質土で、石匙が1点出土した。SD102に切られる。

SK61 B-C-1区で検出した 4.20×2.6 mの不整橈円形のもので、深さ35cm。覆土は黒色粘土。SD37を切る。出土遺物は、土師器皿、龍泉窯系・同安窯系青磁碗、白磁碗の細片が各々1点の他、縄文土器・弥生土器・須恵器片および石器が少量ある。

SK62 (第21図) A-1区で検出した。 3.10×2.60 mの略円形を呈し、深さ55cmをはかる。覆土は砂質土である。SK63を切る。縄文土器・土師器・瓦器の細片および石片が少量出土した。

SK63 (第21図) SK62に切られる隅丸長方形状のもので、推定長1.8m、幅0.8m、深さ32



第17図 土壌実測図 I (1/40)

cmをはかる。覆土は砂質土。出土遺物はない。SD40aと切り合うが先後関係不明。

SK64 SK62の東に位置する。南側をSD40aに切られる。不整形をなすものか。深さ57cm。覆土は黒色粘質土で、木片が混る。弥生土器・土師器・瓦器の細片少量と石鏃などが出土。

SK65 (第21図) A-1区南端で検出した。南が発掘区外にのびるが、径2.70mほどの不整形圓形になると考えられる。残存高57cm。湧水が著しい。縄文土器・弥生土器・土師器・瓦器の細片などが出土した。

SK66 (第21図) B-2区で検出した。南北長1.76mの略円形で、深さ23cm。西は現代排水溝、上面はSD34に切られる。縄文早期の押型文土器から古墳時代の須恵器まで細片ながら少量ずつ出土している。

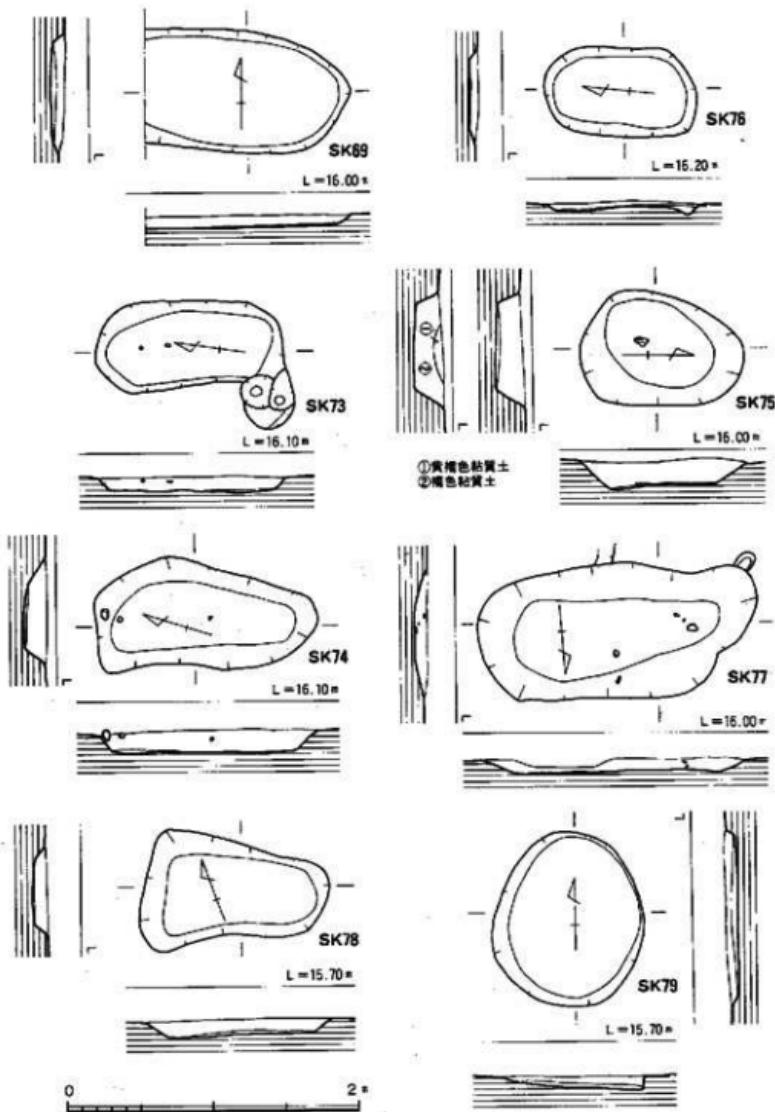
SK67 (第21図) B-2・3区に位置する2.5×1.3mの不整橢円形の土壌である。深さ26cmで、底面は東側に向って低くなる。縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器の細片が少量出土した。

SK68 SK67の東に位置する。1.70×1.56mの隅丸長方形の平面で、深さ18cm。SD102と接続するが、関係は不明。土師器皿・杯などの細片が少量出土した。

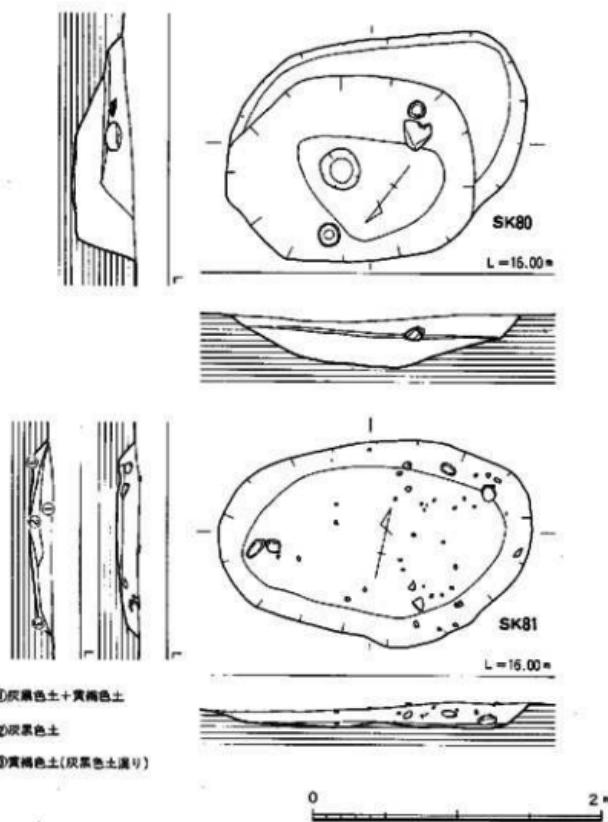
SK69 (第18図) E-8区で検出した。幅0.8m、残存長1.41mの東西に長い橢円形を呈す。深さ9cm。覆土から土師器・黑色土器・瓦器の細片が数点出土した。

SK71 C-2区で検出した。1.72×0.66mの東西に長い橢円形を呈するが、深さ3cmと遺存状態は悪い。SK72に切られる。遺物は、土師器皿・碗・青磁の他縄文・弥生土器が出土。

SK72 SK71の東側を切る1.55×0.7mの南北に長い橢円形土壌である。深さ4cmと遺存状態は悪い。東側でSX33をも切る。弥生土器・土師器の細片がごく少量出土。



第18図 土壌実測図 II (1/40)

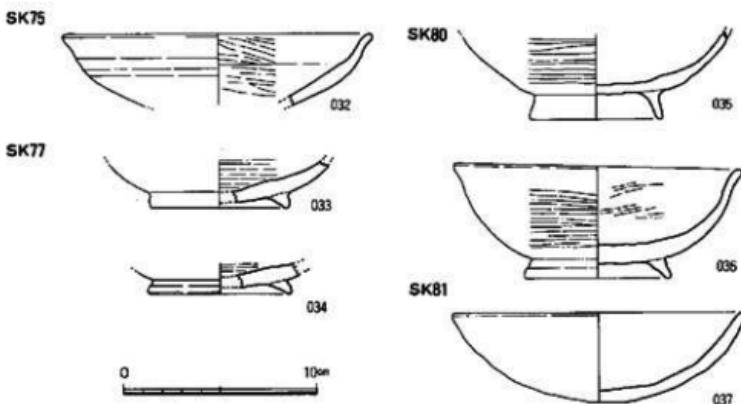


第19図 土壙実測図(1/40)

SK73 (第18図) D-E-9区で検出した土壙で、東西長1.3m、南北幅0.58cmの橢円形状土壙である。深さ11cm。西南隅でSB23のP6を切る他、SB16と重複する。覆土は粗砂粒混りの褐色粘質土で、炭化物を含んでいる。縄文・弥生土器細片、土師器・黒色土器などの細片が少量出土した。

SK74 (第18図) SK73の2.6m北に位置する。1.57×0.7mの南北に長い土壙で、北側がやや開く。深さ16cm。粗砂粒、炭化物を混えた粘質土（灰褐色と黄褐色混り）である。土師器・黒色土器・瓦器細片の他、縄文・弥生土器の細片も出土した。

SK75 (第18図) F-8区で検出した1.13×0.79mの長軸を南北にとる橢円形土壙である。



第20図 土壌出土土器実測図 (1/3)

深さ22cm。覆土は上面に黄褐色粘質土が一部みられる以外は、褐色粘質土である。

出土遺物 (第20図032) 032は底面から出土した内黒土師器碗である。復元口径16.0cm。内面はヘラ研磨、外側はナデ調整。色調は内面黒色、外側灰褐色を呈する。他に少量土師器・黒色土器の細片が出土している。

SK76 (第18図) D-9区で検出した1.06×0.6mの南北に長い橢円形土壙である。深さ6cmと残存状態は不良。覆土は褐色粘質土で、須恵器・土師器・瓦器の細片が少量出土。

SK77 (第18図) D-10区で検出した1.88×0.94mの東西に長い橢円形土壙である。西側部分は上面がややくびれる。深さ9cm。

出土遺物 (第20図033-034) 033は低い高台の付く内黒土師器の碗である。内面はヘラ研磨、外側はナデ調整。内面黒色、外側淡褐色を呈する。034は黒色土器碗。やはり低い高台がつく。内面ヘラ研磨、外側ナデ調整。他に土師器皿(糸切り)・杯・碗、瓦器、須恵質土器片などが出土地している。

SK78 (第18図) I-5区で検出した1.26×0.63mの東西に長い長方形土壙である。西側がやや開く。深さ11cm。出土遺物はない。

SK79 (第18図) SK78のすぐ北側で検出した。南北に長い橢円形を呈し、1.25×1.00m、深さ10cmをはかる。出土遺物はない。

SK80 (第19図) F-7区で検出した2.15×1.55mの南北に長い橢円形土壙である。南側に浅いテラスを設ける。深さ44cm。褐色のしまった覆土をなす。SB12を切り、SK81に切られる。

出土遺物 (第20図035-036) 035は土師器高台付碗である。高台は比較的高く、わずかに外に開く。底部はヘラ切り。全面ナデ調整。磨滅激しい。036は内黒土器の高台付碗である。口

径15.0cm、器高5.8cm。全体に磨滅しているが、体部は内外面ともヘラ研磨、底部および高台はナデ調整。ヘラ切り。内面灰黒色、外面淡褐色を呈する。他に縄文土器、弥生土器、糸切りを含む土師器皿・杯、黒色土器、白磁、越州窯系青磁、滑石製石鍋の細片が出土した。

SK81 (第19図) SK80の北側を切る2.17×1.38mの東西に長軸をとる楕円形土壙である。深さ18cm。覆土は3層に分かれるが基本的には灰黒色土である。SB04に切られ、SB12と重複する。

出土遺物 (第20図037) 復元口径15.2cm、器高4.65cmをはかる土師器杯である。磨滅著しく器面調整不明瞭。ナデか。また底部はヘラ切りのようである。他には縄文土器、土師器皿(ヘラ切り)などの細片が少量出土している。

SK82 G-7区で検出した1.20×0.54mの長軸を東西にとる楕円形土壙である。側壁には段をめぐらす。深さ36cm。出土遺物はない。

(5) 溝

台地-IV層上面の面で検出した溝は23条である(付図2)。掘立柱建物群の南を東西に走るものと、やや離れて西側を東北に走るものに大別できる。

SD31 C-1区西端から東北方向に走る、幅1.2~2.0m、深さ20cm前後の溝である。F-2区でSD36に切られる。覆土は黄褐色粘土・黒色粘土の上下2層に分かれる。

出土遺物 (第23図038-039) とともに土師器皿で、口径10.3~10.4cm、器高1.21~1.3cmをはかる。器面はナデ調整で、底部はヘラ切り。他に縄文・弥生土器、土師器杯、黒色土器椀、須恵器、白磁などの細片が少量出土した。

SD32 D-1区から北北東方向に走る幅約2~3m、深さ40~60cmの溝である。上層は白色粗砂、下層は細砂層となり、場所によってはIV層の黒色粘質土が崩れ落ちている。下層の下部西側には杭が部分的に打ち込まれている。護岸用のものか。弥生土器・土師器の破片が少量出土しただけである。IV層に伴う溝の可能性もある。

SD33 B-6区に端を発し、西にはば一直線に走る。幅0.5~0.7m、深さ5~16cmで、西に向かうにつれ深くなる。ただSD39と接する付近は浅く、その先後関係は不明。覆土は白色粗砂。SE02に切られる。縄文・弥生土器、須恵器、土師器などの細片がごく少量出土した。

SD34 SD33の北約4mをほぼ平行して走る溝である。B-5区にその東端があり、その辺は2m以上の幅をみせるが、西に向かうにつれ狭くなり、B-2区付近で途切れる。深さ12~25cm。東側の方がやや深い。SK66を切る。覆土は白色砂で、下部には鉄分が沈着している。縄文土器・弥生土器・土師器の細片の他、ふいご羽口片が出土した。

SD35 B区を東西方向に調査区いっぱいに横断する溝である。B-4・5区でわずかに蛇行する。溝幅は東側で約0.5mと狭く、西に向かうにつれ広くなり約2mの最大幅をもつ。西端に近いB-1・2区では地山礫が露出し、溝はいったん途切れる。西端はSD39に切られる。またSD36・

37にも切られる。深さは、10~37cm。この溝の北岸にはSD35a・b・cの3本の小溝が接続する。覆土は暗黄褐色砂質土。縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器の細片が少量出土したにとどまる。

SD35a B-6区に端を発し、西南方向に14.2m走り、B-5区でSD35に接続する幅0.6~1.0mの小溝である。深さ10cm前後。東端部分は4つに枝分かれしている。

出土遺物 (第23図040) 上師器皿片である。復元底径7.8cm。底部はヘラ切り。内外面ともナデ調整を行う。他に縄文・弥生土器・須恵器・土師器の細片が出土している。

SD35b C-3区に端を発し、東南方向に7.5m走りSD35と接続する。幅0.8m、深さ13~17cm。出土遺物はない。

SD35c B-2区でSD35と接続する幅1.7m、深さ22cmの溝である。北側5.3mの所でやや開き気味に終わる。縄文土器細片・石片などが出土したにとどまる。

SD36 B-1区から東北方向に一直線に進む溝である。幅0.6~0.8m、深さ7~25cmをはかる。南端はSD39と接続し、C-1区では擾乱坑で一部途切れる。またF-2区でSD31を切っている。覆土は白色~褐色の砂が主である。縄文・弥生土器・土師器皿(糸切り)、青磁碗(同安窯系?)などが少量出土した。

SD37 SD36の東側をほぼ平行して走る幅1~2m、深さ25~37cmの溝である。溝幅はC-2区で最も広く、その両端に向かって狭くなる。B-C-2区ではSK61に切られ、また礫の露出によって部分的に途切れる。南端はSD33に切られ、SD39との関係は不明。覆土は白色あるいは黄褐色の砂である。

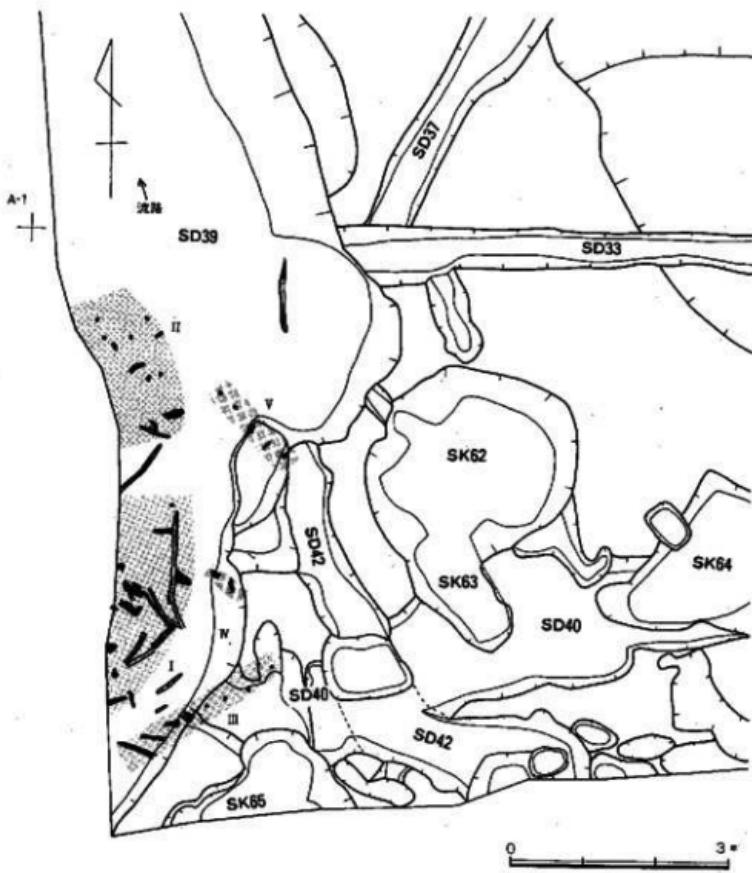
出土遺物 (第23図041・042) 041は瓦器碗片である。復元底径7.6cm。低く断面正方形形状の高台がつく。調整はナデ。内面灰白色、外表面灰黒色。042は上師器杯片。復元口径15.0cm。ナデ調整。内底の調整は強く段がつく。他に縄文・弥生土器・須恵器・土師器・白磁の細片が出土した。

SD38 C-3・4区で検出した東西に走る幅0.5m、深さ12cmの溝である。東端部分はしだいに上がり、途切れる。全長3m。

出土遺物 (第23図043) 縄文土器の甕底部である。外表面横ナデ、他はナデ調整。磨滅著しい。砂粒を多く混えた胎土で、褐色を主として呈する。晩期。他に口縁・胴部など縄文土器の細片だけが100点ほど出土している。

SD39 (第23図) 調査区西端を南北方向に走る溝である。西岸は発掘区外にかかり、その幅は不明。覆土上面~中ほどは20~30cm大の礫が充満しており、それ以下は黒色粘質土であった。深さ約60cm。A-1地区で東側に丸くふくらみ、その南側は溝や土壤状のものが複合している。溝底およびその右岸には杭が打ち込まれ、大まかに5つの列をなす。

杭列Iは溝南側底を北へ約2.8m続く杭列で、杭は東西あるいは直立と無秩序な方向から打ち込まれている。杭も複数あるが明瞭でない。ぬけた杭や流木がひっかかっている。杭列IIは杭



第21図 SD39および周辺の造構(1/80)

列Iの北約1mの所から西北方向に約2m続く、2~3本の杭を単位とした杭列である。杭列I同様各方向から杭が打ち込まれており、杭列Iの続きである可能性が高い。ただ東北側の2本の杭は後述する杭列Vの延長上に位置し、これとの関係も想定される。杭列IIIは南側右岸で東北方向に約1.5m続く7本の杭からなる。後述するSD40がSD39に接続する部分を横断しており、簡単な壠状の造構であったと推定される。杭列IVは杭列IIIの北側で溝壁に打ち込まれた2本の杭である。杭列Vは、SD39が東側に大きく張り出した南側部分で、西北方向に1.5m続く5本の杭からなる。北側2本は溝底に位置する。この部分は後述するSD42がSD39と接続する西岸にあ

たっており、これとの関係を求めるべきか。SD33・34・36・40・42の溝がSD39に接続していることから、これらの杭列が溝への給排水の用をなしていた可能性も高い。

出土遺物 (第23図044-046・第24図062) 044は土師器皿で、復元口径10.2cm、器高1.2cm。ナデ調整。底部には板状圧痕が認められる。045・046は擂鉢である。目の荒さ、方向に違いがみられる。ともに外面ナデ調整。土質質。062は銅錢である。径2.4cm。残存状態が悪く、時計まわりに元□通寶としか読めない。元が頭にくる銅錢は元豐通寶・元祐通寶・元符通寶の北宋錢があり、これもそのいずれかであろう。この他、縄文・弥生土器、須恵器、土師器皿(ヘラ切り・糸切り)・杯、龍泉窯系青磁梅、白磁などの細片が出土している。

SD40 発掘区南端をみえかくれして東西に走る溝である。深さ17~35cm。東側の方が深い。西端がSD39と接続し、そこに杭列が設けられていることは先に述べたとおりである。A-6区ではSX34の遺構を切っている。A-6・7区ではこの溝の南側に溝状の落ち込みがあるが、発掘区外にかかり詳細は不明。A-2区の覆土を中心に縄文・弥生土器、須恵器、土師器、黒色土器、龍泉窯系青磁の細片が出土した。特に縄文土器片が多いのは、SX31との切り合いによるものであろう。

SD41 A-2・3区を東西に走る長さ4.5m、幅0.5m、深さ4~5cmの浅い溝である。覆土は粗砂。縄文・弥生土器、土師器の細片があわせて数片出土したにすぎない。

SD42 A-1区南側からやや湾曲しながら西北方向に走り、SD39と接続する。幅0.6~1.5m、深さ約20cm。SD39との接続部分には杭列がある。覆土は粗砂。縄文・弥生土器、土師器の細片が少量出土したにとどまる。

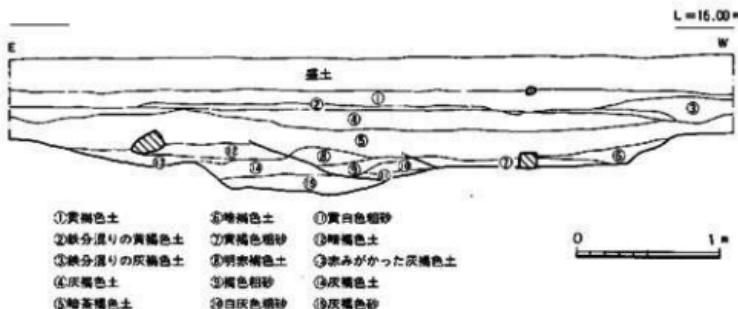
SD43 J-5区から東北方向、発掘区北端まで走る溝である。幅0.5~1.0m、深さ40cm前後。覆土は灰褐色土。位置関係からすればSD36の延長上にあるが、同一溝か確定はできない。縄文土器、須恵器、土師器、黒色土器の細片が少量出土した。

SD44a (第22図) SD43の東南側を平行して走る溝である。当初は後述するSD44b、SD44cもあわせて1本の溝と想定したが、南側に分岐がみられ、また土層図からも3本の溝の切り合いと判明した。このSD44aは一番新しい溝で、南側を走る。幅1.0~1.5m、深さ20cm前後。覆土は⑥⑦の上下2層に分かれれる。

出土遺物 (第23図047・048) 047は瓦器碗である。口径16.4cm、器高5.2cm。小さな高台がつく。体部は内外面ともヘラ研磨。磨滅著しい。口縁部の位置部が灰黒色の他は灰色。048は黒色土器碗底部片である。丸みをおびた低い高台がつく。体部外面ヘラ研磨。内面は磨滅著しい。ともに⑦層から出土。他に縄文・弥生土器、土師器皿・杯、内黒土器、白磁の細片が出土した。

SD44b (第22図) 3本の溝の中央を走る溝で、SD44aに切れられ、SD44cを切る。深さ20cm前後。覆土は⑧の赤褐色粘質土と⑨⑩⑪砂の上下2層に大別できる。

出土遺物 (第23図049) 黒色土器碗である。体部は内外面ともヘラ研磨。高台~底部はナ



第22図 SD44土層断面実測図(1/40)

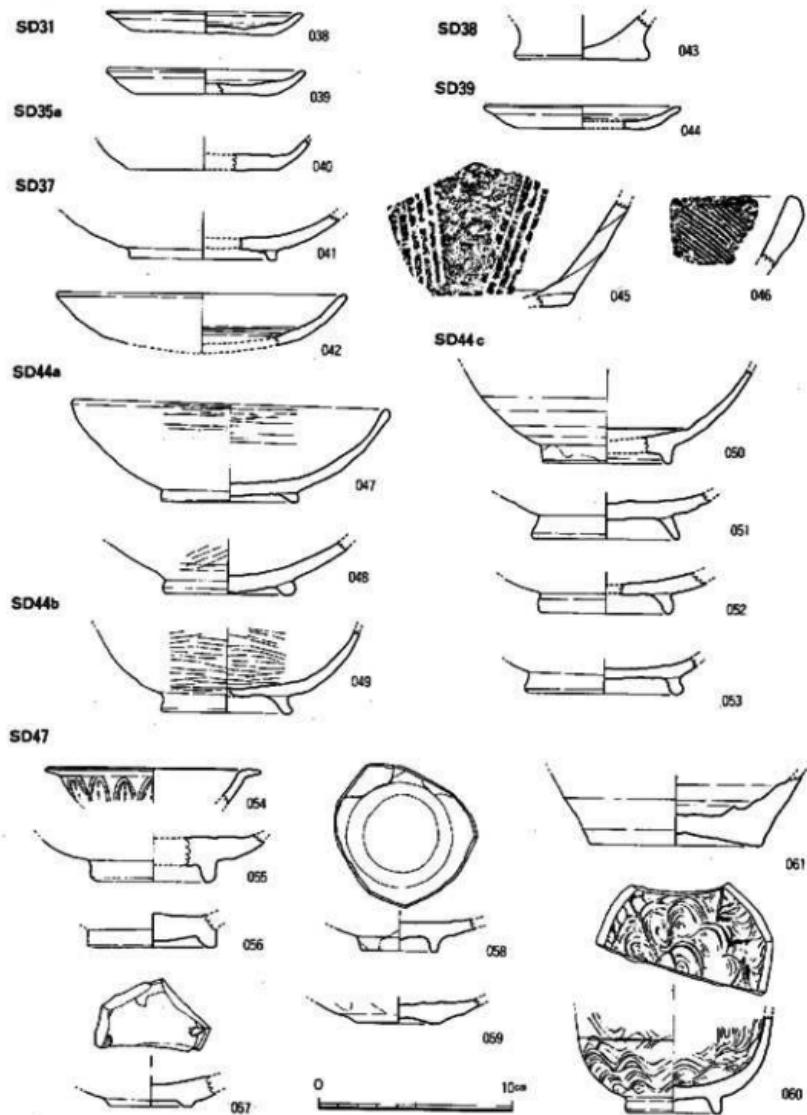
テ調整。最下層の⑪より出土。他に縄文・弥生土器、須恵器、土師器柄・把手、内黒土器、越州窯系?青磁の細片などが砂層から出土した。

SD44c (第22図) 先の2本の溝の北側を走る溝で、一番古い。深さ50cm前後。覆土は⑫⑬⑭⑮の4層に分かれ、最下層の⑮だけが砂層である。SD44a・b・cはSD37・38の延長上にあり、どれがどれと対応するか困難であるが、同一溝のある可能性が高い。またSD43も含め、これらの溝は第4地点へと延びている。

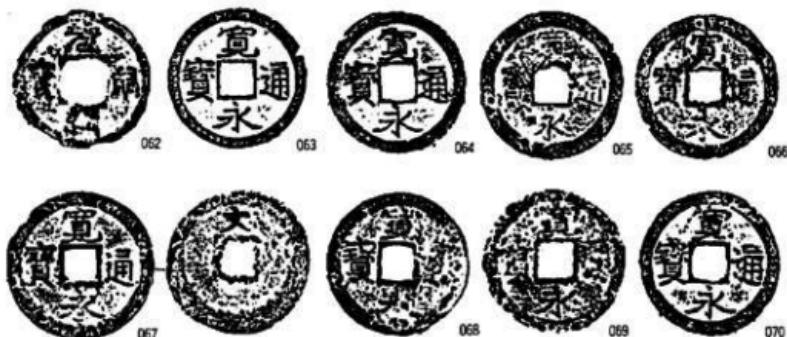
出土遺物 (第23図050-053) 050は白磁碗である。高台は低く、内面見込みには沈線をめぐらす。釉はややオリーブ色をおびた白色で、内面から外面高台部までかかる。貫入もみられる。胎土は灰白色で黒色微粒を混入する。051は土師器碗で、高台は細く高い。調整はナデ。体部下半には沈線がめぐる。052は内黒土器碗である。器表は磨滅著しい。外面はナデ調整か。内面黒色、外面褐色を呈する。053は黒色土器碗で、高台は疊付き部分が丸みをおびる。ナデ調整か。050・052は⑫層、051・053は⑮層より出土。他に縄文・弥生土器、須恵器、土師器杯・皿などの細片が少量ある。

SD47 第3d地点の北端を東西方向に走る溝で、北岸は発掘区外にかかる。深さ50~60cm。覆土は黒褐色粘質土。出土遺物からすれば江戸時代の溝である。

出土遺物 (第23図054-061・第24図063-070) 054は青磁の鉢。口縁部は外に引き出される。外面は蓮弁を浮彫りする。薄緑の釉がやや厚めにかかる。胎土は灰白色で黒色微粒を混入する。055は青磁碗で、灰色味がかった緑の釉が内面および外面高台部分までかかる。内底には沈線がみとめられる。胎土は粗く、しまりがない。以上の2点は龍泉窯系か。056は白磁碗である。釉は緑色をおびた灰白色で、残存部外面は露胎となっている。胎土は灰色で、黒色・白色微粒を混入する。057は灰色をおびた薄青色の釉を、外面および外面高台付近にまで施した磁器碗である。内底には環状の目痕と砂の付着がみられる。高台は小さく、内傾する。胎土は灰色。058は淡黄灰色。施釉を行なった磁器碗である。外面は露胎。内底に沈線と、二ヶ所の豆粒状の目痕



第23図 溝出土土器実測図(1/3)



第24図 潟出土銅錢拓影(1/1)

がある。胎土は黄褐色で粗い。059はあげ底を呈する磁器碗である。暗い灰緑色の釉が内面から体部下半にかかる。内底には砂の日跡が残り、また底部にも砂が付着する。胎土はくすんだ灰色で粗い。以上の057-059は古唐津の類であろうか。060は暗褐色の釉の上に、刷毛状の工具で白い釉薬を、体部内外面とも波文状に施した陶器碗である。外面には段がつく。胎土は赤みをおびた暗褐色。唐津焼か。061は褐釉陶器底部である。あげ底で、内底は一段高い部分がめぐる。内外面とも赤みをおびた暗褐色の薄い釉がかかる。胎土は粗い。

063-070は纈紐にたばねられて一括出土した寛永通寶である。径2.4~2.45cm。字体は細部で異なる。また066・067は裏の方格上に「文」の一文字を鋳出す。寛文8年に鋳造されたいわゆる「文銭」の類であろう。

この他に縄文時代~近世におよぶ土器、磁器、輸入陶器片が出土している。

SD100 B-4・5区を東西に走る幅40~50cmの小溝である。深さ3~17cm。東端SD101に切られる。出土遺物はない。

SD101 SD101の東端を切って東に4.2mのびる、幅0.5m、深さ8cmの小溝である。出土遺物はない。

SD102 B-3区から東に6.7m走る幅0.5m、深さ6~10cmの溝である。西はSK68と重複し、またSK60を切る。覆土は白色砂。出土遺物はない。

(6) 古河川

3a地点の西北部分に、西南から北へ走る古河川(古河道)を検出した(付図3)。その東岸はC-1区から東北方向へ延び、E-D-3区で南側に張り出し(SXII)、またE-4区でも東南に入り込む。このE-4区の入り込んだ溝状のもの(SXI)は、南側が4つに分岐し、その一番北側のものに南からの小溝がとりつく。F-3区から東岸は直線的に北に向かう。西岸について

は発掘区外にあり不明であるが、河底西側は礫が露出しており、西北側に向って高まりをみせている。このため東岸に近い部分が最も深くなっている。第3図の土層図をみてもこの部分が一段低くなっている。この古河川の西岸は第2地点から後述する第4地点に相当すると想定でき、とすれば幅の広い河として普段はいくつかの流れがあったものと考えられる。3a地点の東岸近くの深さもこの流れとしてとらえることができよう。その場合、西側部分は中洲に相当しよう。

この古河川の覆土はIV・V層に大別できるとともに2~3層に細別できるが、著しい湧水により明確にしえなかつた所もある。この2つの層には杭列などが構築されている。以下、V層、IV層の順にこの古河川の利用と埋没状態、出土遺物について観察する。

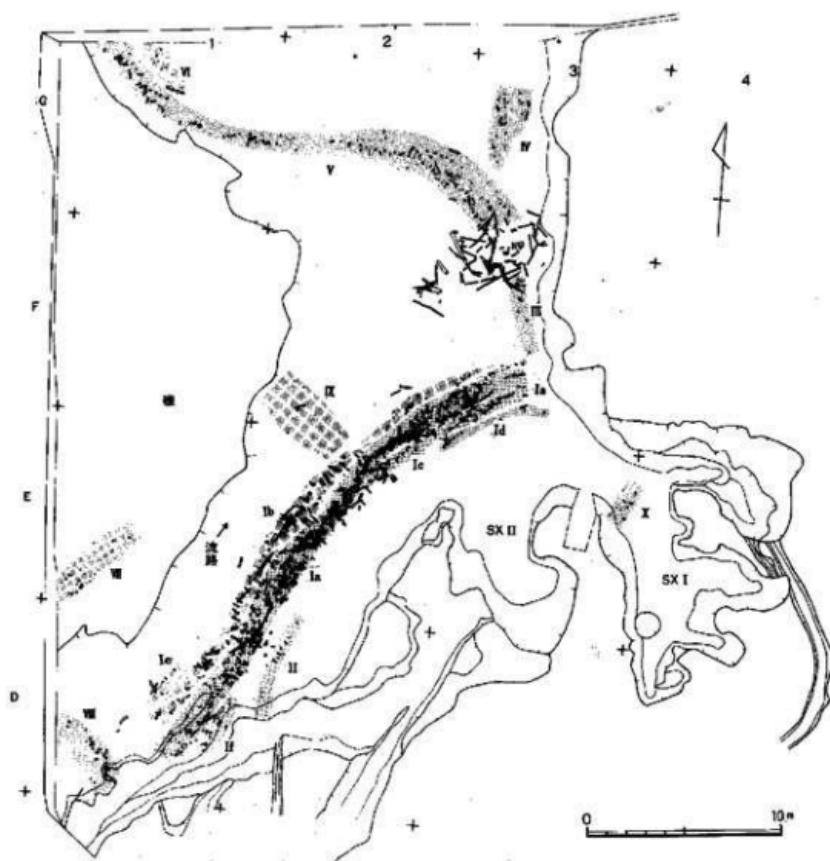
1) V層（第25図）

この層は灰褐色粘質土を主とするが、下部には砂質をおびた異色粘質土、砂質土の層などがあげられた。しかし、湧水のため分層して調査するには至らなかった。この層の中ほどから杭の頭が出土し、地山（礫・シルト）深く打ち込まれていた。杭は東岸に沿って列をなすものを主体としては全域で検出した。また河を横断する杭列も数ヶ所にみられる。ここではそれらの杭列を杭列I~Vに大別した。

杭列I D-1区からF-3区にかけて、東岸に沿うようにして築かれた杭列である。全長約27.5m、幅約5m。西南-東北に方位をとり、中央部分を中心に西北側に張る。杭列はa~fに細分できる。主体となっているのはa列で、西南側から東北側まで複数列の杭を打ち込み、また横木を置く。場所によっては乱雑な様相を呈する。b列はその西北側に続く杭列で、ほぼ1列の杭と横木からなり、整然としている。c列はa列の西北側にあり、約10m西南側でa列と合流する。このほかc列の南側にd列、a・b列の西南側にe・fの小杭列がある。これらが合わさって、外見上杭列Iを形成している。

杭列Iは681本+αの杭、20本+αの横木から構成されている。この他杭列にかかった流木などがある。杭の内訳は丸杭322本(47%)、角杭289本(42%)、丸木半截杭61本(9%)、他に板杭6本、製品（農具・建築材）の板用杭3本などである。丸杭と角杭がともに約半数ずつを占める割合となっている。これをa列だけでみると、残存総数478本の杭のうち、角杭233本(49%)、丸杭195本(40%)、丸木半截杭42本(8%)となる。b列は総数137本のうち、丸杭99本(72%)、角杭33本(24%)、丸木半截杭11本(8%)などとなり、丸杭が圧倒的に多い。またc列では、総数54本のうち、丸杭27本(50%)、角杭22本(41%)、丸木半截杭5本(9%)となっている。

次に杭の打ち込まれた方向について観察すると、杭列I全体では、東南側から打ち込まれたものが31%を占め、東18%、南13%と続く。これに対し西北側からは0.6%、北側からは2.5%と少ない。河岸に沿った東北-南側からのものは実に77%を占め、この方向から多くの杭が打ち込まれたことがわかる。ただc列だけは逆に北一面側からの杭が60%を占め、他と違いをみせる。



第25図 3a地点古河川略図(1/300)

杭の残存長は杭先部分だけのものから1m以上におよぶものまである。これは地上部の自然破壊に左右されており、頭部の比較は困難である。そこで杭底のレヴェルを以下みてみると、杭底のレヴェルは南側ほど高く、また北側、西北側の杭ほど低い傾向がある。これは地形に沿つたもので当然のことであろう。杭列Ⅰ全体でみると杭底レヴェルは、最高いものと低いものの間では1m近くの差がある。その平均値は13.95mとなっている。ただd, e, f例はいずれの杭も14.00mを越しており、その平均値も14.20m近くになっている。

横木はa, b, c杭で部分的に残存しているにすぎない。長さは1.5m以内で、1mに満たないも

のもの多くある。b列では、杭を東南側から打ち込み、そのうえに横木をわたしている。すなわち横木が流れに直接面している状態である。木のつたあるいは繩で緊縛したものと考えられるが、その痕跡は確認できなかった。

以上杭列Iの杭列について観察を行なったが、このまとまりは最初にも述べたように、見かけ上のものであり、実際は複数時期にわたって構築されたものである可能性が高い。b、c列がシンプルな構成をなすのに対し、a列は杭の打ち込みが複雑になっており、何度か修復された様子を呈する。d、e、f列は杭自体の残存長も短く、そのレヴェルも高いところから、後出する可能性が高い。このような状況からすれば、a列が最初に作られ、b、c列がその補強あるいは拡張のため作られたものと考えられる。

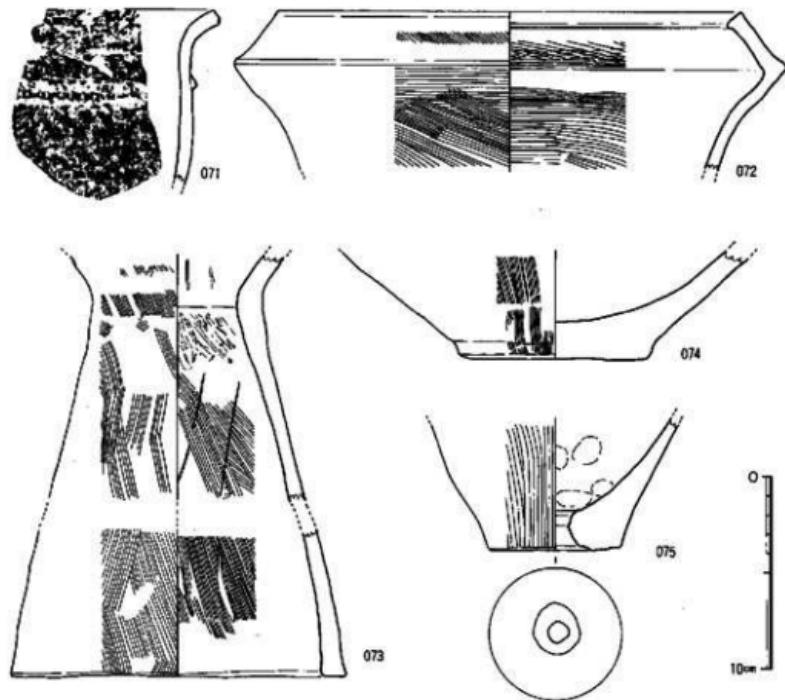
杭列II 杭列Iの東南の河岸側に位置する杭列で、北北東に約5m続く。残存するのは11本の杭で、約30cmおきに1列に並ぶ。ただ南側は一部抜ける所がある。杭種は角杭5本、丸木半截杭4本、丸杭2本となる。このうち8本が北-西側から打ち込まれている。杭底レヴェルは14.17~14.24mで、杭列Iの主流をなすa、b、c列と比べると高い。

杭列III 杭列Iの東北端近くから河岸に沿って北へ約5m延びる杭列である。16本の杭が残存し、その北側では20~30cmの間隔をもって1列に打ち込まれている。杭種は角杭が13本、丸杭が3本である。杭の打ち込み方向は、北-西側からのものがほとんどで、東北側から打ち込まれたものは1本あるにすぎない。杭底レヴェルは13.90~14.23m、平均値は14.12mである。この杭列の北側には多数の流木がみられる。

杭列IV 杭列IIIの北側約5mの所から、北方向に約4mのびる3列からなる杭列である。杭は31本残存しており、20~40cm間隔に打ち込まれる。杭種は角杭24本、丸杭7本と角杭が多数を占める。少ない丸杭は主に北側列に打ち込まれている。杭の打ち込み方向は一定しない。杭底は13.60~14.29mとばらつきがあり、その平均値は14.07mである。

杭列V 杭列III・IVの間から西北方向へゆるいS字状を呈して約25m続く杭列である。流れをせきとめる位置に築かれ、途中に3ヶ所ほど途切れる。159本の杭が残存しており、2~3列に打ち込まれている。北-東側から打ち込まれたものが62%をしめる。逆に南-西側から打ち込まれたものは13%程度である。杭種は丸杭81本(51%)、角杭67本(42%)あとは丸木半截杭6本、板杭5本である。角杭は北側の杭列に通してみられるが、残存状態は良くない。これに対し丸杭は南側の杭列にみられるほか、流木に接する東側部分に多量に用いられている。杭列レヴェルは13.49m~14.41mとばらつく。平均値は13.94m。杭列西側のものが高い値を出している。

杭列VI 杭列Vの西端北側部分で検出した東南-西北方向に約3m続く杭列である。9本の杭が残存し、2列をなす。丸杭7本、角杭2本。南側方向から打ち込まれたものが多數を占める。杭底は14.14~14.26mと杭列Vに比べ高い。杭列Vと一連の可能性もあるが、とすれば後に補強された杭であろう。



第26図 V層出土土器実測図(1/3)

杭列Ⅵ E-1区を東北方向に約5m延びる杭列である。杭列Ⅳと約7m隔ててほぼ平行に走る。角杭9本、丸杭7本、半截杭2本、板杭1本の19本の杭が残存し、複数列に打ち込まれる。その方向は南-西側からのもののが多数を占める。杭底レヴェルの平均値は14.40mと他のものに比べ高い。

杭列Ⅶ D-1区で西北-東南方向に築かれた杭列である。流れに直交して、約4m続き、複数列をなす。35本の杭が残存しており、約半数が東北あるいは東側から打ち込まれている。杭種は丸杭23本、角杭9本、板杭2本、不明1本である。杭底レヴェルは13.92~14.41mで、平均値は14.19m_g

杭列Ⅷ E-F-2区で検出した小杭列で、杭列Ⅰと直交するように設けられている。6本の杭がほぼ1列に西北方向に約5m続く。杭種は丸杭4本、丸木半截杭・角杭各1本。杭底レヴ

エルは14.01~14.37m。杭の残存状態は良くない。

杭列X SX I の北側の、いわば出口部分に、西南~東北方向に築かれた小杭列である。丸杭7本、角杭3本、丸木半截杭1本が残存しているが、残存長は小さい。杭底レヴェルは14.26~14.33mと他の杭列に比べ高い。

出土遺物 V層から出土した遺物には縄文土器・弥生土器・木器・石器がある。ここではV層の時代を示す弥生土器と木器について観察を行ない、縄文土器・石器は後段にゆずる。

弥生土器（第26図） 出土量としては多くなく、またその多くが破片である。しかし杭列にはさまで出土したのは弥生土器で、以後の土器を含まないことから、時期差を無視して一括してこれをここでとりあげた。071はいわゆる亀ノ甲式の甌である。如意形の口縁をなし、口唇下部に小さな刻目を入れる。また口縁下に三角凸帯を設け、そこにも小さな刻目を施す。外面調整は口縁~凸帯間が細い刷毛目。それ以下がナデ。内面はナデ調整。072は複合口縁甌である。口縁上半部は棱を作り内傾する。復元口径24.0m。内外面とも刷毛目調整だが、一部横ナデで消している。比較的砂粒の少ない胎土で、淡褐色を呈する。073は器台である。接合はしないが同一個体である。受部くびれは上位にある。内外面とも刷毛目調整を主とするが、部分的にナデ消す。砂粒を多く混えた胎土で、褐色をなす。黒斑もみられる。074は甌底部である。底径9.9cm。外面刷毛目、内面ナデ調整。胎土には砂粒を多く混える。前期か。075は瓶である。底部は焼成前に穿孔を施し、孔のまわりはきれいに磨いてある。外面刷毛目、内面指ナデ調整。内底には炭化物の付着がみられる。胎土には砂粒を混え、焼成良好、赤褐色を主とした色調をなす。この他弥生前期から中期にかけての土器が、破片ながら出土している。

木器（第27~29図） 古河川で出土した木器・自然木は2000点以上におよぶ。このうち、杭を中心にして1038点の木器について観察を行なった。さらに農具などの製品を中心に約100点取りあげた。残りのものについては、樹種鑑定用のサンプルを作ったが、その結果は製品の一部を除き、今回報告するには至らなかった。以下、農耕具、建築材、杭材の順で観察を行なうが、乾燥・収縮のため図化できなかったもの、あるいは実測後のそれにより原形をとどめないものも若干あることを付記しておく。

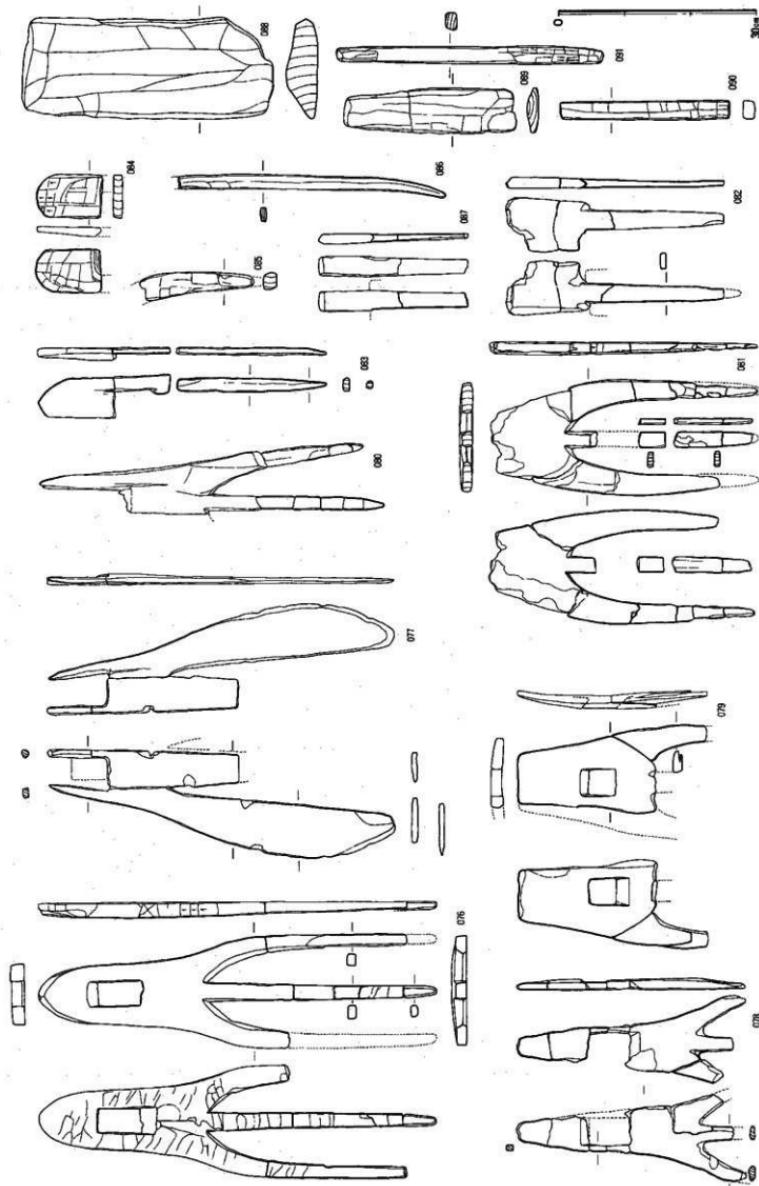
農耕具は18点出土しているが、すべて三叉鋤およびその破片である。このうち11点を図示し

No.	出土地点	樹種	法 量						柄 孔			
			全長	胴部長	刃部長	頭部幅	刃部巾	刃幅	最大厚	形 状	長さ	幅
076	SX I	カシ	(60.6)	25.9	(34.7)	9.2	—	2.2	2.3	長方形	A:9.0	B:8.1
077	G-3区	カシ	(52.6)	(18.4)	34.2	—	—	8.0	1.7	長方形	—	—
078	杭列Ia	カシ	(34.9)	28.1	(6.8)	—	—	2.2	1.7	長方形	A:7.7	B:7.4
079	G 2区	カシ	(28.7)	20.8	(7.9)	(10.7)	(13.6)	3.2	2.0	長方形	A:5.9	B:5.3
081	杭列 Ic	カシ	(40.3)	(16.1)	(27.8)	—	17.6	3.2	2.0	長方形	—	—
082	杭列 Ic	カシ	(33.1)	(12.1)	—	—	—	2.6	(1.7)	長方形	—	—
083	杭列 Ia	カシ	(22.7)	(7.7)	(15.0)	—	—	2.6	(1.6)	長方形	—	—

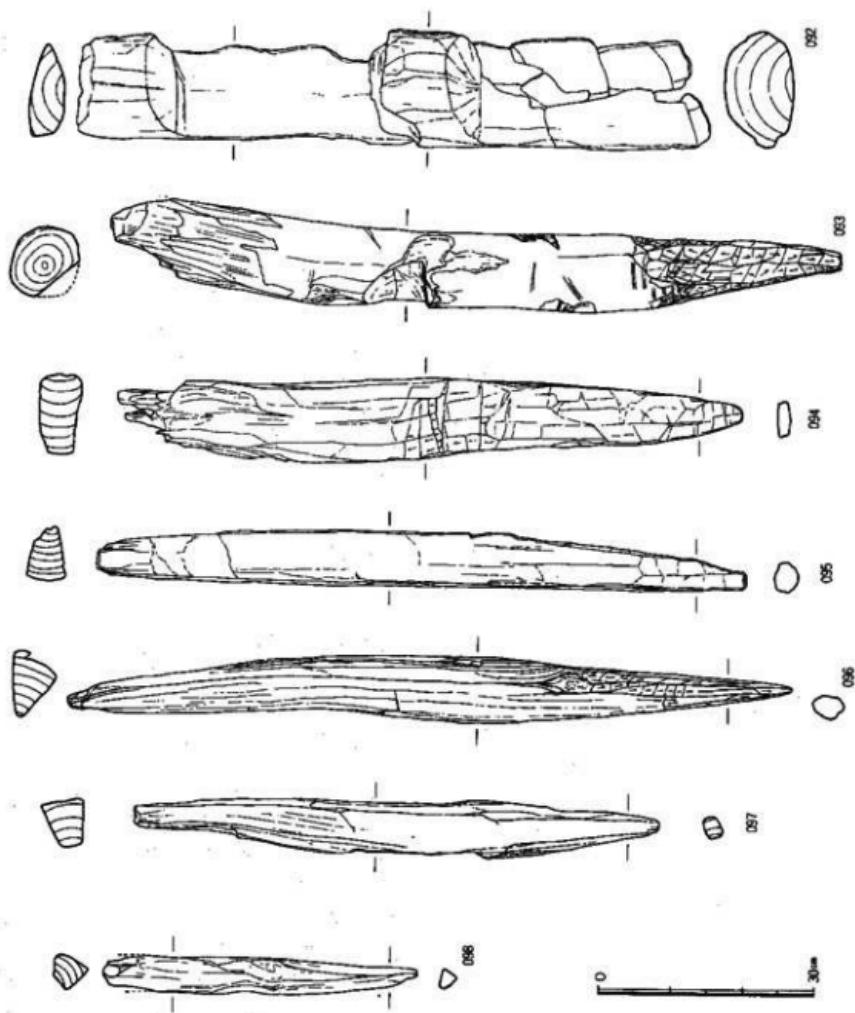
単位:cm. () 内は残存値。長さA表B及、穿孔角度A下B上

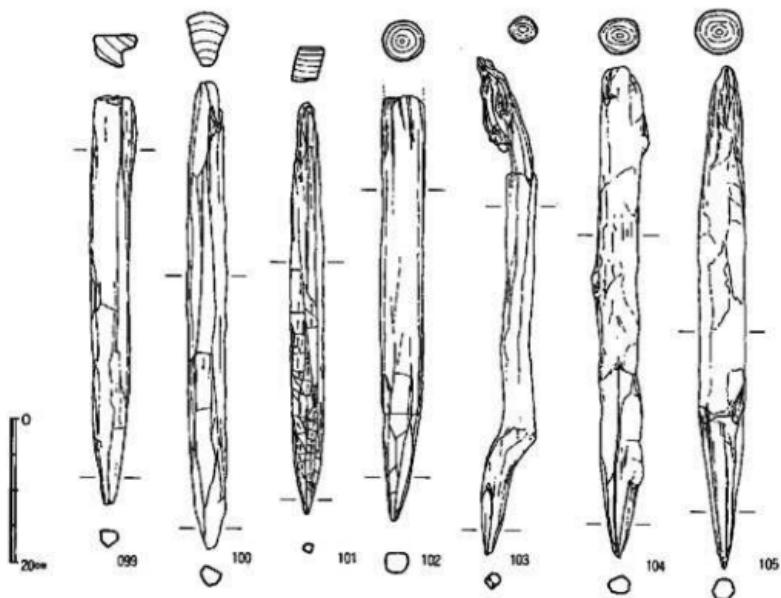
第2表 古河川出土三叉鋤計測表

图274 5号出土木制漆器图：(1/6)



第26图 V层出土木器实物图(1/8)





第29図 V層出土木器実測図III(1/8)

(076-087)。残りの良い7点については計測値を表にまとめた(第2表)。出土した三叉鉄は細部形態に相違をみせるものの、V字状切り込みにより刃部を作り出すこと、長方形柄孔をもつこと、また征目・縦木取りであることの3点で共通している。079は頭部と片側刃部が残存するもので、平頭の身部にやや幅狭の柄孔を施す。刃部の切り込みは、やや丸みをおび、コの字に近い形状が想定される。081は頭部と刃部の一部が欠損するが、刃部形態は079に共通するものである。柄孔下端壁の一部が残存する。規模、穿孔角度などは不明。077は頭部付近が乾燥・収縮しており、柄孔を含めた正確な法量は不明である。三叉鉄としては幅広の刃部を有し、全体的に長さに対して幅の割合が広い状態となる。中央刃部は両端のものに比べ、やや幅狭になるものと思われる。076は最も残存状態が良く、刃部の一部をのぞき、ほぼ全形を知り得る。頭部は丸みをもち、刃部の開きは小さい。ただ柄孔下壁面の破損が著しい。078は頭部付近が収縮のためか縮みになっている。柄孔から刃部までが長く作られているのが特徴である。083は柄孔を含む頭部と刃部の一部を残す。頭部残長20.1cm、刃部残長22.9cm、幅2.1cm。わずかに乾燥、変形している。082と087は、中央刃部と柄孔下端壁の一部を残すものである。080は乾燥し破片となっているが、推定長60cm程のものと考えられる。085・086は同一個体の可能性のあるもの

で、085は柄孔上壁の一部を含んだ頭部片、086は刃部片である。086は076タイプの歯の刃先片で、残存長40.6cm。やや変形している。090・091も三叉歯刃部片の可能性がある。

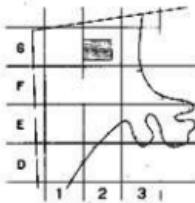
建築材（088・089・092・093）には梯子と板材・柱材がある。092は梯子の一部で、2基の足掛け部を残す。丸木半截材を利用し、その外形を残しながら断面半円形の足掛け部を作り出している。残長87.8cm、最大幅16.0cm、平坦部厚5.0cm、足掛け部厚9.6cm、足掛け部間隔42.0cm。088は断面中央部がやや隆起する板材で、法量、形態的にみて、また出土地点も近接していることから092の一部とも考えられる。089は権状を呈するもので、軟化が著しい。残長26.1cm、最大幅6.9cm、最大厚1.9cm。093は径10.2cmの丸木の一側面に抉りを入れた建築材で、その後先端部分に丁寧な削りを加え杭に転用されたものである。部分的に焼痕が認められる。

木製品の大部分を占める杭材は1000余点を数える。これらは加工形態により丸杭、丸木半截杭、角杭、板杭に分類できる。各々の割合は丸杭47%、角杭43%、丸木半截杭8%、板杭2%で、丸杭、角杭が主体をなす。丸杭の残存長は100cmを越すものから6cmほどのものまであり、その平均値は48cmである。その径による割合をみると、3cm未満5%、3cm10%、3.5cm14%、4cm18%、4.5cm14%、4cm18%、4.5cm14%、5cm15%、5.5cm8%、6cm8%、6.5cm2%、7cm3%、7.5cm1%、8cm以上2%となる。径3～6cmの手頃な木を杭として多く利用していることがわかる。これらは丸木の先端部分だけを削り尖らせる簡単なもので、樹皮がそのまま残存するものも10数点見られる。角杭は最大幅4～8cmのものが78%を占めるが、それ以上のものも18%近くあり、丸杭に比べ法量に統一性がない。ただ原本の大きさは丸杭の比でないことは明らかである。丸木半截杭は径3～13cmのものがあり、5～8cmのものが73%を占める。丸杭に比べてひとまわり大ぶりの原材を使用しているといえる。取り上げた杭材のうち残存状態の良好な13点を図示した。

102～105は丸杭である。103～105は、先端加工部分を除き樹皮が残存している。先端部は、断面三～七角形に加工するものが多いが、104のように一部外面に削りを加えないまま利用したものもある。102の表面磨耗が著しい。095～101は角杭である。これらは断面形態によりいくつかに分類できる。まず丸木の外面を一部分利用し、断面が三角形あるいは台形を呈するもの（096・097）、すべての面を加工しながら断面を四角形（101など）あるいは不整形（098など）に作るものなどである。残存状態は加工痕が明瞭に残るもの、磨耗が著しくさらに軟化しているものなど様々である。部分的に焼痕がある杭もある。094は断面長方形を呈する板杭（矢板）である。これらは側面にも丁寧な加工が施されている。

2) IV層

黒色粘質土を主とする層であるが部分的には複数の層が重なっている。また北側土層部分をみると砂層が複雑に重なっており、これはV層が堆積した後、調査区北側に新たな流れがあったことを示している。この層に属する遺構としてはG-2区で検出した杭列Ⅱがあげられる。この他SD31もこの層の時期に相当する可能性があり、またこれに沿った部分で水田らしき痕跡を



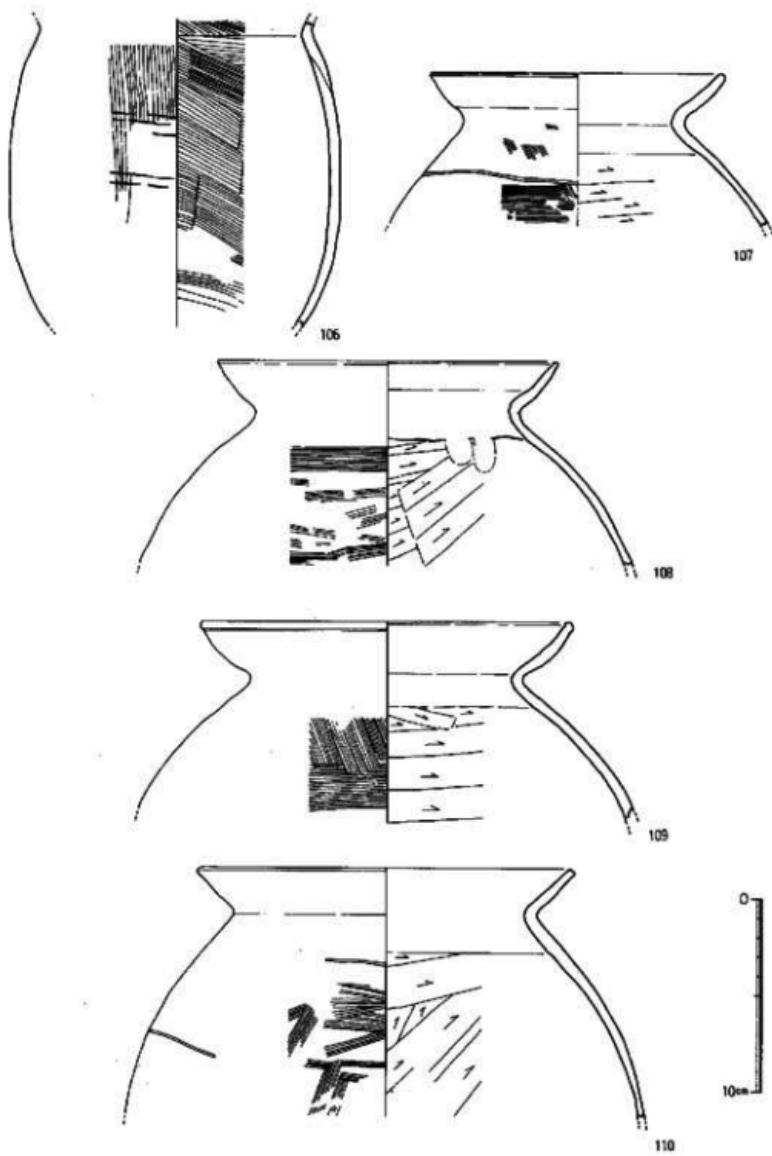
第30図 IV層杭列実測図(1/60)

見出したが、その区画・規模については不明瞭であった。

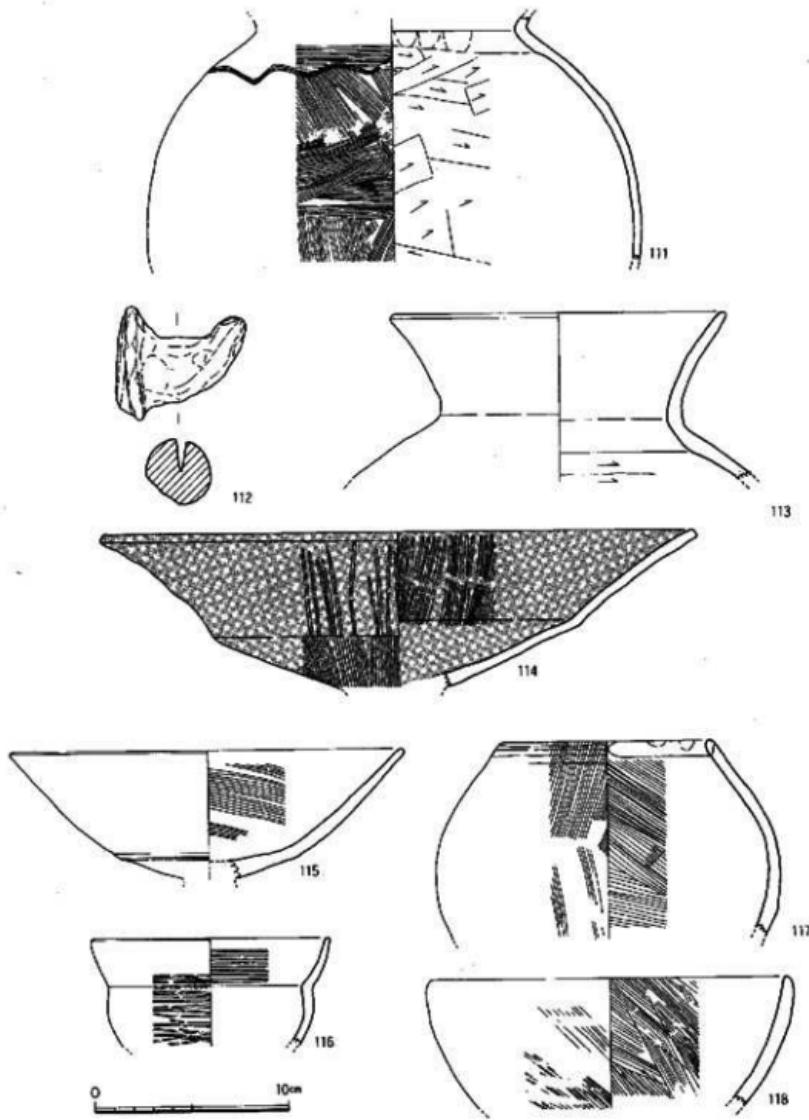
杭列XII (第30図) G-2区で検出した西南一東北方向に約8m続く杭列である。途中約2.5mほど途切れるが、約20~30cmおきに1列杭が打ち込まれている。25本の杭が残存しており、1本が板杭である他は丸杭である。杭底レヴェルは14.30~14.70m。打ち込み方向はまちまちである。北側壁土層にみられた砂の堆積、すなわち河の流れ方向をこの杭列が示している可能性がある。とすれば杭列は護岸的な用途をもっていたと想定できる。

出土遺物 (第31~33図) IV層から出土したのは縄文土器・弥生土器・土師器の土器類、石器、木器などである。木器は杭列XII伴う杭で、これは樹種鑑定用のサンプルを行なっただけで、取り上げはしなかった。ここではIV層の時期を示す土師器についてのみ観察し、他の土器、石器については後段にまとめる。

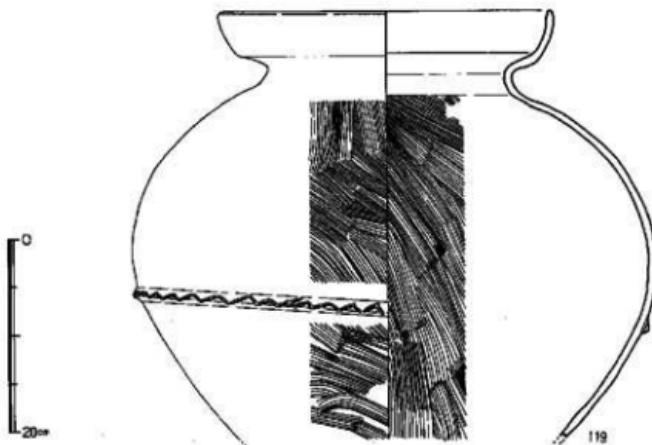
106はあまりふくらみをもたない甕胴部片である。外面上半は叩きの後、緩刷毛目調整を行なう。下半は板状工具によるナデ。内面は斜刷毛目調整。外面には煤が付着する。在地的な甕である。これに対し107~111は布留式系の甕である。107がやや小型で復元口径15.8cm、他は17.8~19.7cmをはかる。口縁部はやや外湾し、端部が平坦になる108~109と外傾する107~110に分かれる。胴部はいずれも大きく張る。口縁部は内外面ともナデ、胴部内面はヘラ削り、外面は



第31図 五層出土器実測図 I (1/3)



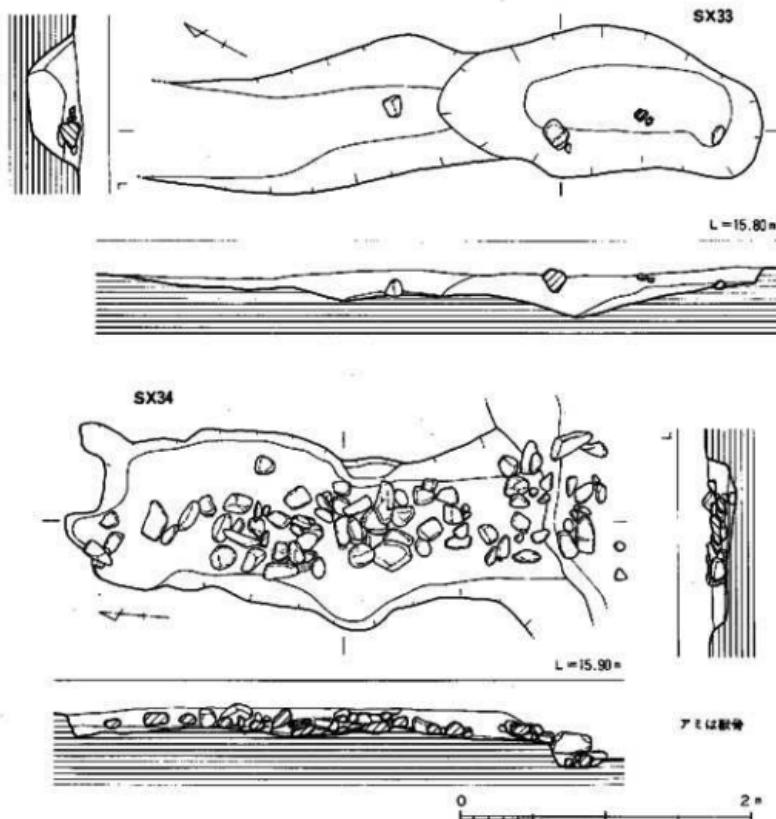
第32図 IV層出土土器実測図II(1/3)



第33図 IV層出土土器実測図III(1/6)

刷毛目をナデ消している。107・110の肩部には一条の沈線が施されているが、110のものは全周しない。110の肩部には櫛状工具による波文があり、これも全周せず途中で切れる。いずれも砂粒を多く混ぜた胎土で、褐色～灰褐色を呈する。107・109の外面には煤が付着する。112は指ナデ調整の把手片である。上面には断面V字形の切り込みを入れる。下面に煤が付着していることからすれば甕であろう。胎土には砂粒を多く含む。

113は復元口径17.4cmの広口壺である。口縁内面は横ナデ、胴部内面はヘラ削り。外面の調整は磨滅して不明。胎土には砂粒を多く混える。114・115は高杯で、前者は口縁上半部が大きく開くのに対し、後者は直線的に外反する。114の杯上半部は暗文風のヘラ研磨、下半部外面は縦刷毛目調整。115は内面刷毛目、外面横ナデ調整。とともに砂粒の混りの少ない胎土で、114には赤色顔料を塗布している。116は小形丸底壺。復元口径12.4cm。扁球形の胴部から口縁部が外湾気味に立つ。外面ヘラ研磨、内面は刷毛目とナデで仕上げる。精良な胎土を用いる。117は鉢であろう。布留式系甕の口縁部を切りとった形態をなすが、器壁厚く、また内外面とも刷毛目調整である。砂粒を多く混えた胎土で、外面には黒斑が認められる。復元口径10.9cm。118は杯である。復元口径18.3cm。内面は刷毛目、外面下半は擦痕が残る。胎土には少量の砂粒を混える。口縁部に黒斑がある。119は復元口径34.6cm、残高44.3cmの複合口縁の大形甕である。口縁上半部は外湾気味に立つ。胴部は大きく張り、その最大径よりやや下位に櫛状工具で連続山形文の刻目を入れた凸帯をめぐらす。胴部は内外面とも刷毛目、口縁部はナデ調整である。

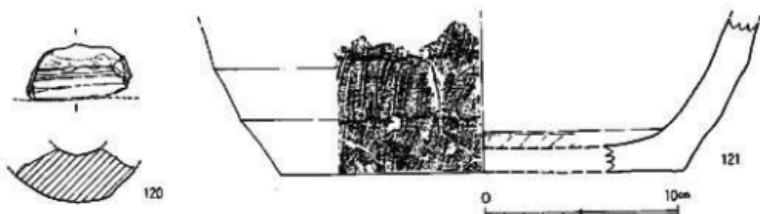


第34図 SX33-34実測図(1/40)

(7) その他の遺構

SX32 A-2区南端で検出した遺構である。大半が発掘区外にかかり、形態など不明。発掘区南端で幅2.90m、深さ30cmをはかる。縄文土器、土師器(歴史時代)などの細片の他、石片が出土している。

SX33 (第34図) C-2区で検出した遺構である。長さ2.20m、幅1.0m、深さ35cmの楕円形土壙の北側に幅約0.9m、深さ20cmほどの溝が約2.5mとりつく。土壙内の土層は、上から褐色粗砂混り粘質土・黄褐色砂混り粘質土・褐色粘質土・灰褐色微砂と細かく分かれている。ふいご羽口片、鐵津などが出土している所から製鉄跡とも想定できるが、積極的な根拠を欠く。



第35図 SX33-34出土遺物実測図(1/3)

出土遺物(第35図120) ふいご羽口片である。径9.5cmをはかり、径3cmの穴をヘラ状工具で中央にあける。スラッグ片が付着する。この他縄文・弥生土器、土師器皿、須恵質土器、龍泉窯系青磁などの細片とともに、鐵滓が出土している。

SX34(第34図) B-C-6区で検出した溝状の遺構である。SD40に南側を切られるが、そこから約3.3m北側に延びる。幅1.0~1.2m、深さ20cm前後。底面には20~30cm大の礫が敷きつめられている。またその礫の下には馬齒と考えられる獸骨片が、中央部分を中心に3ヶ所から出土した。

出土遺物(第35図121) 滑石製石鍋である。復元底径20.8cm。外面は縦方向に削りの痕が残る。外面全体には煤が付着し、また内底には炭化物が付着する。礫直上から出土。この他縄文土器、土師器皿・椀、黒色土器、瓦器、白磁などの細片が少量出土している。

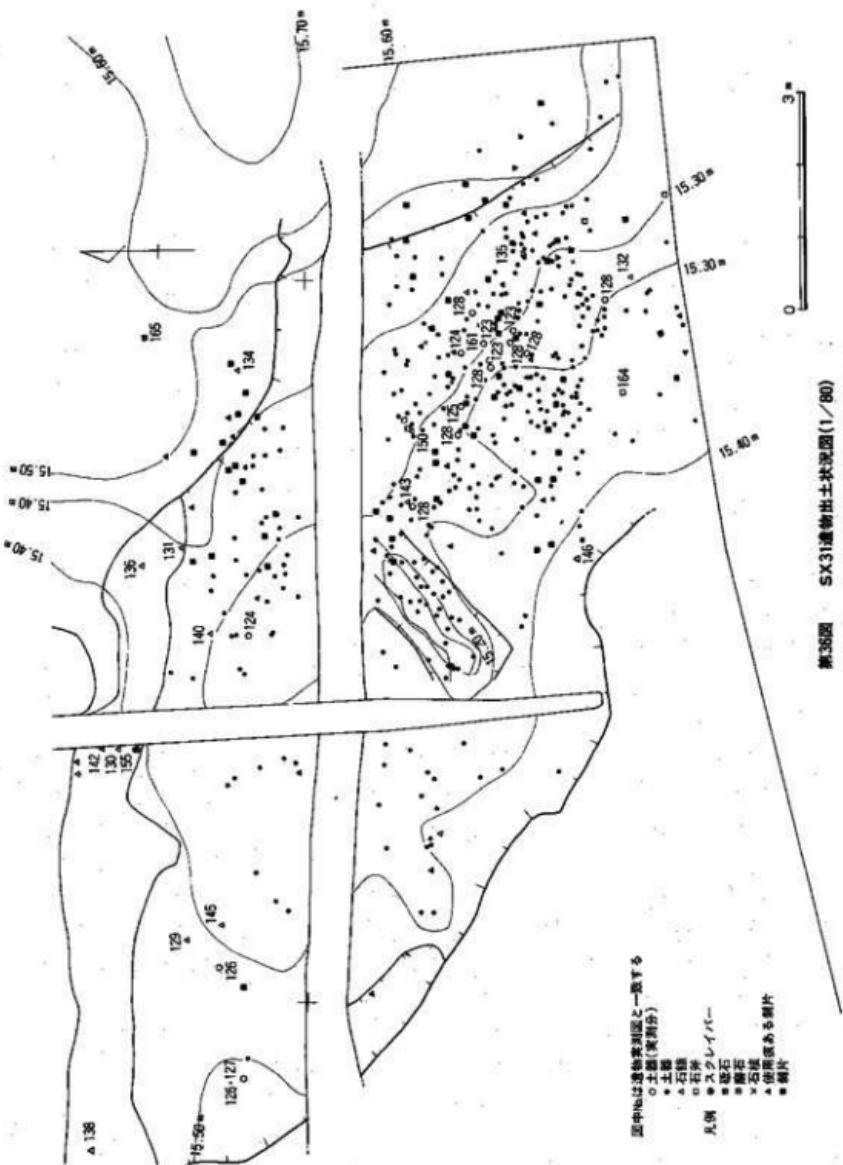
(8) 縄文包含層

2ヶ所で検出した。SX31は溝状の落ち込みにより大きな範囲をとらえることができたが、SX35については確認に至らなかった。

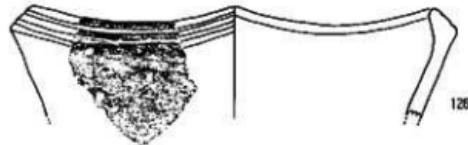
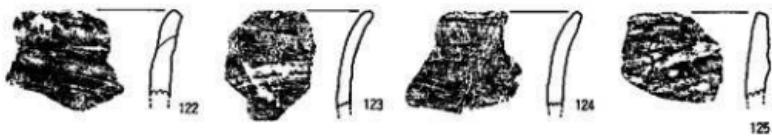
SX31(第36図) B-2区を中心に、東南-西北方向にのびる幅5~7mの溝状の遺構である。深さ10~30cm。北側部分はSD35-37付近で立ち上がる。南側は発掘区外にのびる。底面中央部付近には、幅1mの溝が、西南-東北方向に2.5mづく、覆土は黒色粘質土で、III層下に直接現れた。このため上面には後世の遺物が若干混っていた。そこで上面の遺物には番号を付けて取りあげ、それ以下のものは1点(1碎片)ごとにポイントを図面におとし、レヴェルを測定した。第36図にその状態を示したが、東南部分に遺物が集中していることがわかる。土器片は全体に広がり、また石器、石片の出土位置も特徴的なものはない。溝状に落ち込んだ部分に遺物が堆積し、その底がかろうじて削平をのがれた状態を、この遺構は示しているものと考えられる。

出土遺物 出土したのは縄文土器と石器・石片である。

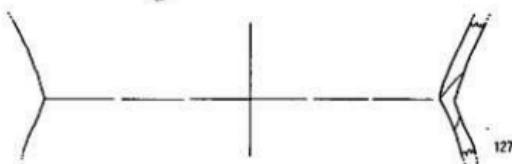
土器(第37図) パンケース1箱弱出土した。胴部を中心とした細片が多く、径・傾きなどを確定できるものは少ない。122-124-128は粗製深鉢である。128は復元口径39.4cm。外面



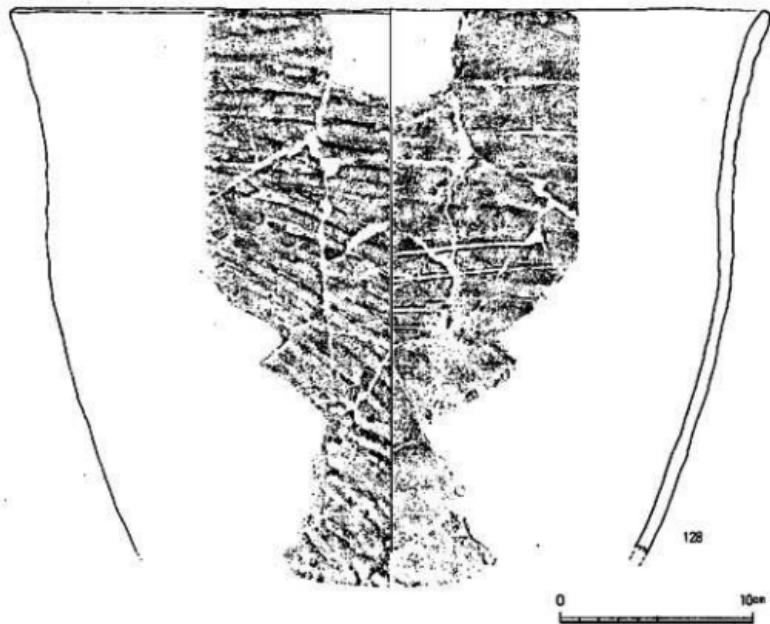
SX3遺物出土状況図(1/80)



126



127



第37図 S X31出土土器実測図(1/3)

は強い横・斜ナデ、内面もヘラ状工具による強いナデで沈線状にその痕跡が残る。125も同様の調整を行なう。122-124は、外面貝殻条痕、内面ナデ調整。いずれも胎土に砂粒を多く混えており、黄褐色～暗褐色を呈するが、部分的に黒色をおびる所もある。

126-127は研磨土器である。126は波状口縁をもつ深鉢で、4ヶ所に低い山形を作る。その下に2条の沈線をはわせる。砂粒を比較的多く含んだ胎土で暗褐色。外面には煤が付着する。127はやはり深鉢のよくしまった頭部付根片である。屈曲部には浅い沈線がめぐる。胎土・色調とも126と変る所がない。ともに三万田式系統の土器であろう。

石器（第38・39図） 本遺構からは総計508点の石器・石片が出土した。遺物は上下2層に分けて取り上げているが、本来同一のものと考えられるので、まとめて報告する。その内訳は第3表に示すとおり、石器160点、剥片329点、石核16点、原石3点、剥片（碎片も含む）が最も多い。石器の中では使用痕のある剥片が133点と最も多く、石鎌がこれに次いでいる。この他、石器の種類には、石斧、スクレイバー、ドリルなどがある。

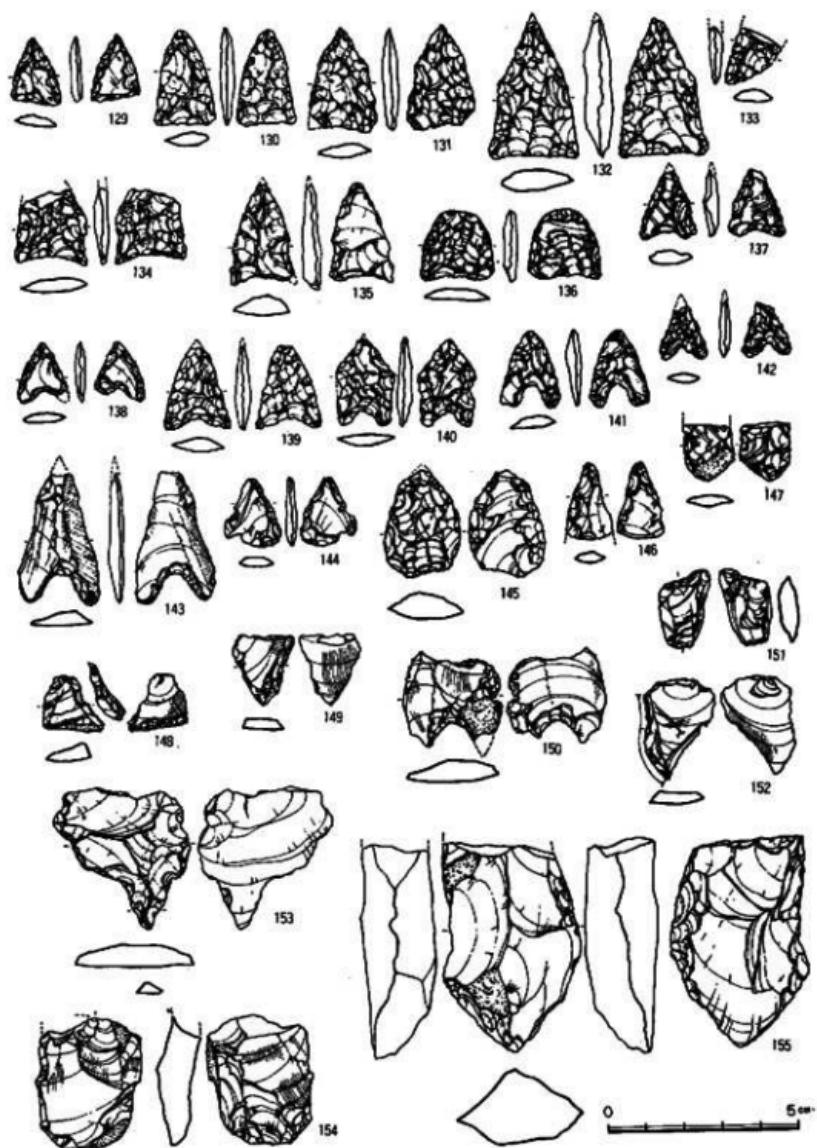
石鎌（129-147）は形態・加工の精粗にかなりのバラエティがある。基部の形状をもとに分類すれば、①平基もしくはわずかに内湾する二等辺三角形のもの…129-131・134-135、②えぐりの浅いもの…137-139、③えぐりの深いもの…133-141-142に分けることができる。また、この他、特徴的な形態をもつものとして、132・136・140がある。132と140は基部のえぐりの状態は異なるが、いずれも両側の肩が張った五角形に似た形態をもっている。136は先端が尖らず、丸く仕上げられており、破損の後再整形された可能性がある。143は剥片鎌で、縱長の石刃状剥片の先端部分を利用したものである。加工は基部のえぐり部分のみに施されている。石材は129・130・133・134・137-140・142・146がサヌカイト、141が姫島産と思われる乳白色の黒曜石、131は青灰色の黒曜石で、他はすべて漆黒色の黒曜石である。なお、144と145は未製品、142はドリルの先端部、147は他の石器の可能性もある。

使用痕のある剥片（147-152・154・156-160）は133点あり、うち3点のみがサヌカイトの剥片を利用したもので、他はすべて黒曜石製である。図示したものは黒曜石製の剥片である。微細剝離の程度は個体ごとに様々であるが、あきらかに加工痕と思われる剝離痕を留めるものがある。148-150・156-159などがその例である。また、151と154は上下両端に潰れたような細かい剝離痕がみとめられ、楔形石器の可能性がある。

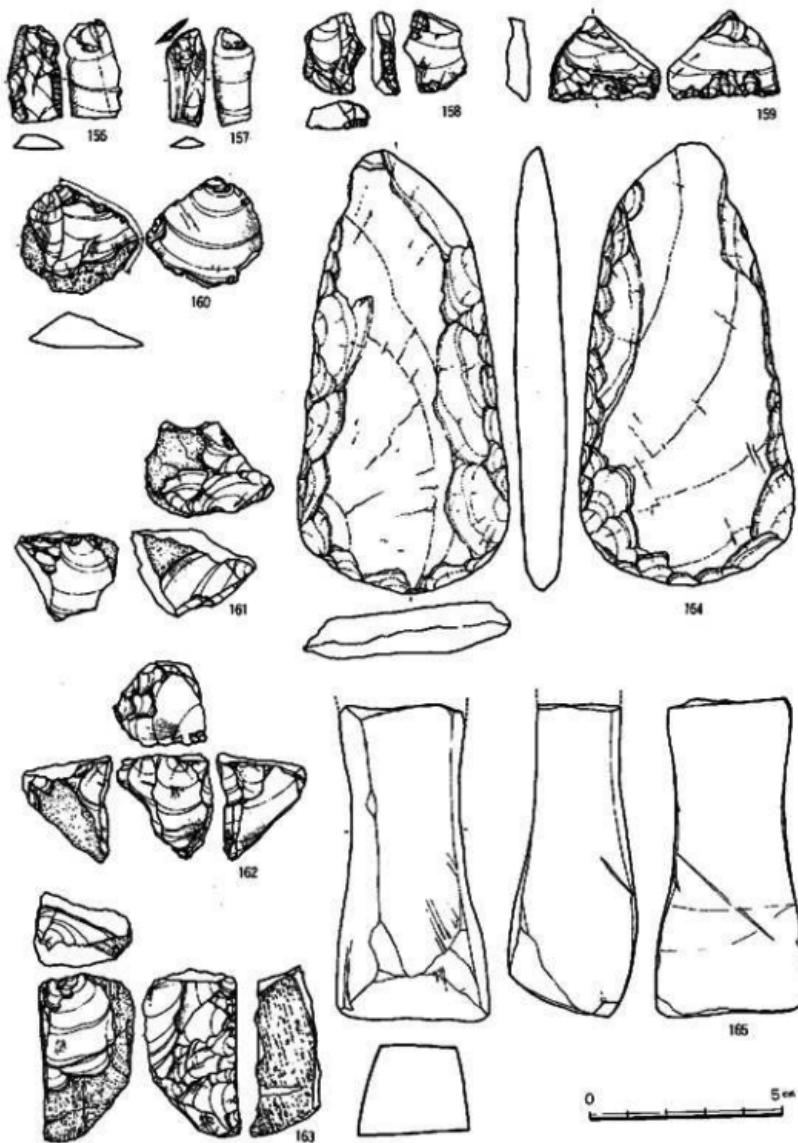
ドリル（153）はサヌカイト製の幅広の剥片を素材としたもので、錐刃部は片面よりの剝離加工でつくられている。

スクレイバー（155）はサヌカイト製の分厚い縱長の剥片を素材としたものである。刃部は主に背面から腹面にかけての連続する調整剝離でつくりだされている。両側辺に刃部をもつ。上端部を欠損している。

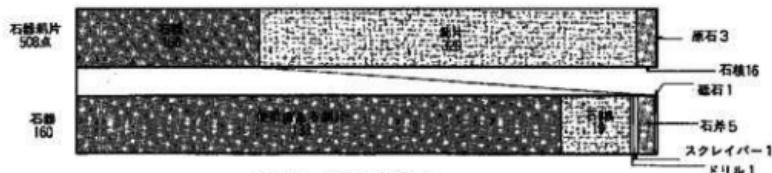
石斧（164）は5点出土したが、完形はこれ1点のみである。玄武岩製の剥片の周辺を加工した打製石斧で、刃部幅51mmを測る。



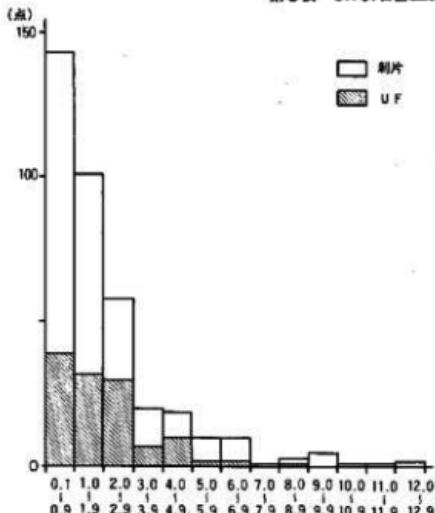
第38圖 SX 31出土石器實測圖 I (2/3)



第39圖 SX31出土石器實測圖Ⅱ(2/3)



第3表 SX31石器組成

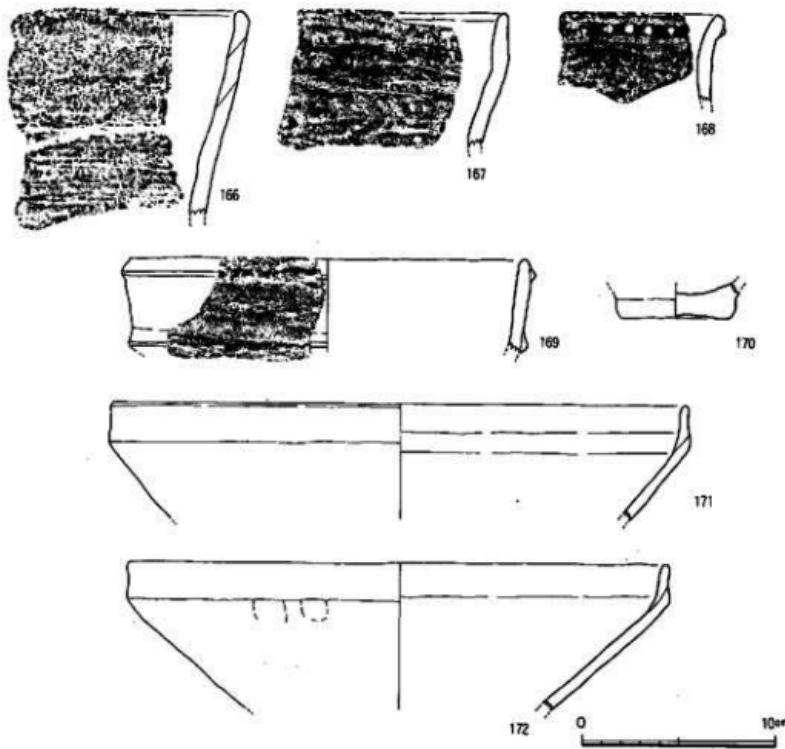


第4表 SX31出土剝片の重量別ヒストグラム

砥石(165)は砂岩質で、小口面を除くすべての面が砥面として利用されている。正面観は中央部がすばまる長い楔形を呈する。砥面はほとんどゆるい凸面が平面をなす。一部欠損。

石核(161-163)は16点出土しているが、代表的なもの3点を図示した。これらを観察すると、剥片剥離は打面を転移しながら実施されるのが常であり、原石の剥離可能なあらゆる面から剥片を得ている。まれに、162のように一つの打面から円錐状をなすように剥離を行なっている例がある。

ここで認められる剥片剥離の特徴としては、①素材に径3~5cm大の角礫が用いられる、②打面転移が頻繁に行なわれる、③打面調整は認められないといったことがあげられる。この結果、形状や大きさの均質でない自然面を多く残した小形の剥片が生産されている。第4表は剥片の計測値をグラフ化したものであるが、3×2cm前後のものが多く、長幅比は1:1を中心にして集中し、やや縦長といったものが多い。その重量は、圧倒的に1g未満のが多く、7gを越えるものはまれであり、これも、原石・石核の大きさを反映している。石器としての利用率は、



第40図 SX35出土土器実測図(1/3)

形状にさほど変化のない使用痕のある剥片を例にみると20~29gや40~49gの剥片でその率が高いが、一部を除いて剥片の数に比例している。剥片の石材別の総重量は、黒曜石835g、サヌカイト50.7gで、その比は17:1と黒曜石が圧倒的に多い。

なお、剥片と剥片の接合例がある。

SX35 G-8区を中心とした地区で縄文土器だけが出土した。この辺りは掘立柱建物がなく、III層の下が比較的荒されていなかったため検出できたものである。しかし縄文土器が点在するだけで、その下の黄褐色粘質土を振り下げても遺物は見当らなかった。同様の包含層は第2地点でも検出している。削平をかろうじてのがれた部分であろうか。

出土遺物(第40図) 縄文中期の阿高式系の土器から晩期の刻目凸帯文土器まで250片ほど出土している。これはこの包含層が単純時期のものではないことを示している。ここでは、最

も量の多い晩期の土器だけをとりあげる。

166・167は粗製の深鉢である。166はほぼ直線的に口縁部が開くのに対し、167は上半部が直立気味になる。ともに外面は条痕、内面はナデ調整。胎土には砂粒を混え、焼成良好。外面暗褐色、内面灰黒色を呈する。169は凸帯文甕である。直線的に外傾する口縁の端部とその下に二条の三角凸帯をめぐらすが、刻目は施さない。残存部ナデ調整。168は内湾気味に外反する口縁部直下に一条の刻目凸帯をめぐらす甕である。磨滅して調整不明。この2点の凸帯文土器は、ともに砂粒の多い胎土で、外面暗褐色、内面灰黒色を呈する。

171・172は精製の浅鉢である。体部から口縁部が直立し、端部は丸くおさめる。復元口径28.2~30.0cm。171は磨滅して器面調整不明。また胎土には砂粒を比較的多く混える。172の外面はヘラ研磨、内面ナデ。胎土は精良。ともに暗褐色を呈する。170は小型の鉢類の底部であろう。ややあげ底をなす。胎土には砂粒を多く混え、外面淡赤褐色、内面灰黒色を呈する。

(9) その他の遺物

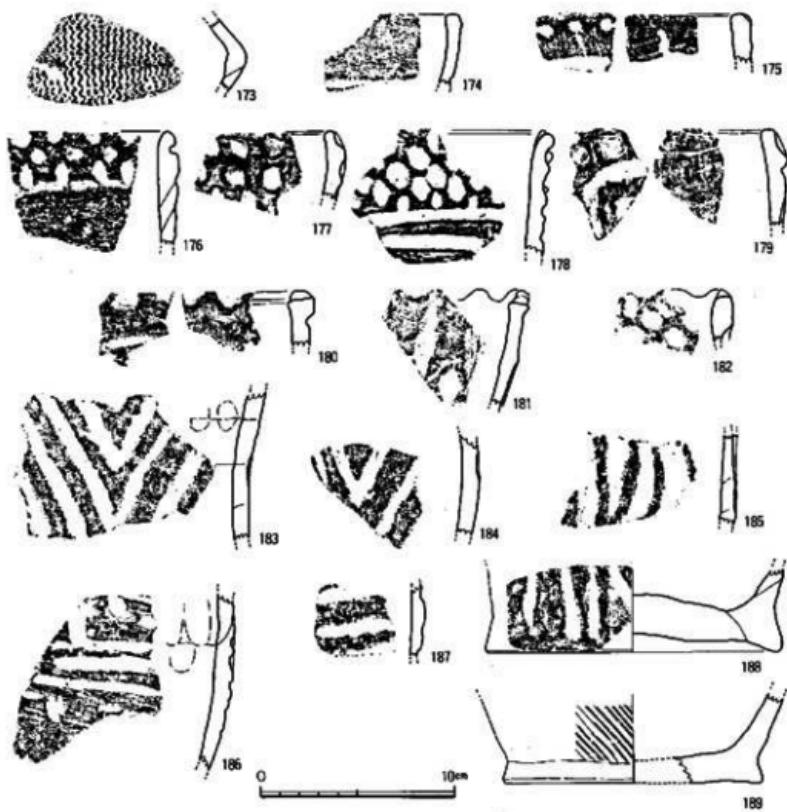
ここでは第3地点のI-III層(表土層)から出土した遺物、遺構から出土したがその時期に先行する遺物、SX31を除いた石器、すべての土製品について取り扱う。これらの遺物の出土場所については、巻末の表に記した。以下、土器・石器・石製品・土製品・金属製品の順に各々の遺物を観察する。

1) 土器 (第41~43図)

縄文土器 (173~214) 古河川をはじめとした各所で多数出土している。そのほとんどが破片あるいは細片で、全貌をうかがえるものは稀である。

173は早期の押型文土器の鉢である。「く」の字形に折れた胴部片で、外面には縱位の細い山形文が施されている。黒雲母を比較的多く含む胎土で、淡黄褐色を呈する。手向山式系のものであろうか。

174~189は中期の阿高式系土器である。滑石を多量に含んだ胎土で、暗赤褐色を呈し、器面には凹線文の装飾を施す。これらはすべて鉢形土器であろう。底部以外は小破片でその全体を知ることはできず。また傾きなども確定することが困難である。174~182は口縁部片である。このうち174~179は口唇に施文しないもので、その直下を烈点文・直線あるいは曲線の凹線文で装飾する。180~182は口唇部に指頭で強い凹凸の文様を施すもので、口縁端は小さく波打つ。また口縁部下は烈点文や凹線文で構成されている。183~187は胴部片である。183~184はY字形の凹線文、185は縱方向の凹線文、186では凹点文と直線・曲線の凹線文の組合せによる装飾が施されている。また187では平行凹線文を施す。188~189は底部片である。188は厚みをもった上げ底を呈し、胴部にかけて「く」の字状に立ち上がる。外面はY字形の凹線文が施され、また底部には部分的に条痕が認められる。189は平底を呈し、底部端は丸味をもった棱を作る。外面には斜方向の粗い条痕が部分的に認められる。



第41図 第3地点出土土器実測図 I (1/3)

190-194は北久根山式系の土器であろう。191は口縁部片で、外面には平行凹線文、内面口唇直下には1本の凹線を施す。砂粒混りの胎土で、外面は部分的に灰黒色を呈する他は褐色、内面は全て灰黒色である。192は支脚の概部片である。外面には4本の平行沈線文があり、それぞれの沈線間に斜方向の刻目を施し、その後スリ消しが行なわれている。内面は条痕の後ナデ調整である。砂粒が多く混る胎土で、外面は淡赤褐色-淡褐色、内面は灰褐色を呈する。復元概部径は14.8cmをはかる。193-194は口縁部片である。193は口唇部に1本の沈線を施し、さらにその上にW字状粘土帯を貼り付ける。外面は条痕、内面はナデ調整である。194には口唇部に羽状文風の沈線文が施され、外面には条痕、内面には板ナデの調整がある。

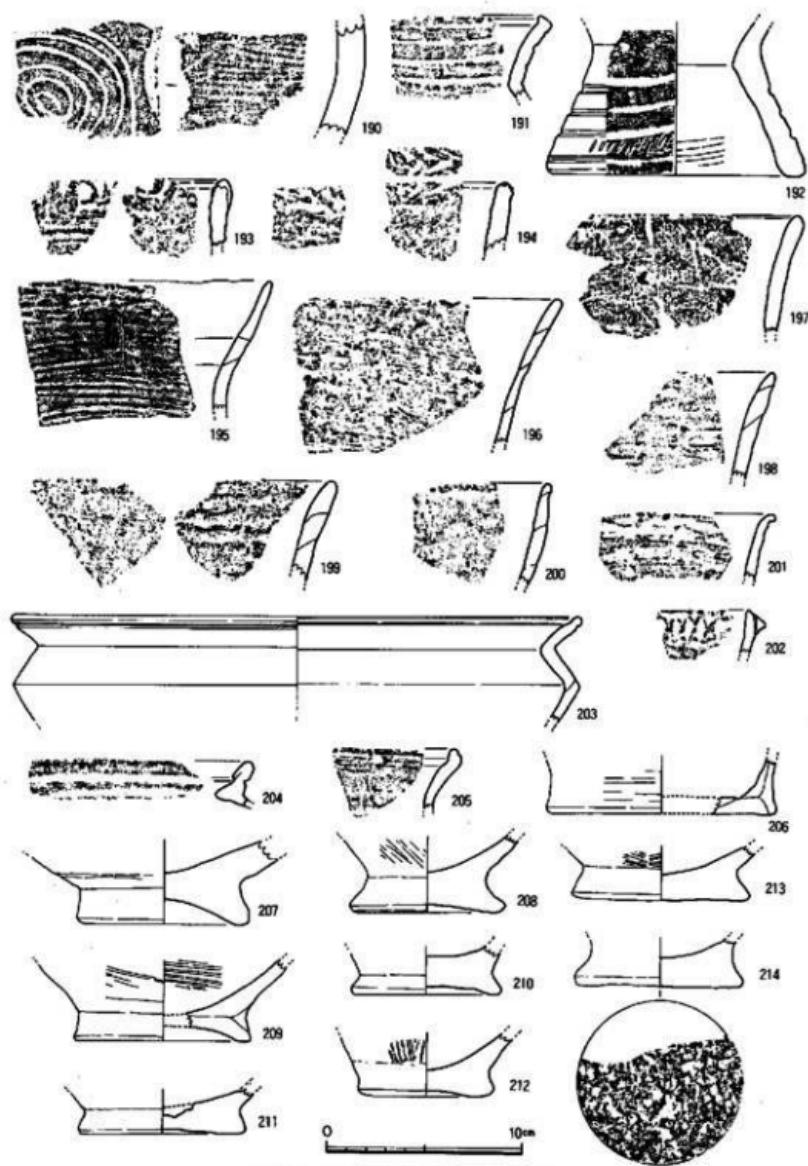
195-202は晩期の粗製土器である。いずれも深鉢形の口縁部片である。195は大きく外反する

口縁部が口唇直下で、内湾気味に立ち上がりわずかに波うつ端部に至る。外面は横方向の条痕の上からさらに弧線状の沈線文様が施される。内面はナデ調整で仕上げられている。胎土は比較的多くの砂粒を混え、外面は暗褐色、内面は灰黒色を呈する。196は大きく外反する口縁を持つ。外面は横方向の条痕、内面は横ナデ調整である。197の口縁部は小さく外反する。器面調整は磨滅著しいため不明、胎土は砂粒を多く混え、外面は暗褐色、内面は灰黒褐色を呈する。198の外面は横方向の条痕、内面は板ナデ調整である。199は外面を板ナデ、その下位部を横ナデ調整で行い、内面には条痕を施す。胎土は砂粒を混え、内面には黒斑が認められる。さらに口唇部には赤色を呈する箇所がある。200と201は口唇部を小さく外反させる。200の外面調整は板ナデ、内面は横、斜方向の板ナデ、201はナデ調整を全面に施す。202は口唇部直下に刻目突帯を持つ夜白式土器である。調整は全面にナデを施す。

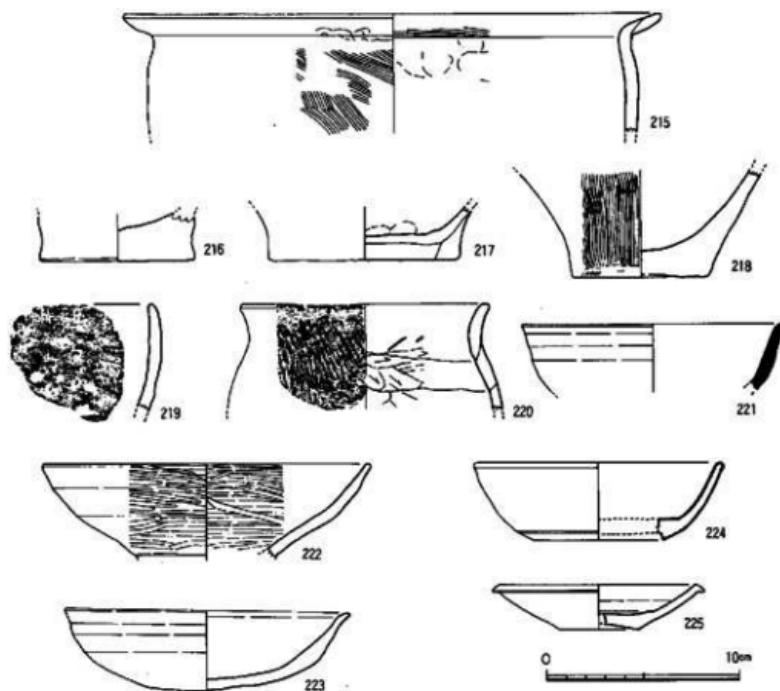
203-205は精製土器である。いずれも浅鉢形土器の口縁部片である。203は口唇部直下の内外面に沈線を施す黒色研磨土器である。復元口径は29.2cmをはかる。204も同様に沈線を持ち、胎土には細かい砂粒が混る。全面ナデ調整で、灰黒色を呈する。201にも沈線が施され、全面ナデ調整で、暗灰褐色を呈する。

206-214は深鉢あるいは甕の底部である。206・213・214はほぼ平底状をなすが、その他は上げ底となる。206の底部端は明瞭な角を持つ。外面は板ナデ、底は条痕を施し、内面は横ナデ調整である。胎土には砂粒が多く混り淡褐色を呈する。内面には赤色顔料の痕跡が認められる。213は外面に条痕を施す、胎土は暗褐色を呈するが、一部に灰黒色を帯びる。214は外面に横ナデ、内面には板状の調整を施した後ナデで仕上をする。砂粒が比較的少ない胎土で、外面灰褐色、内面黒色を呈する。底には植物性の圧痕が見られる。213・214は夜白式の甕であろう。207は「く」の字状に大きく張り出す底部を持つ。外面を条痕、底は板状工具によるナデ、内面はナデ調整である。208は207と同様に、大きく張り出す底部を持つ。外面は斜方向に条痕と横ナデ、底は板状工具によるナデ、内面はナデ調整である。胎土には黒雲母、金雲母を含む多量の砂粒が混る。209は外面を斜方向の条痕とナデ調整、内面は斜方向の条痕と板状工具によるナデ調整を施している。胎土は金雲母を含む多量の砂粒が混る。210は外面を指揮後ナデ、底は板状工具によるナデ、内面はナデ調整をする。内底には炭化物の付着が見られる。211は外面を指揮後横ナデ、底はナデ、内面はナデ調整を施す。内底に淡灰黒色を呈する箇所がある。212は外面を縱方向の条痕、横ナデ、底は板状工具によるナデ、内面をナデ調整する。207-212は後、晚期のものであろう。

弥生土器 (215-218) 215-218は中期の土器である。215は「く」の字状にゆるく開く口縁部をもつ甕の口縁～胴部片である。外面は横ナデと斜刷毛目、また口縁部と胴部との接合部には板状工具による強いナデが見られる。内面の口縁部は横刷毛目後横ナデ、胴部はナデ調整を施す。指頭圧痕が口縁部直下に見られる。胎土には比較的少量の砂粒を混え、暗褐色を呈する。外面肩部には煤の付着が認められる。復元口径は28.0cmをはかる。216-218は甕の底部で



第42圖 第3地點出土土器實測圖 II (1/3)



第43図 第3地点出土土器実測図III(1/3)

ある。216の底部端は明瞭な角をなし、内湾気味に胴部へと立ち上がる。器面は磨滅が著しい。胎土には砂粒が多く混り、淡赤褐色を呈する。217も明瞭な角を持ち、外反しながら胴部へと立ち上る。外面はナデ、内面はナデ調整で、指頭圧痕が見られる。内底には灰黒色を呈する所があり、炭化物の付着と思われる。218は中央部でわずかに窪みのある底をなす。明瞭な角の底部端から外にゆるやかに開きながら立ち上がり、胴部へと至る。外面は織刷毛目、底はナデ。内面はナデ調整である。内底には炭化物の付着が認められる。

土師器 (219・220) 219は鉢の口縁部片である。口縁は外湾気味に立ち上がり端部に至る。外面は磨滅著しいが、下位部ではナデが見られる。内面は比較的丁寧なナデ調整が施されている。胎土には多量の砂粒を混え、外面は灰黒色、内面は褐色を呈する。220は小型甌の口縁～胴部片である。外面は横ナデ、斜方向のタタキ調整、内面は横ナデ、ヘラ削りを施す。また頸部付近にはヘラ状工具による刻線が見られる。胎土には比較的多くの砂粒を混え、黒褐色を呈する。復元口径は12.9cmをはかる。

須恵器 (221) 221は杯の口縁部片である。外面は回転による丁寧な横ナデ調整を施す。口唇部直下では強い横ナデ痕が認められる。胎土はほぼ精良で、灰色を呈する。復元口径は13.6cmをはかる。

中世土器 (222・223) 222は瓦器焼の口縁一胴部片である。高台の一部もごくわずかに残存する。外へ開いた胴部は中位で外湾気味に立ち上がり、口縁部は小さくつまみ上げながら外へ開き、端部は丸くおさめる。器面は全体にわたりヘラ磨き調整を施す。胎土には極く少量の砂粒が混り、灰色を呈する。口縁部の内外面には灰黒色を帯びるカ所がある。復元口径は17.0cmをはかる。223は土師器の丸底杯片である。胴部中位から内湾気味に外へ開き、口縁部は外へ強くつまみ上げられ開く。端部は丸める。底はヘラ切り。外面は横ナデ、内面はナデ調整である。ヘラによる沈線が施されている。胎土には砂粒多く混り、やや軟質である。全面淡褐色を呈するが、外底には灰色を帯びる所がある。復元口径は14.8cm、器高は4.15cmをはかる。

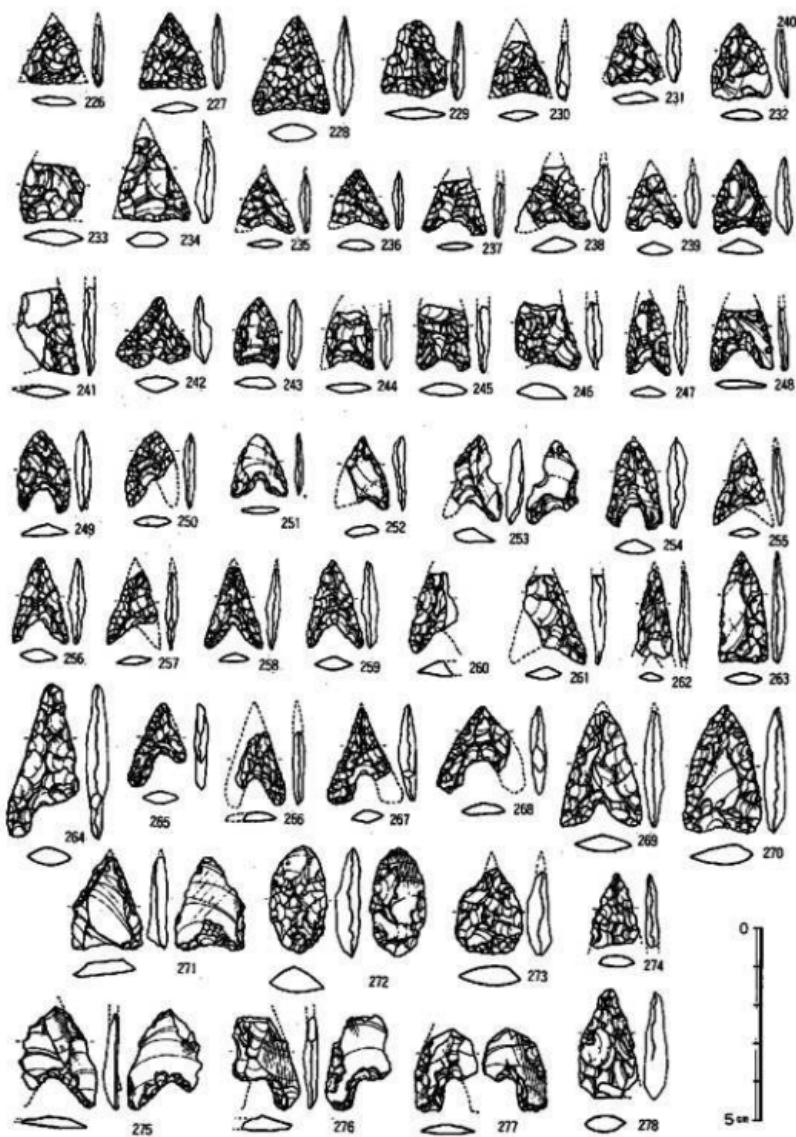
磁器 (224・225) ともに輸入陶磁器である。224は青磁の皿片である。深く削られた外底から外湾気味にゆるやかに立ち上がり、口唇部直下で小さく外反する。全面にオリーブ色の釉が施される。外面の胴部下位と見込みには沈線が巡る。胎土は少量の褐色粒や黑色粒が混る。釉の表面には多くの気泡が見られる。復元口径は12.6cm、器高は4.0cmをはかる。225は白磁の皿破片である。斜めに削り整えた底部から体部が直線的に外へ開き、口縁部ですべて外反する。灰白色の釉が全面に施されているが、外底は施釉の後に釉を削り取り、露胎となっている。見込みには沈線が巡る。復元口径は10.2cm、器高は2.3cmをはかる。

2) 石器 (第44~49図)

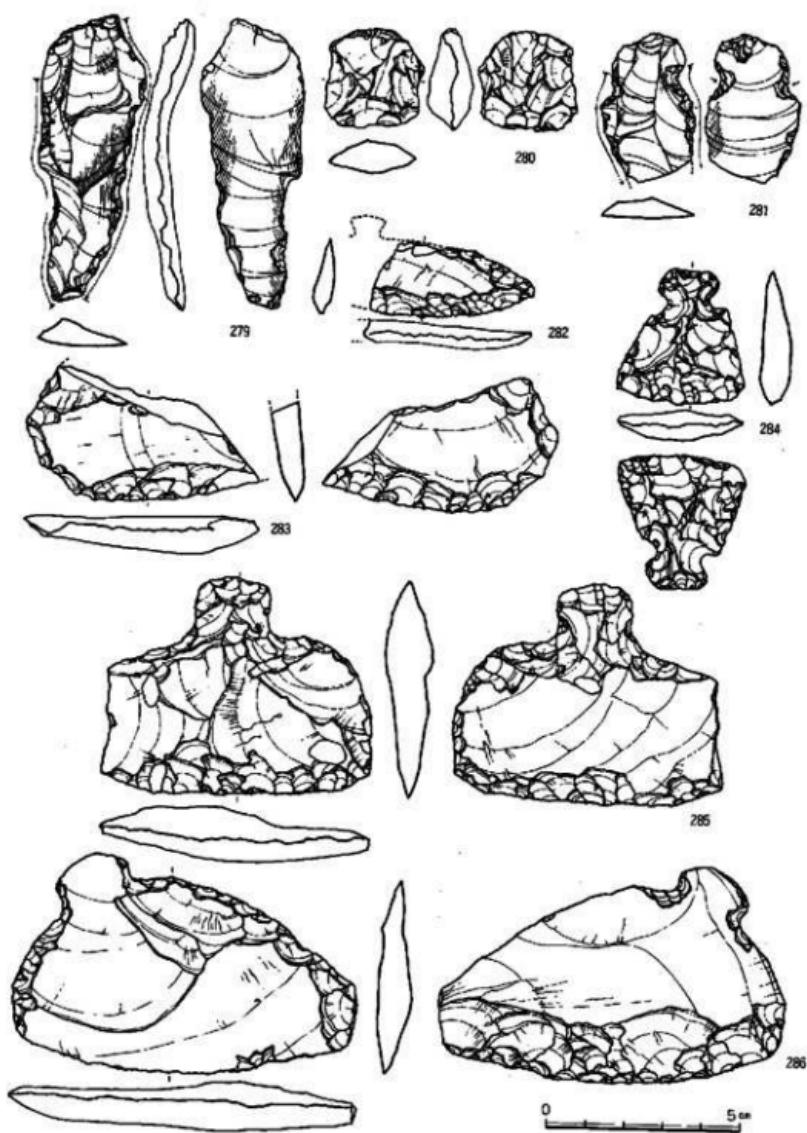
第3地点から出土した石器はSX31出土を除き総計324点である。石器の種類とその数は、石鎚及びその未製品61点、使用痕及び加工痕のある剝片136点、石點7点、スクレイパー5点、ドリル1点、楔形石器5点、打製石斧23点、磨製石斧（うち柱状片刃石斧 大形蛤刀石斧も含む）10点、石庖丁2点、磨石・敲石5点、石錘1点、石核64点である。石器の大半を占めるのは石鎚と使用痕及び加工痕のある剝片で、これらの素材と思われる黒曜石及びサヌカイトの剝片も多量に出土している。

石鎚 (226~278) 石鎚は形態的に多様であるが石材は黒曜石とサヌカイトのみである。その数は48点と13点で、黒曜石が大半を占める。その中でも特徴的なのは、早期の押型文土器に共伴する鍔形鎚 (264~267) や後期に盛行する剝片鎚 (275~277) などが出土しており、時期的に單一性を示すものではない。また272は未製品、273はドリルとも考えられる。石材としては、232~236・238~251・252~256・259~261~264・274~278はサヌカイト、他はすべて黒曜石である。

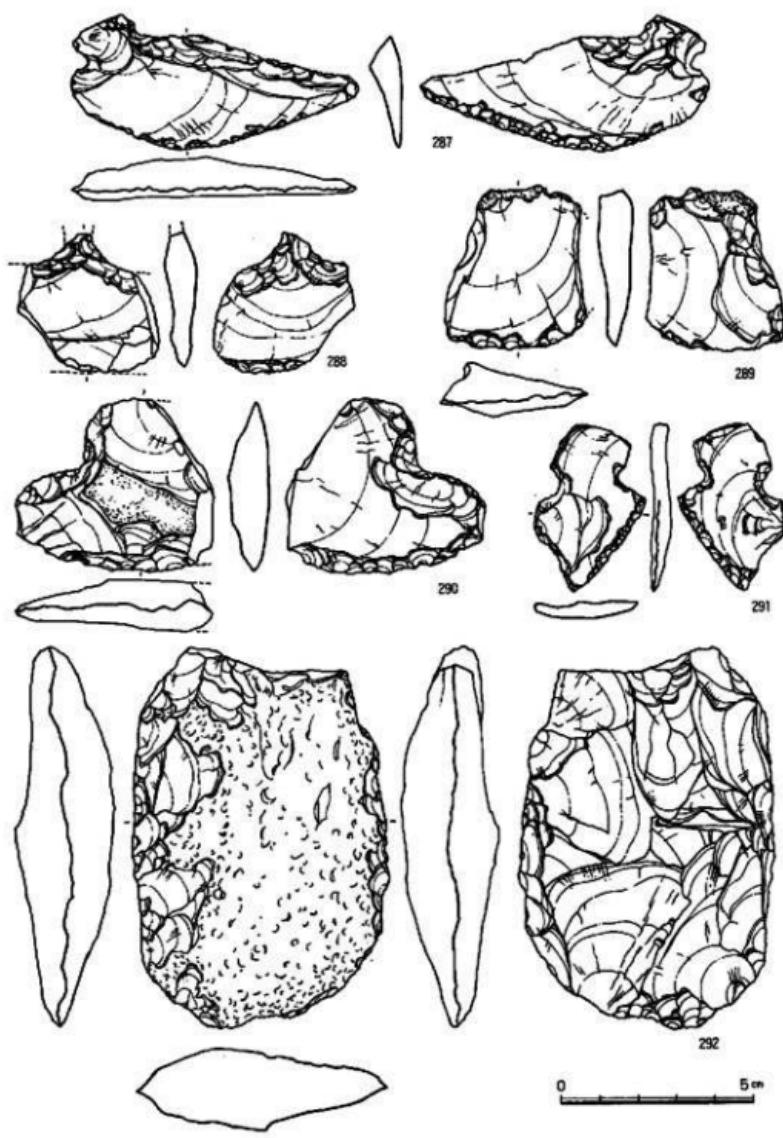
使用痕及び加工痕のある剝片 (279~281) 279は黒曜石製の石刀状剝片の両側辺を使用したもので裏面の右側中位には線状の傷が認められる。281も同じく黒曜石製の石刀状の剝片を使用したものであるが、両側辺の上位にノッチ状に加工を加えている。この2点は縦長の石刀状



第44圖 第3地點出土石器實測圖 I (2/3)



第45圖 第3地點出土石器實測圖Ⅱ(2/3)



第46圖 第3地點出土石器實測圖III(2/3)

剥片を利用したものであるが、これ以外は不定形な剥片を利用したものである。

石匙 (282・284~288・291) 石匙は合計で7点出土しているが、291を除いていずれも模型である。284は唯一黒曜石製の石匙で、整形加工も入念である。刃部が台形状を呈する。素材の用い方は286を除いて横長剥片をそのまま利用し、端部及び周辺を刃部としている。286は縦長剥片を横位に利用している。刃部は両面からの加工であるが、286と287は背面→腹面の一方の加工である。この二者はシンメトリックな形をせず、舌部が一方へ片寄っている。284は黒曜石製、他はすべてサヌカイト製である。

スクレイパー (280・283・289・290・292) 全部で5点の出土がある。すべてサヌカイト製である。280は一見ラウンドスクレイパーに似る。292は背面に大きく自然面を残し、主要剥離面側に周囲から大まかな剥離を加えた後、両側辺に刃部を形成している。290はノッチ状の加工があり、石匙とも考えられる。289のみが片側からの加工によって刃部を形成している。

石核はすべて黒曜石製の3~5cm大の角礫を素材としたもので、その特徴はSX31出土石核のそれとよく似ている。

打製石斧 (293~307) 293は撥形を呈するもので、基部は尖り気味となる。長さ10.0cm、刃幅5.0cm。128g。変成岩製。294は短骨形といえようか。基部は1次剥離をそのままにしている。全長10.1cm、刃幅5.4cm。重量113g。玄武岩製。295は側辺中央部に西側から剥離を施し、やや分銅形状になる。片岩類。全長12.2cm。131.3g。裏面には礫面を残す。296は撥形を呈する扁平なもので片刃。全長10.4cm、刃幅5.1cm。重量84.5g。玄武岩製。297は短冊形と呼べるものであろう。肉厚な石斧である。全長10.3cm。重量80.8g。298は楕円形状を呈する石斧で、刃部には小さな剥離を施している。全長10.7cm、刃幅3.7cm。重量107g。石材不明。299~302は刃部を中心とした破片である。302は刃部を細かい剥離で作りだす。303は石材の摺理をうまく利用して加工したもので、扁平である。304は大きな剥離そのまで刃部の加工をとめている。302の刃部は鈍い。303~307は基部を中心とした破片である。基部が狭くなるもの(303~304)、やや尖り気味になるもの(305)、体部とほぼ同じ広さをもつもの(306~307)がある。以上の破片のうち、301~302・306は玄武岩製、297は片麻岩製、305は変成岩、307は片岩の類であろう。他は不明。

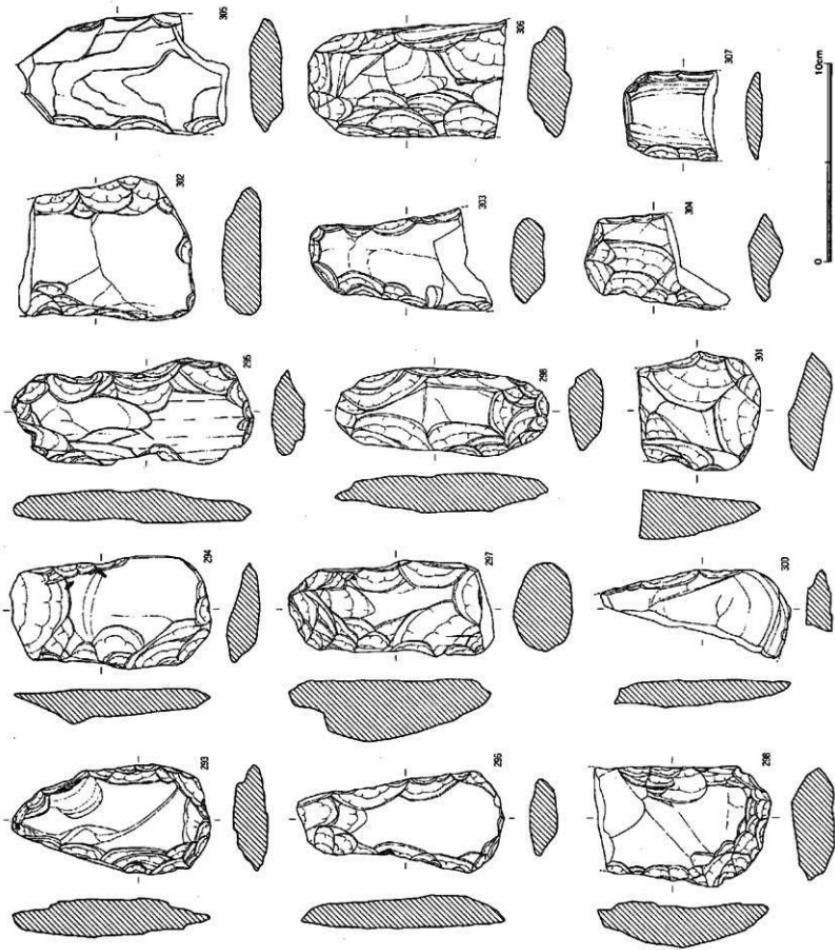
磨製石斧 (308~315) 308は蛤刀石斧である。蛇文岩製?。309~310は尖り気味の基部をもつもので、310には敲打痕が側辺を中心に残る。309は石材不明。310は砂岩製。311~314は平面長方形をなす。311~313・314の器面には敲打痕が残る。313が変成岩。他の石材は不明。315は桂状片刃石斧である。一部欠損するが、全長5.6cm、幅1.2cmをはかる。頁岩製。

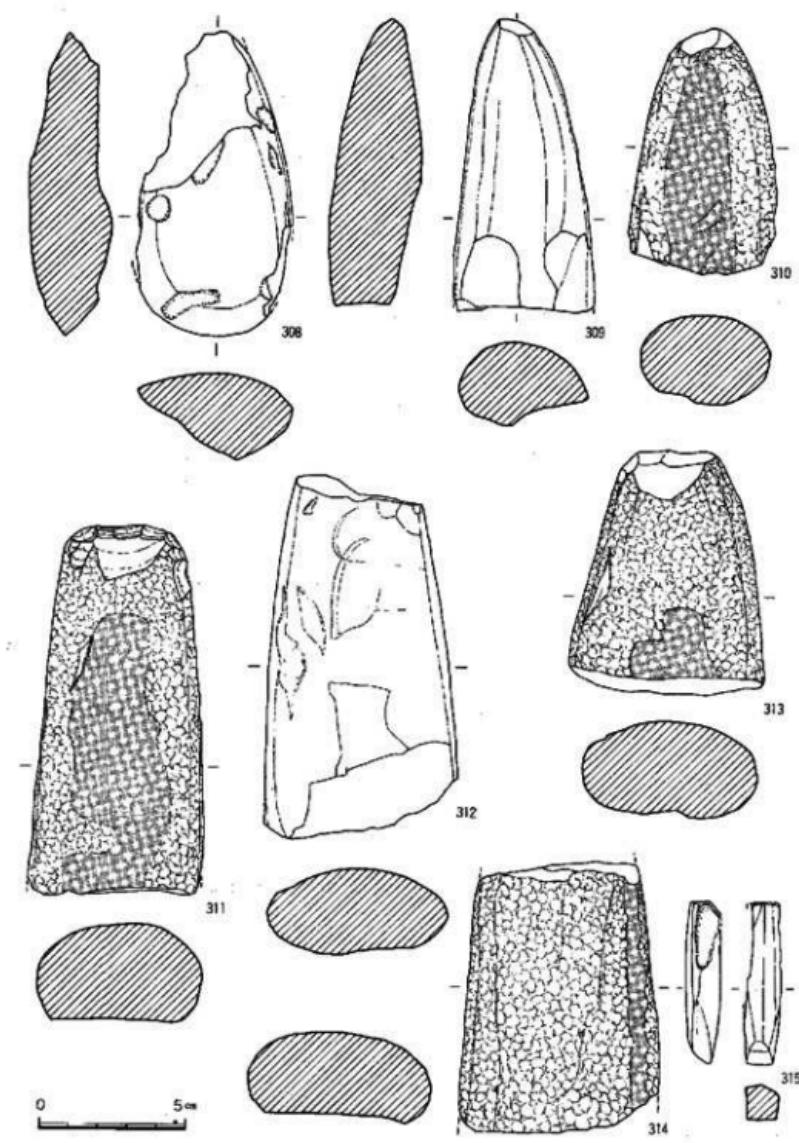
石鎌 (316) 石鎌の未製品であろうか。上下側辺に剥離を施したものである。玄武岩製。

石庖丁 (317~318) 317は杏葉形と呼べるものであろうか。一孔の紐かけ穴がかろうじて残存する。淡灰岩製。318は半欠品であるが長方形を呈する。肉厚で片刃。玄武岩製。

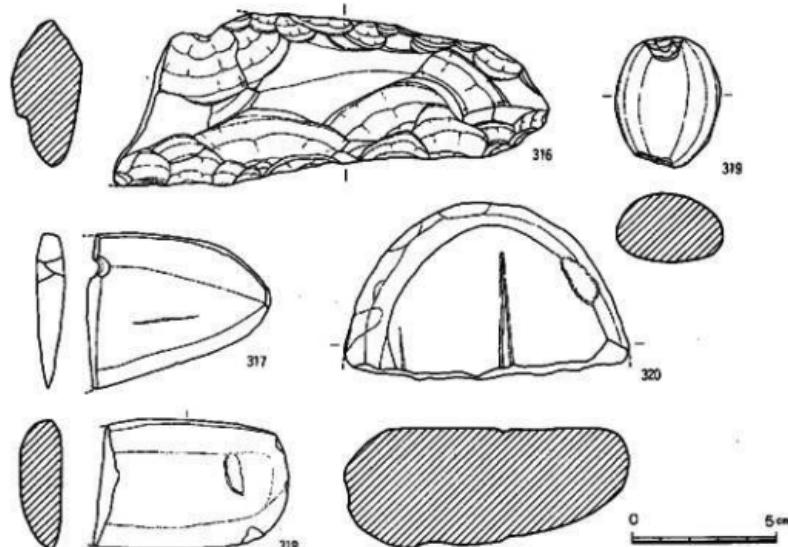
石錐 (319) 円礫の両側辺をわずかに打ち欠いたものである。重量49.4g。ローリングを

圖版四 第3地點出土石器整理圖 V (1~2)





第48圖 第3地點出土石器實測圖 V (1/2)



第49図 第3地点出土石器実測図VI (1/2)

受けている。

砥石 (320) 円碟の上面を平らに研ぎ、その中央に溝を設けた、いわゆる有溝砥石の類であろう。石材は砂岩。

3) 清石製品 (第50図321-324)

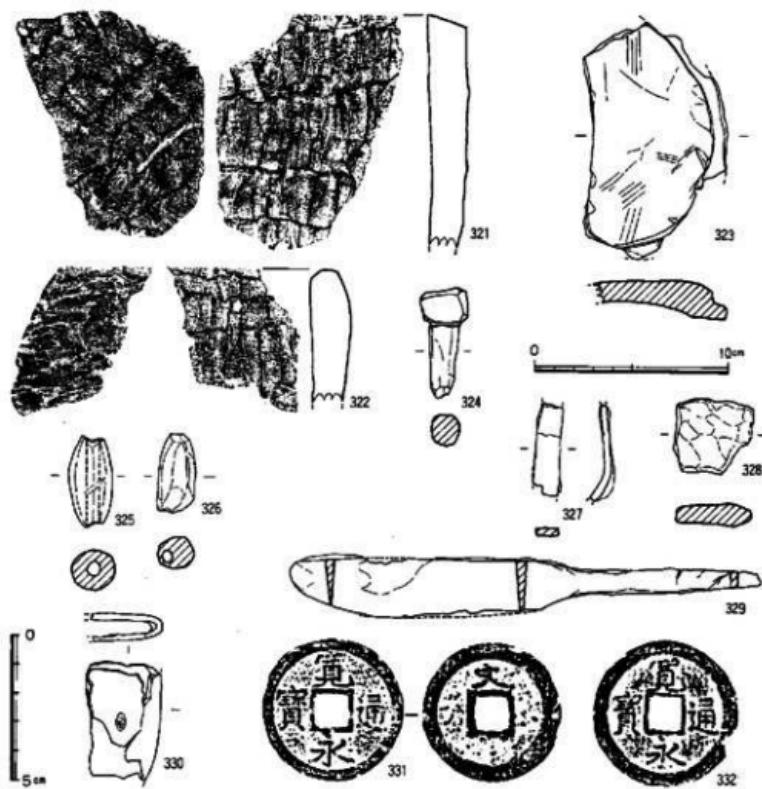
321・322は石鍋である。内外面とも加工痕が明瞭に残る。また外面には煤が付着している。323は石蓋であろうか。円形部分から一段下って狭い突起をめぐらす。器面には製作時の不規則な加工痕がみられる。324は方形の頭部に断面形の柄状のものがつく製品で、長さ5.65cmをはかる。栓の類でもあろうか。

4) 土製品 (第50図325・326)

2点とも管状土錐である。326は穴が貫通していない。325の長さ3.15cm、径1.5cm、重量5.6gをはかり、V層から出土した。

5) 鉄製品 (第54図327-329)

327は幅0.8cmの薄い板状のものが屈曲したものである。その用途はわからない。328は鉄片である。厚さ0.6cm。329は長さ16.2cmの刀子で、茎部は断面長方形を呈する。いずれも遺構に伴ったものではなく、近世以降の新しいものである可能性が強い。



第50図 第3地点出土その他の遺物 (1/3, 1/2, 1/1)

6) 銅製品 (第50図330)

銅製鉤先であろうか。折り返し部分の一端が残存する。残存高4.05cm、幅2.6cm。上面は緑青をふいているが、内面は赤銅色の地金があざやかである。遺構に伴っておらず、問題は残る。

7) 銅錢 (第50図331・332)

2枚とも裏面に「文」の字を入れた寛永通寶である。SD47から出土したものと大差ない。

IV 第4地点の調査

1 概要

この地点の一部は1980年の試掘調査で、遺構なしとされ、西南部分にはすでに管理塔など田村団地の施設が建設されていた。また第3地点および前年度の第1・第2地点の発掘調査の結果からもおそらく古河川およびその氾濫源なるものと想定できた。そこで古河川の東端および北限を確認するためのトレンチ方式の調査を行うこととした。

調査は1981年8月、対象地の西端部分に南から北へ向って1本のトレンチをあけることからはじめた。団地建設のための盛土が、旧水田面から1m以上もなされていたため、ユンボを用いて掘削した。その南端近くで台地部分と、それに続く段落ちが見つかり、第3地点から続く古河川の南岸と想定できた。トレンチの北側は砂礫層が主となり、ほとんど遺構を見出せず、おそらく旧河道にあたるものと考えられた。そこで南側台地部分の西側への拡張をはかり、台地部分と河川の関係をつかむことにした。ここを4a地点とし、11月16日まで調査を行った。

またそれに併行して、この古河川の左岸を捜すべく中央東寄りに南北のトレンチを設定した。その掘削中、小溝などの遺構が上面に見られたが、ほとんどが砂礫に埋まっていた。4a地点の北約100mにして、古河川の左岸を検出することができた。右岸と異なり、杭などの構築物はみられなかった。ここを4b地点と呼ぶ。さらに北側にトレンチをのばしたが、砂礫層を地山とした左岸部分には小溝などの遺構が若干みられたにとどまった。この古河川以北部分を4c地点と呼ぶ。

この4c地点の西側に東西方向に2本のトレンチを設けた。西約40m地点で赤褐色粘質土の台地部分、さらにその西に溝状の遺構を確認したため、拡張をはかり、4d地点として調査を行った。結局2本の溝の重複であり、それは東北方向、すなわち第5地点にさらに延びていることが判明した。

この4d地点の南側は未買収の土地であったが、翌年3月、2本の試掘トレンチを入れることができた。この4e地点からは期待した溝は検出できず、砂礫上に主として南北方向に走る小溝を9条見出だしたにとどまった。

以上みてきたように第4地点の調査では古河川の確認にとどまり、遺構はほとんど検出できなかった。弥生時代以前の古河川が古墳時代にかけて埋没した後も、何回かの氾濫（旧室見川によるものか）があり、古河川の左岸（北側）に営まれ、それまでの遺構も削りとられ、その残骸がわずかに残るといった状態を示しているものと考えられる。

以下、a地点、b・c地点、d地点、e地点の順に、遺構・遺物とも個別に記述する。ただし、石器だけは、この章の終りにまとめて観察を行った。出土地点については、巻末の遺物一覧表にすべて記している。

2 4a地点の遺構と遺物

4a地点の発掘面積は560m²である。検出した遺構は、溝、古河川とそれに付設された杭列だけである。古河川覆土上では、明確な遺構は検出できなかった。出土した遺物は、土器、石器、木器などがあるが、その量はきわめて少ない。ここでは溝、古河川、出土遺物に分けて記述する。

(1) 溝 (第51図)

調査区の東南台地部分で11条検出したが、その残存状態は良くない。西南—東北方向の溝のうちには、第3地点のSD43、SD44と接続する可能性をもつものがあるが、個別の関係づけは困難である。

SD45・46は古河川の肩に沿って東北方向に走る溝で、幅0.4~1.4m、深さ10cm前後をはかる。SD45が切り合いにより新しくて、覆土はともに灰褐色砂質土。縄文・弥生土器の他にSD45では土師器高台付椀、SD46では内黒土器の細片が出土している。

SD50・51・52・53はやはり東北方向に走る溝で、調査区東南隅で検出した。SD51・52・53は切り合い、南側から順次新しくなる。ただSD52は、SD51・53が切り合う所で途切れる。溝幅0.65~0.85m、深さは10cm程度である。覆土は砂質土。いずれの溝も遺物はごく少量で、縄文土器細片の他、SD50で黒色土器、SD51・53から土師器皿片などが出土している。SD49・54・55・56は、SD53に西北側から接続する小溝である。SD49で内黒土器、土師器椀・皿などの細片が出土している。

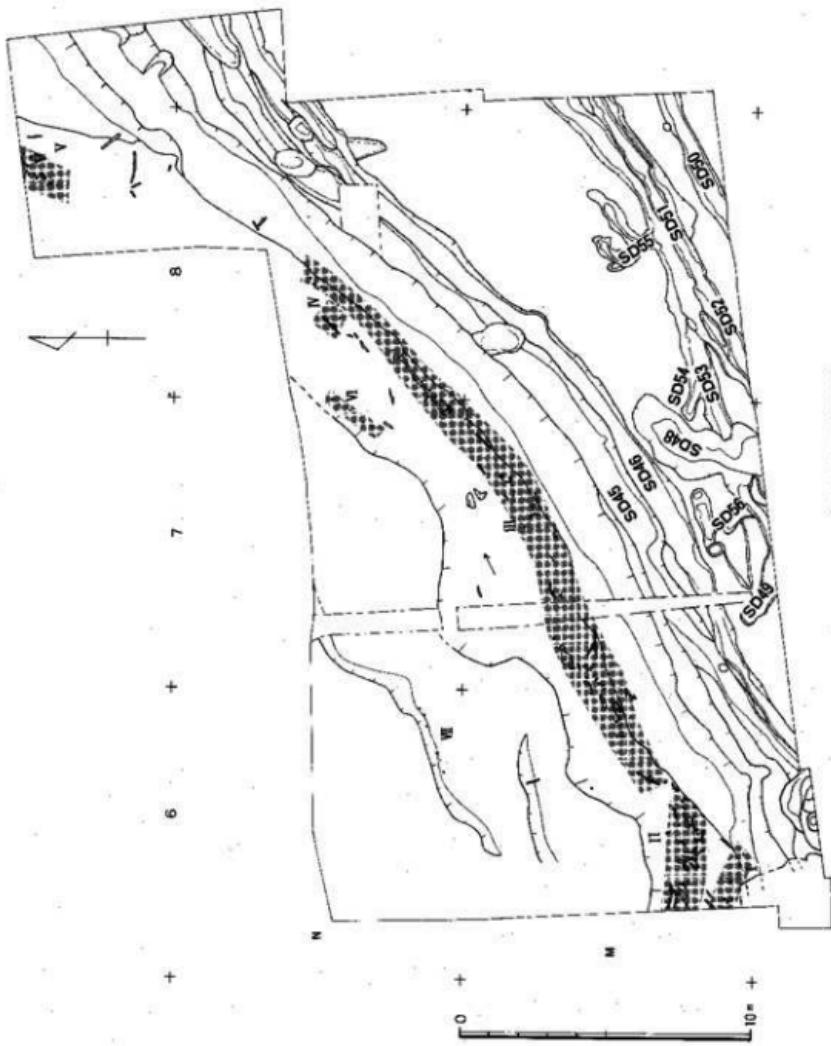
SD48は南北方向にのびる幅1.5m、深さ25cm前後の溝で、SD53を切っている。覆土は褐色砂質土。縄文土器細片がごく少量出土したにとどまる。

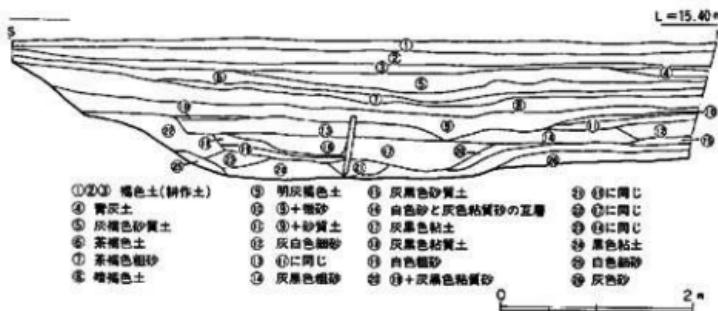
(2) 古河川 (第52図・付図4)

西南から東北方向に流れる古河川である。第3地点で北流していたものが、やや東に向きを変えたものであろうか。土層(第52図)は第3地点と異なり、複雑な様子を呈する。第3地点と比較すれば、①~③がⅠ層、④~⑥がⅡ層、⑦がⅢ層、⑧~⑨がⅣ層、⑩~⑯がⅤ層に相当しよう。ここではⅣ層とⅤ層間に砂の堆積(⑩~⑯)がみられ、その上(Ⅴ層)から杭が打ち込まれている。ただこの杭は単発的なもので、後述する杭列はⅤ層中に頭があり、地山に打ち込まれている。鐵などの流木もⅤ層中からの出土である。

杭列はⅠ~Ⅷに細分できる。主体となるのは台地が落ち込んだ部分に設けられた杭列Ⅰ・Ⅲ・Ⅴで、これらは護岸用のものと考えられる。杭列Ⅲの東北側では、長さ2.6mの丸木を杭で固定している。杭列Ⅳは杭列Ⅲの東北端で、流れに向かって突き出た小杭列である。杭列Ⅵ・Ⅶは、杭列Ⅲの北側を平行して続くもので、ⅥがⅢから約2mしか離れていないのに対し、Ⅶは約5.5m離れている。杭列Ⅱは杭列Ⅰの北約2mを平行して走る複数列からなる。杭列Ⅲと接続する可能性もある。

第51圖 4號地點全林圖 (1/200)





第52図 4a地点古河川土層断面図(1/60)

以上みてきたように、これらの杭列は古河道中の比較的小さな流れに対して築かれたもので、その規模も小さい。杭列I・IIと杭列VI・VIIの関係からすれば、流路の変化により護岸的な杭列が作り直されたとも推察される。V層からは弥生土器、IV層からは土師器(布留式系)までが出土しているが、その量はきわめて少ない。

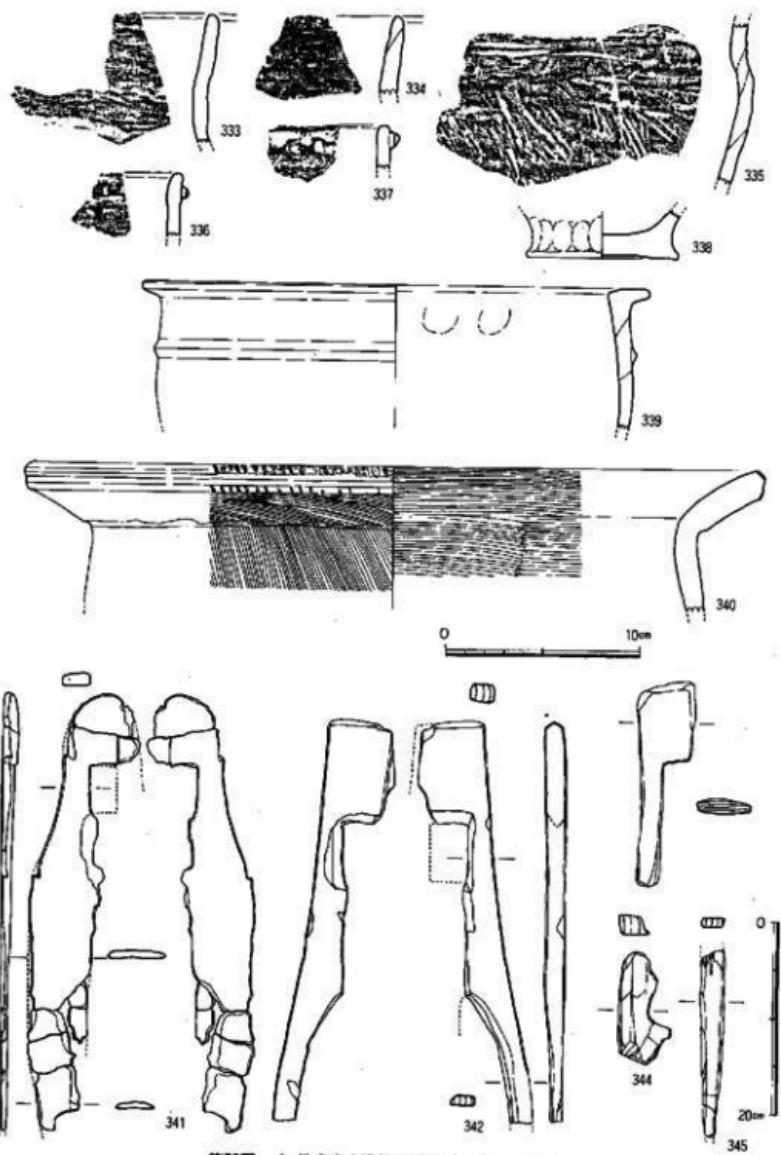
(3) 遺物 (第53図)

縄文土器 (333-338) 333-335は粗製深鉢片である。外面は貝殻状痕、内面はナデ調整で仕上げる。いずれも砂粒を多く混えた胎土で、333・335が暗褐色、334が灰褐色を呈す。336・337は夜白式の甕である。口縁端よりやや下った所に三角凸帯をめぐらし、ヘラ状工具で刻目を施す。外面条直、内面ナデ調整。胎土には砂粒を多く混え、336が褐色、337が黒色をなす。338も夜白式に属する甕底部片であろう。

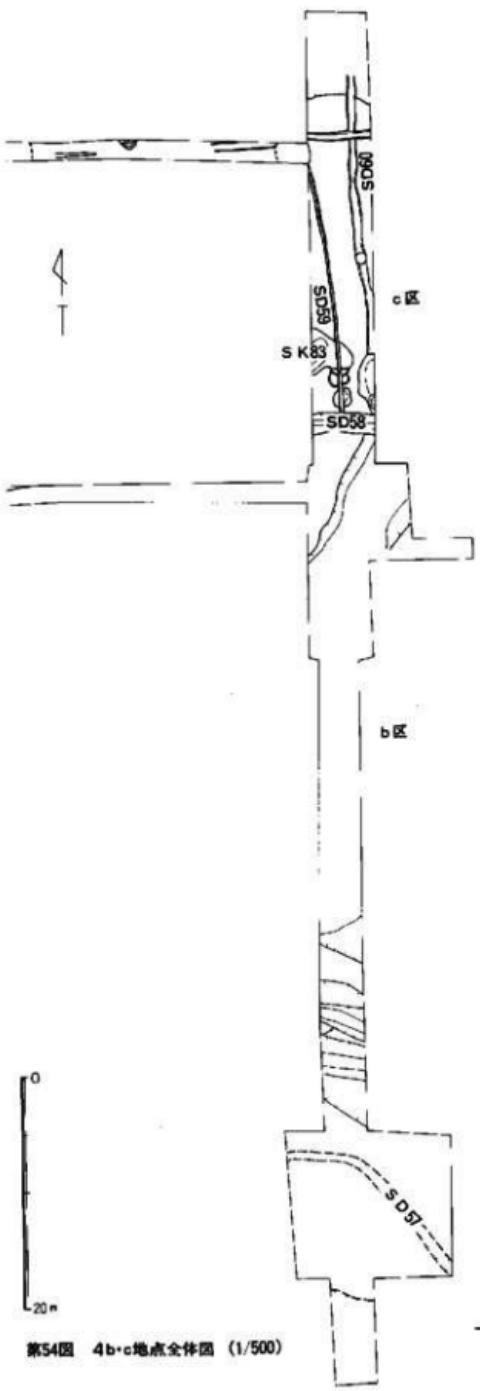
弥生上器 (339・340) 339は未発達な逆L字状口縁をもつ甕で、口縁下には三角凸帯をめぐらす。ナデ調整。胎土は比較的精良で、淡赤褐色。中期前葉のものか。340は前期末の大形甕である。復元口径38.0cm。口縁は肥厚し外反する。内外面とも刷毛目調整で、一部ナデ消す。胎土には少量の砂粒を混え、褐色～暗褐色を呈する。

木器 (341-345) 341は片側刃部を欠損するが、ほぼ全体の形状を知り得る二又鋸である。残存長41.4cm、刃幅2.6cm。頭部は丸く、柄孔は長方形。樹種はカシ。342は細身の平頭をなす三又鋸で、残存形態からして開きの少ない刃部を作ると考えられる。柄孔は上下端とも断面V字形状を呈する。また柄孔から刃部切り口までが長く、全体的に長脚の形態を想定できる。樹種はカシ。343は柄孔を一部を含む平頭片で、三又鋸かと考えられる。344は頭部、345は刃部の一部で、同一個体の三又鋸である可能性が高い。いずれの鋸も目取りである。

杭材は130点出土した。内訳は丸杭54(41%)、丸木半截杭8(6%)、角杭62(48%)、板杭6(5%)となり、角杭が丸杭をやや上まわるもの、第3地点とは同様の傾向を示してい



第53圖 4a地點出土遺物實測圖 (1/3, 1/6)



第54図 4b・c地点全体図 (1/500)

る。丸杭は径2~5cmのものが83%を占め、その中でも2~3cmのものが最も多い。角杭は最大幅4~7cmのものが69%あるが、それ以上のものも多い。また丸木半截杭は径5~8cmの大形材を使用する。

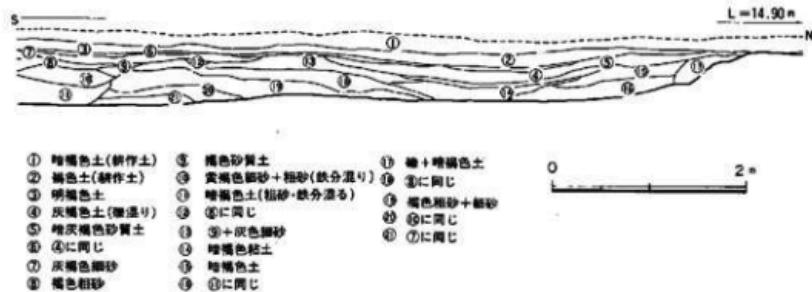
3 4b・c地点の遺構と遺物

この地点は概要の項でも述べたように、幅3mのトレンチを南北に1本入れ、場所に応じてトレンチの拡張あるいはサブトレンチを設けた。これは古河川の幅などについて調査したものである。調査面積800m²。ただ4c地点では微高台地上(古河川の左岸上)に溝・土壙の検出をみた(第54図)。古河川、各遺構とも出土遺物はきわめて少ない。以下、古河川、4c地点の土壙、溝、最後に出土遺物の順で記述する。

(1) 古河川

4b地点の岸から北約100mの地点で、その北岸(左岸)を検出した。やはり南岸に沿うようにして東北方向へ進む。河幅は70~80mといったところであろう。北岸の地山は礫となっている。

4b地点からこの北岸に至る間は、砂礫層の堆積となっており、河底(主に礫)もアップ・グウンしている。南側部分で上層に溝状遺構(SD57)を確認し、トレンチの拡張をはかった部分が、河底としては最も高く、そこから南北に下っている。またそのすぐ北側には、東西方向に走る数本の流路が複合している。一部土



第55図 4b・c地点古河川土層断面図 (1/60)

が削りとられた所もありその先後関係は明らかにしがたい。

第55図に示した土層図は北岸近くのものである。①-③は表土(耕作土)で、この上に1~2mほど圃地造成のための盛土がある。表土下は砂層がほとんどで、複雑に切り合う。⑤-⑩および⑪-⑫の層を南側では⑪が切り、その上を⑧-⑩が切る。また北側では⑬・⑭の層が切り、その上を④・⑤が切る。⑯・⑯・⑯-⑫の層にても水平堆積とはいがたい。すなわち、たび重なる流路の変化がこの図にみてとれるであろう。

北側に伴う杭列などの遺構はみられない。また古河川中の遺物もきわめて少ない。最も多い
弥生土器でも100片ほどにしかすぎない。

(2) 滅

SD57-61の5条を検出した。このうちSD57は4b拡張区の上層で検出した幅0.6m、深さ10cm程度の溝である。出土遺物はない。残りの4条は4c地点の砂礫上から検出した。このうちSD60を除く溝は近・現代のものである。SD60はほぼ南北に走る溝で、幅0.7m前後、深さ10cm前後をはかる。覆土からは弥生時代中期の土器までが出土している。しかしその量はきわめて少なく、時期の確定はしがたい。

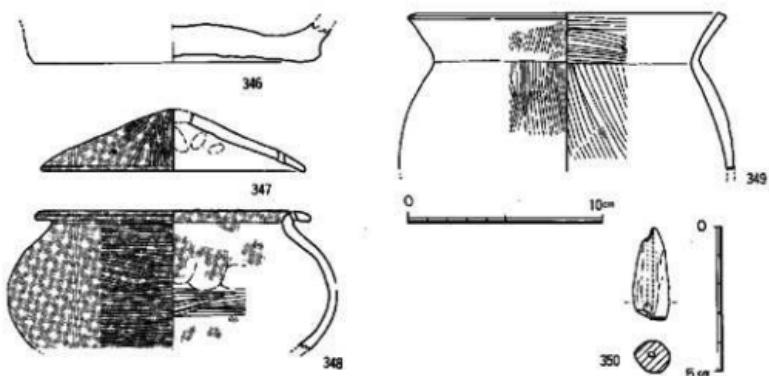
(3) 土壌

SK83の1基を4c地点で検出した。不整円形を呈し、深さ20cm。上層は黒色砂質土、下層は粘質土となっている。繩文土器が1片だけ出土した。

(4) 遺物 (第56図)

各遺構の項でも述べたが、出土遺物はきわめて少なく、実測できるものはほとんどない。まとめて観察する。

346は阿高式系の深鉢底部である。ややあげ底を呈する。調整はナデで、器表に凹線はみられない。滑石を胎土に混え、暗赤褐色をなす独特な土器である。347-349は弥生土器である。347・



第56図 4b-c地点出土遺物実測図(1/3,1/2)

348は丹塗り無頬壺とそれに組み合わさる蓋であるが、出土地点は異なる。ともに外面はヘラ研磨を行う。壺口縁および蓋下端には2ヶ所鉤孔を設ける。胎土は精良。中期後半。349は後期の甕で、復元口径15.3cm。内外面とも刷毛目調整を施す。胎土には少量の砂粒を混え、褐色を呈する。外面全体に煤が付着する。350は紡錘形をなす管状土錐片である。

4 4d地点の遺構と遺物

4c地点から西方向に南北2本のトレンチを設けたところ、約13mの所でそれまでの礫の地山が砂質土に変化した。さらに北側トレンチでは、そこから約25m西側で赤褐色粘質土の抜がりが認められ、溝状の遺構を見出した。そこで、この赤褐色粘質土の地山部分についてトレンチの拡張を行い、その範囲と溝の行方を確認することにした。

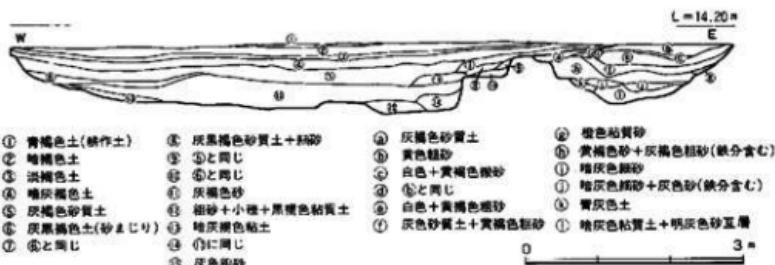
対象地は4c地点から地山のレヴェルがだいに低くなっている。表上に盛上が厚くなされていたため、排土の関係もあり、発掘調査面積は830m²にとどまった。

検出したのはSD63・64の切り合う2本の溝が主体で、他にSD62溝、SK104・105土壙がある。またこの地点の西北側にトレンチを延したところ、厚い砂層とわずかに残された赤褐色粘質土の台地部分を検出した。東北方向に走る複数の溝と考えられる。赤褐色粘質土の地山の抜がりはSD63・64を中心とした部分に限られる。

(1) 土壙

SD63・64の南側上面で検出したSK104・105の2基だけである。ともに円形を呈し、SK104をSK105が切っている。深さ10cm前後。縄文土器片の他、SK105では須恵器片も出土している。しかしいずれも細片で、その量は数片である。

(2) 溝



第57図 SD63・64土層断面実測図(1/80)

SD62 北側の砂層上で検出したのは東北方向に走る小溝である。幅0.6m、深さ30cm。覆土は粗砂。土師器杯、皿などが出土しており、中世のものと考えられる。

SD63・64(第58図) SD63は西南方向から北側に向かって走る幅8.5m、深さ0.94mの溝で、東側でSD64を切る。そのSD64は東北方向に走り、推定幅3.0m、深さ0.8m。

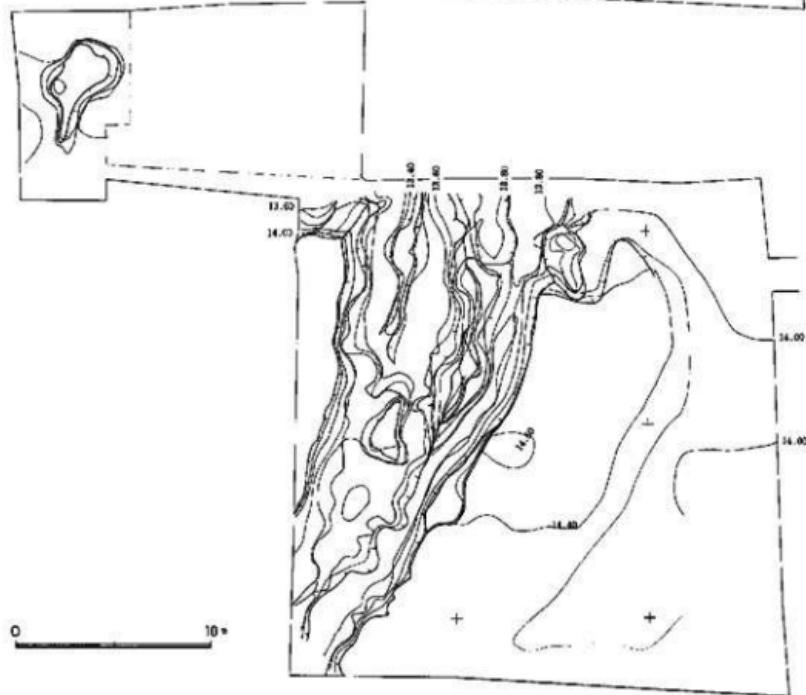
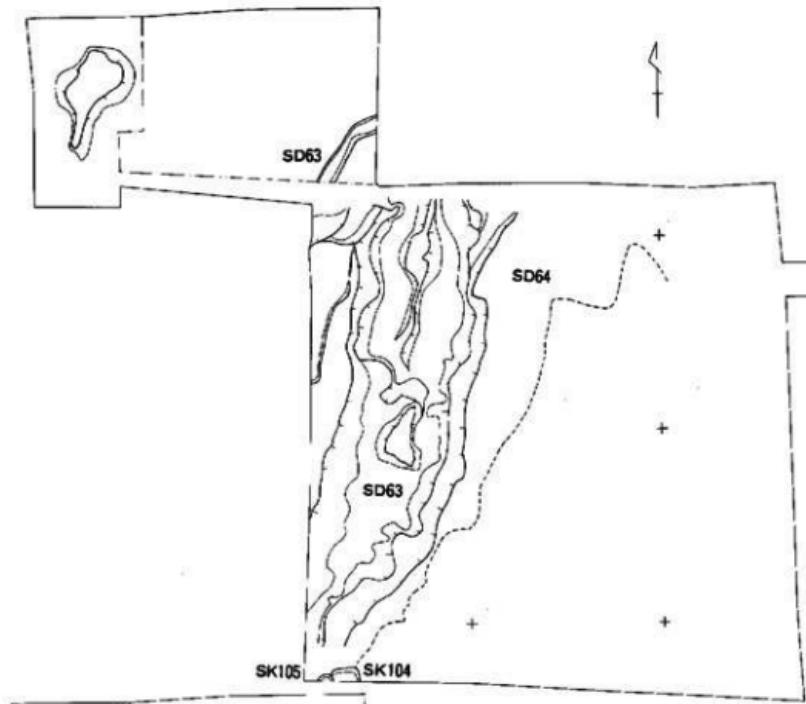
両溝の切り合い関係とその土層は第57図に示した。①～③は表上層の流れ込みで、近世までの遺物が混る。④～⑩は砂質土でSD63の上層、⑪～⑯は砂礫と粘質土の互層になっており、下層となる。⑭～⑯層はSD64に伴うものである。このうち⑭～⑯を上層、⑮～⑯を中層、⑭～⑯を下層として分層調査した。

この両溝は第5地点に統一し、SD64はSD66と接続する可能性が大である。SD63は、この地点の西北側にみられる溝と切り合はうしく、第5地点での明確な流路はとらえられなかった。

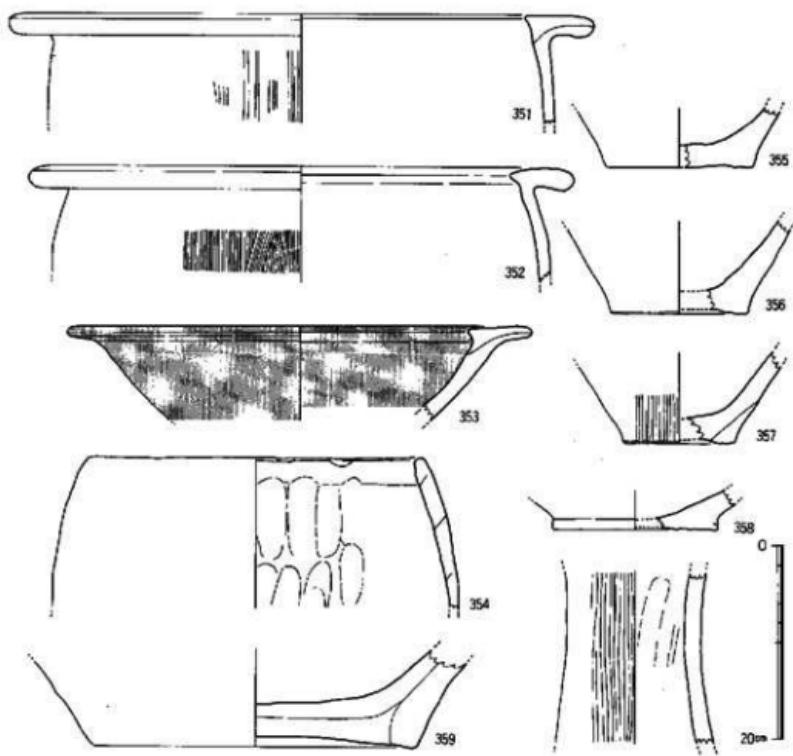
SD63・64とも溝内に設けられた杭列などは見あたらない。自然流路であったものと考えられる。だた多量の遺物が両溝から出土している。以下SD64、SD63の順に出土遺物をみてゆく。ただし、溝(脇)の下限を表す土器に限定し、それ以前の土器、および石器などについては、後段にまとめた。

SD64下層出土土器(第59図) SD64では上層～下層から縄文～弥生時代の遺物が出土した。上層からの出土遺物は少ない。中層出土のものは少量あるが、下層のものと時期的な開きはない。ここでは下層の土器について記す。すべて弥生土器である。

351-352は逆L字状口縁をもつ甕である。調整は外面が刷毛目、内面がナデ。胎土には砂粒を多く混入する。351の復元口径30.0cm、352は28.0cm。353は鋸先状口縁をもつ高杯で、復元口径23.8cm。器表は磨滅しているが、内外面とも丹塗りの痕跡が認められる。胎土は精良。354は口縁部がすぼまる形態をなす鉢の類であろうか。復元口径17.0cm。内外面ともナデ調整で、内面には指頭痕が残る。胎土には少量の砂粒を混入し、暗褐色を呈する。360は器台片である。薄手の作りで、外面刷毛目、内面ナデ調整で仕上げる。砂粒を少量混入した胎土で、淡赤褐色。355-357は甕、358・359は甕の底部である。358は円盤貼付けの板付I式の甕である。以上の弥生土



第58図 SD63・64実測図 (1/300)

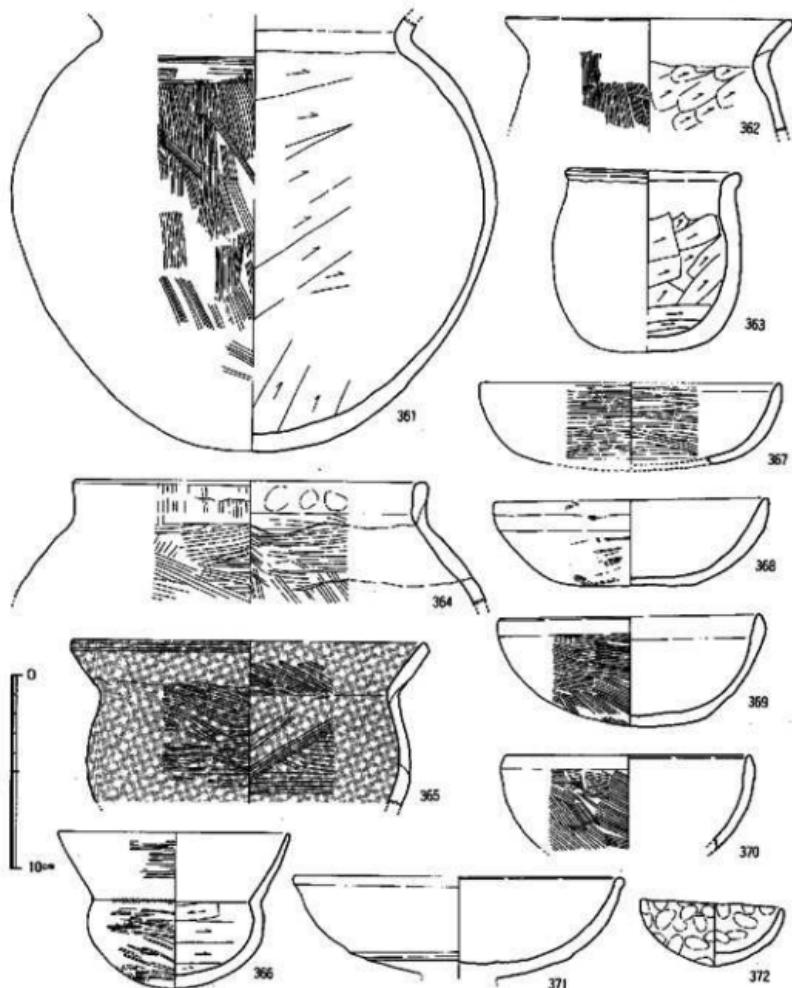


第59図 SD64出土土器実測図 (1/3)

器からすれば、弥生中期中頃から後半を下層の下限と考えることができる。

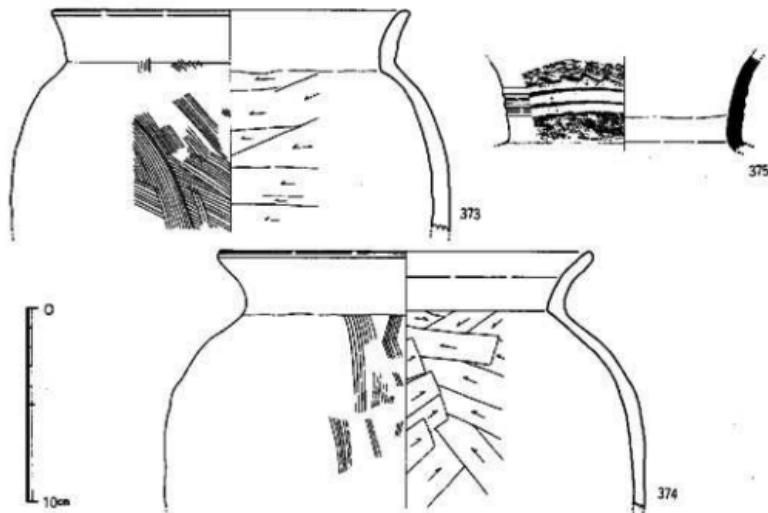
SD63下層出土土器 (第60図) 繩文・弥生土器と土師器が出た。土師器を図示した。

361は布留式系の甕である。球形胴部をなし、外面刷毛目調整、内面ヘラ削りを行う。少量の砂粒を混えた胎土で、外面暗褐色、内面灰黒色を呈する。外面は広範囲にわたり煤が付着する。362も甕で、口縁部はくの字状になり、胴部の張りは小さい。調整・胎土は361に同じ。灰褐色を呈し、やはり外面には煤が付着する。363は丸底の鉢とでも呼べるものであろうか。やや下膨れで、口縁部は短く外反する。外面ナデ調整、内面ヘラ削り。少量の砂粒を混えた胎土で、暗褐色。外面には黒斑がある。口径9.5cm、器高9.1cmの完形品。364は口縁部が短く立ち上がる壺で、内外面とも粗い刷毛目調整を施す。砂粒を多く混えた胎土で、灰褐色。外面煤付着。復元口径18.2cmの粗雑な作りの土器である。365は外反する口縁部と扁球の胴部からなる体である。



第60図 SD63下層出土土器実測図(1/3)

外面ヘラ研磨、内面刷毛目の後、両面とも赤色顔料を塗布する。胎土は比較的精良。366は小形丸底壺で口径13.8cm、器高7.9cmをかる。圓球形の胴部から口縁部が外湾気味に開く。胴部外面はヘラ研磨、内面ヘラ削り、口縁部は刷毛目の後ナデ調整。胎土には少量の砂粒を混え、淡赤褐色。



第61図 SD63上層出土土器実測図（1/3）

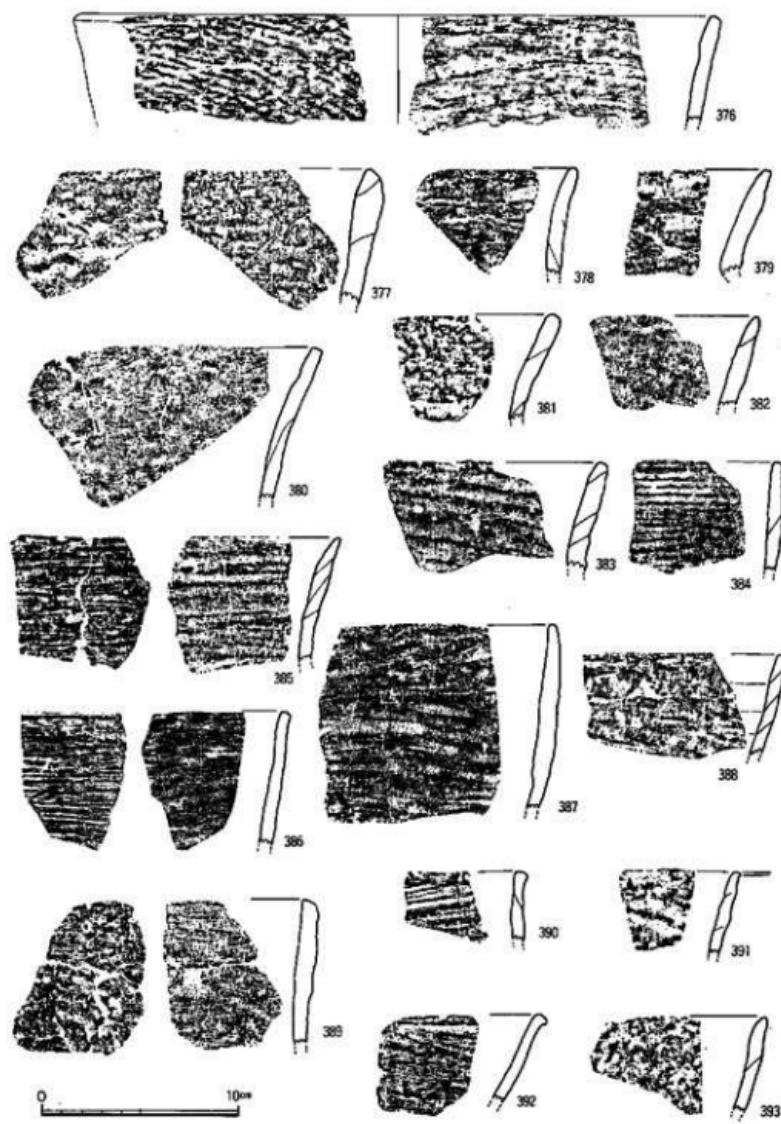
367-370は杯である。丸底で、口縁部がわずかに立ち上がる形態をもつ。367・368は内外面ともヘラ研磨を行うもので、口径14.0～15.4cm、器高4.4cm前後。369・370は外面刷毛目、内面ナデ調整。口径12.5～13.2cm、口径5.6cm前後。いずれの胎土も精良で、367・370が褐色、368・369が淡赤褐色を呈する。371は高杯で、復元口径17.0cm。口縁端は肥厚し、底部には段がつく。ナデ調整。比較的精良な胎土で、茶褐色を呈する。372は手捏ねの鉢である。口径7.2cm、器高3.2cm。器表には指頭痕が多数残る。土器ではないが、三叉鋏片もこの層から出土している。

SD63上層出土土器（第61図） この層からは古墳時代の須恵器までが出土している。373・374は甕で、張りの小さい胴部から口縁部が外反する。復元口径18.4～19.4cm。外面は刷毛目の後ナデ、内面はヘラ削りを施す。砂粒を多く混えた胎土で、褐色を主とした色調をなす。375は須恵器甕の頸部片である。二条の沈線をめぐらし、その上位に横描きによる波状文を入れる。穂線はややシャープさを欠く。焼成堅緻で、灰黒色を呈する。

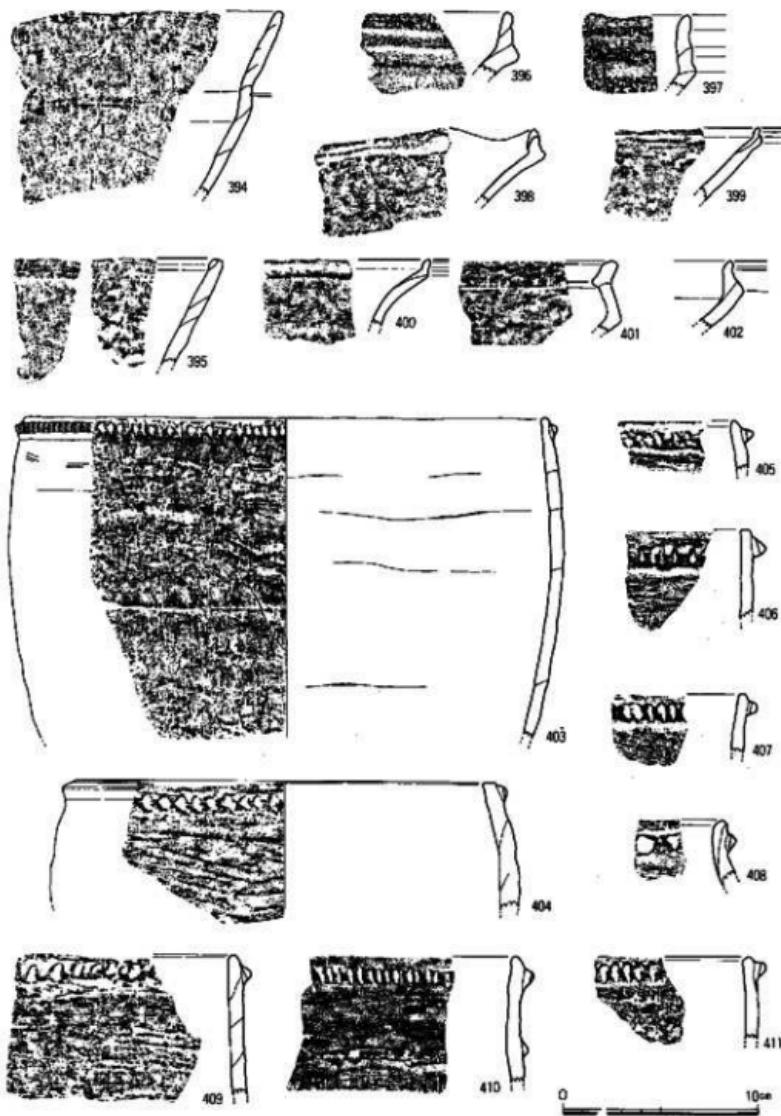
以上の出土上器からすれば、SD64は弥生時代中期以降、SD63はやや混りがあるが、おおむね下層は5C前半前後、上層は後半前に比定できよう。

(3) その他の遺物

SD63・64を中心とした4d地点の、遺構に伴なわないも、表土層出土のものについてここで扱う。ただし石器は第4地点の章末にまとめた。出土地点などについては巻末の表を参照されたい。



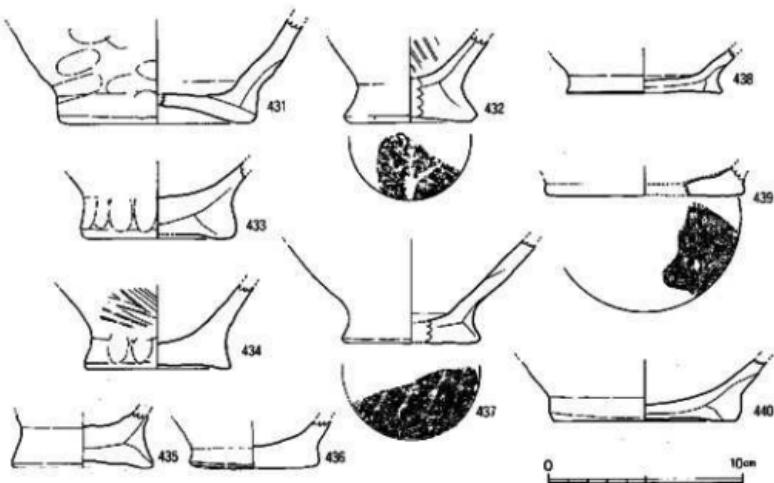
第62图 4d地点出土土器实测图 I (1/3)



第63图 4d地点出土土器实测图II(1/3)



第54图 4d地点出土土器实测图三 (1/3)



第65図 4d地点出土土器実測図N(1/3)

1) 土器 (第62-67図)

縄文土器 (376-440) 376-395は粗製の深鉢である。いずれも小破片でその器形の全様をうかがうことはできない。また図示した上器の傾きも確定的なものではない。口縁部は外傾し、端部は丸くおさめるもの、角をなすもの、肥厚するものがある。390-393は薄手のもので、他のものとはやや異なる。394は胸部近くまでうかがえる深鉢で、頸部には一条の浅い沈線がめぐる。395は内側に肥厚する。外面は条痕で調整するものが多数を占めるが、379・380・391・392は残存部はナデ調整である。内面はナデ調整のものがほとんどである。いずれも胎土には砂粒を多く混え、褐色あるいは黄褐色を呈するものが多い。

396-400は精製の深鉢である。396・397は直立する口縁端部に2条の沈線をめぐらす三万円式系統の土器である。398は波形口縁をなすもので、口縁下には2条の沈線をはわせる。山形部分には指頭による凹文を入れる。399・400は大きく外反する口縁部端が短く立ち、そこに沈線をめぐらすものである。いずれも残存部はナデ調整。砂粒を混えた胎土で、黒褐色を主とした色調を呈する。

401・402は精製浅鉢である。401はくの字状に屈曲する口縁部内面が肥厚する。402は口縁端部が小さく外反する。後述する夜白式に伴うものである。外面はともにヘラ研磨か。砂粒混りの胎土で、黒褐色～黒色を呈する。

403-430は夜白式の甕である。いずれも口縁端あるいは直下に一条の刻目凸帯をめぐらすものである。胴部にも凸帯をもつものはきわめて少なく、404を図示したにとどまる。凸帯の貼付

け位置によって、大まかに①口縁下に貼り付けるもの(403-411)、②口縁端部に斜下向きに付けられるもの(412-418・426)、③口縁端部に水平に貼り付けるもの(419-423)、④口縁端より上方に付けられるものの、あるいは口縁端が内傾するもの(424-430)の4つに分類できる。残存外面の調整は、条痕とナデが相半ばする。内面はほとんどナデ調整である。刻目はヘラ、棒状工具で入れられたものである。胎土には砂粒を多く混え、暗褐色を主とする。外面に煤が付着するものも多い。復元口径でみると403が26.9cm、404が22.7cm、412が24.9cm、415が15.0cm、424が18.7cmと大小がある。

431-440は底部である。431-437は鉢あるいは甕の底部であろう。大きなあげ底を呈する431、底部の付根がくびれ小さなあげ底を呈する432-435、平底をなす437-438がある。432の底面には木葉が、また437には根状の圧痕が残る。438-440は甕の底部である。438-439は付根がくびれる平底、440はわずかにあげ底をなす。439の底面には種子の圧痕が認められる。

弥生土器(第66図) SD64出土以外のものをここでは扱う。総体的に小破片が多い。

441-443は前期の甕片である。441は外傾する口縁部端に刻目を入れる。442は如意形口縁の端部に細かい刻目を入れる。443は胴部接合部付近に刻目をいれるもので、胴下半はわずかに屈曲する。いずれもナデ調整。板付I式か。444は逆L字状口縁をもつ甕で、復元口径30.5cm。調整はナデ。中期中葉。445はくの字状口縁をもつ甕で、胴部は張る。ナデ調整。復元口径21.5cm。後期初頭か。いずれの甕形土器も胎土には砂粒を多く混え、褐色～暗褐色を呈する。

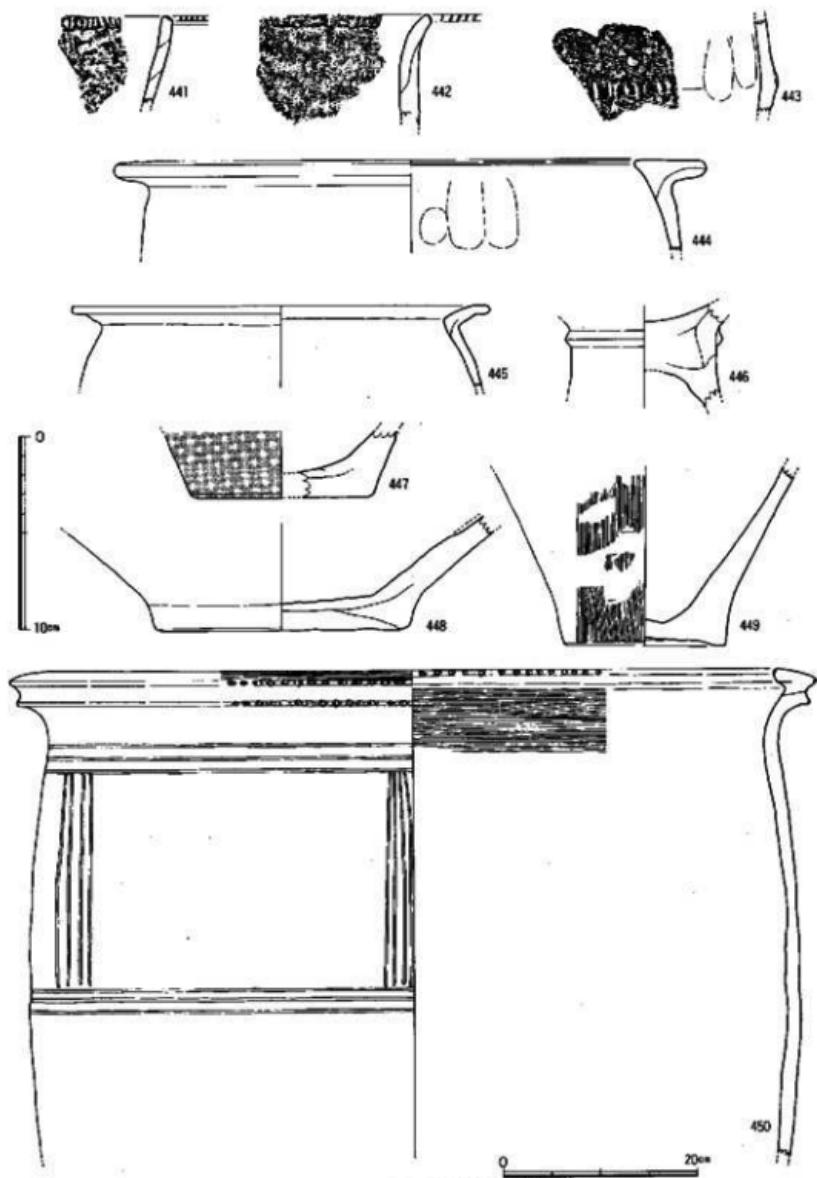
446は高杯筒部片である。杯部の付根に一条の三角凸帯をめぐらす。残存部はナデ調整。砂粒を多く混えた胎土で、暗褐色を主とした色調をなす。前期の所産である。

447-448は甕、449は甕の底部である。447は器壁が厚く、外面は赤色顔料を塗布する。中期。448は前期の大形甕の底部である。449はややあげ底である。外面刷毛目調整。中期か。

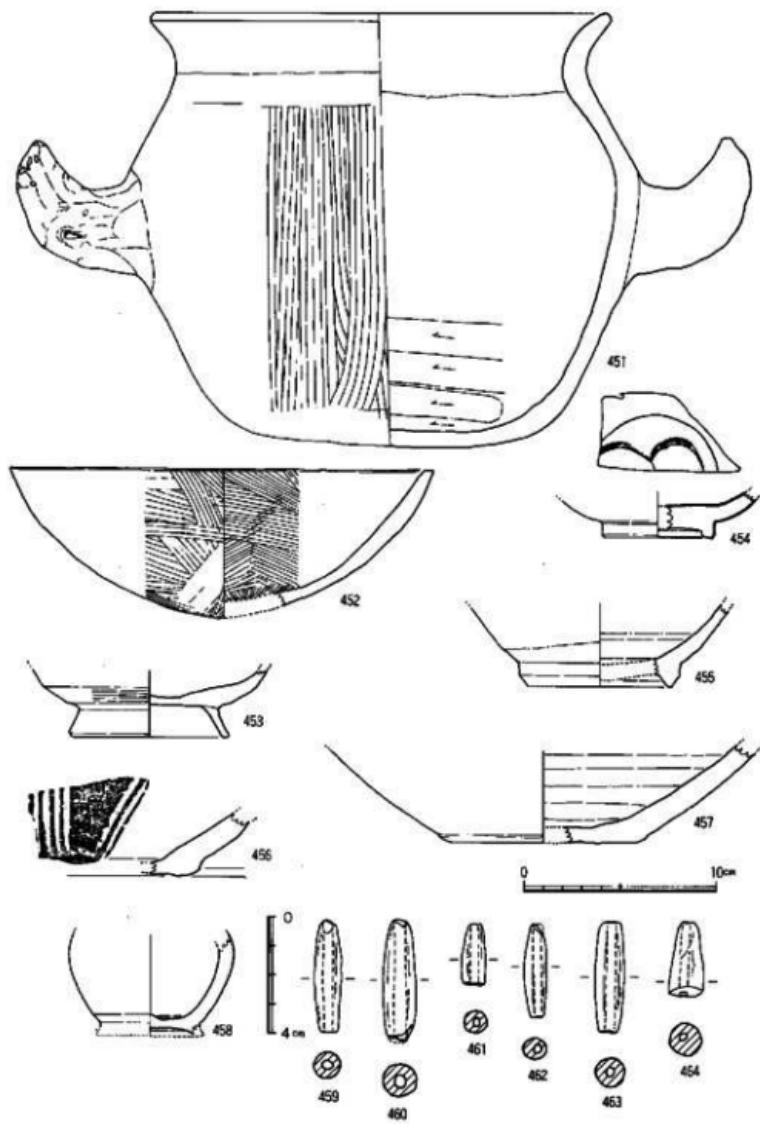
450はいわゆる金海式の大甕である。SD63の溝底で一括して検出したもので、その破片の一部は第5地点でも検出した。口唇部には内外3ヶ所に刻目を入れる。また口縁下と胴部に各々3条の沈線をめぐらせ、その間に輻方向の4条の沈線を数ヶ所入れている。口縁部に一部刷毛目を残す他はナデ調整。胎土には砂粒を多く混え、淡褐色。復元口径83.6cm。

土師器(第67図451-453) 各時代とりまとめて述べる。451は把手付の甕である。復元口径23.7cm、器高22.0cm。丸味をおびた平底で、口縁部はくの字状に外反する。把手は胴最大径部分に付く。外面刷毛目、内面ヘラ削り。胎土には砂粒を多く混え、淡褐色。胴部中央に黒斑があり、また胴下半部から底部にかけて煤の付着がみられる。452は半球形に近い鉢である。口縁端部は水平になる。内外面とも刷毛目調整。砂粒混りの胎土で褐色を呈する。古墳時代前期のものである。453は高台付椀で、高台は高く、外に張る。体部外面ヘラ研磨、他はナデ調整。淡赤褐色。

磁器(第67図454-455) 454は龍泉窯系青磁片である。内面から外面高台部まで薄縁の輪がかかる。内底には花文を彫る。胎土には黒色粒が混る。455は白磁碗である。高台は外側が削



第66圖 4d地點出土土器實測圖 V (1/3, 1/6)



第67圖 4d地點出土土器實測圖 VI(1/3)・土器實測圖(1/2)

り取られ尖り気味になる。釉は内面から外面体部下半にかけて施され、灰色を呈する。ただ内底部分は輪状に削り取られている。胎土には黒色粒が混る。

その他の土器（第67図456-458） 456は土師質の擂鉢である。縦方向に擂目を設ける。赤褐色。475は須恵質の手捏ね鉢。ナテ調整で仕上げる。砂粒混りの胎土で、灰色を呈する。東播系産のものか。458は須恵質の小壺で、小さな高台がつく。内底中央は突出する。ナテ調整。微砂粒混りの胎土で、焼成ややあまく、青灰色を呈する。

土錘（第67図459-464） 6点出土したがいずれも管状土錘である。平面がほぼ長方形をしたものと、やや中膨みのものがみられる。唯一の完形品である463は、長さ3.8cm、径1.0cm、重量3.6gをはかる。460の重量は4.7g。

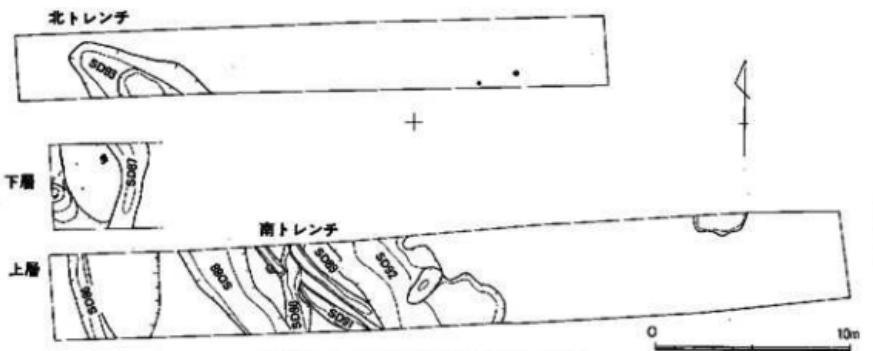
木器 SD64下層から三叉鋸が1点出土した。方形柄孔をもち、V字状切り込みにより刃部を作り出すものである。残念ながら収縮・変形のため図示しえなかった。

5 4e地点の遺構と遺物

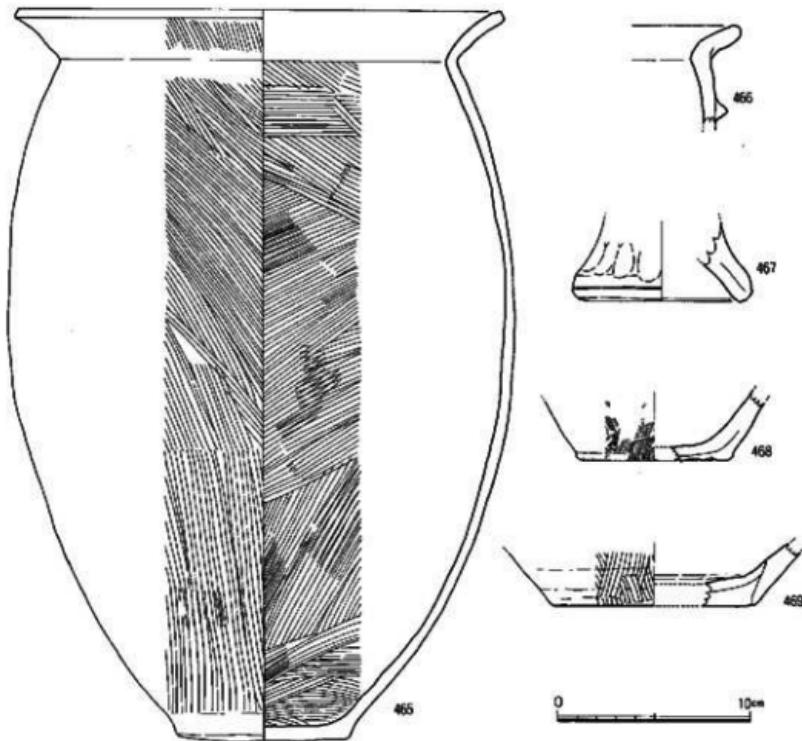
4d地点の南側と給水塔など団地の管理施設のある間は未買収地となっていた。古河川左岸およびSD63・64の南側部分について知るために、所有者の了解のもとに南北2本のトレンチを開いた。調査は1982年3月に行った。

(1) 遺構

当初予想した古河川およびSD63・64は検出できなかった。表土層下は砂礫の地山となっている。南トレンチの西側では東西-西北方向に走るSD86・88・89・91・92と南北方向に走るSD90を検出した。また西端のSD86の下は段落ちとなっており、SD87とその西側で小枕列を検出した。また完形に近い弥生土器(465)もここから出土した。また北トレンチではSD92と接続すると考えらえるSD93と、東側でピットを2個検出した。南トレンチの溝は重複しており、自然流路と



第68図 4e地点トレンチ配置図 (1/300)



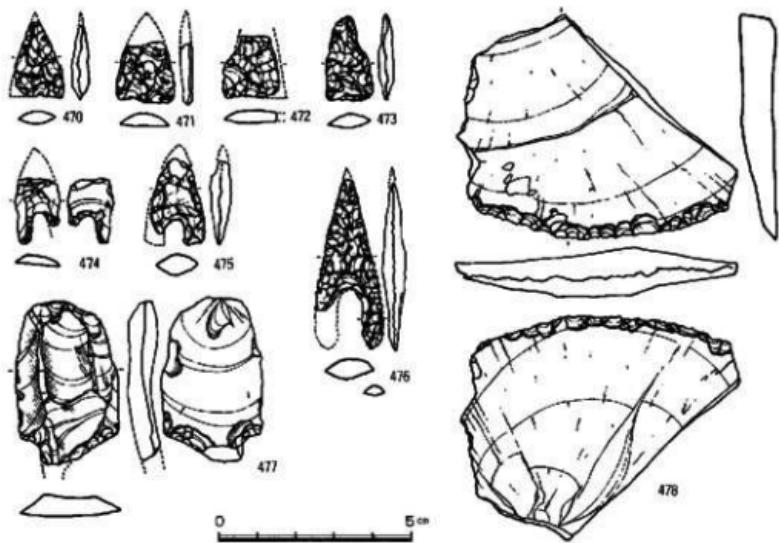
第69図 4e地点出土土器実測図(1/3)

考えられる。下層の枕列については西側が拡張できず、その実態はわからないままである。

(2) 遺物

表土層から縄文～歴史時代にわたる土器が出土した。しかし、いずれも小片である。溝からの土器は、SD86と段落ちから弥生土器の小片がわずかに出土したにとどまる。

第69図は4e地点から出土した弥生土器である。465は南トレンチ西端段落ちとSD87の間からつぶれて単独出土した壺である。口径24.9cm、器高37.7cm。くの字状に大きく開く口縁部と長脚をもつ。底部は丸みをおびた平底。内外面および底面を刷毛目で調整する。少量の砂粒を混えた胎土で、暗褐色を呈する。外面には煤、内面下半には炭化物が付着する。後期中葉か。466は前期の壺であろう。口縁下に一条の三角凸帯をめぐらす。残存部はナデ調整。467は器台あるいは脚台片である。内厚で、外面には指頭痕が残る。468は壺、469は壺の底部である。平底を



第70図 第4地点出土石器実測図 I (2/3)

なし、外面刷毛目、内面ナデ調整を行う。

6 第4地点出土石器

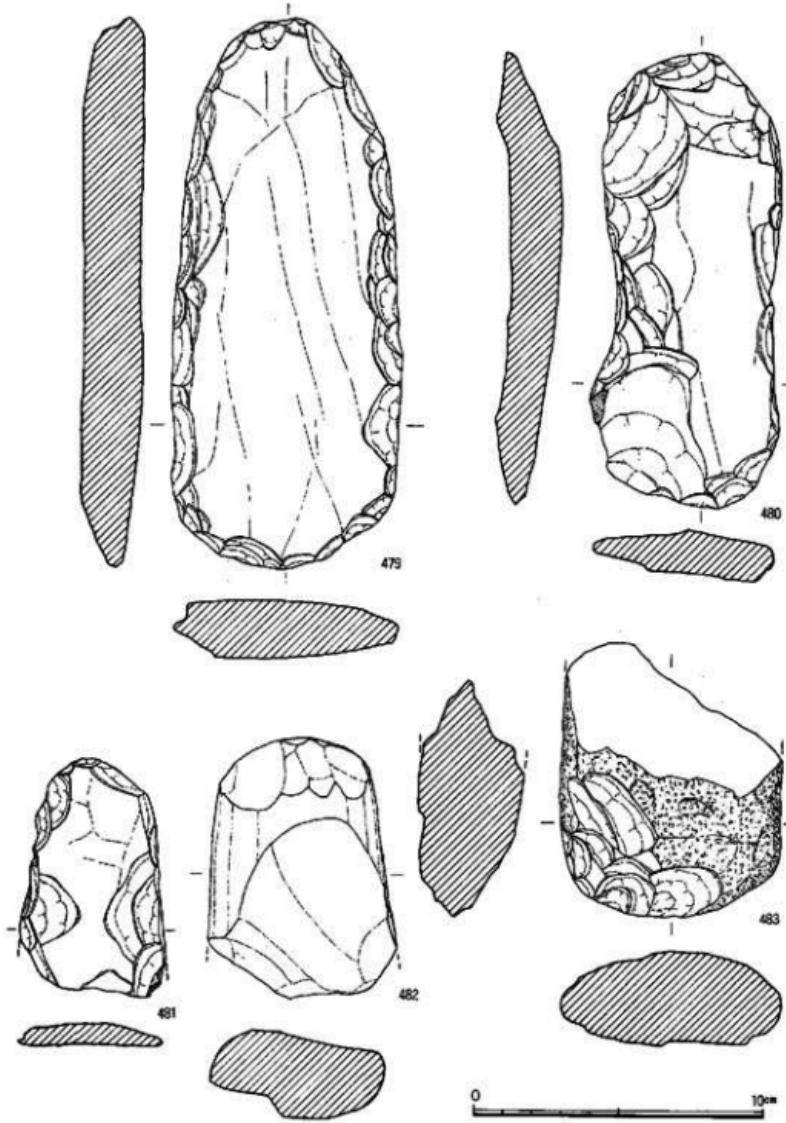
第4地点から出土した石器は、石鎌13点(未製品も含む)、使用痕および加工痕のある石器14点、ドリル1点、石匙1点、スクレイパー2点、打製石斧3点、磨製石斧5点(うち太形蛤刃石斧4点)、石包丁1点、磨石2点、砥石3点の計51点である。他に剥片、石核などが出土している。

石鎌 (第70図470-476) 470-472は黒曜石製の平基の二等辺三角形を呈する石鎌である。いずれも欠損している。473は同じ平基の鎌であるが、先端が尖鋭でない。黒曜石製。474はサヌカイト製の剥片を利用した物で、素材の主要剥離面をほとんど残している。475もサヌカイト製で、基部のえぐりが深い。476は長身の錐形鎌で、整形加工も細かく入念である。黒曜石製。

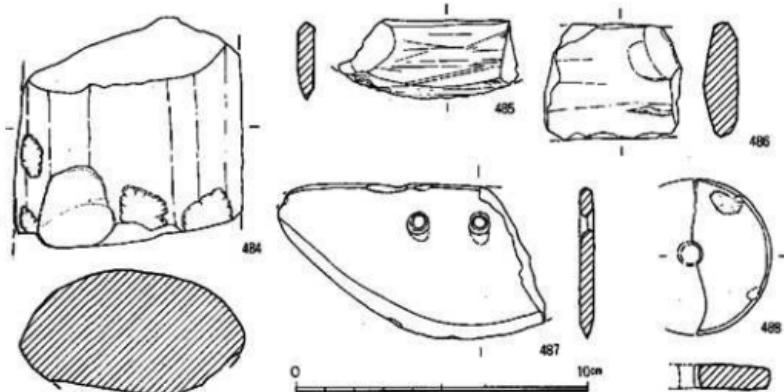
ドリル (第70図477) 黒曜石製の縦長剥片を利用したもので、その端部に錐刃を形成している。先端部は欠損する。

スクレイパー (第70図478) サヌカイト製の幅広の剥片の端部に両面から調整し、刃部を形成したものである。

打製石斧 (第71図479-481) 479は刃部がやや幅広の扁平打製石斧である。調整は全周しており、頭部は丸みをおびる。裏面には中央部に両側辺からの大きな剥離がみられる。玄武岩



第71圖 第4地点出土石器实测圖 II (1/2)



第72図 第4地点出土石器実測図III (1/2)

製。480は分銅形に近い扁平打製石斧である。剥離は大きく、やや荒い。玄武岩製。481は上述の2点に比べて小型なものである。基部が狭くなるものであろう。片岩の類であろうか。

磨製石斧 (第71図482・483、第72図484) いずれも玄武岩製の太形蛤刃石斧の破片である。482は基部片、483は刃部片、484は脇部片。483は敲打痕が一面に残存している。

磨製刃器 (第72図485) 石庖丁刃部片を転用したものであろうか。刃部には刃こぼれがみられる。また背面は磨いている。

石鎌 (第72図486) 残片である。左端にわずかに刃部が認められる。

石庖丁 (第72図487) 半月形外湾刃石庖丁である。両刃。2個の紐かけ穴は両側から穿孔する。蛇紋岩製。

石製紡錘車 (第72図488) 半欠品である。復元径5.3cm、孔径0.8cm、厚さ0.8cmをはかる。石材不明。

V 第5地点の調査

1 概要

第5地点は大字田村字小柳にあたる。1982年1月12日、東西方向にトレンチを入れることから調査を開始した。その結果、対象地の中央に台地部分が残存していることが判明し、この部分から土壌、ピット、溝などの遺構を検出した。そこでまずこの台地部分の表土剥ぎを行った。その後、東西両方向に遺構が延び、最終的には東西約95m、南北約20mの長方形の発掘区となつた。

第4地点で検出した溝の行方が一つの目的であったが、調査時の1~1.5mの盛土が障害となって、直接的な関係はつかめなかった。ただ台地部分から弥生時代の明確な生活遺構が検出できたのは大きな収穫であった。しかし台地部分を除けば、砂礫層が主体となっており、遺構の切り合い状況、あるいはその性格をつかむのがかなり困難であった。台地の東西側では、まず古河道（複数の溝の切り合い）があり、それが埋没した後にさらに溝があるといった上下2層の重複がみられた。また東側部分は砂礫が地山となっており、自然流路と考えられる溝が数条みられた。

発掘調査は2月に諸事情から中断し、3月1日再開、古河道底に構築された杭列の取り上げによって終了したのは4月24日であった。発掘調査面積1,750m²。ただし重層面積はこれには含まない。検出した遺構は柵5列、竪穴住居跡1基、土壙19基、溝27条、古河道ならびにそれに構築された杭列などである。その時代は弥生時代前期から平安時代におよぶ。また縄文時代中期から江戸時代におよぶ土器、石器、木器などの遺物を検出した。

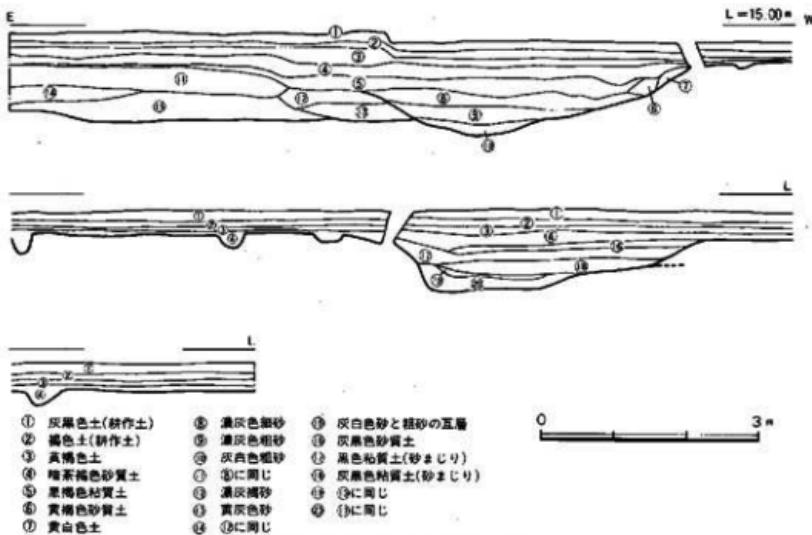
調査にあたっては、西から20mごとにI~V区の設定を行った。また場合に応じて、その1区画を南北に分け、例えばI区北区、II区南区などと称する。

以下、第3地点と同様な方法で、遺構・遺物について触れる。石器については、これまでのように、第5地点出土のものを一括して後段にまとめた。

2 土層

古河道部分を除けば、表土下は疊あるいはシルトの地山といった土層堆積を示している。ただ台地西側（I・II区）は古河道の關係でかなり複雑な状況を呈している。第73図は台地東西の土層を、調査区北壁で図化したものである。1列目右側から2列目中央部分までが、赤褐色粘質土の台地となる。

①~④層は第5地点に全体的にみられる表土層である。先に述べたようにIV・V区では④層直下が砂礫の地山となっている。I・II区ではこの下に⑤の黒褐色粘質土が続く。青磁などの破片が入っており、中世の包含層の可能性がある。台地に接した西側ではこの層下にSD65があ



第73図 第5地点土層断面図(1/80)

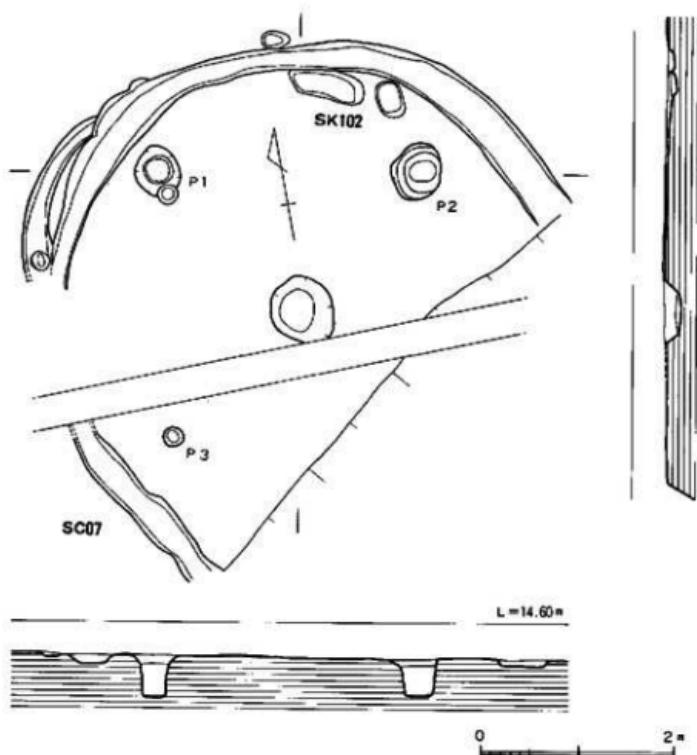
る。(⑧—⑯層)。細砂と粗砂の上下両層に大別できる。SD65は⑫⑯層からなる溝状のものを切っており、さらにこれは⑰の砂層を切っている。また⑯層の上には⑪⑭の砂層が載っている。これらの砂層は1mも離れると様相が変化し、幾重にも古河道が入りこんでいたことをうかがわせる。このため、SD65以外は、ひとつひとつの古河道を追って調査することができなかった。台地東側の⑩—⑯はSD66の堆積層である。⑯の黄灰色砂をはさんで上下両層に分けられる。遺物からすれば、上下別の流路としてとらえることもできる。

古河道部分の南壁土層も観察したが、台地部分がほとんどなく、砂層を中心とした堆積となっており、明確な切り合い関係などは把握できなかった。

3 遺構と遺物

(1) 櫛(付図5)

III区台地上で5列まとめて検出した。いずれの柱穴も5cmに満たない位しか残存していない。SA01は一番西側に位置するもので9個の柱穴からなる。柱穴は30×50cmの楕円形を呈すものが多く、東側に張りをもって西南—東北方向に続く。柱間は約60cm。SA02はSA01のすぐ東にあり、これとは逆に西側に張りをみせる。柱穴は9個でSA01に比べひとまわり大きい。柱間はほぼ同じである。SA03はSD97の東側にあり、ほぼ南北方向をとる3個の柱穴からなる。SA04はそのすぐ東にあり、5個の柱穴から構成される。ほぼ南北に方位をとるが、東にやや弓張り



第74図 積穴住居跡実測図(1/60)

状になる。柱穴は径20~30cmの円形あるいは梢円形をなし、約60cmの柱間距離をとる。SA05はSA04の東南側と同じ方向で走るもので、4個の柱穴からなる。柱穴の規模、柱間距離はSA04と変る所がない。これらの遺構からの出土遺物はないが、埋土からすれば弥生時代の柱穴とは大きく異っている。またその性格についてもはっきりした所はわからない。SD95~97が同様の土色を呈しており、その位置からしても互いに関連するものであった可能性が高い。古代~中世のものか。

(2) 積穴住居跡（第74図）

SC07の1基を台地上で検出した。側壁は削平を受け残存しないが、円形の周溝および柱穴を確認した。南側はSD66とSK101によって切られ、周溝も途切れる。残存する周溝は幅12~42cm

と一定せず、深さも7~10cmにとどまる。周溝の西北側には径の小さい弧状の溝が外側にとりつく。覆土などからして、同一遺構であるものと考えられる。周溝内には3個の柱穴とその中央に位置する不整形の土壙がある。P1.2は径50cm、床面からの深さ39~45cm。P3はSK101に切られ径20cm、深さ35cmをはかる。柱間はともに4.8mである。中央の土壙は径60cmの不整形圓形を呈し、深さ18cmでなべ底状を呈する。炉の可能性が高い。以上の結果と周溝の規模から判断すれば、4本柱の中央に炉をもつた5.5mほどのやや南北に長い圓形住居跡であったといえる。

周溝からきわめて少量の土器片が出土した。縄文・弥生土器に限定され、最も新しいものとして逆L字状口縁の細片がある。住居跡の形態なども考えあわせれば、弥生時代中期後半前後のものと考えられる。

(3) 土壙

SK84 V区で検出した。SD83と接続する3.42×2.50mの不整橢圓形の上壙で、深さ22cm。覆土は粗砂で、あるいは自然的なよどみである可能性もある。

SK85 I区で検出した1.16×0.65mの橢圓形土壙である。縄文土器から近世陶磁器まで少量ながら出土しており、江戸時代頃のものと考えられる。

SK86 同じくI区で検出した2.04×1.18mの橢圓形土壙である。上面は現代排水溝に切られる。出土遺物はないが、覆土からみてSK85同様、江戸時代以降のものと考えられる。

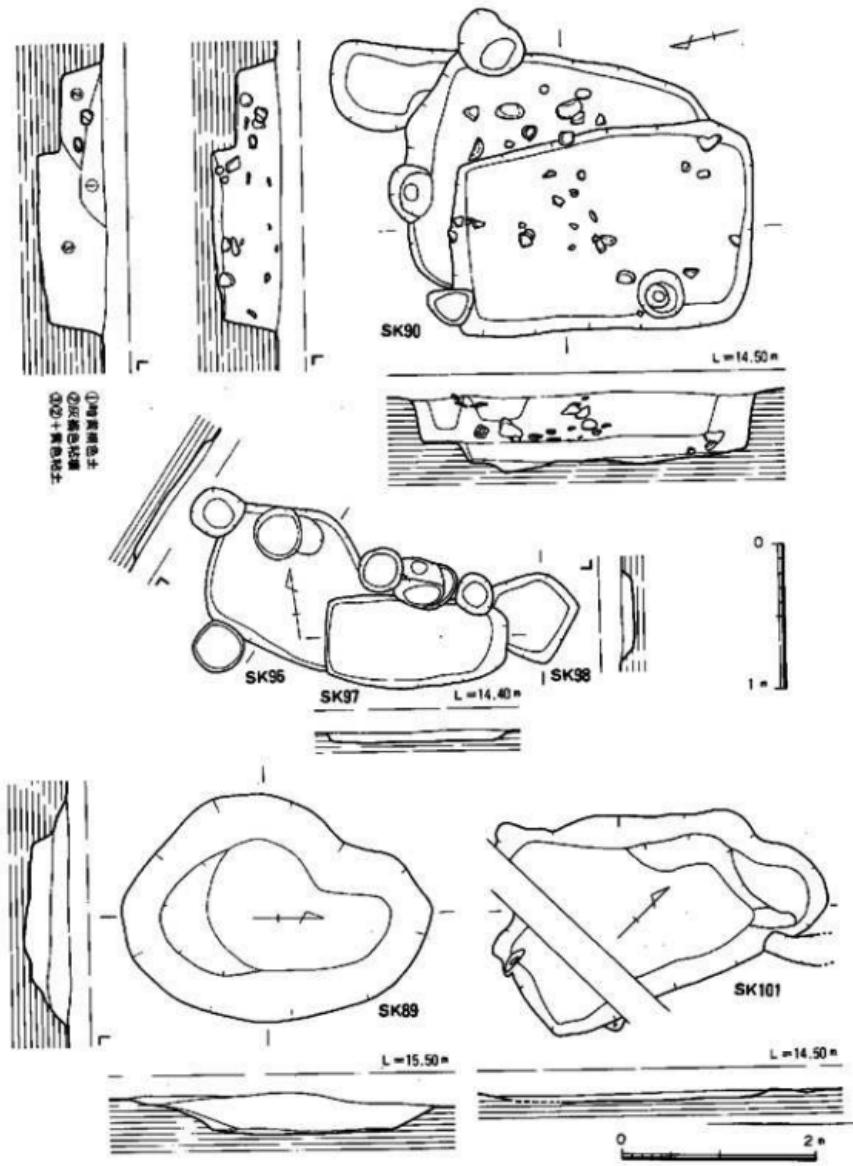
SK87 IV区で検出した。3.70×2.40mの南北に長い橢圓形を呈する。覆土からは縄文土器から近世陶磁まで出土しており、これも江戸時代以降のものである。

SK88 IV区で検出した3.02×1.90mの東西に長い橢圓形を呈する。深さ22cm。出土遺物はない。北側がSD77と接続する。

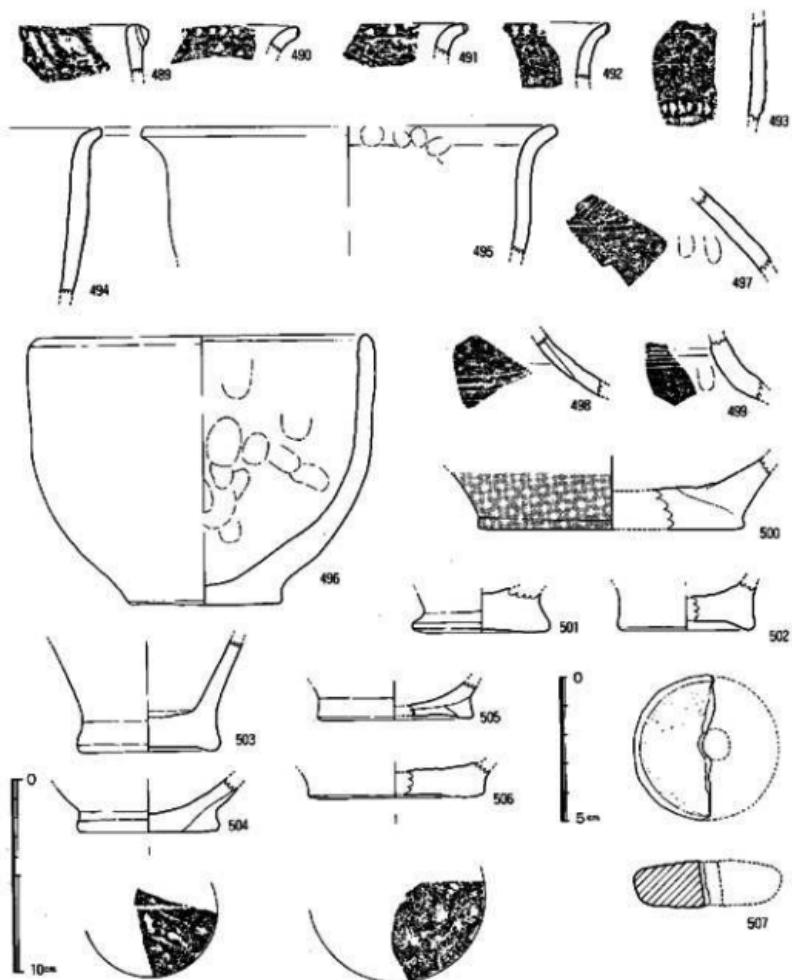
SK89(第75図) III区のSD65上面で検出した3.16×2.32mの南北に長い橢圓形の土壙である。深さ44cm。覆土は粗砂混りの黒褐色土で、縄文・弥生土器、土師器、瓦器、褐釉陶器の細片が出土している。平安~鎌倉時代のものであろう。

SK90(第75図) III区台地上で検出した南北長2.10m、東西幅1.36m、深さ45cmの長方形土壙である。北から東にかけては、幅30~50cm、深さ30cmのテラス状の張り出しがある。上面形態では2基の上壙の切り合いかとも考えられたが、土層堆積はほぼ一定しており、1基の遺構として取り扱かった。

出土遺物(第76図) 縄文晩期と弥生前期の土器が出土した。489は夜臼式の甕である。口縁部と水平に刻目凸帯をめぐらす。残存部ナデ調整。490~495は板付I式の甕である。うち490~492は如意形口縁部の口唇にへらで小さな刻目を入れる。494~495は同様の口縁部を持ちながらも、口唇部に刻目をもたない。493は脇部接合部付近に刻目を入れる甕で、わずかにその部位で段をなす。いずれの甕も残存部はナデ調整。胎土には砂粒を混え、暗褐色を主とした色調をなす。495の復元口径20.2cm。



第75図 土壤実測図(1/40, 1/60)



第76図 SK90土壤出土遺物実測図(1/3.1/2)

497-499は壺の頸部～肩部の小破片である。497は平行凹線間に複線山形文を入れるものであろう。赤色顔料らしき痕跡が残るが、確定はしがたい。498・499は平行凹線をめぐらすものである。498の施文は丁寧である。いずれも砂粒を混えた胎土で、497が赤褐色、残りが黄灰色を呈する。板付I式か。

496は復元口径17.0cm、器高13.7cmの鉢である。腹部中位から口縁部にかけて直立し、端部は丸くおさめる。内外面ともナデ調整で、内面には指頭痕が残る。多量の砂粒を混えた胎土で、外面淡赤褐色、内面灰褐色を呈する。器肉が厚い。

500-506は底部片である。うち500は外面に赤色顔料を塗布した壺、506も壺の可能性がある。残りは甕の底部であろう。504以外はわずかにあげ底を呈する。夜白式と板付I式に属しよう。504の底面には木葉痕が、また506に種子の圧痕が認められる。

507は土製鍾車の半欠品である。復元径5.0cm、孔径0.7cm、厚さ1.6cm。赤褐色。

SK92 SK90の東北側で検出した1.24×0.75mの東西方向の長方形土壙である。深さは5cm前後。繩文土器、弥生土器の細片が8片出土した。SK93に切られる。

SK93 SK92の北東側を切る0.52×0.37mの長方形土壙である。深さ46cm。壠底には扁平な礫が2つある。弥生土器の細片が少量出土した。

SK94 SK90の東側で検出した長方形土壙である。長軸を東西にとり、平面1.37×0.8m、深さ10cm前後をはかる。夜白式甕、弥生の丹塗り壺、甕片が出土している。弥生前期か。

SK95 SK94の南側で検出した0.68×0.52mの精円形土壙である。深さ10cm前後。繩文・弥生土器細片が覆土から出土した。弥生前期か。

SK96 SK95の西南に位置する。東側をSK97に切られ、平面形は明らかでない。東西幅1.0m、深さ5cm。弥生前期壺片の他、繩文・弥生土器の細片が出土した。

SK97 SK96・98を切る長軸を東西方向にもつ長方形土壙である。長さ1.25m、幅0.64m、深さ6cm。SK96とはほぼ同様の遺物が少量出土しており、弥生前期かと考えられる。

SK98 西側をSK97に切られる不整方形の土壙である。南北幅0.55m、深さ10cm前後。丹塗り壺を含む弥生土器細片が数点出土したにとどまる。

SK99 SK98の東側で検出したが、SD95とSK100に西側を切られ全体をうかがうことはできない。深さ5cm前後。弥生土器細片が1点出土しただけである。

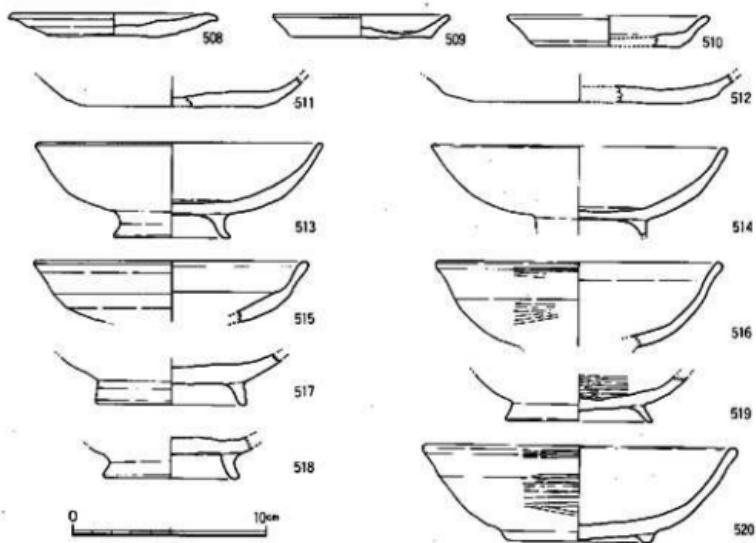
SK100 SK99を東側で切る精円形状の土壙である。東南側をピットに切られ全体はわからぬ。幅0.28m、深さ5cm。夜白式土器、弥生土器の細片が少量出土した。

SK101(第75図) 台地南側で検出した。平面形は東西に傾いた釣鐘状を呈する。長さ3.30m、幅1.85m、深さ10cm。SK95がその東北側に接続する。またSC07を切る。繩文・弥生土器、土師器、須恵質土器の細片が比較的多く、他に石庖丁片も出土した。

SK102(第75図) SC07の北側周溝内側に位置する0.8×0.3mの精円形土壙である。出土遺物はない。位置関係からすれば、SC07に伴う施設の可能性もある。

(4) 溝(付図5)

SD65-85・94-99の27条を検出した。I・III・IV区の溝は自然流路が多く、遺物を包含しないSD72・74・76・78・79・80・82・84・85・98・99の溝については個別の記述は行わない。こ



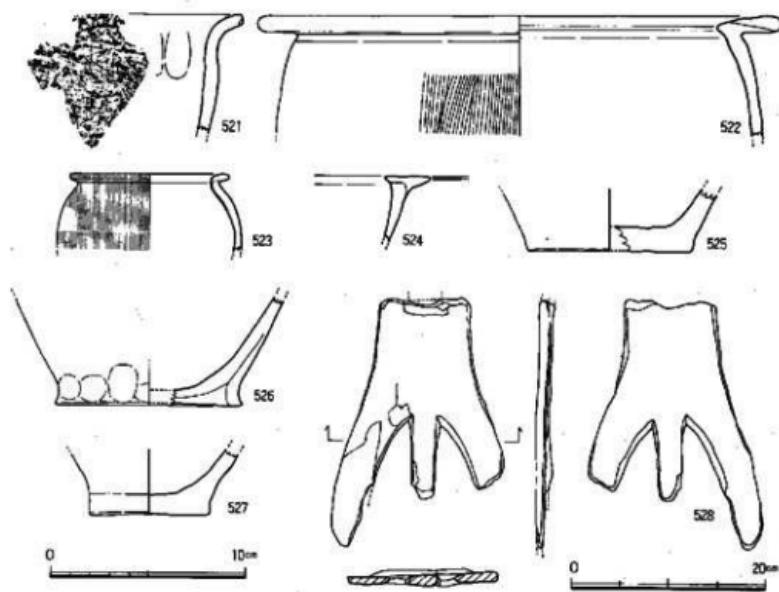
第77図 SD65出土土器実測図(1/3)

これらの溝の多くは鉄分の多い砂質土あるいは粗砂をその覆土としている。また、台地西側にみられた古河道も複数の溝の切り合いによるが、後段にまとめた。この中にはSD94も含まれる。

SD65 I・II区の北側を凹形状にめぐる溝である。古河道が埋没した後の溝で、幅4~6m、深さ60~70cm。土層の項で述べたように台地際での覆土は、濃灰色細砂・濃灰色粗砂・灰白色粗砂の上・中・下3層に分別できる。しかし南および西側では、この溝を切る新しい上砂の堆積があり、土層のみならず、溝の肩も不明瞭となる。このままの形態が北側にのびるとすると、外径27mほどの円形周溝になるが確定はできない。

出土遺物 (第77図) 508~518は土師器である。このうち508~510はヘラ切りの底部をもつ小皿で、器面調整は横ナデである。508は口縁部が横に引き出された底の浅いもので、口径10.8cm、器高1.1cm。509~510は口径9.0~10.4cm、器高1.2~1.6cmをはかる。508と510の底部には板状圧痕が、また内外面とも煤が認められる。511~512は糸切り底をもつ大皿である。511の外面はヘラナデ、他はともに横ナデ調整を施す。

513~518は土師器高台付碗である。513・514は体部から口縁部がほぼ直線的にのびるもので、復元口径14.9~15.2cm。513の器高は4.9cm。高台は高く、外に張る。ともに器面調整は横ナデで、内底に指頭による押圧痕が認められる。淡褐色。この2個体は器形、器面調整、法量および色調の点から類似する。515・516は体部との境にわずかに段をなして口縁部が外反する



第78図 SD66出土遺物実測図(1/3.1/6)

ものである。復元口径13.7~14.2cm。515は横ナデ調整で、特に口唇部直下にナデは強い。516は外面ヘラ研磨、体部下半および内面は横ナデ調整を施す。口唇部直下は帯状に灰黒色を呈する。517・518は底部片で、高台は517が直線的にわずかに開くのに対し、518では内湾気味に外へ張り出す。ともに横ナデあるいはナデ調整である。

519・520は黒色土器碗である。519は黒色土器A類、いわゆる内黒土器である。高台は大きく外へ「ハ」の字状に開く。外面はヘラナデ、内面にはヘラ磨きが施され、また内には強い指押さえによる凹痕が見られる。底部には糸切りの痕跡がある。520は黒色土器B類のものである。高台は低く、やや内傾する。外面はヘラ研磨、口縁部には回転横ナデによる凹痕がある。内面は磨滅が著しい。復元口径15.5cm。

以上の土器のうち508・513~515・520は下層、残りは中層から出土した。この他下層では褐釉陶器、中層では黒色土器・瓦器・白磁・青磁（龍泉・同安窯系）などの破片が出土している。また上層は量的には少ないものの中層と同じ類の遺物片が出土している。

SD66 III区東南端から、東側に8mほど張り出し、さらに北流する溝である。溝幅2~4m、深さ約70cm。覆上については土層の項すでに述べたが、5層に分かれる。方向からすれば第4地点のSD63の続である可能性が高い。

出土遺物（第78図） 図示したのはいずれも最下層である灰黒色砂質土から出土したものである。この層には縄文・弥生時代の遺物を包含しており、ここでは弥生土器および木器についてのみ観察する。

521は板付II式の甕である。如意形口縁部下端に刻目を入れる。残存部はナデ調整。522は復元口径27.0cmの逆L字状口縁をもつ甕である。外面は刷毛目をナデ消す。他はナデ調整。この2個体の甕は、胎土に砂粒を多く混え、褐～暗褐色を呈する。また521には外面に煤が付着する。523は無頸甕であるが、ふつう見られるものに比べ復元口径8.2cmと小型である。外面および内面の一部には赤色顔料を厚く丁寧に塗布する。胎土は精良なものだが、胴部が灰褐色を呈するのに対し、口縁部は赤褐色を呈しており、異ったものを使用したのではないかと考えられる。524は鈎状口縁をもつ高杯片であろう。ナデ調整。525-527はいずれも甕の底部片である。526はわずかにあげ底となる。この他5層からは後期の複合口縁甕の細片が出土しており、この溝の下限を示している。

528は三叉鋸である。方形柄孔をもち、V字状切り込みにより刃部を作り出す。残存長25.2cm、刃幅2.5cm。柵目取りで、樹種はカシ。

SD67 SD66の上層で検出した東南—西北方向に7m続く溝である。幅1.5m、深さ20cm。覆土は黒褐色粗砂。縄文・弥生土器の他、土師器皿などの細片が少量出土した。

SD68 III区で検出した東北方向に走る溝である。幅0.8~1.0m、深さ10cm以下。覆土は鉄分を混えた褐色砂質土と、その上の灰褐色粗砂からなる。縄文・弥生土器の細片が数点出土したにすぎない。自然流路と考えられる。

SD69 IV区で検出した西北方向にやや蛇行気味に続く溝である。幅0.7~1.5m、深さ5cm前後。SD76の自然流路を切る。縄文土器と土師器の細片が出土している。自然流路か。

SD70 I区で検出した幅1.2m、深さ10cmほどの溝である。東南部でSD71・73と重複するが、明確な関係はつかめなかった。

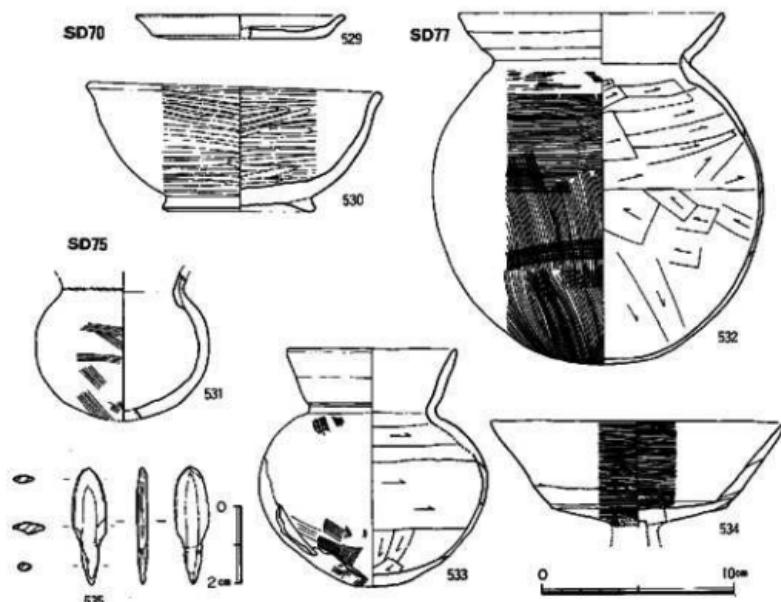
出土遺物（第79図529・530） 529は土師器皿で、復元口径10.8cm、器高1.2cm。底部はヘラ切り。内底と口縁内外面が煤ける。530は内黒土器碗で、口径14.3cm、器高6.6cmをはかる。内外面ともヘラ研磨を行う。高台は小さく外側に張り出す。外面は褐色。この他、縄文・弥生土器、施釉陶器の細片が出土している。

SD71 SD70の南側から西南に走る溝で、幅0.7m、深さ10cm。西南端はSD81に接続する。夜白式甕の他、縄文土器、弥生土器が数片出土した。

SD73 SD70-71が重なる所から、やや曲りながら東に走る幅0.8m、深さ25cmの溝である。東端は広がる。土師器皿。杯などの破片が10点ほど出土した。

SD75 IV区の中央部に端を発し、北に走る溝である。北に行くにしたがい溝幅が広がり、北端で約2mをはかる。深さは25cm。

出土遺物（第79図531） 土師器の小形丸底甕である。球形の胴部から口縁部が外反するが、



第79図 SD70-75-77出土遺物実測図(1/3.2/3)

その端部は欠損する。外面は刷毛目の後ナデ、内面は横ナデ調整。胎土には砂粒を多く混え、灰黒色を主としてなす。この溝からは縄文・弥生土器に混って土師器細片が多く出土している。

SD77 IV区東南端のSK88に端を発し、蛇行しながら西北に向う溝である。幅0.6~1.5m、深さ25cm。覆土は褐色粗砂。

出土遺物 (第79図532~535) 土師器3点と銅鏡1本と縄文土器細片1が出土した。532は布留式系の甕で、口径13.8cm、器高17.9cmをはかる。球形の胴部から口縁部がやや外湾気味に開き、端部を丸くおさめる。胴部外面は細い刷毛目、内面はヘラ削り。口縁部は横ナデ調整。砂粒を混えた胎土で、茶褐色を呈する。外面には煤が付着する。533は小形丸底甕で、口径8.6cm、器高12.2cmをはかる。扁球形の胴部から口縁部が外傾する。胴部外面は細い刷毛目調整の後ナデ、内面はヘラ削り。口縁部は内外面とも横ナデ。胴下半部に穿孔を行う。砂粒を多く混えた胎土で、淡赤褐色。534は高杯形部片で、復元口径15.3cmをはかる。内外面とも丁寧なヘラ研磨を行う。少量の砂粒を混えた胎土で、茶褐色。535は銅鏡である。全長3.0cm、最大幅0.9cm、最大厚0.3cmの有茎柳葉形のものである。腐蝕のため稜線は不鮮明である。重量1.5g。

SD81 I区の西端を南北に走る溝である。西側は調査区外にかかり、幅不明。深さ50cm。

覆土は砂質土。縄文土器細片、土師器皿、天目碗などが数片出土した。

SD83 IV区で検出した蛇行する溝で、幅、深さとも一定でない。東南はSK84に接続し、SD69に切られる。土師器杯、甕の細片が数点出土したにすぎない。自然流路か。

SD85 III区台地上を北北東に7m走る溝である。両端は立上がり、幅0.3~0.5m、深さ5~33cmをはかる。覆土は粗砂。出土遺物はない。後述するSK96・97とともに、台地上で検出した柵と関係する溝と考えられる。

SD86 SD95の東側を、やや東に張りながら北へ進む溝で、発掘区外へと延びる。覆土は粗砂。出土遺物はない。

SD97 SD96の東側を東北方向に9m続く幅0.3~0.4m、深さ5cmの直線的な溝である。西南端はSK101につながる。覆土は粗砂。出土遺物はない。

(5) 古河道 (付図5・6)

II区を中心に複数の溝からなる古河道を検出した。一面が砂礫に覆われ、上層状態を把握することが困難であった。また湧水の関係もあり、各々の溝ごとに掘ってゆけば、結局は河道底まで掘り下げるところとなつた。

しかし調査区南側部分では4つの流路を確認した。調査時に使用した名称をそのまま用いて説明を加える。河IはII区東南側から西北方向へ流れるもので、わずかに残る台地部分から判断すれば幅10m前後をはかる。これに直交して杭列IとII、または東岸に沿うようにして杭列IIIが設けられる。河IIはその東側を平行して流れるもので、幅1~2m。この河IIの下にはSD66がある。河IVはII区の西南側で検出したもので、東南から西北へ向う。調査の都合上、西への拡張はできず、幅などはわからない。河Iと河IVの間には、やはり西北に方向をとる幅1.2mほどのSD94がある。これらが結果的には合わさって、III区北側へと続いている。その先後関係については明らかにしない。ただ河Iについては第4地点で検出したSD63がつながるのではないかと考えられる。また河IVについては4d地点の西北部分の複数の古河道が接続する可能性が強い。

河底及び台地の西南側には、杭列、水溜り状造構がみられる。杭列はI~IVに分けられる。杭列Iは河Iを横断する6本の杭からなり、その方向は西南→東北をとる。前述したように河Iに付設されたものと考えられるが、この杭列の延長上にはSD66の左岸があり、この護岸的な杭列の可能性もまたある。

杭列IIは河Iの西岸南端から北北東に向って約10m続くもので、河Iを横断する部分は途切れ。流出したのであろうか。この北側部分は台地を沿うようにして築かれ、その先にはSXII・IIIの水溜り状造構がある。杭は大部分が東側から打ち込まれ、横木はその上に西側に面して置かれる。ただ杭はほとんど横になった状態で検出した。この杭列と台地の間には、多数の流木、葉状の植物繊維の堆積がみられる。杭列IIは、河Iの水を堰止め、SXII・IIIに流水する役割を

もっていたものであろうか。

杭列Ⅲは河Ⅰの東側に沿って打ち込まれた数本の杭からなる。杭は西側から打ち込まれている。護岸用の杭列であろう。

杭列Ⅳは杭列Ⅱの西8mの所に位置する。南北方向に約4m続く。杭は杭列Ⅱと同様にほとんど東側から打ち込まれており、また検出時には横に重なりあった状態であった。この杭列の築かれた場所は、河道底が溝状に低くなった所で、それに直交して設けられている。しかし、どの流路に対しての構築されたものか、またその性格については判然としない。

これらの杭列に用いられた杭材は、丸杭231、丸木半截杭17、角杭19、板杭10と圧倒的に丸杭が多い。第3地点、第4地点の古河川中の杭列では、丸杭と角杭がほぼ同じ割合であったことと比べると、大きな差異がある。丸杭は径3~6cmのものが7割以上を占める。

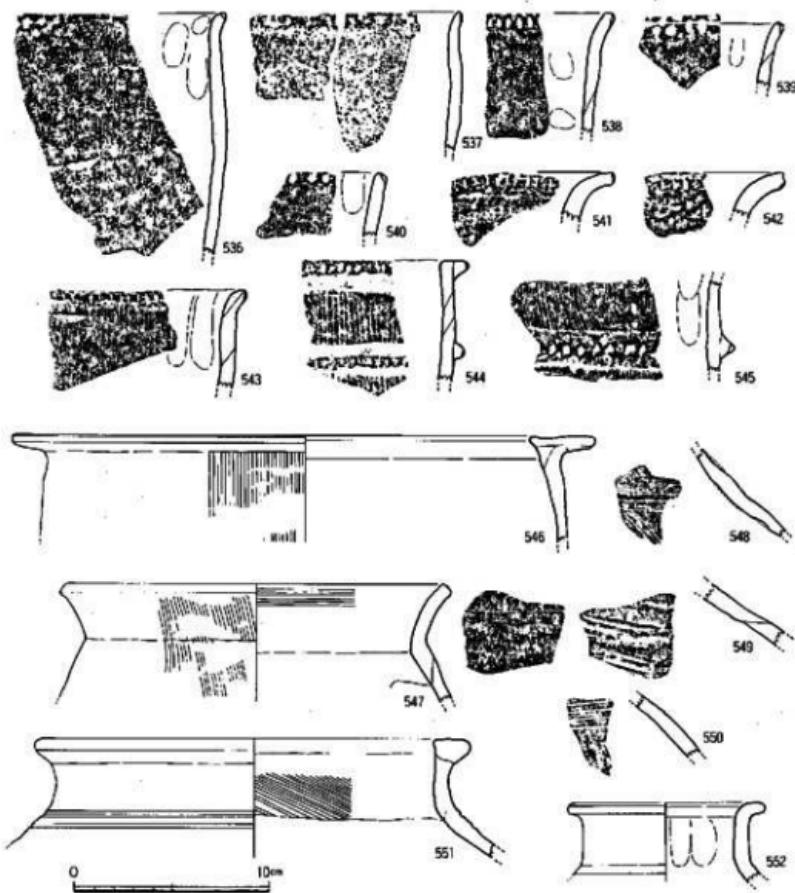
出土遺物(第80~82図) 古河道からは縄文中期の阿高式系の土器から古墳時代の須恵器、木器、石器などが出土した。ここで弥生時代以降の土器と木器について観察を行う。

弥生土器(536~562) 536~545は前期の甕である。536~539・543はほぼ直線的な胴部から口縁部が小さく外反するもので、その口唇に刻目を施す。539は端部と上面2ヶ所に刻目を入れる。540は直線的な口縁端部に刻目を入れたものである。541~542はいわゆる如意形口縁を呈するもので、541は端部いっぱいに、また542は下端に刻目を施す。以上の甕は内外面ともナデ調整。胎土には砂粒を多く混え、褐~暗褐色を呈する。541と543の外面には煤が付着する。544~545は龜ノ甲式の甕である。口縁部と胴部に凸帯をめぐらせ、小さな刻目を入れる。外面輻射毛目、内面ナデ調整。胎土・色調は先にあげた甕と変る所がない。545の外面には煤が付着。

546は逆L字口縁をもつ甕である。口縁部上面はやや凹む。外面刷毛目のみの後ナデ調整、内面ナデ。砂粒を多く混えた胎土で、淡褐色。復元口径30.0cm。中期中葉。547はくの字状口縁をもつ甕で、復元口径19.8cmをはかる。外面刷毛目、内面口縁部は刷毛目、その他はナデ調整。砂粒を多く混えた胎土で、暗褐色。後期。

548~552は壺である。548~550は肩部小片であるが、548は凹線間に複線山形文、549~550は凹線をめぐらす。外面はいずれもヘラ研磨で、548~550には赤色顔料を塗布する。549の内面はヘラ状工具による強いナデ調整である。胎土には比較的多くの砂粒を混える。551は口縁部が肥厚するもので、しまりのない肩部に二条の凹線をめぐらす。復元口径22.4cm。口縁部内面が刷毛目、残りは横ナデ調整。砂粒を多く混えた胎土で、褐色を呈する。以上の壺は前期に属する。552は中期初頭の小形壺である。頸部が直立し。口縁部が強く外反する。調整はナデ。胎土には砂粒を混え、褐色をなす。復元口径10.0cm。

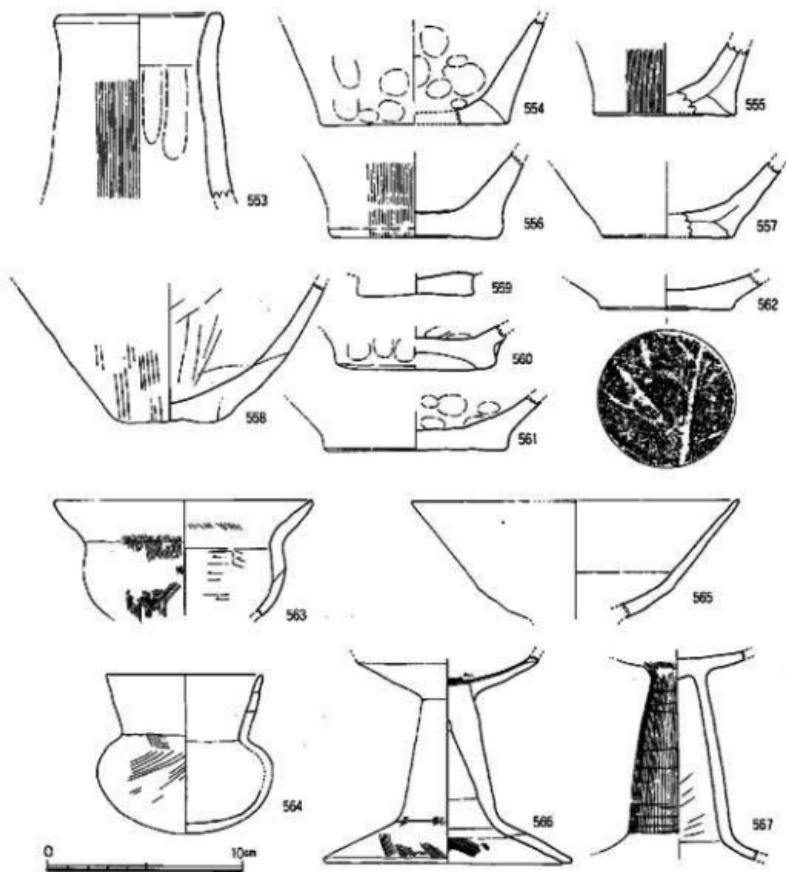
553は器台で、受部がわずかに外反する。外面刷毛目、内面ナデ調整。砂粒混りの胎土で、淡赤褐色。554~562は底部片である。554~558は甕の底部で、後期の558が丸底気味であるのを除けば、すべて平底である。554~556は前期、557は中期のものか。559~562は壺の底部である。すべて前期のものであろう。562の底面には木葉痕が残る。



第80図 古河道出土遺物実測図 I (1/3)

土師器 (563-567) 563は鉢で、胴部から口縁部が大きく開く。復元口径13.2cm。胴部内面はヘラ削り、他は刷毛目の後ナデ調整。少量の砂粒を含んだ胎土で、暗褐色。564は小形丸底壺の完形品である。口径、器高とともに8.1cmをはかる。胴部外面が刷毛目の後ナデ、他はナデ調整である。口縁部には接合痕が認められる。胎土には少量の砂粒を混え、淡赤褐色をなす。

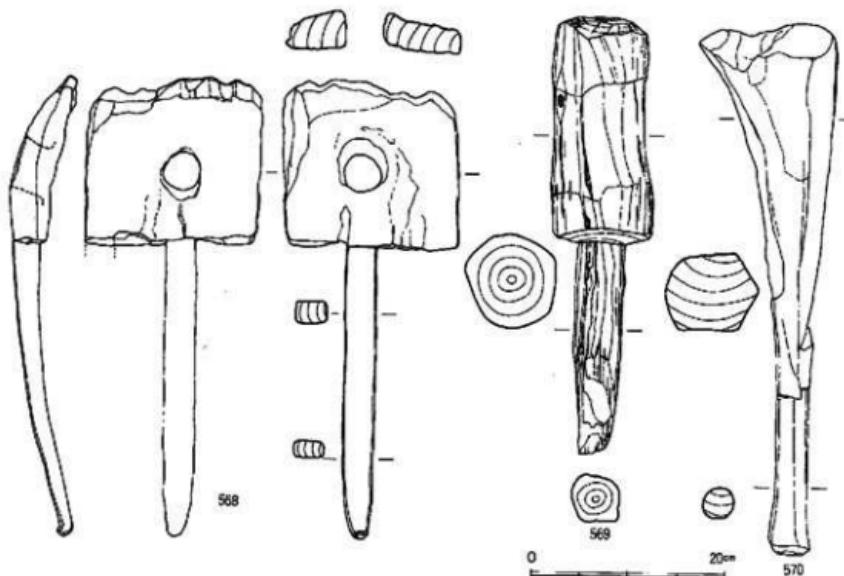
565-567は高杯である。565は復元口径16.8cmの杯部片である。器面は磨滅する。566と567は脚部片であるが、筒部の作りに相違がみられる。調整も異なり、566が杯部ヘラ研磨、筒部ナデ、



第81図 古河道出土遺物実測図 II (1/3)

裾部刷毛目の後ナデで仕上げるのに対し、567は裾部以外の外面は刷毛目で仕上げている。3点とも胎土は精良で、565が茶褐色、566・567は赤褐色を呈する。

木器 (568-570) 568は長方形の胴部にコの字状切り込みを入れることによって刃部を作り出す三叉鋏である。縦断面観に作り反りをもち、また胴部・刃部とも厚手の作りとなっている。また円形柄孔を施す中央部に向って若干隆起している。胴に比して長めの刃部である。残存長47.4cm、刃幅3.2cm、柄孔径3.8~4.8cmの柾目取りで、樹種はカシ。569は横椎である。中



第82図 古河道出土遺物実測図III (1/6)

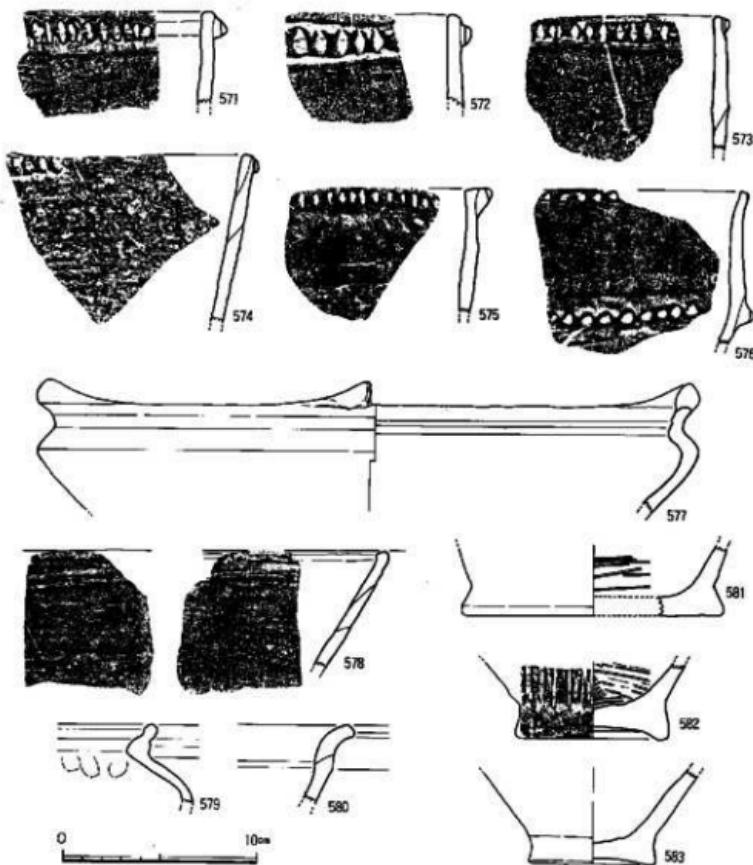
央部は使用のため磨滅している。また柄部の先は破損しており、全体に軟化が著しい。残存長44.9cm、楕部長23.4cm、楕部最大径10.6cm、柄部径4.7cm。570は断面円形の柄部と断面不整六角形の身部を作り出したものである。横柵としての機能が推定される。残存長54.8cm、柄部径3.2cm、先端部最大幅14.2cm。

(6) その他の遺物

ここでは表上層から出土した遺物、遺構の時期以前の遺物について一括して述べる。ただし石器に関しては、第6地点で出土したものすべてを扱う。

1) 土器 (83-85図)

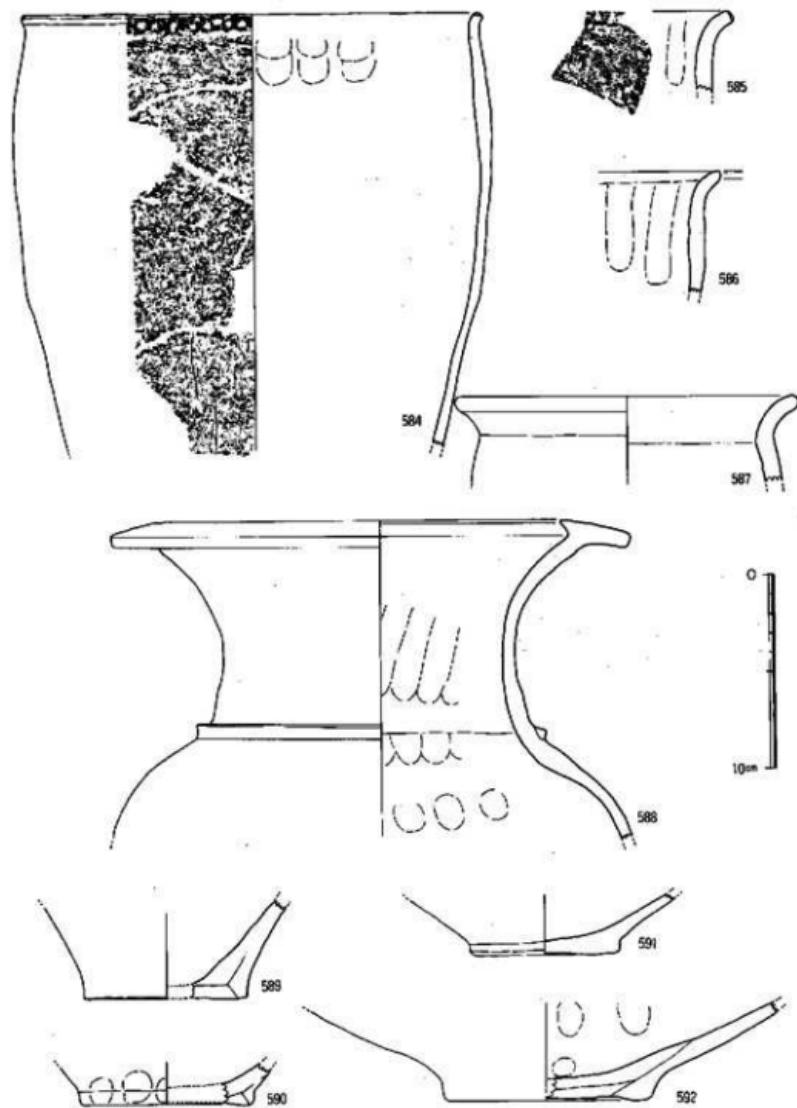
縄文土器 (571-583) すべて晩期の土器である。571-576は夜白式の甌の口縁部片である。571・572は口縁部直下に刻目凸帯をもつものである。571の外面には煤の付着が見られる。器面は磨滅が著しい。573-574は口縁部にはば接して刻目凸帯が貼り付けられている。572の外面はナデ、内面調整は口縁部で横ナデ、その下位部ではナデを施す。574は外に開き、直口する口縁を持つものである。外面は条痕、内面は横ナデ、板ナデが見られる。内面には灰黒色を呈する箇所ある。575は口縁部に接して刻目凸帯がある。外面は粗い条痕、内面は横ナデ調整が施



第83図 第5地点出土土器実測図 I (1/3)

され、外面には灰黒色を呈する箇所ある。576は口唇部に小さな刻目を直接施し、凸帯を持たない。しかし胴部上位には刻目を持つ凸帯があり、ここから内傾し胴下半部へと続く。外面はナデが施されている。凸帯の直上の外面には強い横ナデの痕跡が認められる。

577-580は深鉢である578を除いて、全て精製土器であり、浅鉢の口縁部片である。578は大きく外へ開き直口させ、端部の内側をつまみ上げる口縁部をもつ。器壁の内外面には条痕を施し、口唇部は横ナデ調整をする。胎土には金雲母を少量含み、砂粒は比較的多く混る。外面は灰褐色、内面は黒色を呈する。577はいわゆる黒川式土器で、口唇部にリボン状の粘土隆帯を貼



第84図 第5地点出土土器実測図II(1/3)

り付け飾るものである。胎土は砂粒を比較的多く混え、灰黒色を呈する。復元口径は33.0cmをはかる。579は口縁部から肩部へと「く」の字状に屈曲する。口唇部直下の外面にはヘラ状工具による1本の凹線があり、内面にも指による凹線がある。外面調整は横ナデ、内面の肩部には条痕が見られる。580は内湾する口縁部とゆるやかな張りのない直線的な胴部を持つ。外面は磨滅が著しいが、内面には横ナデが施されている。

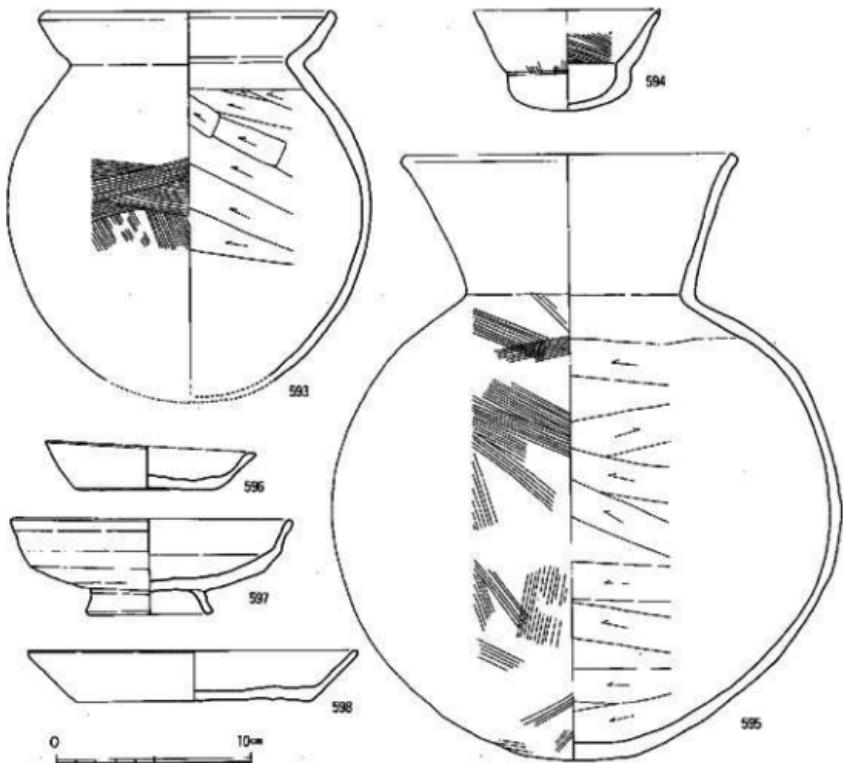
581-583は底部である。581は平底状をなすもので、外面はナデ、内面には条痕が施される。582・583は底が上げ底状をなすものである。582の外面は条痕である。583は内外面ともナデ調整が見られる。深鉢あるいは甕の底部である。

弥生土器(584-592) 584-587は変形土器の口縁部片である。584は胴部上位で外側へ膨みをなし、小さく外反する口縁部をもつものである。口唇部には刻目を施す。外面はナデ、口唇部直下では指頭圧痕が見られる。内面の口縁部はナデ。口縁部直下には指頭圧痕が見られ、胴部には板状の斜方向のナデ調整が施されている。胎土は砂粒が比較的多く混り、淡褐色を呈する。外面口唇部下には煤が付着する。復元口径は23.1cmをはかる。この刻目の施用部位及び器形は福岡市有田遺跡群を中心に出土するものに類似している。585はいわゆる板付I式の甕の口縁部で、口唇部には刻目を施す。外面は口唇部直下に斜刷毛目が見られる以外はナデ調整である。内面は横ナデを施す。586は外反する口縁を持ち、肩部はわずかに張り気味に胴部へ下る。口唇部の刻目は器面の磨滅が著しいため不明である。胎土には砂粒が多量に混り、褐色を呈する。587は口縁～肩部にかけて小さく「く」の字状に屈曲する。外面は横ナデ、胴部では継刷毛目後ナデ消し調整を施す。内面は横ナデである。胎土には砂粒が比較的少なく混り、茶褐色を呈する。復元口径は17.4cmをはかる。

588は甕の口縁～胴部片で、平坦な「鶴先」口縁を持ち、肩部には三角凸帯を張りめぐらせる。外面は丁寧な横ナデ調整を施し、内面には横ナデ、頸部には指押え後ナデ、胴部には指頭圧痕がある。胎土には砂粒を比較的多く混え、淡褐色を呈する。内壁中央付近には黒色を帯びる箇所がある。復元口径は25.7cmをはかる。

589は甕の底部片である。底は平で、明瞭な角を持つ。外面はナデ調整、内面は磨滅が著しい。590-592は甕の底部片である。底はわずかに上げ底状をなす。底部端はやや丸味を帯びるが、ほぼ明瞭な角をなす。590の外面には指頭圧痕が認められる。底部はナデを施す。591の外面はナデ、内面はナデ調整が施されているが、器面の磨滅著しい。592は外面をナデ、内面には指押え後ナデ調整が見られる。

土師器(593-598) 593は変形土器の口縁～胴部片である。胴部中位付近に最大径をとり、ほぼ球形に近い器形をなす。口縁部は外湾気味に外へ開き、口縁端部は小さくつまみ上げ、丸くおさめる。外面は横ナデ、刷毛目後ナデ消し、胴部中位では不定方向の刷毛目調整。内面は横ナデ、胴部上位ではヘラ削り、下位ではヘラ削り後ナデ消しが施されている。胎土には砂粒が多く混り、褐色を呈する。口縁～胴部中位にかけて黒斑が見られる。復元口径は14.0cmを



第86図 第5地点出土土器実測図(1/3)

かる。594は小形丸底壺である。口縁は大きく外反する。底はゆるやかな丸底をなし、安定感がある。外面が横ナデとナデ、頸部近くには刷毛目後ナデ消しがされ、内面には横ナデ、斜刷毛目が口縁部に施され、胴部はヘラ削り調整である。胎土は砂粒が比較的の少量混り、外面は暗褐色、内面は淡赤褐色を呈する。口縁部には煤の付着と思われる箇所ある。595は壺形土器である。底はやや丸底状をなすが、底部端はわずかに胴部と境をつくる。胴部中位で最大径となる球形状の器形をなし、口縁部は外反する。端部ではわずかにつまみ上げがなされる。外面調整は横ナデ、不定方向の刷毛目、内面は横ナデ、ヘラ削りである。外壁の胴部と底部付近には黒斑が見られる。胎土は砂粒が多く混り、淡褐色を呈する。復元口径は16.5cm、器高は31.2cmをはかる。

596と598は皿の破片である。596はヘラ切り底部を持つ小皿で、外面は横ナデ、底部には板状圧痕が見られる。内面は横ナデ調整を施す。口径は10.75cm、器高は2.0cmをはかる。598はヘラ切り底部をもつ大皿である。外底を除く全表面に横ナデを施す。底部には板状圧痕が見られる。復元口径は14.9cm、器高は2.6cmをはかる。597は高台付の椀の破片である。「ハ」の字状に開く高台をもち、胴部は大き外に開き、中位付近で、外湾気味に立ち上がる。口唇部下では強い横ナデによる凹が見られ、端部は丸くおさめる。内外面の調整は横ナデが施され、内底には指頭圧痕による凹凸がある。復元口径は14.2cm、器高は4.85cmをはかる。

2) 石器 (第86-89図)

第5地点より出土した石器は、石鎚25点(未製品も含む)、使用痕及び加工痕のある剥片30点、スクレイバー2点、石匙1点、打製石斧3点、磨製石斧18点(太形蛤刀石斧1点、柱状片刃石斧5点、扁平片刃石斧2点を含む)、石庖丁7点、石鎌2点、磨石2点、砥石7点の計97点である。

石鎚 (599-619・621・622) 本区出土の石鎚はそのほとんどが平基のえぐりのない3角形鎚である。その中で601と605はえぐりが浅く入り、616は深く長い脚をもっている。613-614・618は整形加工が素材剥片の周囲のみで、背面および主要剥離面を大きく残している。615は再加工品とも考えられるが特異な形態をしており、石鎚でない可能性がある。617は他に比べて、その厚さが大きい。619、621、622は石鎚の加工途中のものと考えられる。石材は612、614、621がサスカイト、他はすべて黒曜石である。

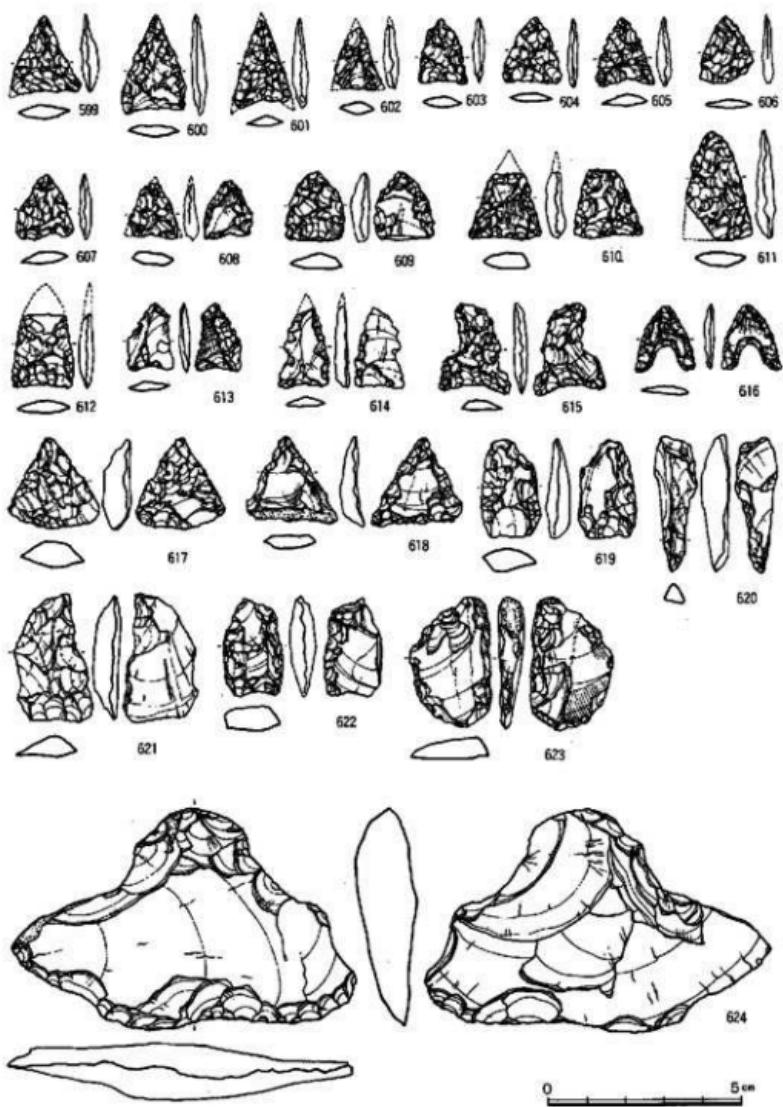
ドリル(620) サスカイト製の剥片の一部を利用したもので、側面に分割面を残している。断面3角形を呈する。

スクレイバー(624) サスカイト製の厚味のある横長剝用を素材としたもので、主に腹面側から背面にかけての剥離によって刃部を形成している。素材剥片の打面部付近にも両面からの調整加工が施してある。

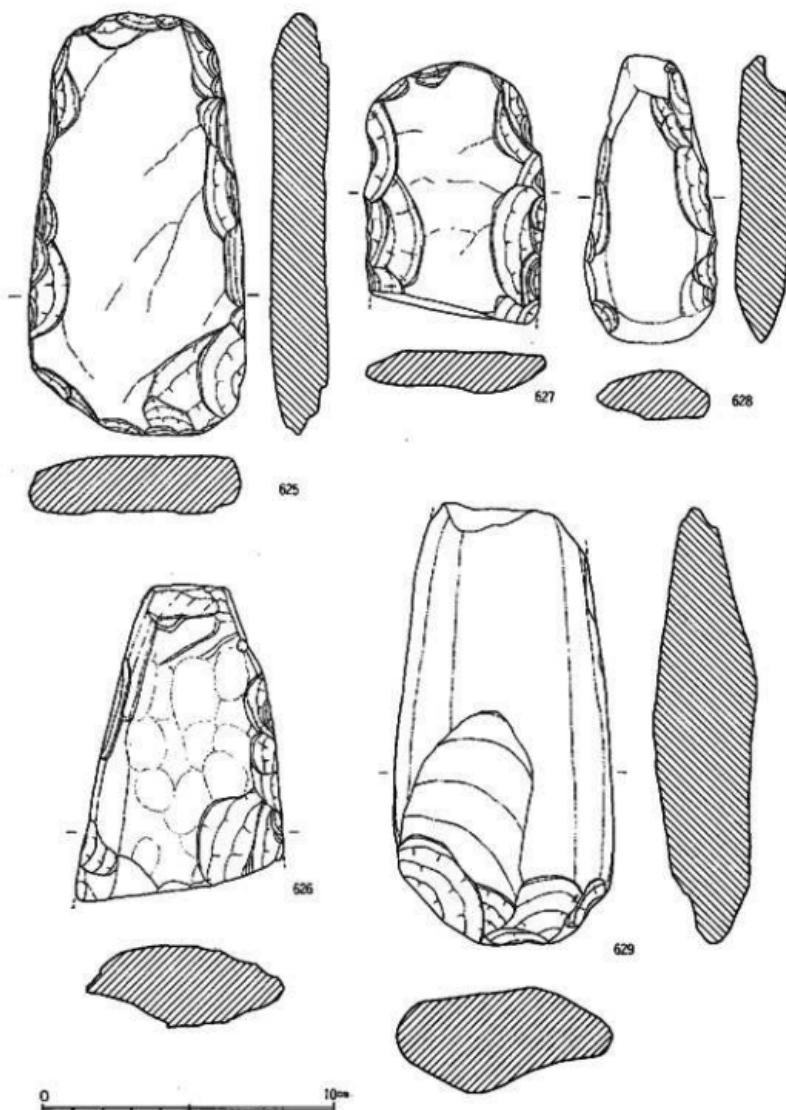
加工痕のある剥片(623) 多数出土しているが一点のみ図示している。そのほとんどが黒曜石製剥片を利用している。本品は、右側辺にプランティング状の急斜な剥離を、その裏面と左側辺には連続する平坦剥離を施したものである。黒曜石製。

打製石斧(625-627) 625は砂岩製の短骨形を呈する扁平打製石斧である。側辺には西面から剥離を施している。全長14.35mm、刃幅7.1mm。重量367g。626も扁平なもので、丸みをもった基部部分が残存する。安山岩製。627は撥形を呈する石斧の基部片。砂岩製。

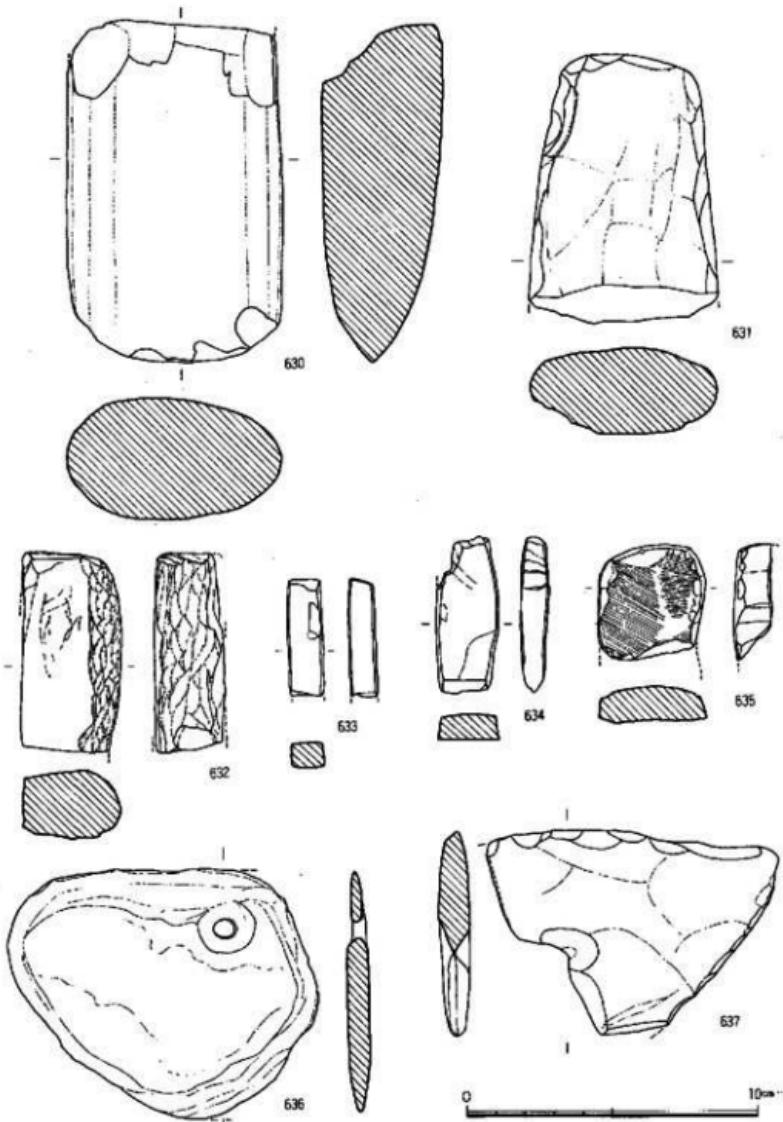
磨製石斧(628-635) 628は刃部が幅広の小形の磨製石斧で、外縁部には剥離が残る。断面凸レンズ状で、両刃をなす。全長9.9cm、刃幅4.2cm。重量114g。安山岩製。629は基部を欠き、刃部も破損している。玄武岩製。630は太形蛤刀石斧である。基部を欠損し、刃部にも刃こぼれがある。玄武岩製。631は基部が残存したもので、表面には敲打痕が残る。玄武岩製。632-633は方柱状片刃石斧片で、632が粘板岩、小型の633は頁岩製。635は抉入石斧であろうか。基部は



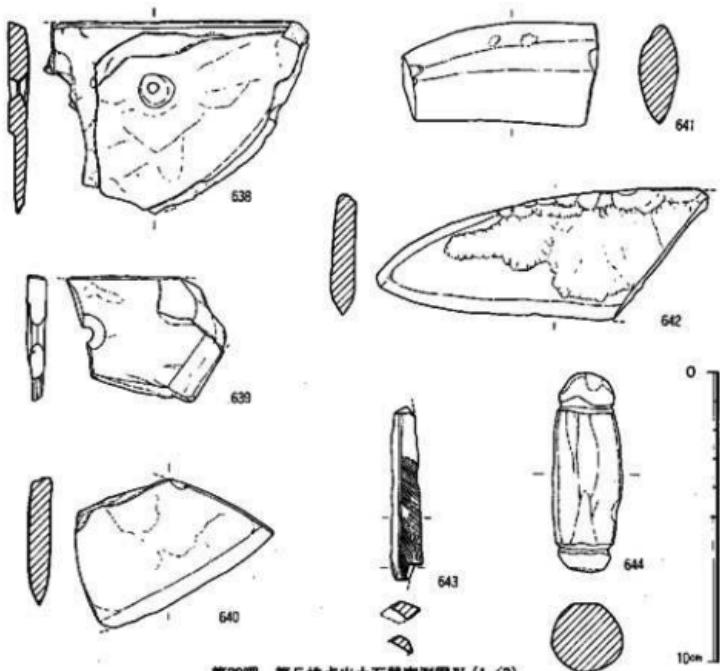
第86圖 第5地點出土石器實測圖 I (2/3)



第87圖 第5地點出土石器實測圖II (1/2)



第88图 第5地点出土石器实测图三 (1/2)



第88図 第5地点出土石器実測図IV (1/2)

丸みをもつ。粘板岩製。634は扁平片刀石斧である。頁岩製である。

石庖丁 (636-640) いずれも破損しているが、形態的には636-639が三角形を呈する大形のものである。637と638には表面に敲打痕が残る。637は未製品か。いずれも両刃。640は葉形を呈するものである。石材は636・639・640が頁岩、637が安山岩、638が砂岩である。

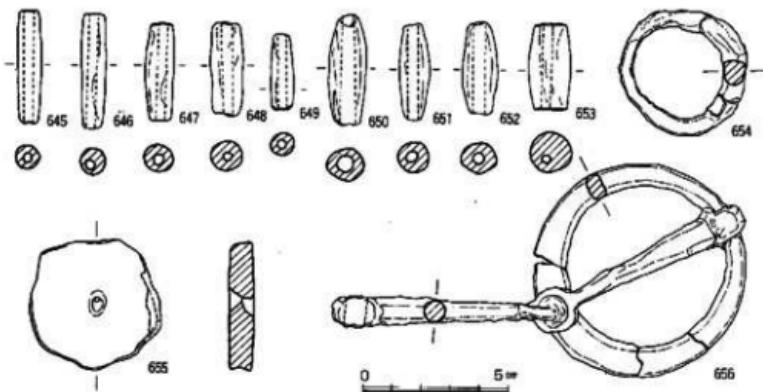
石鎌 (641-642) 641はやや厚みをもつもので、砂岩製。642はシャープな刀部をもつが、表面には敲打痕が残る。砂岩製。

磨製石鎌 (643) 柳葉形をなす磨製石鎌の破片である。断面菱形を呈し、器面はきれいに研ぎ出す。粘板岩製。

石錐 (644) 丸みをもった細長い石材の両端部近くに各々の溝をめぐらせたものである。長さ6.8cm、径2.4cm、重量64g。

3) 土製品 (第90図)

土錐 (645-653) いずれも管状土錐である。平面長方形をなすものと、やや中膨みするものとがある。653は須恵質のもので、長さ3.1cm、径1.45cm、重量5.7g。他のものは重量1.4~4.7gをはかる。



第90図 第5地点出土土製品・鉄製品実測図(1/2)

紡錘車（655） 弥生土器の甕洞部片を加工し、中央に穿孔を施したものである。径4.4cm、厚さ1.0cm。

4) 鉄製品（第90図）

図示したものはともに表土層から出土しており、残存状態が良いことから近世以降のものであろう。654は径4.5cmのリング状の製品、656は轔の一部分である。

VI まとめ

III～Vでみてきたように、田村団地建設に伴う田村遺跡群の第3次調査では、縄文時代から江戸時代にいたる遺構・遺物を検出した。ここでは、各時代ごとに検出遺構・遺物について簡単なまとめを行ってみたい。

縄文時代の遺構としては、溝状を呈するS X31がある。覆土からは後期三万田式系の土器と石器をはじめとする多数の石器・石片を検出した。また同じ第3地点のS X35は縄文時代の包含層と考えられる。この種の包含層はこれまで第2地点で検出しているが、その残存状態は削平により悪い。しかし1983年に調査した第8地点では、きわめて良好な包含層とビット群を検出しており、三万田式系深鉢の完形品が出土している。さらに第3地点に南接する第11地点では、多数の後期のビット群が検出されており、後期には遺跡のほぼ全域に拡がりをみせるものと考えられる。

遺構に伴わない縄文時代の遺物は各地点から出土しており、その時期は早期・中期・後期・晩期におよんでいる。早期の押型文土器(173)は1点だけだが、細かい山形文を縱方向に施したもので、手向山式系のようである。中期の阿高式系土器は、各地点あわせて300片以上出土している。四線の文様・構成からすれば坂ノ下I式に相当するものが多いようである。早良平野では四箇・般盛・有田・湯納遺跡などに例がある。後・晩期の土器は古河川(道)を中心に多数出土している。粗製の深鉢・甕が圧倒的に多いが、精製土器も混る。型式的には北久根山式系、三万田式系、黒川式系の他、晩期終末の夜白式がある。前述したように後・晩期の土器が最も多い。後期は早良平野の沖積地への遺跡の進出が拡大する時期で、四箇遺跡・次郎丸高石遺跡などでも遺構・遺物がみられる。

弥生時代の遺構としては、第5地点で検出した土壙、竪穴住居跡がまずあげられる。土壙は前期初頭のもので、早良平野の沖積地では最初の検出例であろう。また竪穴住居跡(S C07)は円形を呈し、中期中頃～後半のものと考えられる。いずれにせよ、弥生時代の生活跡はこの遺跡群でははじめてのものである。鶴町遺跡の報告にもあるように、沖積地内の微高地が乾燥化しており、生活の場として適していたことを証明している。これにより、第2地点あるいは第3地点で検出した杭列との関係の一部が判明するとともに、古河川(道)に多数みられる弥生遺物の出自も明らかになったといえよう。第5地点に西接した第10地点では、前期の甕棺墓地が出土しており、生活、生産、埋葬がこの地でまとまった形で営なされたことがわかる。

さて弥生時代のもうひとつの大きな遺構として、生産に関わる古河川(道)内に構築された杭列について触れる必要があろう。その前に古河川についてみてみよう。古河川があることは試掘調査でわかっていたことであるが、第1・2地点で確認された。また今回の調査では、第4地点でその両側までを確認することができた。その結果、河幅は90m前後をはかることが判

明した。この古河川が何時頃からあったかについては明らかでないが、第1地点では、最下層から前期後半までの土器が出土しており、これ以前であることはまちがいない。ただ、これが単一な流れをなしていたとは考えられない。第3地点内でもその北側と南側では大きく土層の堆積状態が異っているし、第2地点では後期初頭前後に一起に埋没した状態を示していた。ということは、この古河川の形成・埋没は各地点で同時に起ったものではなく、繰り返し河道が変化することにより、発掘で確認された河幅に最終的になったものと想定される。あるいは第4地点のS D63・64のような溝が複合していた可能性もある。

弥生時代の杭列は第3・4地点で検出した。第5地点の古河道とした溝の複合した部分にも井堰と考えられる杭列などを検出しているが、古墳時代の遺物まで含んでいる。第4地点の杭列は護岸的なものとしてはほぼ良いであろう。第3地点では、最大の杭列Ⅰで全長16m、そこに用いられた杭材は700本という大規模なものをして、大まかに7列の杭列を検出した。その杭列Ⅰは岸に沿ったアーチ状を呈し、その下流内側にはSXⅠの入りくんだおち込みがある。井堰としてはその配渠関係から、また護岸的なものとしても、岸との間に溝状のものがあり問題が残る。この杭列Ⅰによく似た例として、東北1.2kmに位置する鶴町遺跡の堤防状遺構をあげることができる。第2号溝に設けられたこの杭列は、溝中に向って張りをみせ、その後には溝状のものが走っている。その時期は後期～古墳時代初頭とされている。杭列Ⅰの時期も後期中頃のものと考えられ、時期的にも近い。その役割については農業に関したものである推定されている。第3地点の他の杭列に関しては護岸や小井堰的なものと考えられるが、北側部分で検出した杭列Ⅲは、土層堆積が変化する部分に位置し、これに関する杭列の可能性もある。

早良平野のこの種の杭列としては先にあげた鶴町遺跡の他、四箇・原談儀・原深町・牟多田・石丸古川・湯納・拾六町ツイジ遺跡などがある。田村遺跡でも第2地点で井堰と考えられる杭列を検出している。これらの構築された時期をみると、四箇遺跡ではその上層を前期後半～中期中葉、下層を5世紀中頃としている。田村遺跡第2地点の杭列は中期後半～後期初頭、原談儀遺跡もおよそその時期と考えられる。多くは古墳時代前期までの間に埋没している。これらの杭列の多くが農業と相關していることは、木器農具の出土などから推定される。前期にあっても、第5地点でみられたように古手の三角形石包丁の出土などから水田が営なまれていた可能性はある。しかし、絶えず水害を受ける可能のある沖積地でそれがどれほどの有効性をもったかについては問題が残る。本格的に沖積地で水田經營が行なわれるのは中期後半のことであろう。この時期には平野を単位とした首長層が生れつつあった段階にあたり、このもとで一連の治水が行われ、水田經營の安定化がはかられたものと考えられる。それが、沖積地にみられる大規模な杭列として残存しているものと考えられる。ただ水田そのものの検出は、その立地のせいもあり、現在のところなく、今後も困難であるかもしれない。

次に第3地点で検出した古代末の集落跡についてみてみる。集落を構成する遺構は掘立柱建物30棟、井戸4基の他土壙、溝などである。建物は2×3間のものが大半を占め、南北棟、東

西棟がともに存在する。それを除けば 2×2 間の建物が確実なもので、残りの建物についてはなお検討を要する。ここではこの 2×3 間の建物を中心に、その分布状況、構造などに触れてみたい。

まず主軸方向によって 2×3 間の建物を分ければ、磁北よりやや西にとるもの (SB04・05・16・17・19・20・22)、東にとるもの (SB02・08・09・10・11・12・13・14・15)、ほぼ北にとるもの (SB01・06・07・18・21) になる。このうち前 2 者は重複関係からそれぞれ 2 つに細分できる。この細分は建物の建替え状況を示しているものが多く、SB19 と SB20、SB04 と SB05、SB13 と SB14 などが位置をずらして、また SB09 と SB10 が同一位置で建替を行っていると考えられる。また磁北に方位が近い SB06・07 も同一場所での建替である。建物の方向がその建築時期を示すのにどれだけ有効であるのかはさておくとして、重複しないようにこの集落を構成するすれば、3～5 時期はあったものと考えられる。この建物群はさらに東へ延びており、その時期ごとの構成棟数は確定しがたい。

第 3 地点でメインとなる建物は SB01・02 であろう。身舎は 2×3 間と他のものと変りがないが、集落の南側に位置した東西棟で、四面廻をもつ。なおかつ SB01 はその周囲に日隠し塀と考えられる柵を設けている。

これらの建物の構造に共通した点がみられる。それは梁間柱が梁行から外側に出るということである。これは第 2 地点で検出した鎌倉時代の掘立柱建物にも、また第 8 地点で検出した古代末の掘立柱建物にも共通してみられる所である。

この集落は南は SD35 で限られているとみてよく、西は SB21 で終る。その西は古河川上を溝が走っており、その一部で水田らしき痕跡を検出している。東は先も述べたように集落が延びるものと考えられる。これが第 8 地点の集落と続くものかについては、今後の調査を待つ所であるが、接続するすればかなり大規模な集落となり、また途切れたとしても近接して同時期の集落が営まれたということになり、その提出する問題は大きい。その年代は出土遺物からして、11世紀中頃～12世紀前半頃と想定される。

最後に集落跡の井戸から出土した輸入陶磁器について述べたい。その量は少ないが、越州窯系刻花文碗、水注、それに掲輪陶器、白磁片が出土している。刻花文碗は、内底にヘラ状工具で花文を刻ったもので、これまで太宰府で 3 例知られている他、インドネシアでも出土例がある。第 3 地点では 2 個体、さらに第 8 地点でも 1 個体出土しており、国内出土例は 6 個体となる。水柱はスリップの上に釉をかけたもので薄緑色を発する。一応越州窯系のものと考えたが、白磁の可能性もある。陶磁器の輸入の少ないこの時期にあって、これらの遺物をもつ田村遺跡の意味あいは深いものと考える。陶磁器については九州歴史資料館森田勉氏、太宰府市教育委員会山本信夫氏・狭川真一氏より御教示を得た。

この集落がその後途絶えたのは、田畠の砂の堆積とは無縁でなかろう。以後集落は第 2 地点、その北側の第 10 地点に移り、100 棟を越す掘立柱建物が構築されることになる。

第3地点(遺跡調査番号8144)

番号	類	種類	特徴	出土遺物	記号	番号	類	種類	特徴	出土遺物	記号	
001	14	土師・皿		S B01 P 2	00015	050	23	白磁碗		S D44 c	00050	
002	14	土師・皿		S B01 P 37	00018	051	23	土師・碗		S D44 c	00048	
003	14	土師・杯		S B01 P 13	00017	052	23	黒色上器碗	A類	S D44 c	00051	
004	14	22	瓦器皿	S B05 P 8	00011	053	23	黒色上器碗	B類	S D44 c	00049	
005	14	土師・大型		S B05 P 1	00012	054	23	青磁鉢	龍泉窯系	S D47	00058	
006	14	22	土師・皿	S B05 P 2	00014	055	23	青磁碗	龍泉窯系	S D47	00054	
007	14	土師・杯		S B09 P 9	00016	056	23	白磁碗		S D47	00063	
008	14	22	土師・皿	S B15 P 1	00009	057	23	磁器碗	唐津焼	S D47	00057	
009	14	土師・碗		S B19 P 19	00010	058	23	磁器碗	唐津焼	S D47	00055	
010	14	土師・碗		S B21 P 2	00008	059	23	磁器碗	唐津焼	S D47	00056	
011	14	土師・碗		S B21 P 22	00005	060	23	陶器碗	唐津焼	S D47	00059	
012	14	土師・甕		S B21 P 2	00007	061	23	褐釉陶器甕		S D47	00052	
013	14	22	土師・皿	S B18 P 12	00004	062	24	銅錢	元□通宝	S D39	00709	
014	14	22	土師・碗	S B18 P 11	00002	063	24	銅錢	寛永通宝	S D47	00712	
015	14	22	土師・碗	S B21 P 9	00001	064	24	銅錢	寛永通宝	S D47	00713	
016	14	22	土師・碗	E-6ピット	00003	065	24	銅錢	寛永通宝	S D47	00714	
017	14	土師・椀		(3b) P 43	00013	066	24	銅錢	寛永通宝	S D47	00715	
018	14	22	練陶器蓋	内面スリップ	(3b) P 2	00006	067	24	銅錢	寛永通宝	S D47	00716
019	16	22	褐陶器蓋	四耳壺	S E01	00020	068	24	銅錢	寛永通宝	S D47	00717
020	16	22	土師・杯	S E01	00019	069	24	銅錢	寛永通宝	S D47	00718	
021	16	23	青磁碗	越州窯系	S E03	00024	070	24	銅錢	寛永通宝	S D47	00719
022	16	23	青磁水注	327と同一種類	S E03	00107	071	26	弥生・漆	F-2 V層	00127	
023	16	22	土師・皿	高台付	S E03	00154	072	26	弥生・漆	V層	00093	
024	16	22	土師・椀	S F03	00022	073	26	弥生・漆	V層	00113		
025	16	23	土師・椀	S E03	00023	074	26	弥生・漆	F-2 V層	00078		
026	16	23	黒色土器椀	B類	S E03	00021	075	26	弥生・漆	F-2 V層	00077	
027	16	23	青磁水注	越州窯系	S E04	00028	076	27	木製三叉歛	カシ	S X I	00500
028	16	23	土師・皿	S E04	00029	077	27	木製三叉歛	カシ	V層杭列	00501	
029	16	23	土師・皿	S E04	00025	078	27	木製三叉歛	カシ	V層杭列	00502	
030	16	24	土師・皿	高台付	S E04	00026	079	27	木製三叉歛	カシ	V層杭列	00503
031	16	24	土師・皿	高台付	S E04	00027	080	27	木製三叉歛	カシ	V層杭列	00504
032	20	褐色土器柄	A類	S K75	00033	081	27	木製三叉歛	カシ	V層杭列	00505	
033	20	褐色土器柄	A類	S K77	00034	083	27	木製三叉歛	カシ	V層杭列	00506	
034	20	黒色土器柄	B類	S K77	00035	083	27	木製三叉歛	カシ	V層杭列	00507	
035	20	土師・椀		S K80	00036	084	27	木製三叉歛	カシ	V層杭列	00508	
036	20	24	黒色土器柄	A類	S K80	00037	085	27	木製三叉歛	カシ	V層杭列	00509
037	20	24	土師・杯	S K81	00038	086	27	木製三叉歛	カシ	V層杭列	00510	
038	23	24	土師・皿	S D31	00040	087	27	木製三叉歛	カシ	V層杭列	00511	
039	23	24	土師・皿	S D31	00039	088	27	建築材		V層杭列	00512	
040	23	土師・皿		S D35 a	00060	089	27	建築材		V層杭列	00513	
041	23	瓦器椀		S D37	00043	090	27	木製鋸刃?		V層杭列	00514	
042	23	土師・杯		S D37	00041	091	27	木製鋸刃?		V層杭列	00515	
043	23	織文・甕		S D38	00042	092	28	建築材	梯子	V層杭列	00516	
044	23	土師・皿		S D39	00110	093	28	建築材		V層杭列	00517	
045	23	土師・捨盆		S D39	00112	094	28	板杭		V層杭列	00518	
046	23	土師・捨盆		S D39	00111	095	28	角杭		V層杭列	00519	
047	23	瓦器椀		S D44 a	00044	096	28	角杭		V層杭列	00520	
048	23	黒色土器碗	B類	S D44 a	00045	097	28	角杭		V層杭列	00521	
049	23	黒色土器碗	B類	S D44 b	00046	098	28	角杭		V層杭列	00522	

第6表 掘立出土遺物一覧 I

遺物番号	種類	目次	種類	特徴	出土遺構	遺物番号	種類	目次	種類	特徴	出土遺構	遺物番号	
099	角杭	V層	杭列	V層	杭列	00523	150	38	UF	黒曜石	S X31	00349	
100	角杭	V層	杭列	V層	杭列	00524	151	38	UF	黒曜石	S X31	00350	
101	角杭	V層	杭列	V層	杭列	00525	152	38	UF	黒曜石	S X31	00351	
102	丸杭	V層	杭列	V層	杭列	00526	153	38	ドリル	サメカイト	S X31	00352	
103	丸杭	V層	杭列	V層	杭列	00527	154	38	UF	黒曜石	S X31	00353	
104	丸杭	V層	杭列	V層	杭列	00528	155	38	スクレイバー	サメカイト	S X31	00354	
105	丸杭	V層	杭列	V層	杭列	00529	156	39	UF	黒曜石	S X31	00355	
106	土師・甕	G-3	W層	G-3	W層	00118	157	39	UF	黒曜石	S X31	00356	
107	土師・甕	F-G-3	W層	F-G-3	W層	00086	158	39	UF	黒曜石	S X31	00357	
108	土師・甕	F-G-3	W層	F-G-3	W層	00085	159	39	UF	黒曜石	S X31	00358	
109	土師・甕	F-G-3	W層	F-G-3	W層	00082	160	39	UF	黒曜石	S X31	00359	
110	土師・甕	F-G-3	W層	F-G-3	W層	00087	161	39	石核	黒曜石	S X31	00360	
111	土師・甕	F-G-3	W層	F-G-3	W層	00083	162	39	石核	黒曜石	S X31	00361	
112	土師・把手	F-G-3	W層	F-G-3	W層	00114	163	39	石核	黒曜石	S X31	00362	
113	土師・甕	F-G-3	W層	F-G-3	W層	00084	164	39	30	打製石斧	玄武岩	S X31	00363
114	土師・高杯	全面丹塗り	W層			00071	165	39	30	砾石	砂岩	S X31	00364
115	土師・高杯	F-G-3	W層	F-G-3	W層	00115	166	40	25	縦文・深鉢		S X35	00142
116	土師・甕	F-G-3	W層	F-G-3	W層	00116	167	40	25	縦文・深鉢		S X35	00143
117	土師・甕	G-3	W層	G-3	W層	00117	168	40	25	縦文・廉		S X35	00144
118	土師・甕	D-E-2-3	W層	D-E-2-3	W層	00072	169	40	25	縦文・廉		S X35	00104
119	土師・甕	F-G-3	W層	F-G-3	W層	00106	170	40	25	縦文・縫		S X35	00147
120	吹いこ羽口	S X33		S X33		00032	171	40	25	縦文・浅鉢		S X35	00145
121	湯石要石鍋	S X34		S X34		00700	172	40	25	縦文・浅鉢		S X35	00103
122	縦文・深鉢	S X31		S X31		00068	173	41	26	縦文・深鉢	手向山式系	S K66	00031
123	縦文・深鉢	S X31		S X31		00063	174	41	26	縦文・深鉢	阿高式系	S XI	00141
124	縦文・深鉢	S X31		S X31		00067	175	41	26	縦文・深鉢	阿高式系	C-D-3-4 II層	00151
125	縦文・深鉢	S X31		S X31		00062	176	41	26	縦文・深鉢	阿高式系	S XI	00099
126	縦文・深鉢	S X31		S X31		00064	177	41	26	縦文・深鉢	阿高式系	S XI	00150
127	縦文・深鉢	S X31		S X31		00065	178	41	26	縦文・深鉢	阿高式系	F-3-E-Y層	00075
128	縦文・深鉢	S X31		S X31		00061	179	41	26	縦文・深鉢	阿高式系	S X34	00152
129	石鍔	サメカイト	S X31	S X31		00328	180	41	26	縦文・深鉢	阿高式系	(3 a) II層	00149
130	石鍔	サメカイト	S X31	S X31		00329	181	41	26	縦文・深鉢	阿高式系	S XI	00140
131	石鍔	黒曜石	S X31	S X31		00330	182	41	26	縦文・深鉢	阿高式系	S XI	00128
132	石鍔	黒曜石	S X31	S X31		00331	183	41	26	縦文・深鉢	阿高式系	S XI	00132
133	石鍔	サメカイト	S X31	S X31		00332	184	41	26	縦文・深鉢	阿高式系	S XI	00133
134	石鍔	サメカイト	S X31	S X31		00333	185	41	26	縦文・深鉢	阿高式系	S XI	00135
135	石鍔	黒曜石	S X31	S X31		00334	186	41	26	縦文・深鉢	阿高式系	S XI	00134
136	石鍔	黒曜石	S X31	S X31		00335	187	41	26	縦文・深鉢	阿高式系	S XI	00137
137	石鍔	サメカイト	S X31	S X31		00336	188	41	26	縦文・深鉢	阿高式系	S XI	00101
138	石鍔	サメカイト	S X31	S X31		00337	189	41	26	縦文・深鉢	阿高式系	F-G-3-II-Y層	00076
139	石鍔	サメカイト	S X31	S X31		00338	190	42	26	縦文・深鉢		S XI	00138
140	石鍔	サメカイト	S X31	S X31		00339	191	42	26	縦文・深鉢	北久根山式系	F-G-3-II-B層	00129
141	石鍔	黒曜石	S X31	S X31		00340	192	42	26	縦文・縫合	北久根山式系	S XI	00102
142	石鍔	サメカイト	S X31	S X31		00341	193	42	26	縦文・深鉢	北久根山式系	F-G-3-II-N層	00131
143	石鍔	黒曜石	S X31	S X31		00342	194	42	26	縦文・深鉢	北久根山式系	(3 a) Y層	00126
144	石鍔	黒曜石	S X31	S X31		00343	195	42	26	縦文・深鉢		G-3 H-Y層	00091
145	石鍔	黒曜石	S X31	S X31		00344	196	42	26	縦文・深鉢		(3 a) Y層	00120
146	石鍔	サメカイト	S X31	S X31		00345	197	42	26	縦文・深鉢		(3 a) H-Y層	00148
147	石鍔	黒曜石	S X31	S X31		00346	198	42	26	縦文・深鉢		F-G-3-N-Y層	00123
148	UF	黒曜石	S X31	S X31		00347	199	42	26	縦文・深鉢		(3 a) V層	00125
149	UF	黒曜石	S X31	S X31		00348	200	42	26	縦文・深鉢		F-G-3 Y層	00122

第7表 掘出出土遺物一覽II

番号	種類	特徴	出土遺構	番号	番号	種類	特徴	出土遺構	番号		
201	42	繩文・深鉢	F-G-3 W-Y層	00121	252	44	30	石鍬	サタカイト S D 44	00391	
202	42	繩文・甕	E-4 W層	00124	253	44	30	石鍬	黒曜石 S D 36	00392	
203	42	26	F-G-3 W-Y層	00088	254	44	30	石鍬	黒曜石 (3a) II~IV層	00393	
204	42	26	S X I	00139	255	44	30	石鍬	黒曜石	00394	
205	42	繩文・浅鉢	F-G-1 II~IV層	00130	256	44	30	石鍬	サヌカイト S D 34	00395	
206	42	繩文・深鉢	S X I	00098	257	44	30	石鍬	黒曜石 S D 37	00396	
207	42	繩文・深鉢	S X I	00096	258	44	30	石鍬	黒曜石 S D 35a	00397	
208	42	繩文・深鉢	E-3 V層	00080	259	44	30	石鍬	サヌカイト	00398	
209	42	繩文・深鉢	E-3 V層	00073	260	44	30	石鍬	黒曜石 (3d) IV層	00399	
210	42	繩文・深鉢	E-3 V層	00074	261	44	30	石鍬	サヌカイト S D 44	00400	
211	42	繩文・深鉢	S K 61	00030	262	44	30	石鍬	サヌカイト S X I	00401	
212	42	繩文・深鉢	S X I	00097	263	44	30	石鍬	サヌカイト F-3 V層	00402	
213	42	繩文・浅鉢	(3a) V層	00094	264	44	30	石鍬	サヌカイト (3a) III~V層	00403	
214	42	繩文・浅鉢	(3a) II層	00153	265	44	30	石鍬	黒曜石 S D 33	00404	
215	43	弥生・甕	(3a) IV層	00119	266	44	30	石鍬	黒曜石 (3a) 表揚	00405	
216	43	弥生・甕	G-8 IV層	00146	267	44	30	石鍬	黒曜石 (3c) 表揚	00406	
217	43	弥生・甕	(3d) I~II層	00095	268	44	30	石鍬	黒曜石 (3d) IV層	00407	
218	43	弥生・甕	G-3 W-V層	00092	269	44	30	石鍬	黒曜石 F-3~V層	00408	
219	43	土師・鉢	S X 31上面	00069	270	44	30	石鍬	F-4 表揚	00409	
220	43	土師・甕	G-1 II層	00089	271	44	30	石鍬	黒曜石 (3b) II層	00410	
221	43	須恵・杯	S X 31上面	00066	272	44	30	石鍬	黒曜石 (3a) 表揚	00411	
222	43	瓦器・椀	(3b) II層	00090	273	44	30	石鍬	黒曜石 (3a) II層	00412	
223	43	土師・杯	(3d) II層	00105	274	44	30	石鍬	サヌカイト (3a) 表揚	00413	
224	43	青磁	龍泉窯系	F-3 W層上面	00079	275	44	30	石鍬	黒曜石 (3c) II層	00414
225	43	白磁	F-G-3 II~V層	00081	276	44	30	石鍬	黒曜石 S D 35	00415	
226	44	30	石鍬	黒曜石 (3e) II層	00365	277	44	30	石鍬	黒曜石 S D 31	00416
227	44	30	石鍬	黒曜石 S X I	00366	278	44	30	石鍬	サヌカイト (3b) II層	00417
228	44	30	石鍬	黒曜石 S D 44	00367	279	45	U F	黒曜石 S X I	00418	
229	44	30	石鍬	黒曜石 (3d) I~II層	00368	280	45	スクレイパー	サヌカイト G-3 W-Y層	00419	
230	44	30	石鍬	黒曜石 B-2 II層	00369	281	45	U F	黒曜石 A-1 II層	00420	
231	44	30	石鍬	S X 30	00370	282	45	石匙	サヌカイト (3a) 表揚	00421	
232	44	30	石鍬	サヌカイト A-1 II層	00371	283	45	スクレイバー	サヌカイト A-1 II層	00422	
233	44	30	石鍬	サヌカイト S D 42	00372	284	45	石匙	黒曜石 A-1 II層	00423	
234	44	30	石鍬	サヌカイト S D 40	00373	285	45	石匙	サヌカイト S K 60	00424	
235	44	30	石鍬	サヌカイト G-3 III層下	00374	286	45	石匙	サヌカイト A-1 II層	00425	
236	44	30	石鍬	サヌカイト	00375	287	45	石匙	サヌカイト F-3 III~V層	00426	
237	44	30	石鍬	黒曜石 S X I	00376	288	45	石匙	サヌカイト A-1 II層	00427	
238	44	30	石鍬	サヌカイト (3h) II層	00377	289	46	スクレイバー	サヌカイト A-1 II層	00428	
239	44	30	石鍬	黒曜石 B-3 II層	00378	290	46	スクレイバー	サヌカイト G-3 W-Y層	00429	
240	44	30	石鍬	黒曜石 (3e) II層	00379	291	46	石匙	サヌカイト F-G-3 II~III層	00430	
241	44	30	石鍬	黒曜石 S E 02	00380	292	46	スクレイバー	サヌカイト G-3 W-Y層	00431	
242	44	30	石鍬	黒曜石 S D 33	00381	293	47	30	打製石斧	変形岩 (3a) 表揚	00432
243	44	30	石鍬	黒曜石 (3d) III層	00382	294	47	30	打製石斧	玄武岩 S X I	00433
244	44	30	石鍬	黒曜石 S D 44	00383	295	47	30	打製石斧	片岩 F-G-3 III~V層	00434
245	44	30	石鍬	黒曜石 F-3 III~V層	00384	296	47	30	打製石斧	玄武岩 S X I	00435
246	44	30	石鍬	黒曜石 S K 66	00385	297	47	30	打製石斧	片麻岩 E-3~III~V層	00436
247	44	30	石鍬	黒曜石 (3b) II層	00386	298	47	30	打製石斧	S K 71	00437
248	44	30	石鍬	黒曜石 S D 39	00387	299	47	30	打製石斧	玄武岩 (3a) 表揚	00438
249	44	30	石鍬	黒曜石 B-3 II層	00388	300	47	30	打製石斧	(3a) W-Y層	00439
250	44	30	石鍬	黒曜石 (3a) II層	00389	301	47	30	打製石斧	玄武岩 A-1 II層	00440
251	44	30	石鍬	サヌカイト S D 44c	00390	302	47	30	打製石斧	玄武岩 (3b) II層	00441

第8表 掘出出土遺物一覧III

番号	地	種類	特徴	出土遺物	記号	番号	地	種類	特徴	出土遺物	記号
303	47	打製石斧		G-3 II層	00307	319	49	石錐	49.2g	A-1 II層下	00319
304	47	打製石斧		S K66	00310	320	49	有清晰石錐	砂岩	F-G-3 V層	00327
305	47	打製石斧	變成骨	S X I	00317	321	50	滑石製石錐		S B10 P 9	00703
306	47	打製石斧	玄武岩	(3e) 表土	00326	322	50	滑石製石錐		F-2 II層上部	00701
307	47	打製石斧	片岩	(3a) 表土	00314	323	50	滑石製石錐		(3b) II層	00702
308	48	磨製石斧	蛇紋岩?	C-2 II層	00300	324	50	滑石製石錐?		S B10 P 6	00704
309	48	磨製石斧	(3a) II層下	(3a) II層下	00312	325	50	上錐		(3a) II層	00721
310	48	磨製石斧	砂岩	(3a) 表土	00311	326	50	土錐		(3a) II層	00720
311	48	磨製石斧	E-O V層	00302	327	50	鐵製品		(3a) 表土	00707	
312	48	磨製石斧	S D39	00301	328	50	鐵片		(3b) II層	00705	
313	48	磨製石斧	變成骨	S D35a	00324	329	50	鉄刀子		(3c) I-II層	00706
314	48	磨製石斧	(3c) I-II層	(3c) I-II層	00320	330	50	銅鑿先?		(3a) 表土	00708
315	48	柱狀片刃石斧	頁岩	F-3 III-V層	00315	331	50	銅錢		寛永通宝	00710
316	49	石錐	玄武岩	(3b) II層	00318	332	50	銅錢		寛永通宝	00711
317	49	石錐	凝灰岩	F-3 IV層	00316	657	23	青銅網		越州銅絲	S E03
318	49	石錐	玄武岩	(3d) IV層	00321						00108

第4地点(遺跡調査番号8145)

番号	地	種類	特徴	出土遺物	記号	番号	地	種類	特徴	出土遺物	記号
333	53	縞文・深鉢		S D46	00069	365	60	土師・杯	丹塗?	S D63 下層	00003
334	53	縞文・深鉢	占河川	00071	366	60	土師・壺		S D63 下層	00010	
335	53	縞文・深鉢	S D46	00068	367	60	土師・杯		S D63 下層	00015	
336	53	縞文・甕	古河川	00072	368	60	上師・杯		S D63 下層	00012	
337	53	縞文・甕	古河川	00070	369	60	土師・杯		S D63 下層	00008	
338	53	縞文・甕	S D46	00001	370	60	土師・杯		S D63 下層	00045	
339	53	弥生・甕	(4a)	00074	371	60	土師・高杯		S D63 下層	00011	
340	53	弥生・甕	(4a)	00073	372	60	上師・杯	手捏ね	S D63 下層	00009	
341	53	木製二叉鉤	古河川	00300	373	61	土師・甕		S D63 上層	00007	
342	53	木製三叉鉤	古河川	00301	374	61	土師・甕		S D63 上層	00016	
343	53	木製甕	古河川	00302	375	61	須恵・甕		S D63 上層	00123	
344	53	木製甕	古河川	00303	376	62	縞文・深鉢		S D63 下層	00127	
345	53	木製甕	古河川	00304	377	62	縞文・深鉢		S D63	00145	
346	56	縞文・深鉢	S D61	00076	378	62	縞文・深鉢		S D63 下層	00097	
347	56	弥生・壺	丹塗?	(4b)	00066	379	62	縞文・深鉢		S D63 下層	00120
348	56	弥生・壺	丹塗?	(4c) II層	00077	380	62	縞文・深鉢		S D63 下層	00125
349	56	弥生・壺	(4b) II層下	00075	381	62	縞文・深鉢		S D63 下層	00118	
350	56	土錐	(4c) II層	00500	382	62	縞文・深鉢		S D63 下層	00099	
351	59	弥生・甕	S D64 E層	00080	383	62	縞文・深鉢		S D64 E層	00081	
352	59	弥生・甕	S D64 E層	00058	384	62	縞文・深鉢		S D63 下層	00101	
353	59	弥生・高杯	S D64 E層	00078	385	62	縞文・深鉢		S D64	00079	
354	59	弥生・甕	S D64 E層	00036	386	62	縞文・深鉢		S D63 下層	00023	
355	59	弥生・甕	S D64 E層	00038	387	62	縞文・深鉢		S D64	00056	
356	59	弥生・甕	S D64 E層	00031	388	62	縞文・深鉢		S D63	00142	
357	59	弥生・甕	S D64	00069	389	62	縞文・深鉢		S D64 E層	00085	
358	59	縞文・甕	S D64	00037	390	62	縞文・深鉢		S D63 下層	00098	
359	59	弥生・甕	S D64	00054	391	62	縞文・深鉢		S D63 下層	00109	
360	59	弥生・甕	S D64	00055	392	62	縞文・深鉢		S D63 下層	00096	
361	60	土錐	S D63 下層	00014	393	62	縞文・深鉢		S D63 下層	00110	
362	60	土錐	S D63 下層	00039	394	63	縞文・深鉢		S D63	00141	
363	60	土錐	S D63 下層	00013	395	63	縞文・深鉢		S D63 下層	00113	
364	60	土錐	S D63 下層	00025	396	63	縞文・深鉢		S D63 下層	00100	

第9表 掘出出土遺物一覧IV

番号	種類	種類	特徴	出土遺構	登録号	番号	種類	種類	特徴	出土遺構	登録号	
397	63	縦文・深鉢		S D63下層	00119	444	66	弥生・妻		S D63下層	00091	
398	63	縦文・深鉢		S D63下層	00128	445	66	弥生・康		S D63	00135	
399	63	縦文・深鉢		S D63上層	00133	446	66	弥生・高杯		S D63下層	00130	
400	63	縦文・深鉢		S D63	00137	447	66	弥生・妻	外底月捺引	S D63	00033	
401	63	縦文・浅鉢		S D63	00139	448	66	弥生・妻		(4d) I層	00065	
402	63	縦文・浅鉢		S D64下層	00086	449	66	弥生・妻		S D63下層	00006	
403	63	27	縦文・妻	S D64	00004	450	66	弥生・妻		S D63	00159	
404	63	縦文・妻		S D63下層	00122	451	67	28		(4d) I層	00063	
405	63	縦文・妻		S D63上層	00132	452	67	土器・縫		(4d) II層	00151	
406	63	縦文・妻		S D64 I層	00084	453	67	土器・縫		(4d) I層	00064	
407	63	縦文・縫		S D63下層	00104	454	67	青磁碗	龍泉窯系	(4d) II層	00150	
408	63	縦文・縫		S D63 I層	00114	455	67	白磁碗		(4d) II層	00050	
409	63	27	縦文・妻	S D63	00144	456	67	土師質・縫		(4d) II層	00051	
410	63	27	縦文・縫	S D64	00053	457	67	須恵質・縫		(4d) II層	00149	
411	63	縦文・妻		S D63	00029	458	67	須恵質・蓋		(4d) II層	00134	
412	64	27	縦文・縫	S D63下層	00005	459	67	土鏡	2.2g	(4d) II層	00501	
413	64	27	縦文・縫	S D63	00028	460	67	土鏡	4.7g	(4d) III層	00502	
414	64	27	縦文・縫	S D64 h層	00082	461	67	土鏡		(4d) II層	00503	
415	64	縦文・妻		S D63下層	00111	462	67	土鏡	1.3g	(4d) II層	00504	
416	64	縦文・縫		S D64 f層	00087	463	67	土鏡	3.6g	(4d) II層	00505	
417	64	縦文・妻		S D63 I層	00095	464	67	土鏡		(4d) II層	00506	
418	64	縦文・縫		S D63 T層	00026	465	69	28	弥生・妻	(4e)	00062	
419	64	28	縦文・縫	S D64 f層	00060	466	69	弥生・縫		(4e) II層	00153	
420	64	27	縦文・縫	S D64 f層	00131	467	69	弥生・縫合		(4e) II層	00152	
421	64	縦文・妻		S D63下層	00117	468	69	弥生・妻		(4e) II層	00154	
422	64	縦文・縫		S D63 I層	00116	469	69	弥生・縫		(4e) II層	00155	
423	64	縦文・縫		S D63下層	00103	470	70	石鏡	黒曜石	(4a) II層	00200	
424	64	28	縦文・縫	S D63下層	00129	471	70	石鏡	黒曜石	S D45	00201	
425	64	27	縦文・縫	S D64 f層	00030	472	70	石鏡	黒曜石	S D46	00202	
426	64	縦文・縫		S D63 T層	00121	473	70	石鏡	黒曜石	古河川	00203	
427	64	27	縦文・縫	(4d) II層	00147	474	70	石鏡	サヌカイト	古河川	00204	
428	64	縦文・縫		S D63 f層	00107	475	70	石鏡	サヌカイト	S D64	00205	
429	64	28	縦文・縫	S D63	00138	476	70	石鏡	黒曜石	古河川	00206	
430	64	28	縦文・縫	S D63	00143	477	70	ドリル	黒曜石	古河川	00207	
431	65	縦文・深鉢		S D63下層	00040	478	70	スクレーパー	サヌカイト	S D50	00208	
432	65	縦文・妻		S D63下層	00108	479	71	31	打製石斧	玄武岩	S D64	00209
433	65	縦文・縫		S D63 T層	00124	480	71	31	打製石斧	玄武岩	古河川	00201
434	65	縦文・深鉢		S D64	00048	481	71	打製石斧	片岩類	S D64	00211	
435	65	縦文・縫		S D63下層	00024	482	71	始刃石斧	玄武岩	S D64	00212	
436	65	縦文・深鉢		S D63下層	00018	483	71	始刃石斧	玄武岩	S D64	00213	
437	65	縦文・縫		S D64	00061	484	72	始刃石斧	玄武岩	S D63 V層	00214	
438	65	縦文・縫		S D64 f層	00059	485	72	磨製刀器	砂岩	S D45	00215	
439	65	縦文・縫		S D63下層	00067	486	72	石鎌	真岩	(4e) II層	00216	
440	65	縦文・縫		S D63-64	00052	487	72	31	石底丁	蛇纹岩	古河川	00217
441	66	弥生・縫		S D63	00136	488	72	31	石製鋸齒車		S D63 I層	00218
442	66	弥生・縫		S D63	00140	489	72	32	木製三叉鍬		S D63下層	00305
443	66	弥生・縫		S D63下層	00105							

第5地点(遺跡調査番号8146)

番号	種類	種類	特徴	出土遺構	登録号	番号	種類	種類	特徴	出土遺構	登録号
489	76	縦文・縫		S K90	00066	491	76	弥生・縫		S K90	00069
490	76	縦文・縫	弥生・縫	S K90	00070	492	76	弥生・縫		S K90	00068

第10表 掘戻出土遺物一覧 V

遺物番号	種類	特徴	出土遺構	遺物番号	種類	特徴	出土遺構	遺物番号			
493	76	弥生・斐	S K90	00071	544	80	弥生・斐	S XII	00118		
494	76	弥生・斐	S K90	00002	545	80	弥生・斐	河 I	00146		
495	76	弥生・斐	S K90	00001	546	80	弥生・斐	河 I	00057		
496	76	弥生・斐	S K90	00005	547	80	弥生・斐	S XII	00115		
497	76	弥生・斐	S K90	00073	548	80	弥生・斐	河 I	00149		
498	76	弥生・斐	S K90	00074	549	80	弥生・斐	河 I	00150		
499	76	弥生・斐	S K90	00072	550	80	弥生・斐	河 I	00148		
500	76	弥生・斐	S K90	00007	551	80	弥生・斐	河 I	00056		
501	76	羅文・斐	S K90	00004	552	80	弥生・斐	河 II	00184		
502	76	弥生・斐	S K90	00078	553	81	弥生・斐	河 I	00155		
503	76	羅文・斐	S K90	00006	554	81	弥生・斐	S XII	00113		
504	76	弥生・斐	S K90	00077	555	81	弥生・斐	S D 94	00047		
505	76	弥生・斐	S K90	00003	556	81	弥生・斐	河 I	00054		
506	76	弥生・斐	S K90	00080	557	81	弥生・斐	S D 94	00048		
507	76	土製筋鉄車	S K90	00700	558	81	弥生・斐	河 I	00130		
508	77	28	上師・皿	S D 65下層	00025	559	81	弥生・斐	河 I	00151	
509	77	十師・皿	S D 65中層	00038	560	81	弥生・斐	S XII	00112		
510	77	28	土師・皿	S D 65中層	00022	561	81	弥生・斐	S XII	00125	
511	77	土師・皿	S D 65中層	00085	562	81	弥生・斐	河 II	00193		
512	77	上師・皿	S D 65中層	00090	563	81	土師・鉢	河 I	00133		
513	77	28	土師・碗	S D 65下層	00023	564	81	上師・斐	河 I	00055	
514	77	28	土師・碗	S D 65下層	00024	565	81	土師・高杯	河 I	00156	
515	77	土師・碗	S D 65下層	00081	566	81	土師・高杯	河 I	00059		
516	77	土師・柄	S D 65中層	00086	567	81	土師・高杯	河 I	00058		
517	77	土師・柄	S D 65中層	00089	568	82	木製三叉脚	杭列 IV	00501		
518	77	土師・柄	S D 65中層	00036	569	82	木製柾	杭列 IV	00502		
519	77	黒色土器柄	A類	S D 65中層	00037	570	82	木製柾	杭列 IV	00503	
520	77	黒色土器柄	B類	S D 65下層	00084	571	83	羅文・斐	S D 65下層	00013	
521	78	弥生・斐	S D 66	00034	572	83	羅文・斐	S D 65下層	00014		
522	78	弥生・斐	S D 66	00026	573	83	羅文・斐	S D 65	00012		
523	78	弥生・斐	外面丹塗	S D 66	00030	574	83	羅文・斐	S D 94	00046	
524	78	弥生・高杯	S D 66	00027	575	83	羅文・斐	S D 90	00008		
525	78	弥生・斐	S D 66	00029	576	83	羅文・斐	S D 65下層	00011		
526	78	弥生・斐	S D 66	00032	577	83	羅文・洗鉢	河 I	00127		
527	78	弥生・斐	S D 66	00031	578	83	羅文・深鉢	S D 65下層	00015		
528	78	32	木製三叉脚	S D 66	00500	579	83	羅文・洗鉢	河 I	00128	
529	79	28	上師・皿	S D 70	00040	580	83	羅文・洗鉢	S D 65下層	00016	
530	79	29	黑色土器柄	A類	S D 70	00041	581	83	羅文・深鉢	S D 65	00100
531	79	29	土師・壺	S D 75	00042	582	83	羅文・斐	河 I	00053	
532	79	29	土師・斐	S D 77	00044	583	83	羅文・斐	II区 II層	00052	
533	79	29	土師・壺	S D 77	00045	584	84	弥生・斐	III区 IV層	00061	
534	79	29	土師・高杯	S D 77	00043	585	84	弥生・斐	河 IV	00195	
535	79	31	銅鏡	S D 77	00711	586	84	弥生・斐	S D 65下層	00017	
536	80	弥生・斐	河 I	00172	587	84	弥生・斐	S D 65中層	00035		
537	80	弥生・斐	河 I	00171	588	84	弥生・斐	S D 70	00039		
538	80	弥生・斐	河 I	00174	589	84	弥生・斐	S D 65下層	00020		
539	80	弥生・斐	河 I	00175	590	84	弥生・斐	S D 65下層	00018		
540	80	弥生・斐	河 I	00152	591	84	弥生・斐	河 I	00050		
541	80	弥生・斐	河 I・II	00179	592	84	弥生・斐	河 I	00154		
542	80	弥生・斐	河 I	00147	593	85	土師・斐	S D 65V層	00021		
543	80	弥生・斐	河 I	00173	594	85	土師・斐	III区南W層	00065		

第11表 掘立出土遺物一覽 VI

番号	標記	種類	特徴	出土遺物	番号	標記	種類	特徴	出土遺物	番号		
595	85	土師・壺		山区南西層	00060	626	87	打製石斧	安山岩	S D65N層	00341	
596	85	29	土師・壺	I 区南西層	00062	627	87	打製石斧	砂岩	III区排水溝	00344	
597	85	29	土師・板	II区河	00063	628	87	磨製石斧	安山岩	S D66	00354	
598	85	29	土師・板	II区下層	00064	629	87	磨製石斧	玄武岩	I 区III層	00338	
599	86	石錠	黒曜石	表土	00300	630	88	大形磨刃石斧	玄武岩	S XII	00343	
600	86	石錠	黒曜石	表土	00301	631	88	磨製石斧	玄武岩	S XII	00334	
601	86	石錠	黒曜石	S XII	00302	632	88	槌狀石頭	粘板岩	S XII	00333	
602	86	石錠	黒曜石	河 I・II	00303	633	88	柱狀片狀石斧	頁岩	III区III層	00356	
603	86	石錠	黒曜石	S D77	00304	634	88	換入石斧	頁岩	III区III層	00355	
604	86	石錠	黒曜石	S D66	00305	635	88	扁平片刃石斧	粘板岩	S D66	00357	
605	86	石錠	黒曜石	表土	00306	636	88	石磨丁	頁岩	S K101	00352	
606	86	石錠	黒曜石	II区表土	00307	637	88	石磨丁未製品	安山岩	河 II	00351	
607	86	石錠	黒曜石	II区最下層	00308	638	89	石磨丁	砂岩	S D66	00346	
608	86	石錠	黒曜石	S D66	00309	639	89	石磨丁	頁岩	河 I	00350	
609	86	石錠	黒曜石	S D69III層	00310	640	89	石磨丁	頁岩	河 I	00347	
610	86	石錠	黒曜石	S XII	00311	641	89	石錠	砂岩	表土	00348	
611	86	石錠	黒曜石	S XII	00312	642	89	石錠	砂岩	河 I	00349	
612	86	石錠	サヌカイト	S D66	00313	643	89	有茎磨石錠	粘板岩	II区 II	00353	
613	86	石錠	黒曜石	河 IV	00314	644	89	石錠	滑石質	II区II層	00345	
614	86	石錠	サヌカイト	II区表土	00315	645	90	土鍤	2.5g	III区最上層	00710	
615	86	石錠	黒曜石	S D66	00316	646	90	上鍤	2.9g	II区II~III層	00706	
616	86	石錠	黒曜石	S D77	00317	647	90	土鍤	3.0g	II区III層	00707	
617	86	石錠	黒曜石	S XII	00318	648	90	土鍤	3.9g	II区II層下	00705	
618	86	石錠	黒曜石	II・III北II層	00319	649	90	土鍤	1.4g	II区 S D65	00708	
619	86	石錠	黒曜石	S D69II層	00320	650	90	上鍤	4.7g	I 区北II層	00702	
620	86	ドリル	サヌカイト	S D63III層	00321	651	90	土鍤	2.9g	II区北III層	00703	
621	86	石錠	サヌカイト	S D66下層	00322	652	90	土鍤	3.7g	II区I~II層	00704	
622	86	石錠	黒曜石	III区 pit 97	00323	653	90	上鍤	5.7g	III区III層	00709	
623	86	UF	黒曜石	河 I	00324	654	90	鉄製リング		III区 I 層	00713	
624	86	スクレイパー	サヌカイト	河 I・II	00325	655	90	鉄通車	土器軸用		00701	
625	87	31	打製石斧	砂岩	II区IV層	00339	656	90	鉄製馬具		III区 I 層	00712

第12表 掘出出土遺物一覧表

図 版



田村遺跡群周辺航空写真（1/5万）

1. 田村遺跡群 2. 田隈遺跡 3. 次郎丸高石遺跡 4. 鶴町遺跡 5. 四箇遺跡群



3a地点造構検出状況 1. 北から 2. 南から



3b地点遺構検出状況 1. 北から 2. 南から

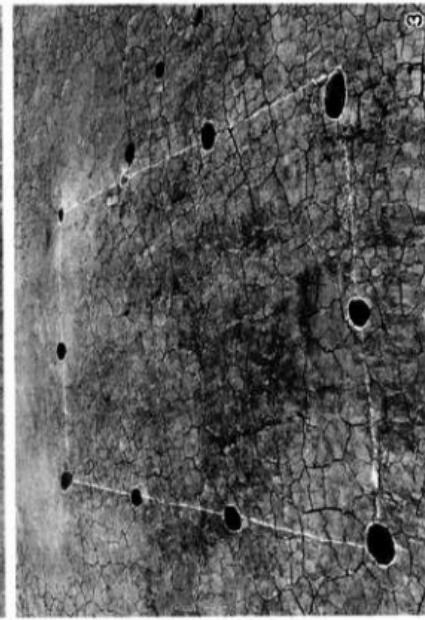
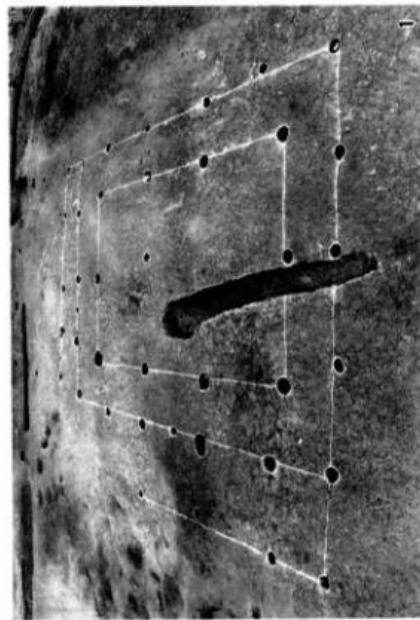
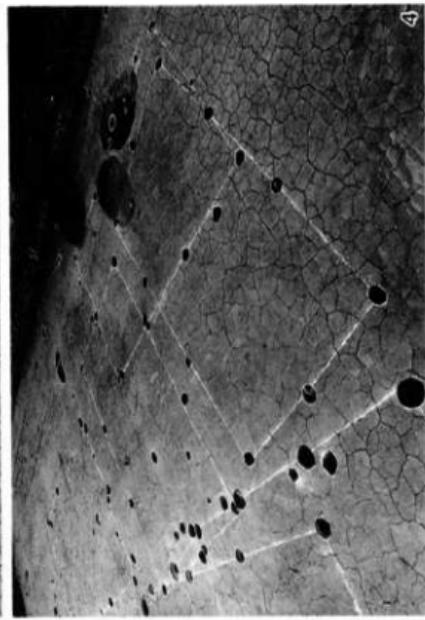
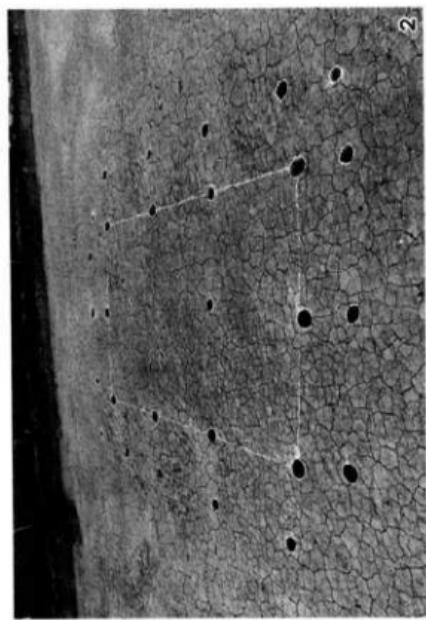


3c地点遺構検出状況 1. 北から 2. 南から

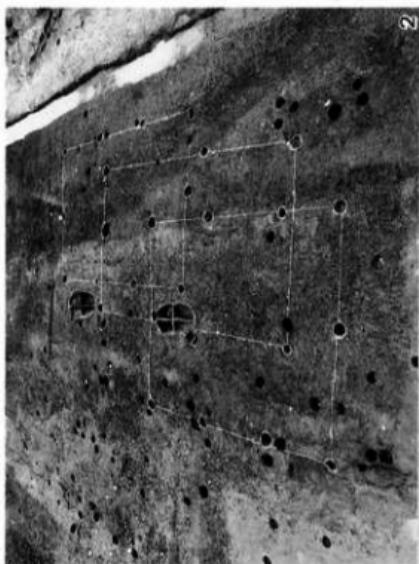
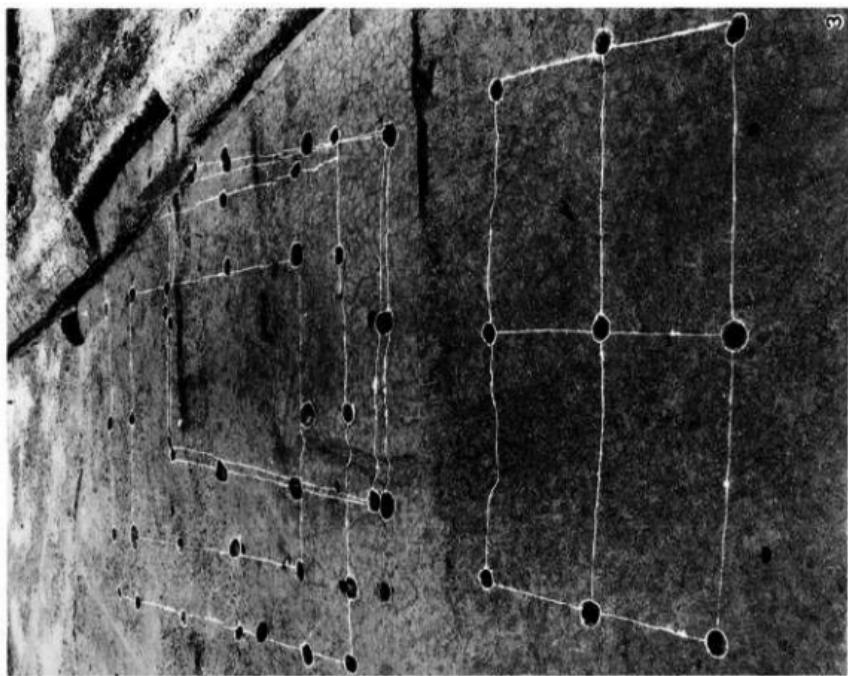


3d地点遺構検出状況 1. 西側部分（西から） 2. 東側部分（南から）

図版 6



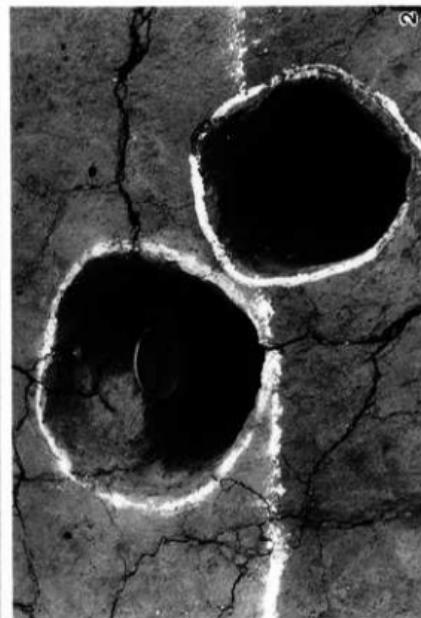
1 . SB01 (西から) 2 . SB02 (西から) 3 . SB11 (南から) 4 . SB04・05・12 (西南から)

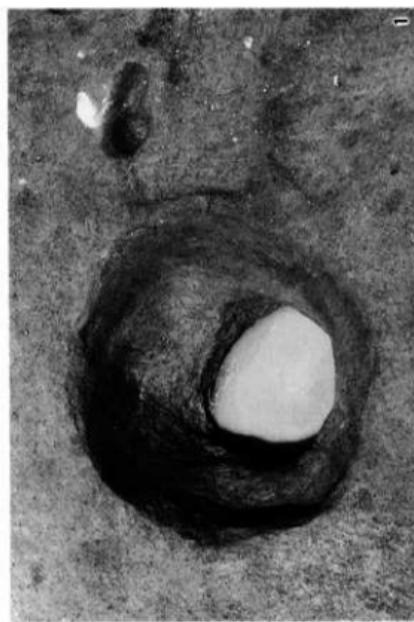


1. SB19・20周辺 (南から) 2. SB16・17・23 (南から) 3. SB08・09・10・24 (北から)



1. SB15・21隔壁 (西 δ_1 ・ δ_2) 2. SB18 P12 (北 δ_1 ・ δ_2) 3. SB18 P11 (西 δ_1 ・ δ_2) 4. SB21 P25 (北 δ_1 ・ δ_2)





1. SE01 (東から) 2. SE02 (南から) 3. SE03 (南から) 4. SE04 (西から)



2



4



1



3

1. SK73 (北から) 2. SD33・34・35 (西から) 3. SK80・81 (南から) 4. SD39周辺 (北から)



1. SD44 (南西から) 2. SX33 (北西から) 3. SX34 (西から) 4. SX31 (東から)



3a地点古河川検出状況 1. 東南から 2. 西北から



3a地点古河川 1. 杖例 I 2. 杖例III・IV



1



2

4a地点遺構検出状況 1. 北から 2. 南西から

4b·c地点遺構検出状況 1. 南から 2. 北から



1



2



1



2

4d地点 1. SD63検出状況（北から） 2. SD63・64検出状況（北から）



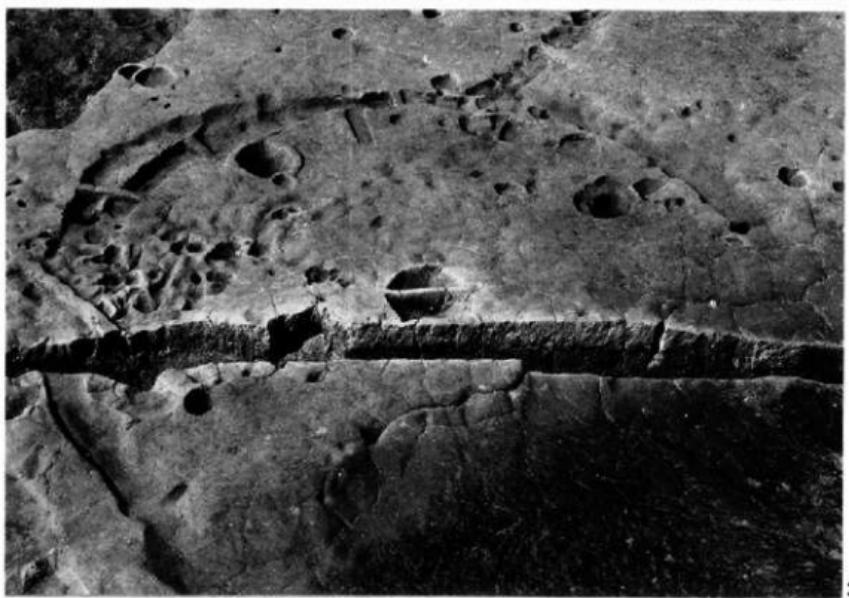
第5地点全景 1. 東から 2. 西から



第5地点下層遺構検出状況 1. 東から 2. 西から



1



2

1. III区台地上遺構検出状況（北から） 2. SC07（南から）



1

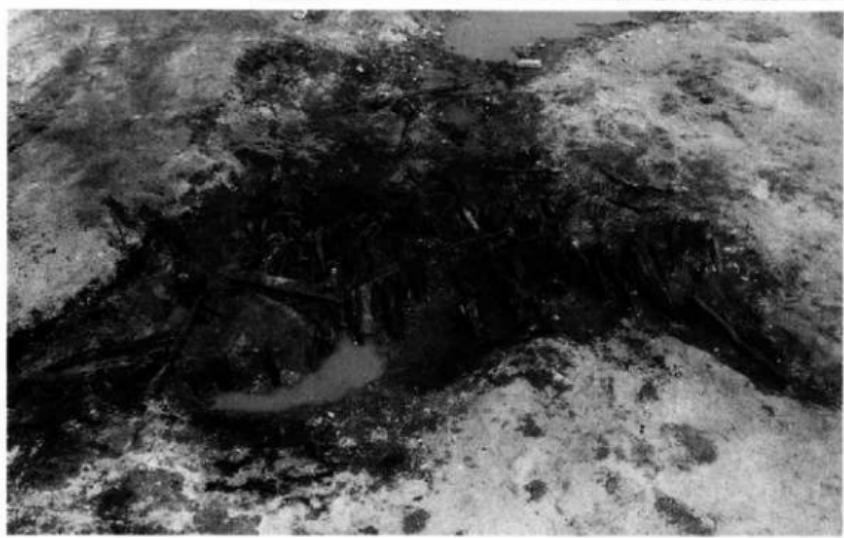


2

古河道検出状況 1. 北から 2. 東南から



1



2

古河道 1. 桁列II 2. 桁列IV



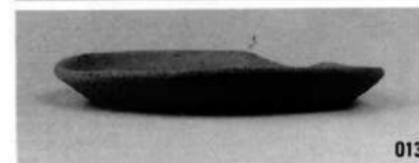
004



006



008



013



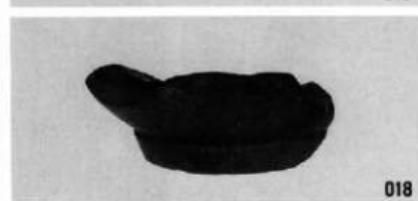
014



015



016



018



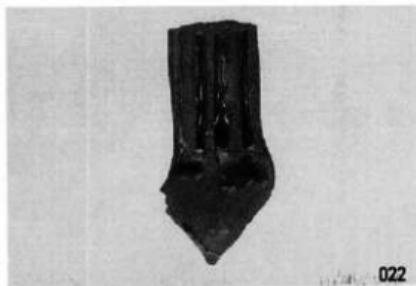
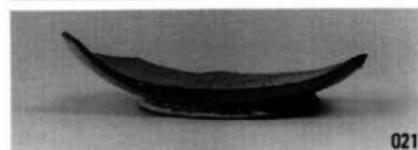
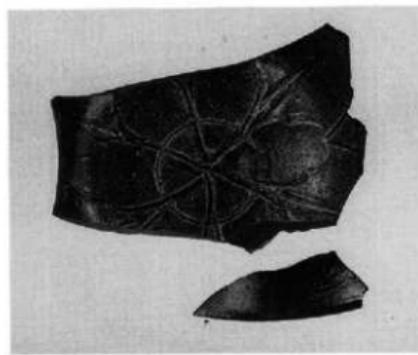
019



020



024

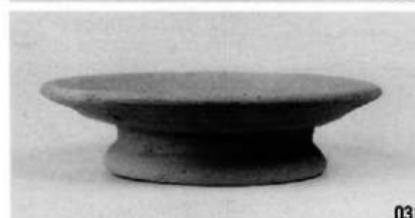




030



047



031



107



036



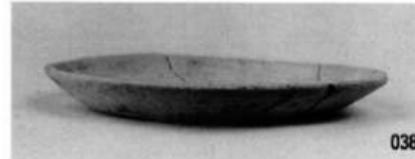
108



037



113



038



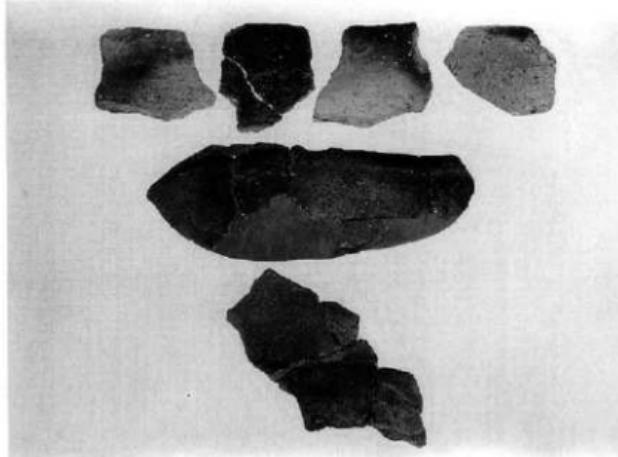
114



▶
122 123 124 125

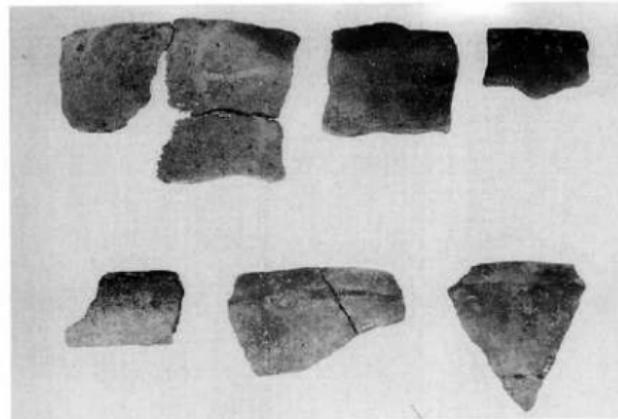
126

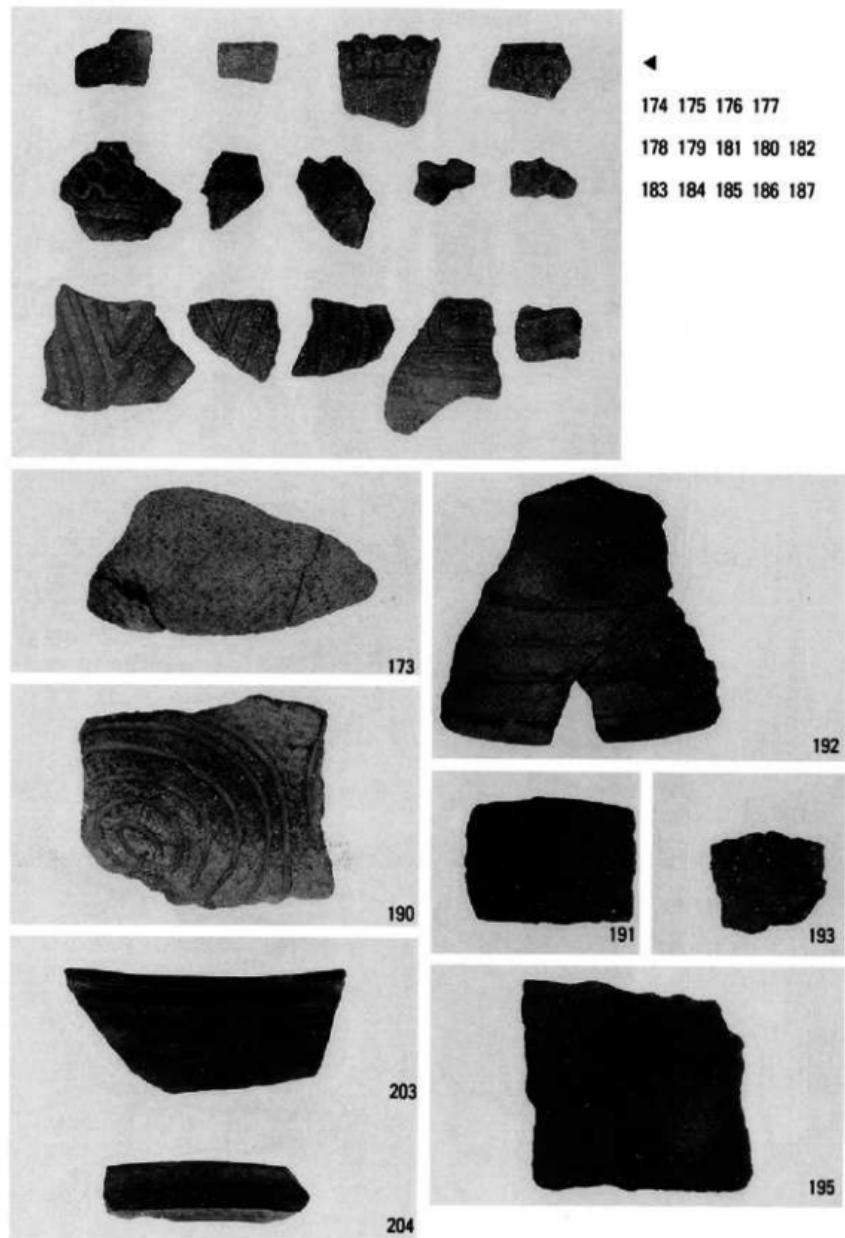
127



166 167 168

169 171 172







347



371



363



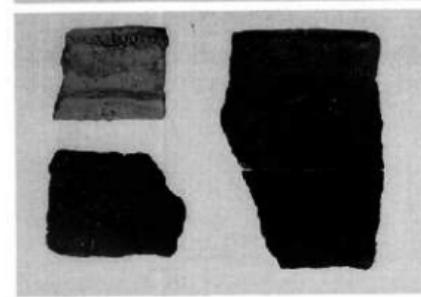
372



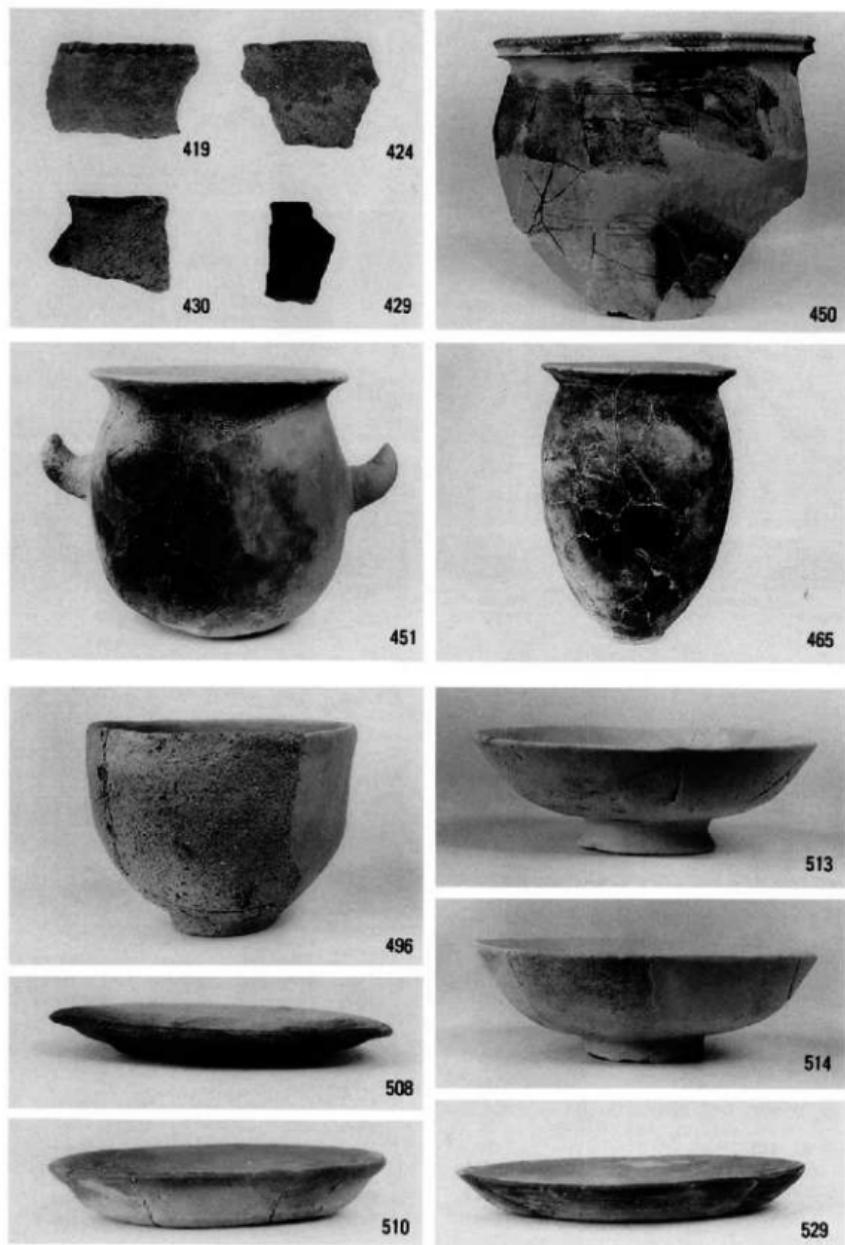
366



368

▲ 410 403
409412 413 414
420 425 427

369





530



531



532



533



534



596

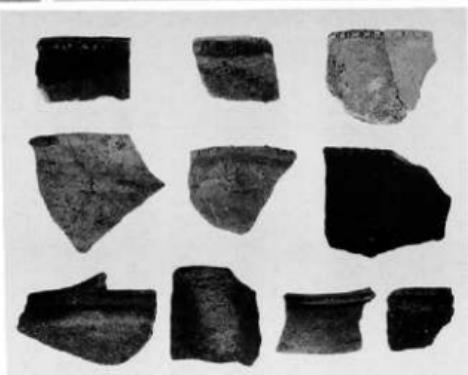


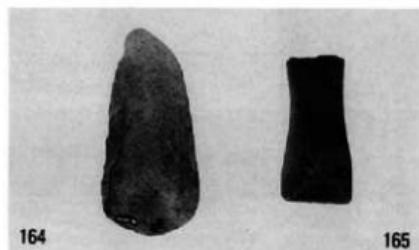
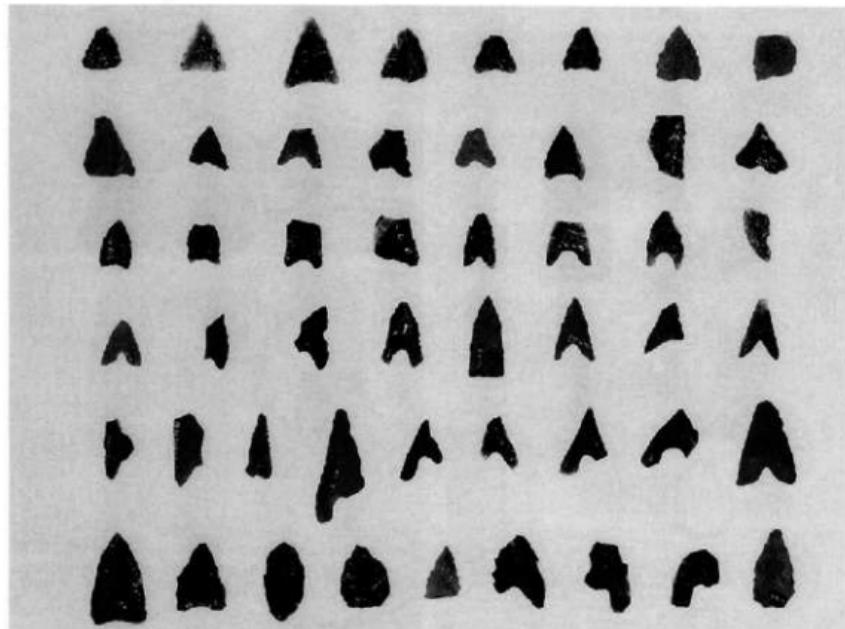
597



598

571 572 573
574 575 576
577 578 579 580

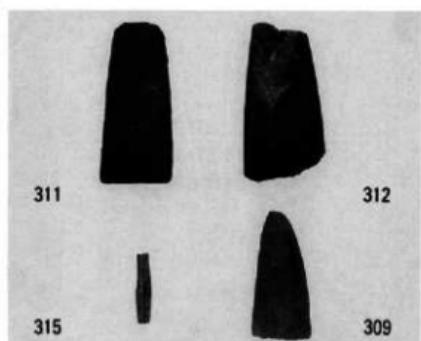


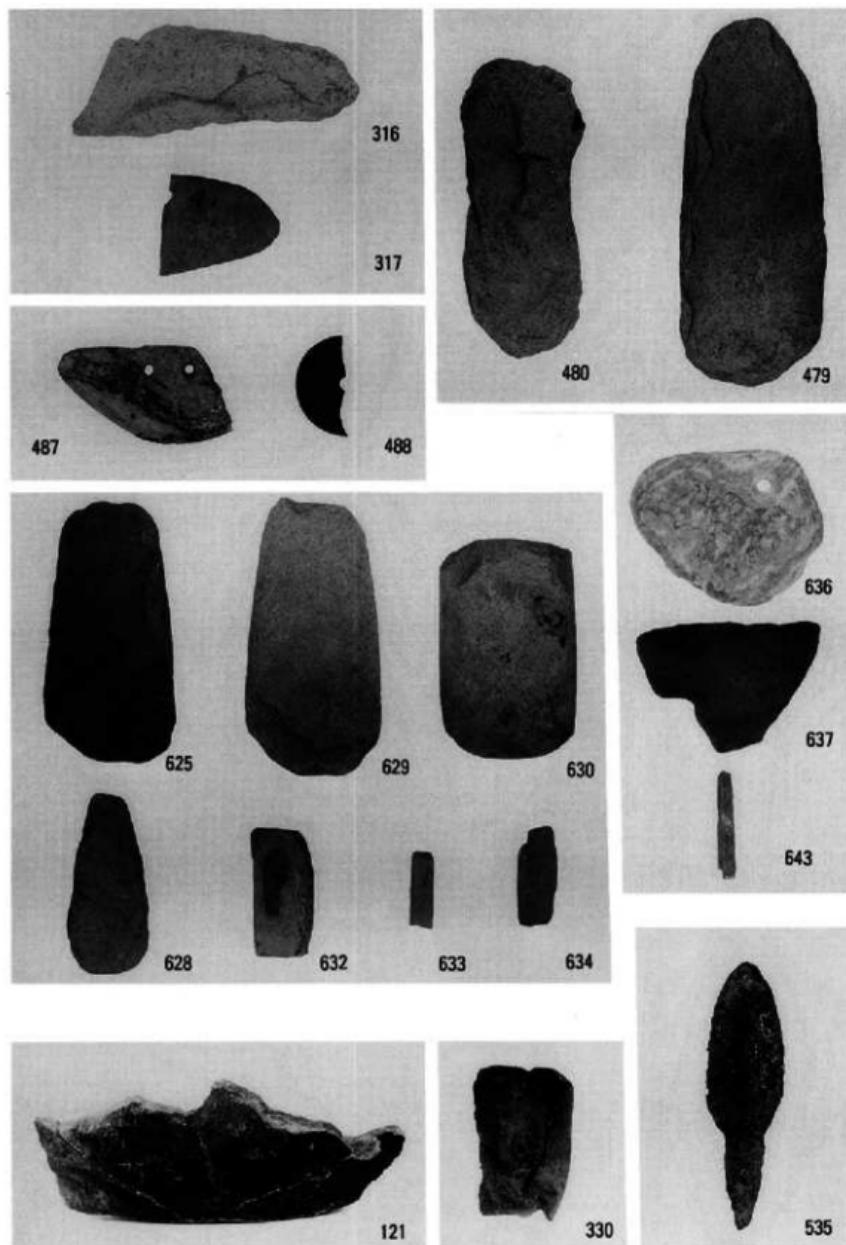


▲ 226-278 (235・255・259欠)

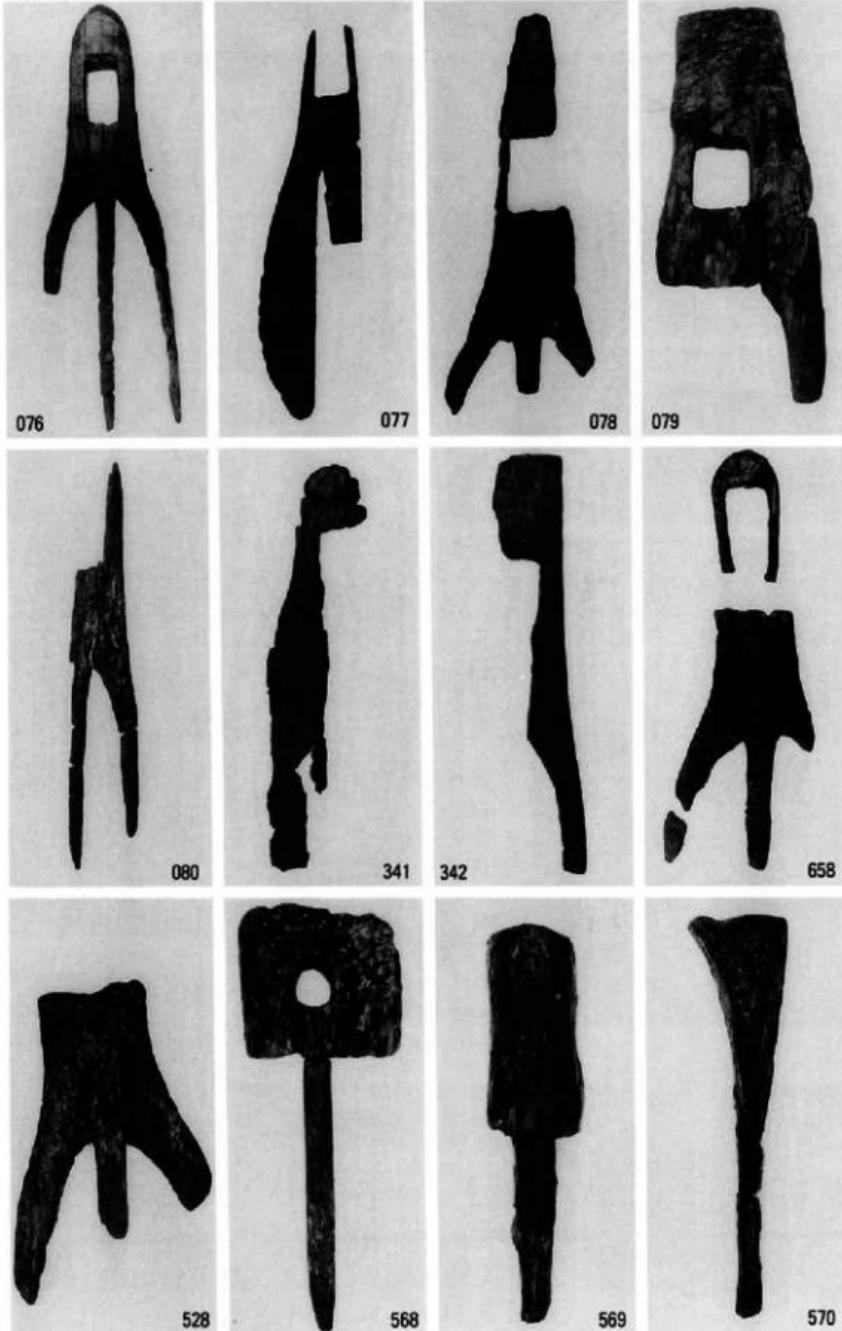
296 293 294

▲ 297 298 295





出土石器 II・金属器



福岡市埋蔵文化財調査報告書 第167集
田村遺跡 III

1987年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区人名2丁目10番29号 ようきビル
印刷 赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8番34号
